ぼんくら天狗

他二編

山手樹一郎長編時代小説全集＝17

春陽堂

山手樹一郎長編時代小説全集＝17

ぼんくら天狗

他一編

春陽堂

ぼんくら天狗　他一編

山手樹一郎長編時代小説全集＝17

春陽堂

春陽堂 450円
0193－200417－3066

作品案内

―――文芸評論家　石井富士弥

山手文学のおきまりの主人公――おとぼけでいて、実は胆力深慮ともに備わった侍というのがおなじみだが、本編「ぼんくら天狗」のヒーローはひと味ちがう。すこしばかり猪突猛進ぎみ。勇気凜々はいいのだが、ときどきエラーするところが、われわれ平凡人には親近感がある。それもそのはず、丹波笹山出身の自称〝天狗太郎〟君なのだ。……なんと、かの〝いれずみ奉行〟遠山の金さんには、若かりしころ船宿の娘に産ませた隠し美女があった!?　その彼女を将軍の側妾にしようという水野美濃守の野心をうけて、悪党灘万が動き出したから、初老の金さんも見逃せない。たいがいの場合、現代人は権力に弱いが、田舎侍の天狗太郎は絶対にこの闇の政治の壁にひるまない。不可抗な相手に一歩も譲らず闘う彼の姿勢こそ、淳朴を愛する作者の願いの象徴だ。

併収の「ぼんくら与力」は、混沌の終戦日本を大政奉還前後の江戸に見立てた力編「明治元年」の改題。作者の人世に対する視座がよくうかがえる作品だ。

ぼんくら天狗

他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

17

ぼんくら天狗

他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

17

春陽堂

春陽堂

ぼんくら天狗

他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

17

春陽堂

●編集/解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
*松永義弘
水野泰治

*本巻執筆者

目次

ぼんくら天狗(てんぐ)……一
ぼんくら与力……二四九

ぼんくら天狗(てんぐ)

お大名浅

1

小田原から大磯へ四里、お大名浅こと島帰りの浅吉は、遠くなったり近くなったりしながら、ひとり旅の女のあとをつけている。

中秋十五夜に近い季節で、朝夕はめっきり涼しくなったが、日中はまだ日ざしが相当強い。

——小娘のくせに、わりに達者な足をしてやがる。

すあわせの手甲脚絆、わらじがけ、短い道中差しを一本腰にした浅吉は、かぶった笠の下の汗をつるりと手ぬぐいでふいた。中肉中背、色のあさ黒い三十八、九の肩幅のがっしりしたびんしょうそうな男で、むろん、だれが見ても堅気とは見えない。島帰りというあだ名のとおり、去年秋の赦免船で十五年ぶりに八丈島から江戸へ帰ってきたやつで、罪名は盗人。十両から上の盗みは斬罪という御定法だが、こいつは十八のときからぬすっとになろうと変な発心をしてから、二十五で島送りになるまでのたった足かけ五年の間に、おそらく五千両近くは人の金をわがものにしていたろう。それが、ぬすっとに心がけというのは少してまえみそか、浅吉は決して困る者の金は盗まなかった。相手はたいてい大町人か、大名屋敷、盗んだ金の大半は貧乏人にばらまいていた。てめえでは義賊気どりのつもりだったろうが、ぬすっとに義賊なんて名は通用しない。それが通用するのは、盗んだ金をわけてもらって、そんな不浄金をありがたがって押しいただく無知な連中の間だけのことで、

「浅、てめえは義賊なんだってな。えれえもんだな。感心したぜ。どうだ、江戸の人口を百万

とおさえて、その半分の五十万が子どもとする。残るおとなの五十万の半分が貧乏人として、その二十五万人の中でほんとうに食えねえのが、半分の十二万五千人、その半分の六万二千五百人の中のそのまた半分、三万人ばかりも助けてやったか」

と、ある時、賭場で金さんという若い遊び人にからかわれた。くやしいがぐうの音も出ない。盗んだ金の五千両を一両ずつみんなばらまいても、五千人しか助けられない理屈だからだ。しかも、助けたと思ったのはいちじのこと、こんなことで日本じゅうにどれくらいあるかわからない貧乏人が、どれだけ浮かびあがれるんだ、そう考えて陰鬱になったとたん、御用弁になってしまった。

当然鈴ガ森の露と消えるはずのところを、相手がおおかた大名屋敷で、被害を内聞にしているところが多かったのと、ほかに人殺しだとか女を手ごめにしたなどという凶悪な罪状がなにもなかったので、首がつながり、八丈島へ遠島にされた。あとで聞くと、当時若手同心中幅ききで、金さんが懇意にしていた笠井平三郎という人が、だいぶ陰でほねをおってくれたのだという話である。

きょうお大名浅が、こうして、御苦労にも、朝から女のあとをつけているのは、実はその首の恩人笠井のだんなに、たって、とたのまれてのことだった。

2

お大名浅が去年十五年ぶりで、なつかしい江戸の土を踏んで、いちばんびっくりさせられたのは、そのころどこの賭場へ行っても、〝金さん、金あにい〟で通っていた遊び人の金さんが、いまの遠山左衛門尉景元というお奉行さまだと聞かされたことだった。

「本当か、おい。おれの知っている金さんてのは、からだに桜のほりものをしている男だぜ」

「そのとおりだ。だから、遠山さまはいま、夏でも特別あつらえのはだじゅばんをきちんと着て、脱いだことがねえんだ」
「ううむ」
これはまったく仰天ものである。太閤さまは尾張中村の百姓の子だったとは、物の話でよく聞いているが、それは昔話で、しかも乱世だった時代のこと、自分がちゃんとこの目で見て、年こそあっちが少し上だったが、義賊づらをからかわれるまでは友だちづきあいもしたことのある遊び人の金さんが、あれからまだ十六、七年、二十年とはたたないうちに、そばへも寄りつけないお奉行さまに出世している、島帰りの浅吉は、どう首をひねってみても、当分は変な気がしてしょうがなかった。
まもなく道でぱったり会ったのは、いまだに定町回りでにらみをきかせている笠井平三郎のだんなで、首のつながったのはこの人のおかげと聞いているから、ていねいにその礼をのべ、ついでに金さんの話が出た。
「いや、てめえたちの目から見りゃふしぎな気もするだろうが、あのかたの御尊父は長崎奉行から勘定奉行までつとめられたかただ。その遠山家の次男に生まれて、ある子細から、なにか考えるところがあって、しばらく遊侠の群れに投じていたまでのことで、少し心ある者はそのころから、決してあんなことで一生を終わる人物じゃないと、ちゃんとわかっていたんだ」
「へえ、ちゃんとわかっていたんですかねえ。そういやあ、あの時分から、いうことも、することも、どっか違っていましたね」
「それが思い出せりゃ感心だ。まあ、てめえたちにあのかたのまねをしてみろったってそいつは無理な話だが、人間は心の持ち方一つで、自分にそなわっただけの生き方はできるもんだ。おめえなんかも、せっかくこうして娑婆があったんだから、せめて畳の上で往生ができるように、心を持ちかえてみろ」

しまいには意見というやつをくらって、それでも赦免祝いだからと、一分つつんでくれた。
うれしいだんなだなあと、その時はさすがにしいんと胸にこたえたものだが、一度やくざが身にしみこんだからだはどうにもならないものとみえ、ぬすっとの足こそ洗ったが、いまだに堅気にはなりきれず、ただぶらぶらと、やくざのあかをなめて生きている。恥ずかしいから、その後はなるべく笠井のだんなと顔をあわさないように、こっちから逃げまわっていたのだが、それが一昨日の朝、運悪く浅草橋の上でぱったり顔が合ってしまい、橋の上だからどうわき道へ逃げこみようもない。

3

「浅、てめえを男と見こんで、たのみてえことがある」
皮肉の一つもいわれるのかと思ったら、茅町の番屋へひっぱっていかれて、笠井のだんながまず口にしたことばはこれだった。
「へえ、承りますでござんす」
八丁堀の定町回り同心ともあろうきけ者が、島帰りのやくざに、男と見こんでというからには、よっぽどむずかしいことが持ちあがったんだろう。首の恩人から、かりにも男と見こまれて御用のおてつだいができるのは身の面目だ、いさぎよく死んじまえと、浅吉はとっさに腹をきめた。
「そうか、たのまれてくれるか」
「たのまれますでござんす」
「さっそくの承知で、平三郎も満足だ。そこで、おめえ、深川の永代に相模屋という船宿があるのを知ってるか」
「さあ、聞いたような名だが、行きゃあすぐわかるでしょう」
「いや、そこへ行くんじゃねえ。相模屋の亭主は徳造、女房がおいそ、ふたりの間に娘がひとりあって、名はお夏、ことし二十歳で、花柳の

名取りだ。そのお夏が、蔵前の札差し丹波屋四郎兵衛の女房お菊の供をして、このあいだうちから箱根の湯元へ湯治に行っている。宿はたしか福住だ。実は、けさ、丹波屋に少しごたごたがおこって、店からお菊を迎えの番頭が早駕籠で立ったんだ。あした箱根へ着いてその晩というわけにもいくめえから、明々日の朝、早立ちということになるだろう。お菊はむろん通し駕籠ということになるから、ことによると、お夏はひとりで帰るようになるかもしれねえ。つまり、娘のひとり旅ってことになる。御苦労だが、そのお夏が無事に家へ帰るまで、陰ながらおめえに道中の護衛役をたのみてえんだ。ここからすぐに立ってくれるだろうな」

「承知しやした」

お大名浅はいささかぽかんとした気持ちだった。こっちは命がけのつもりだったのに、仕事はただ娘っ子の道中のおおかみよけ、あんまり張り合いがなさすぎる。それにしても、なに様じゃあるまいし、たかが船宿の娘ひとりの道中に、わざわざ八丁堀のお声がかりとは、あんまりごたいそうすぎはしないか。そして、ふっと思い出した。

「だんな、永代の相模屋ってのは、もと柳橋にあった船徳じゃござんせんか」

「うむ、そうだ」

「たしか、あそこにお玉さんという評判娘がいて、金さんが居候していたことがござんしたっけね」

「そんなこともあったようだな」

平三郎はさりげなく答えていたが、それで読めた。お奉行さまが昔やっかいになったことのある家だから、八丁堀も念をいれなくちゃならないんだろう。なあんのこった、と半分はばからしくなりながら、路銀をもらってすぐ江戸を飛び出してきたが、そのお夏という娘を、けさ、よそながら一目見て、浅吉は二度びっくりしなければならなかった。

けさ、明け六ツ（六時）を待ちかねるようにして、箱根湯元の福住から肩がわりつきの駕籠が三丁、山をおりていった。前とうしろに番頭がついて、中の駕籠が丹波屋四郎兵衛の家内お菊だった。

丹波屋は豪家をきそう蔵前の札差し仲間でも金持ちとして知られた家で、当主四郎兵衛は三十を出たばかり、お菊は深川木場の材木問屋の娘だったのを、五年前に四郎兵衛に見そめられ、たってと望まれて丹波屋へ嫁入りしたのだという。それだけに、いかにも大家の内儀らしく、おっとりと品のいい若女房ぶりで、留守宅になにか心配ごとがおこって迎えるのだから、顔色こそひどくさえなかったが、さすがに取り乱しているふうは少しも見えなかった。

――けど、いい女だったなあ。

物陰から駕籠に乗りこむところを見ていた浅吉は、その駕籠を見送りながら、世の中にあんな美人もあるものかと、妙に寂しくさえなったくらいだったが、まもなくその玄関へ送り出されてきて、手早く紅緒のわらじをつけ始めた娘、金を握らせておいた番頭がそっと合図をしたから、それが船徳の娘で花柳お夏に違いない。

――なあるほどねえ。

ひと目見るなり、お大名浅はまったくうなってしまった。年こそ二十歳というから、娘としては少し年増になりすぎているが、色白で、大まかにととのった目鼻だちは、前のおとなしやかなお菊にくらべるとぐっと派手に見え、なによりもいきいきとした、きかなそうな涼しい目が千両だ。しかも、肉づきゆたかにすらりと上背のある肢体は、踊りできたえているだけにきびきびとした色っぽさにあふれ、これこそだれに見せても文字どおり江戸まえのすばらしい下町娘である。

――争われねえもんだなあ、金さんとうわさのあった船徳のお玉さんとは伯母、姪、お玉さんそっくりといいてえが、こっちのほうが目に

どこか気品てやつがあるだけ一枚上だ。

なるほど、これじゃ笠井のだんながひとり旅を心配するのも無理はない、と感心した浅吉は、待てよ、と気がついた。この娘、ことによると、本当は金さんとお玉の間にできた落としだねじゃねえかな、そう思って見なおすと、涼しい目もとがどうやら金さんの若いときとそっくりのようにも見える。

――いけねえ、いけねえ。そんなことをかってに決めるのは、せっかく評判のいいお奉行さまにけちをつけるようなもんだ。友だちのすることじゃねえ。ふふふ、友だちってのもちょいと気がひけるが、昔の金さんなら、友だちだったに違いねえんだからな。

お大名浅は急にお夏という娘が自分の姪かなんかのように思えてきて、かげながらの護衛という仕事が、つまらないどころか、たのしみにさえなりだしたのだから正直なものだ。

それにしても、この姪っ子は案外足が達者で、朝から途中一度も休もうとはせず、やがて大磯（おおいそ）の宿（しゅく）へかかろうとしている。

4

――はてな。

その時になって、お大名浅はふと気がついた。さっきから、自分のあとを、二十四、五とも見える田舎侍がひとり、同じ歩調でつけてくるのだ。達者だとはいっても、お夏は女だから歩幅がせまい。自然こっちは男なみよりゆっくり歩いているのを、それに歩調をあわせているのは、あとをつけているに違いない。

――畜生、おれじゃあるまい、お目あては、おそらく、おれのたいせつな姪っ子だ。

見たところ、ふろしき包みを右の肩から斜めにしょって、いかにも貧乏くさい田舎侍だが、顔の造作はなかなかたくましいやつで、上背も五尺七、八寸はあるだろう。

てめえのような青二才になめられてたまるもんかとわざとふり返ってにらみつけてやると、そいつがにこりと白い歯を見せてわらった。お世辞をつかったって、そんな手にのるもんか、と思いながら、

「お武家さん、おれになんか用かね。おめえさん、さっきから、あっしのあとをつけているようだね」

と、お大名浅はこっちからけんかを吹っかけてしまった。

「ああ、いいお天気だね」

田舎侍はのこのこと肩をならべてくる。

「そのとおりさ。おてんとさまが照っているからね。で、あっしに用というのは」

「別に用なんかないよ」

「じゃ、なんであっしのあとをつけなさるんだ」

「そういう貴公は、あの娘をつけているんじゃないかね」

なんだ、この野郎のほうが、おれをごまのはえと見やがったのか、と、つけているのはずぼしだっただけに、思わず苦笑が出て、ふっと、この田舎侍をからかってやりたいいたずらっ気が、頭を持ちあげてきた。

「お武家さん、あの娘はべっぴんだろう。そうは思わないかね」

「思うな。あんな美人を見たのは、おれ、はじめてだ」

なかなか正直な男である。

「そうだろうとも。江戸にだって、あんなのはちょいと類がないからね。どうだ、あの娘さんを一両で買わないか」

「買う――？」

「そうさ。せっかくあっしがねらっている娘なんだが、おめえさんがほしけれぱ、一両で売ってもいい。あっしは手をひこう」

「あれは貴公の娘かえ」

「冗談いっちゃいけねえ。あっしの娘なら、だれがおめえさんなんかに売るもんか。他人の娘だから、売ってもいいという話よ」

「それで、他人の娘が、貴公に売られるのを、おとなしく承知するのかえ」
「そんなことはわからねえ。あとはおめえさんの腕一つさ、物にするもしないもね」
「物にするって、あの娘がどうかなるのかえ」
こいつ、よっぽどのんびりでき上がっていると、お大名浅はいささかあきれてしまった。

5

「おめえさん、本当はあの娘をねらっているんじゃないんかね」
浅吉はもう一本さぐりを入れてみる。こっちが悪党を表に出しているのだから、たいがいなら、ここらで本音を吐きそうなものだと思うのだ。
「違うよ。おれのねらっているのは、貴公のほうだ」
「なんだって――?」
「貴公はごまのはえうじじゃないのかね」
田舎侍はずばりといって、またしてもにっとわらってみせる。
「冗談いっちゃいけねえや」
「冗談ならけっこうな話だが、むやみに他人の娘を一両で売りたがるのは感心しないなあ」
この田舎かぼちゃめ、味なことをいいやがると思ったが、一度悪党ぶってみせたてまえ、お大名浅はおとなしく引っこむのも業腹だ。
「感心しなけりゃどうしようっていうんだね」
「どうもしないな。ただこうやって歩くだけのことだ」
「つまり、あっしのじゃまをしようっていいなさるんだね」
「いや、貴公のじゃまはしないが、悪事のじゃまはするかもしれない」
「いい度胸だね、だんなは」
「ほめてもらってありがとう」
「別にほめやしねえが、そのかわり、あっしも、おめえさんがあの娘に手を出すやつなら、ただ

ではおかねえからね」
じろりと一つにらみをきかせておいて、道中退屈しのぎにからかって歩くにはちょうど手ごろなかぼちゃだと、お大名浅は腹の中でわらった。
お夏はそういう男ふたりにあとをつけられているとは少しも気がつかなかった。丹波屋の内儀お菊とは子どものころからの踊りの友だちで、ねえさん、お夏ちゃんと、いまだに姉妹のようにしている仲である。そのお菊が家になにか心配ごとができたと番頭の迎えをうけて、けさ早く通し駕籠で湯元を立った。
「お夏ちゃん、江戸へ帰ったつごうで、わたしがもう一度くるか、番頭を迎えによこすか、きっと返事をしますから、それまであなたは、女中たちとここに遊んでいてくださいね。どんなことがあっても、ひとりで道中をしてはいけませんよ」
お菊から何度も念を押されていたお夏だが、丹波屋の心配事というのはただごとではない。それでなくて、番頭があんなにあわてて、湯治先まで迎えにくるはずはないもの。と思うにつけても、きかない気のお夏だから、とてもおとなしく江戸のたよりなど待っている気にはなれなかった。あとに残された丹波屋の女中たちが、たってとめるのもきかず、お菊の駕籠のあとを追うように、湯元を立ってきてしまったのである。
――いざというとき、あのおとなしいねえさんひとりじゃ心細いんだもの。
子どものころから、いつも妹のほうが姉分のお菊をしょって立つ、そういう男まさりのお夏だったのだ。

6

江戸までは通行の絶えない東海道を三日の旅、箱根からこっちには山路の難所があるわけではなし、無理な夜道さえかけなければ、なに

も顔色をかえてこわがるほどのことはあるまいと、気丈なお夏はたかをくくっていた。それはそうに違いないのだが、それでなくてさえ問題をおこしやすい人並みすぐれた美貌を持っていることを、そこは世間知らずだから、さすがに自分ではついうっかりしているお夏なのである。

——ふいにひとりで帰ったら、おとっつぁんびっくりして、どんな顔をするかしら。

同業の間では船徳で知られた父親の相模屋徳造は、日ごろまた札つきの子煩悩で、こんど丹波屋から湯治の話があったときも、決していい顔はしなかった。ただ、子煩悩の常で子には甘く、お夏がどうしても行きたいとせがんだので、しぶしぶ承知してくれたのだ。その半月という約束が、まだ七日にもならないのに、突然、しかもひとりで帰るのだから、どんなにびっくりして相好をくずすか、お夏には別にそんな楽しみもあった。

——おっかさんは気が小さいから、ひとりで帰ってきたといったら気絶するかもしれない。

旅というからおおげさだけれど、こうして歩いていれば、人家が少ないというだけで、江戸だって向島あたりへ行けばこんなものだのにと、その時までお夏はまったくこわいもの知らずだった。

まもなく大磯の宿場へかかろうとする松並木道である。宿場のほうから、ひとりが空駕籠をかつぎ、相棒とならんで道いっぱいになりながら通りかかった雲助が、相手が悪いと見ておとなしく道の端へよけているお夏の前までくると、

「ねえさん、乗っておくんなさい。帰り駕籠だから安くしておきやす」

と、立ち止まって声をかけてきた。

「せっかくですけれど、いいんです。もうすぐそこなんですから」

お夏はにっこりしながら断った。

「すぐそこって、江戸まではまだだいぶあるよ」

身なりで、雲助はちゃんと江戸の女と見抜いているのだ。

「いいえ、大磯に連れが待ち合わせているんです」

「じゃ、そのお連れさんのところまで乗っておくんなさい」

「もうすぐそこなんですもの、いらないわ」

「そんなこといわねえで、安くしておきまさ。お連れさんきっと待ちかねてますぜ」

「いらないったら、いらないんです。どいてくださいな」

めんどうだから、わきをすりぬけようとしたが、雲助はすばやくそっちへ大きなからだを持っていって、にたにた笑いながら通そうとしない。

「どいてくださいったら」

「乗っておくんなさいったら」

「承知しないから」

勝ち気なお夏は、とうとう白い目をして、ふたりをにらみつけてしまった。

7

人通りがないという道ではない。若い娘が道中の悪い裸虫につかまったと見て、もう、二人、三人と、往来の者が立ちだしていた。人目があるからお夏も気が強いのだが、あいにく相手はそんな人目などを物の数とも思っていない鉄面皮な雲助どもだ。

「あんれ、このねえさん、おれたちをにらんだぜ。かわいい顔をしてるくせに、めっぽう気が強いんだな」

「ばかぬかせ。にらんでるんじゃねえや。よく見ろ、いろ目をつかってるんじゃねえか。なあ、ねえさん」

お夏はじりじりとうしろへさがりながら、髪から銀の平打ちのかんざしを抜き取った。もし手出しでもしてきたら、目を突きさしてやる気である。

「おっと、あぶねえ。なにも、ねえさん、そんなにおこらなくたっていいじゃねえか。おれたちはただ、駕籠に乗っておくんなさいってたのんでいるんだぜ」
「だから、あたしは、いりませんと断っているんです」
「そう木で鼻をくくったようなことをいうもんじゃねえ。じゃ、こうしましょう。駕籠賃はいらねえ。ただでいいや。ただでいいから、大磯までやらしておくんなさい。それならいいだろう」
「いりません」
「ううむ。じゃ、おれたちがこんなにたのんでも、乗ってくれねえのか」
ひとりのほうが急にすごい顔になって憎体に一足ぐいと乗り出したから、はっとお夏がかんざしをさか手にあおざめたとたん、
「おい、おまえたち、駕籠賃がただなら、おれが大磯まで乗ってやってもいいよ」
人垣の中から声をかけてのこのこ出てきたのは、さっきの田舎侍だった。
——あきれた、かぼちゃだな。
先を越された連れのお大名浅は、思わずにやにや笑いだす。
「なんだと——」
雲助はふたりいっしょにくるりとふりむいて、
「なんだ、てめえは」
青二才のくせに、といわぬばかりに、頭からかみついてくる。
「なんだてめえはとは、姓名を名のれということかね」
「ふざけるねえ」
「いや、おれはまじめだ。丹波笹山の産で、姓は天狗、名は太郎——」
「天狗だと。こんちくしょう。そんな鼻のひくい天狗があるけえ。ああ、わかった、てめえはからす天狗だな」

「ううむ、からすに似ているかねえ」
「ばかやろう、箱根からこっちは化け物やからす天狗の出るところじゃねえや。さっさと消えてなくならねえと、やみじるん中へたたっこんで煮て食っちまうぜ」
雲助は悪態のつきほうだいだ。

8

「いや、わしは化け物ややみじるになりたいんじゃない。おまえたちが大磯まで、ただで駕籠に乗せるというから、いやがる娘さんのかわりに乗ってやってもいいと思ってね、こっちは親切のつもりなんだ。誤解しないでもらいたいな」
田舎侍は平気で雲助どもをからかっている。
こいつはとんでもねえぼんくら天狗だと見ていたお大名浅は、だんだん笑えなくなってきた。若いから、娘にいいところが見せたくて岩見重太郎を気どっているんだろうが、相手は問屋場に籍をおく人足と違い、悪を看板にして荒かせぎを稼業に流して歩く雲助仲間でもいちばんたちの悪い命知らずなのだ。いいかげんにしておかないと、それこそどんな目にあわされるかわかったものではない。と見ているうちに、はたして、雲助どもの形相が凶悪になってきた。
「たたきのめすぞ、野郎」
「人の親切をたたきのめすのは乱暴だな」
「こんちくしょう、どうしても消えてなくならねえ気だな」
「あっ、兄貴、娘っ子のほうが消えてなくなっちまった」
相棒がふっと気がついて、すっとんきょうな声をあげる。
「あっ、逃げやがったな」
それでなくてさえ、すきもあればとねらっていたお夏だから、これは逃げるのが当然だが、うっかり獲物を物にしそこなった雲助の憤慨が、じゃまをしたぼんくら天狗にかかってくる

のも、また当然だ。
「ちくしょう、てめえが、てめえが逃がしやがったんだ」
「あははは、逃げたんじゃないよ。駕籠はいらないと、娘さんははじめからいっていたじゃないか」
「もう承知しねえ。くたばれ、野郎」
息づえを振りかぶるなり、火のようになってびゅんとなぐりつけてくるやつ、
「あぶない」
ぼんくら天狗はひょろりとよけて、流れる棒の端をむぞうさに左の手でつかんだ。
「こんちくしょう――」
ぐいと引いたが、よろけただけで棒は放さない。
「放さねえか、野郎」
「放すと、またなぐる気だろう」
「なにをぬかしやがる」
こんどは力いっぱい押してきた。よろけはしたが、まだだめだ。六尺ゆたかなおおかみ雲助は、くそっ、と満身の力をこめてぐいとひっぱった。とたんに棒の手を放したから、
「あっ――」
雲助はすかを食って腰がくだけ、自分の力でただっとうしろへよろけていきながら、ちょうどそこに太い松の木がある、いやというほどその幹へからだごと後頭部をたたきつけて、ううむと目をまわしてしまった。
「やりやがったな」
相棒が血相をかえる。

9

「待った」
ぼんくら天狗が右手を出して、すばらしく大きな声を出した。
「なにを――」
目の前であっけなく兄貴が目をまわしたばかりだから、びくっと相棒は息づえをふりかぶっ

たまま一足さがる。
「おどかすねえ」
「けんかはよそう。どっちが目をまわしてもつまらない。おたがいに、無事なからだで別れるとしようよ」
にっこり笑ってみせて、ぼんくら天狗はさっさと歩きだした。
「ふざけるねえ」
そのうしろ姿をにらみつけてはみたものの、一度びくっとしたのが弱みで、相棒はもうあとを追いかける元気はなかったようだ。
野次馬は、なあんだというように、くすくす笑いながら、それぞれの旅へ散っていく。
あれえ、おれをおいてっちまやがった。けど、あのぼんくらめ、ちょいと味をやりやがるな。
のこのことあとをつけだしたお大名浅は、こいつはいけねえ、と気がついた。こんなぼんくら天狗のあとをつけるのが目的じゃなかった。くれぐれも笠井のだんなにたのまれているのは、お夏のほうである。うっかりけんかに気をとられているうちに、その肝心なお夏はどこへ行ってしまったか、目のとどくところには姿を見せない。
――ちくしょう、大しくじりだ。
思わず駆けだそうとしたとき、そのお夏が向こうの庚申堂のかげから、すっと、派手な姿を街道へあらわした。ぼんくら天狗の前へ出て、ていねいにおじぎをしている。お大名浅はまたしてもぎくりとさせられてしまった。
――さあ、いけねえ。とうとう寸法どおりになりやがった。
こんなことがきっかけになって、万一たいせつなお夏があの田舎かぼちゃのぼんくら天狗と妙な仲にでもなろうものなら、それこそ、笠井のだんなにあわせる顔がなくなってしまうのだ。
――あんぼんくらかぼちゃめ、田舎っぺのくせに、なかなかすみにおけねえようだからな。

どうしてくれようかと思っているうちに、もう若いふたりは肩をならべて歩きだした。いよいよことだ。娘はひとり旅で、たったいまこわい目にあったばかりのところだし、かぼちゃ天狗は、鈴ガ森の白井権八のようにさっそうとまではいかなかったが、とにかく娘を助けているのだ。

　心細いから、江戸まで送ってくださいということになる。むろん、下心があって、命がけで雲助を相手にしたかぼちゃ天狗だから、よろこんで送ってあげようということになる。今夜の泊まりが藤沢で、あしたは川崎あたりだろう。若い女と男が、二晩もおなじ宿へいっしょに寝泊まりすれば、いったい、どんなことになるものか、ならないものか。

「ちくしょうめ、てめえのような田舎かぼちゃに、おれの姪っ子もおなじお夏を、――そうは問屋でおろさせてたまるけえ」

　ついかっとなって、足が速くなる浅吉だ。

道中すごろく

1

「本当は、あたし、どうなるかと思って、黙って逃げてはみたものの、心配でした」

　田舎者で、悪気はなさそうだが、あの掛け合いぶりからみると、あんまり気がきいているほうではなさそうだし、まちがいがなければいいがと、お夏はほんとうに心配していたのだ。

「どうなるかって、おれがかね」

　肩をならべて歩きながら、田舎侍は意外そうな顔をする。

「ええ、相手はあんな命知らずがふたりなんですもの」

「おれはだいじょうぶだ。知恵があるからね。いくら命知らずでも、あいつらはあんまり利口そうじゃないから、たいしたことはない」

　平気でいってのけられると、利口な人が自分から知恵をふりまわしたがるはずはないし、なんだかこばかにされたようで、ちょいとこづらにくい気がしてくる。

「あなたはそんなに知恵がおありになるんですか」

「こう見えてもね」

「じゃ、江戸へその知恵を売りにおいでになるの？」

　下町育ちだから、お夏もひねくれると相当人が悪い。

「ほしい人があったら、わけてやってもいいな」

「あ、お名まえが天狗さんだから、どうしても天狗になるんですね」

「そうかもしれないね」

　いなか天狗はにこりとわらう。

「でも、少し場違いじゃないかしら」

「どうしてだえ」

「天狗さんは鞍馬山が本場でしょう。笹山の名物はおさるだって聞いているんですけれど」

　すましていってやりながら、お夏は胸がすうっとした。

「なるほどねえ。すると、おれはさる知恵のぼんくら天狗かな」

　感心して、首をひねっている。

「でも、おさるの中にも孫悟空っていうえらいおさるさんもあるんですってね」

「そうだ、さる面冠者は太閤さまになったからな」

「きびだんごをもらって、鬼征伐のお供をしたおさるもいますし」

「悲観するにはあたらないねえ」

「そうですわ、木から落ちるさるだっています」

「おれは絶対に落ちないよ」

「えらいんですね」

「えらいとも。木にのぼらなければいいんだろう」

「じゃ、かきの実はほしくないんですね」

「さおで落とすよ」
「そのさおが届かなかったら」
「落ちるまで待っているねえ」
どっちがばかにされているんだか、お夏はだんだん変な気がしてきた。

2

「あんた江戸へなにしに行くの」
お夏は話題をかえた。いつの間にか、ことばつきまでくだけて、半分は相手をこばかにしながら、どうしてもこの男の正体をつかんでやりたい意地に駆られている。
「お嫁をさがそうと思ってね」
けろりとして、またしてもそんなとぼけたことをいいだすぼんくら天狗だ。こしゃくにさわるから、
「ふふふ、おれのお嫁やあいって、お江戸八百八町を毎日流して歩くといいわ」
とひやかしてやると、
「なあに、黙って歩いていたって、お嫁のほうからたくさん寄ってくるだろう」
いちいちいうことがしゃくにさわる。
「そうでしょうとも。めっかちやびっこのお嫁さんがたくさんね」
「あれえ、江戸にはめっかちやびっこの女ばかりしかいないのかね。がっかりしたなあ」
「だから、もうあきらめて、さっさと丹波へお帰んなさいよ」
「しかし、ひとりぐらいはいいお嫁があるだろう。たとえば、お夏さんのような美人がね」
「おきのどくさま。あたしはお嫁なんかに向かないからだめよ」
「実は、おれもさっきからそう思っていたんだ」
そうはっきりいわれると、やっぱり女だから気になる。
「どう思っていたんです」
「気が強くて、わがままで、利口すぎるから、こういう娘さんをお嫁にする男は、ほねがおれる。それが一つ」
「あら、まだあるの」
「あるよ。美人薄命といってね、美人にはとかく毒虫がつきやすい。つまり、自分が求めなくても、外から災いがやってくるんだ。これは用心しなければいけないね。あんまりひとりで旅なんかしないほうがいいよ」
「どうもありがと。でも、だいじょうぶよ。毒虫は、あなたのような、強くて、お世話好きで、どこかのんびりしているお人よしの天狗さんがどこにもいて、きっと追っ払ってくれますもの」
「あはは、まあ、そういえばそうだね。悪があれば、一方に善がある。それが世の中だ。あんまり人の世話をやきすぎるとおせっかいになるし、さりとて、みすみす水におぼれかけているものを知らん顔をしていれば不仁になる。なかなかむずかしいところだ」
「さっきはごめんなさいね、あたし、お世話をやきすぎて」
「はあてね、なんだったっけかな」
「あんた、江戸へお嫁をさがしに行くんでしょう。あたし、もうお世話はやかないから、お好きになさいまし」
「ありがとう。じゃ、やっぱりお江戸八百八町を、おれのお嫁やあいと、黙って流して歩くことにしよう」
どこに本音があるのか、まったく正体のつかみにくいぼんくら天狗だ。

3

お大名浅にとって、その日の道中ぐらい気のもめる旅はなかった。いちばん心配したのは、さっきの一両の件があるから、ぼんくらかぼちゃめ、あれを真にうけていて、ひょっとするとお夏に変な男がつけているから気をつけろと、よけいなことをしゃべってしまやしないかということだった。そうなればしようがない、こっちも道づれになって、なんとかお夏が気味悪が

らないように話しておく必要がある。

が、笠井のだんなには、なるべくかくし目付でいろ、とたのまれている。できれば、表面へは顔を出したくない。

——あんなつまらねえことをいって、からかうんじゃなかったっけ。

後悔しながら様子を見ていると、ぼんくらかぼちゃめ、お夏のきげんをとるのが忙しくて、こっちのことなどけろりと忘れてしまったものか、ふたりとも一度もふり返ってみようとさえしない。ふり返らないようなら、まだ話は出ていないと見ていいから、そのほうはひとまず安心だが、そうなると、あんまりふたりにくっついて歩くのは、せっかく忘れているものを、こっちからわざわざ思い出させることになる。

といって、離れていては話が聞こえないし、お夏があのぼんくらかぼちゃにくどかれては大変だと心配にはなったが、それはもし手でも握るけはいがあるまで待つほかはなかろうと、遠くから見張って歩くことにした。

ふたりは大磯の宿はずれで、いっしょに掛茶屋へ休み、そこで中食をとった。ぼんくら天狗のは宿でこしらえてもらってきた大きな握り飯で、それを三つまで堂々とたいらげていた。あんまり色気のあるかっこうではなく、それをなにかあつらえ物をしているお夏にも一つすすめて、みごとに断られていた。

——そんな色消しなものを、江戸の娘っ子が人の前で食うものか。とんだぼんくらかぼちゃだ。あれでいっぺんにあいそをつかされちまったろう。

お大名浅は、離れた木かげに身をひそめながら、ひとりで吹き出してしまった。

大磯から平塚へ二十七町。平塚から藤沢へ三里半、別に手を握りそうなけはいは見せなかったが、若いふたりは仲よく話しながら肩をならべて、その日の夕方、藤沢の宿へはいった。

お大名浅はまた心配になってくる。いよいよ

今夜はここ泊まりだが、ぼんくら天狗はあくまで食い下がって、のこのこと一つ旅籠へ着く気でいるのではなかろうか。お夏は心で迷惑でも、黙ってついてこられれば、とにかく恩人のことだし、ここまで道づれになってきたのだから、いまさら別の宿へ行ってくれとは、女の口からいいにくいだろう。かわいそうに、もてあましているんじゃねえかな、と気をもんでいると、お夏はふっと常陸屋という宿の前へ立ち止まって、

「あたし、今夜はここへ泊まります。どうもいろいろありがとうございました」

と、はっきり別れのあいさつをしながら、いともていねいにおじぎをした。

その時のぼんくら天狗の世にもぽかんとした顔つきといったら——。

4

——少し悪かったんじゃないかしら——。

その夜、疲れているからひとふろあびて、早めに床についたお夏は、なんとなくぼんくら天狗の顔がいつまでも目にちらついた。

むろん、黙っていれば、あの男はいっしょにこの宿へ着く気でいたに違いない。相手が若い男だから、お夏はつい用心する気持ちのほうが先にたっていたのだけれど、考えてみると、とにかく一度助けられているのだし、御飯ぐらいいっしょに食べて礼ごころに、今夜のまかないは自分が持つ、そのほうが本当のようだった。

一日じゅうとぼけたことばかりいって歩いていたが、いやらしいことはひと言も口にしていなかった。いやみったらしいお世辞っ気などはみじんもなく、

「これ一つ食わないかね」

と、中食のとき大きな握り飯の竹の皮づつみを出したのも、その時は女になんて物知らずなんだろうとあきれて、

「いやな人——。あたしはまだあんたのお嫁じ

ゃないんだもの」

と、きっぱりことわってやったが、あれもただ心からの親切だったのだろう。

――あれで案外、しんはしっかりしているんじゃないかしら。

ばかなことばかりいっているけれど、顔つきだってなかなかたくましくて、そこらにざらにころがっているような男とは違うようだ。ことによると、こっちがあんまり用心しすぎるのを、うぬぼれちゃいけない、おれは女などにすぐ手を出したがるほどけちな男にはできていないよと、内心で笑っていたかもしれない。

「それだと恥ずかしいな」

いや、恥ずかしいより、勝ち気だからくやしくさえなってくる。男にいいよられたおぼえはずいぶんあるが、ばかにされたおぼえは一度もないし、この男ならと今まで自分のほうから好きになれそうな男には、むろん出会ったことはない。それだけに、男からわらわれたとなると、なんだか意地にならずにはいられなくなる。

――ばからしい。なんだって、あたしはあんなぼんくら天狗のことなど、こんなに気になるんだろう。

しまいにはおかしくもなって、いつの間にか眠ってしまった。

翌朝、常陸屋を立ったのはまだ早い朝で、明るい朝日が目にしみるようにさわやかだった。きのう少し無理をしている足が、歩きはじめはなんとなくぎこちなかったが、宿はずれへかかるころにはようやく慣れて、戸塚へは一里三十町、千本松へかかろうとして、お夏はおやと目をみはった。

「おはよう。もうくる時分だと思って、待っていてあげたよ」

きのうのぼんくら天狗がにっこりわらいながら道ばたから出てきて、肩をならべたからである。お夏は妙にどきりとして、その顔をながめてしまった。

5

人を待ち伏せしているなんて、あんまり感心したことではない。この男もやっぱりなにか醜い野心があって、あたしにつきまとう気なのだろうかと、お夏はそんなふうにとって、それがつい顔色に出たらしい。

「誤解しちゃ困るよ、お夏さん。若い女のひとり旅はあぶないと思ったから、おれ、待っていてやったんだ。迷惑なら一足先へ行ってもいいんだよ」

ぼんくら天狗は、急にきのどくそうな顔をして、ことばだけではなく、ほんとうにあとずさりしてみせる。よく見ると、一点の邪気もなさそうな、憎いほど澄んだ目だ。

「だれも迷惑だなんていってやしないじゃありませんか」

お夏はわざとおこった顔をして、さっさと歩きだした。そして、男なんて口がうまいもんだからわかるもんかと思い、もし変なまねでもしたら承知しないから、と、むりに腹をたてながら、その心の底では少しでも疑った自分がなんとなく気恥ずかしい。

「きょうは川崎泊まりかえ」

男はもう気軽に話しかけてくる。

「たぶん、そうなるかもしれないわ」

「川崎へはいったら、また遠慮なくさようならをしていいよ」

「だれが遠慮なんかするもんですか」

「やれやれ、きょうはたいへんごきげんが悪いんだね」

「大きなお世話だわ」

どうしてもすなおになれないお夏だ。

「やれやれ――」

さすがに男もあきれたとみえて、それっきり黙って歩く。おこったのかしらと思い、おこったってかまうもんかと、お夏はぐんぐん歩く。

さわやかな朝の松並木だ。ここの松並木は、

ほとんど戸塚の宿までつづく。ほとんどそのへんまで、その黙りっこも強情につづいたが、「あっ――」
　そこまできてお夏は急に立ち止まりながら、意地もみえもなく、いきなり男のたもとをつかんでしまった。向こうの道ばたの切り株に腰かけてたばこをのんでいるやつ、こんな田舎には珍しい江戸侍のようだがとすぐ目についたが、それが人もあろうに丸田市之進という因縁つきの御家人くずれだったからである。
　深川西念寺横町の御家人市といえば、名にしおう辰巳(たつみ)という色街で顔をきそう無頼の中でさえ定九郎市と呼ばれておじけをふるわれている悪党で、一度こいつにねらわれたら、男でも女でも命取りだといわれている。悪才があって、冷酷で、執念深くて、しかも当時飛ぶ鳥も落とすといわれた大御所の側用人(そばようにん)水野美濃守(みののかみ)の家中にひっかかりのあるやつだそうで、さすがの町方も手出しを控えているというのだから始末におえない。
　その定九郎市が、船徳のお夏の器量にほれこんで、この夏時分からじわじわとくどき落としにかかっている。一つにはそれがうるさいから、しばらく息ぬきに湯治に逃げたお夏だったが、今そこでたばこをのんで休んでいるのは、どう見てもその定九郎市に違いないのだ。

6

「どうかしたかね」
　ぼんくら天狗はぽかんとしたような顔をしている。
「いやなやつがいるんだもの」
「どこにさ」
「あそこに、たばこをのんでるじゃありませんか」
「ああ、あの侍か。役者みたいな男っぷりだねえ」
　感心しているのだから、まったくたよりない。

「あいつは深川の御家人くずれで、丸田市之進、あだ名が定九郎市っていう悪党なんです。このあいだうちから、あたしをお嫁にほしいって、しつこくつきまとって、――いやだわ。どうして、こんなところへ来ているのかしら」
「心配しなくてもいいよ。いやならおれが断ってやるから。そのために、おれ、いっしょに歩いているんだからね」
「あんた、だいじょうぶかしら。とても強いって評判よ。それに、悪知恵にたけていて、仲間でさえこわがっているんですって」
「知恵なら、おれだって、江戸へ売りに行くほどあるよ。かまわないから、お夏さん、いざとなったらまた先へ逃げてしまえよ」
　きのうの雲助といっしょにしているような口ぶりだ。なんともたよりないけれども、一応はたよりにしておくよりしようがない。
　案の定、そばへ近づくと、着流しで雪駄(せった)ばきという江戸そのままの定九郎市が、ひょいと立ってきた。
「やあ、お夏。たぶん、もうくる時分だと思って迎えに出ていたんだ。箱根へ湯治に行っていたんだってな」
　ぼんくら天狗のほうなどは頭から無視して、至極なれなれしいことばをかけてくる。
「まあ、お珍しいところでお目にかかりますこと。どうかなすったんでございますか」
　お夏は強い目をして、決してそのなれなれしさに乗ろうとはしない。
「どうかなすったのは、おめえのほうじゃないのか。きのう蔵前の丹波屋から、番頭が早駕籠(はやかご)で、四郎兵衛の女房、おめえと仲よしのお菊を迎えに行ったろう。こいつはなまやさしいごたごたじゃねえ。たぶん、おめえも心配して、すぐ江戸へ引っかえすだろうと思ったから、わざわざここまで迎えにきてやったんだが、その真相ってのを、おめえ、番頭から聞いているのかね」
「いいえ、別に――」

「そうだろうな。番頭も、こんどのことばかりは、うっかり口にできなかろう。へたに世間に知れると四郎兵衛の命にかかわるからな」
「そんな大騒動なんですか」
お夏はぎくりとして、乗るまいと用心しながらも、これだけは聞き捨てにならなかった。
「大騒動だとも。おおげさにいえば、天下の大事件だ」
「いったい、どうしたというんでしょう」
「ときに、このお連れさんは何者だね」
定九郎市は、はじめてぼんくら天狗のほうをぎょろりしりめにかけて、おうへいにお夏にきく。

7

「拙者は丹波の産、姓は天狗、名は太郎さん、どうぞよろしく」
ぼんくら天狗は人のいい顔をして、ていねいにおじぎをした。
「ああ、丹波の山ざるか――。いけねえな、お夏。こんなのと道連れになっていると、いつおまえにちょっかいを出すかわからねえ。不用心じゃねえか」
定九郎市は平気でそんな口をきく。田舎天狗などまったく眼中にないのだ。
「違うです。おれはそのちょっかいを出したがるやつを追っ払ってやろうと思って、お夏さんについているです」
「御親切にありがとうよ。じゃ、もういいや。おれって男がこうして江戸から迎えにきたからにゃ、だれだって指一本お夏にふれさせるもんじゃねえ。安心して、さっさと引き取ってくんな」
「貴公は深川の御家人くずれで、丸田市之進さん、またの名が定九郎の市さんてかただってね」
「そうだよ。それがどうしたえ」
「たいへん知恵があるんだってね」
「なにを――」

この野郎、おれほどの男をからかう気か、と思わず目を光らせる定九郎市だ。
「知恵なら、おれも江戸へ売りに行くほど持っているです」
「さる知恵をか――。わらわせやがる」
「悪知恵よりましかもしれねえです。しかし、貴公はとても腕が強いんだってねえ」
「田舎者だから無理はねえが、てめえはおれという男を知らねえんだな」
「少しは知ってるな。貴公はお夏さんをお嫁にほしいと、だいぶ前からねらっているんだってね」
「お夏、なんだって、おめえ、こんな山ざるなんかと道連れになったんだ。早くことわっちまえ。気色が悪くっていけねえ」
定九郎市はまるで女房にでもいいつけているような口ぶりだ。
「丸田さん、失礼ですけれど、お夏はまだあなたにそんな口をきかれるおぼえはございません」
腹にすえかねて、さっとお夏の顔色がかわる。
「人前だと思って、水くさいことをいいなさんな。いずれは夫婦と、ちゃんときまってる仲じゃねえか」
「そんなおぼえはありません」
「ふうむ、そんなに、おめえ、人前を気にすることはねえじゃねえか。まあいいや。それはそれとして、丹波屋の一件は、人の前じゃ口にできない。お菊の命にかかわる問題だからな。道道話してきかせるから、山ざるとだけはさようならしねえ」
勝ち気なお夏は、腹がたって腹がたって煮えかえりそうだが、丹波屋の事件というのも妙に気にかかる。とっさには返事をしかねて、じっとくちびるをかみしめてしまった。

8

「定九郎の市さん、そんなに押しつけがましい

ことをいうと、娘っ子はこわがるばかりなんだがねえ」
ぼんくら天狗が、そばからひやかすように笑う。
「山ざるは黙っていな」
定九郎市はそれを鼻であしらっておいて、
「お夏、おれは親切でいっているんだぜ。丹波屋の一件は、おれのような知恵と力のある者でなければ、とても丸くはおさまらない。おめえは、四郎兵衛が無法に殺され、姉分のお菊がその男の腕力でなぐさまれて一生地獄の責め苦にあわされるのを、平気で見ていられるのか。もしそんなことは本当にできねえというんなら、ひととおりおれの話だけは聞いてみたらどうなんだ」
と、お夏に食い下がっていく。
「では、その話をうかがわしてみてくださいまし」
「だからよう、話が聞きてえんなら、この山ざるにさようならをしろ、他人の耳には入れられねえことなんだって、何度もいってるじゃねえか」
もっともらしく持ちかける鋭い目を見ながら、お夏の腹はとっさにきまった。こういう鉄面皮な悪党は、こっちが一歩さがれば、きっとそれにつけこんで、一歩一歩詰めよってくる。はじめが肝心だ、と気がついたからである。
「うかがわなくてもようござんす。そんな大きな騒動では、たとえうかがったって、女のあたしの力ではどうしてあげられようもありませんの。――どうも、いろいろありがとうございました」
冷たい顔をして、きっぱりとおじぎをして、つと歩きだそうとする。
「待て、お夏、おめえは定九郎市がどんな男か知っているだろうな」
立ちふさがって、すごい目がへびのように光りだす。

「よせよ、貴公のほうがさようならをされたんじゃないか。知恵のある人は、もっと利口に立ちまわるもんだがな」
ぼんくら天狗が、またしても、わきからひやかした。
「うるさい。きさま、そんなに命がいらねえのか」
「命はいる、命がなければお夏さんを送っていけないからね」
「よし、抜け。もう勘弁できねえ、刀にかけてもお夏はおれのものにしてみせる」
定九郎市は一足さがって柄に手をかけた。半分はまだおどかしのようでもある。
「お夏さん、あぶないからどいておいで。――さようならをされておこるなんて、男らしくない人だねえ」
「ばかっ」
とうとう爆発してしまった。抜き打ちに切りつけようとするやつ、わざとこっちから抜くようにしかけたのだから、ぼんくら天狗は案外びんしょうだった。ぱっと飛びさがるなり抜き合わせて、まず敵の抜き打ちの出鼻をぴたりと押さえこんでいる。

9

抜き打ちの初太刀を封じられて、定九郎はくそっと思った。こんな田舎っぺの小僧に嘲弄されっぱなしでは御家人市の名がすたるし、だいいち、お夏に甘く見られてしまうのががまんできない。
「うむ」
命をとるまでにしなくとも、腕一本ぐらいたたき落としてやろうと、むぞうさに一歩踏みこもうとしたが、そうはいかなかった。
小僧のくせに相当修業はしているとみえて、相手はのびのびとした青眼にかまえ、始末が悪いことには、田舎者の鈍感というやつか、それともこわいもの知らずというやつか、こっちの

剣を少しも恐れていない天真爛漫（らんまん）たる目をしている。

——ちくしょう、なめやがって。

とは思うが、真剣勝負はわざに多少の差はあっても、ひっきょうは度胸一つだ。竹刀とは違うから、多少とも堅くなっているところへ、度胸一つで飛びこんでいくほうがたいてい勝つにきまったものだが、こう相手にゆうゆうとされていたのではそれができない。敵にどんな変化があるかわからないからだ。

それに、一度そんな雑念がおこると、こんな小僧を相手に、けがでもしてはつまらないという気になるし、なにも自分が手をくださなくても、ほかに簡単に眠らせる手はいくらもあるのだというずるい考えもわいてくる。

「待て、山ざる」

定九郎市はぱっと踏みこみのきかないところまで飛びさがった。

「やめるんかね」

むろん、ぼんくら天狗はしかけられたからやむをえず抜いたまでで、はじめから相手を切る意志はない。

「この勝負はあずけておく。ここで血を流しちゃ、往来の者の迷惑だ」

さっきから上り下りの往来が止まっているのも事実だった。

「そのほうが利口のようだな。やみ夜があるからね」

にこりとしてみせるぼんくら天狗だ。

「なあに、やみ夜まで待つもんか。江戸っ子は気が早いや」

定九郎市はずぶとくせせらわらって、

「お夏、今夜一晩だけ待ってやる。おれをほんとうにおこらすと、どんなことになるか、まあよく考えておきねえ」

それが捨てぜりふで刀を鞘（さや）におさめると、悪党はくるりと戸塚のほうへきびすをかえしていた。

「どうしよう、あたし」

さすがに、お夏の顔はまっさおである。

「そんなに心配しなくともいいよ。そのために太郎さんが道中の毒虫よけについていってあげるんじゃないか」

「いいえ、あたしより江戸のおっかさんが、——あいつはただの悪党じゃないんだもの」

旅の空だけに、どうしていいかわからないお夏だ。

10

「なあに、あの男は、お夏さんより先に江戸へはいることは、絶対にないと思うな」

とにかく道中をつづけながら、ぼんくら天狗がきっぱりという。

「どうして、太郎さん」

「定九郎市のほしいのはお夏さんだ。今夜は普通にいけば川崎泊まり、あしたは川崎から品川まで二里半でざっと小半日、その間でまずじゃまになるおれをやみ討ちにして、それからお夏さんを手に入れる気に違いない」

「いやだわ、そんなことといってこわがらしちゃ」

決してないとはいえないので、お夏は思わず身ぶるいが出る。

「むろん、こう見えても、おれはやみ討ちを食うほどのろまなぼんくら天狗じゃないがね。しかし、今だから話すけれど、おれは定九郎市のような悪党に出会うだろうと思ってお夏さんの道連れになったわけじゃないんだ。本当は、きのうから変なやつがひとり、お夏さんのあとをつけている」

「どこに、太郎さん」

お夏はまたしてもどきりとして、うしろをふりかえる。

「いや、定九郎市に会うまで、たしかにいたんだが、きっとうわ手が出てきたんで、あきらめて、どっかへ行っちまったんだね。しかし、ちょいとおもしろいやつだったよ。おれは酒匂川（さかわがわ）

からつけていたんだが、そいつは途中で気がついたとみえ、なんだっておれのあとをつけるんだっておこるのさ。おまえこそ、あの娘さんのあとをつけているんじゃないかねといってやると、どうだ、だんな、あの娘を一両で売ってやろうとかって、おれを田舎者あつかいにするのさ。もっとも、おれは丹波の山ざるには違いないがね」

「それならそうと、どうして早く教えてくれなかったんです」

「そんなことをいったら、お夏さんがよけい気味悪がるだろうし、その男だって、まだほんとうにごまのはえかどうか、手証を見るまではわからないものな」

この男はやっぱりはじめから深いものを持っていたのだと思うと、きのう藤沢の宿で小利口らしくさようならをしたことが、お夏は急に恥ずかしくなる。

「いやだわ、あたし。そんなにわかっていたんなら、きのう無理にでもいっしょの宿屋へ着いてくれればいいのに、少し薄情だと思うわ」

「そういうなら白状するが、その男が常陸屋へはいったんで、心配だから、おれもあとから別の部屋へ泊まって、かくれていたのさ。決して悪気があったわけじゃないんだから、けいべつしないでもらいたいな」

「まあ——」

そこまで気をつかっていてくれたのかしら、とお夏はうれしくなって、なんだか顔が赤くなってしまう。

「ところで、さっき定九郎市がいっていた丹波屋っていうのは、どういう家なんだろうね」

こんどはぼんくら天狗が聞く番になった。

名月の使者

1

——きょうばかりは、さすがの定九郎市も、珍しく大しくじりだった。

丸田市之進はとっとと歩きながら、ときに苦笑が出た。勝ち気な娘だとは知っていたが、旅先のことだし、こっちがどんな悪党だかよくわかっているはずだから、すなおにいうことをきかなければ、そのにらみと押しで、むりにでもものにしてしまおう。わしにねらわれた小すずめもおなじことで、声ひとつたてられねえだろう。そうたかをくくって甘く見ていたのが、やっぱりまずかった。

おまけに、変な山ざるが一匹ついていやがって、こんな田舎小僧のひとりぐらいと思ったが、案外人をくった野郎で、正直にいえば、逆にこっちがさんざんこばかにされたような結果になってしまった。

われながら、あんまりみっともいい図じゃない。

それでもただ一つ安心していられるのは、どこから道づれになったか知らないが、野郎のは自分でもいっていたとおり、女のひとり旅だから道中の毒虫よけになってやろう、そんな子どもっぽい侠気からのようで、まだお夏をどうしようという欲はないらしいことだ。色気があれば、目にも顔にもそれが出る。だいいち、お夏にもっといいところを見せようという気になるから、あの真剣勝負は血を見ずにはすまなかったろう。

「あぶねえ、あぶねえ。ばかほどこわいものはねえからな」

定九郎市はまたしても苦笑が出る。そして、考えるのだ。さて、こんどはどの手でお夏を征服してやろうかなと——。

江戸へはいってしまってからでは、いくらなんでも強盗がやるようなまねもできないから、ことめんどうだ。だからこそ、日当をかけてまで旅へ追いかけてきたので、きょう一日一晩と、あした半日、品川の宿へつくまでになんとかくふうしなければならない。
　——おれほどの悪党が、こんなところまで出向いてしくじったといわれちゃ、もう大手を振って深川へは帰れねえじゃねえか。
　意地と命にかけても、きっと手に入れてやる。また、それだけの値うちはじゅうぶんある娘なのだ。
　考えてみると、今までよく娘でいてくれたと思う。ずいぶんいいところから、嫁の口、婿の口、さては大名旗本が山ほど金をつんで、たって寵姫にと熱望したむきも相当あったそうだが、お夏は、いやだわ、きらい、のいってんばりだし、子にあまいおやじの徳造がまた決してうむといわないので、せっかくの玉のこしを、みなのがしているのだという。
　——つまり、あの娘は、おれという男に女にされるのを待っていたようなもんさ。
　にやりと定九郎市はひとりで悦に入って、だれがなんといっても、今夜はのがしっこねえ、と胸がわくわくしてくる。
　しかし、それにはまずあの山ざるを途中でなんとか始末してしまわなければならない。

2

　江戸までは一本道で、どうわき道へそれようもないし、女づれの足では今夜は川崎泊まりがせいぜいだ。定九郎市は、あの手か、この手かと考えながら、お夏たちの先を先をと歩いて、やがて程ガ谷の宿へかかってきた。
　——はてな。
　そこの水屋というお休み所の軒下をわきへよけて、こぎれいな女乗り物が一丁おいてある。六尺が三人、中間三人、若党二人、奥の床には

ぶっ裂き羽織、わらじがけの供侍が三、四人、ちょうど時分どきで、昼食をつかっているところらしいが、その六尺や仲間たちはみんな見おぼえがあるような顔ばかりだ。たしかに口入れ稼業灘屋万五郎のうちの人足たちに違いない。
　灘屋万五郎は、そのころ、武家屋敷へ中間や小者を入れる人宿を表稼業にしていたが、裏へまわるとばくちうちの大親分で、すごい勢力を持っていた。
　この男のやり方は、旗本屋敷、ことに火付け強盗改め役になった旗本の屋敷をねらって、自分から中間部屋のかしらになる。
　ここなら町奉行の手ははいらないから、安心して賭場がひらける。また、安心な賭場なら人がよろこんで集まるから、テラ銭の上がりも大きい。
　抜け目のない灘万は、そうして集めた金を屋敷の上役、下役から、両町奉行所の与力、同心にまで、急所急所へわいろとしてばらまく。
　また、要所要所の役人のところへはいっている中間小者は、みんな日ごろ目をかけておく自分の子分たちなのだから、たいていの情報は手にとるようにつたわってくる。
　中には灘万を憎んで、現場を取り押さえてやろうという硬骨の役人がいても、絶対につかまらなかった。
　金がまわって、そういう手足があって、しかも上役人をまるめこんでいる灘万だから、すごいにらみのきくのは当然で、かげではずいぶん思いきった悪事がどんな程度のものか、あまり世間に知れていないのは、被害者があとのたたりを恐れて、みんな泣き寝入りにしているからだろう。
　こんなうわさもある。
　ある千石取りの旗本屋敷へ部屋頭として乗りこんだ灘万は、例によって、上は殿さまから、下は門番まで金でまるめこんだばかりでなく、いつか美貌の奥方にまで手をつけてしまった。

さすがに腹にすえかねた殿さまが、現場をおさえて手討にしようとすると、

「切るんならお切りなさい。逃げやしねえ。そのかわり、ここの屋敷も、奥方さまのお里方も、いっしょに断絶するばかりさ」

と、平気で居直った。

殿さまは男として、家名を犠牲にしても憎い姦夫を手討ちにしたいと思ったろうが、それができなかったのは、腕力にかけても灘万におよばなかったからだという。

そして、病弱だったこのきのどくな殿さまは、まもなく憤死してしまった。

定九郎市がこの灘万のところへゆすりに行ったのは、そのうわさを耳にした直後のことである。

3

「おい、深川西念寺横町の御家人くずれ、丸田市之進があいさつにきたと、灘万に取り次いでくんな」

たったひとりで京橋大根河岸の灘屋をふらりとたずね、外にいた若い者に頭からあびせると、そこに居合わせた四、五人の子分たちは、あっと気をのまれて顔を見あわせていた。

居留守をつかうか。

それとも、子分たちをしかって、暴力で追い出しにかかるか。

居留守のほうならすわりこむ腹だったし、暴力なら何人でもたたっ切ってやると意気ごんでいたのだが、さすがに灘万も悪党だった。

すぐに茶の間へ通して、長火ばちの前で、若いめかけに肩をたたかせたままのかっこうで、

「深川の定九郎市ってのはおめえさんか。なるほど、いい度胸だね」

と、感心していた。

四十五、六だろうか、中肉中背の、がっしりとしたおやじだ。

「いや、おめえさんにほめられるほどの度胸じゃなさそうだ」

「なにか用かね」

「五分の兄弟分になってもらいてえのさ」

年からいっても、貫禄からいっても、そんなことは承知すまい。が、そんなことはどっちでもいい。

こっちはけっきょく金が目的だったのだが。

「いいだろう。それで、いくら入用なんだ」

と、相手はうわてに出てきた。

「たくさんもらっても重いから、きょうは一本、百両にしておこう」

「そうか。――おとく、出してやんな」

「はい」

若いめかけがむぞうさに手文庫から出してくれた切りもち四つ百両をふところへ入れて、ざまあ見やがれ、根が折助あがりだから、おれの気合いにのまれやがったと、定九郎市はいい気持ちで、あたりをにらみまわしながら外へ出たが、気がついてみると、わきの下へびっしょり汗をかいている。しかも、金持ちけんかせずで、たった百両で追っ払われたんじゃないかな、というひがみまで感じると、腹のむしがおさまらない。

だから、十日ほどたって、また百両ゆすりに行った。

こんどは灘万は留守だったが、姉御と呼ばれている例のおとくが、ちゃんといいつけられていたとみえて、

「市さんは男がよすぎるから、金がかかるんでしょう」

と、わらいながら百両出してくれた。

くやしいが、とても歯がたたないと感じた。

それっきり、二度と金はねだったことがないが、二百両でももらえば、もらったほうが弟で、くれたほうが兄貴だ。

五分の兄弟分というわけにはいかない。

遊びに行けば、兄貴と呼ぶよりほかはなかった。つまり、男一匹、二百両でうまく買収され

てしまったことになる。
だからといって、灘万は特にうち解けるというのでもなく、さりとてきらっているふうもない。いってみれば、いまだにまったく奥底の知れない男だった。
むしろ、定九郎市の度胸を買ってくれているのは、子分たちのほうだったのである。

4

「丸田さん、珍しいところで会うじゃねえか」
水屋の中を横目でにらみながら通りすぎようとすると、奥の土間からいそいで出てきたのは、灘万の代貸しで京橋木挽町の水野美濃守の部屋に住みこんでいる板橋の清七だった。
「ううむ。すると、清公、これは美濃さまの御家中か。女乗り物のようだが、どなただえ」
さすが定九郎市も声をひそめる。
大御所の側用人水野の家中といえば、陪臣はむろんのこと、旗本といえども、なるべくよけて通りたがる。
けんかになれば、たとえこっちに正当な理屈があっても、どんなとばっちりがかかってくるかわからないからだ。
まして、町人などは、たいていな無理は泣き寝入りしなければならない。町方へ訴えて出ても、訴えたほうがしかられるに決まっているからだ。
「まあ、こっちへおいでなせえ」
清七は水屋の横手の木かげへ市之進をつれていって、
「きょうはちょいと御苦労千万な出迎えでね、これから箱根まで出かけるんでさ」
と、意味ありげににやりとした。
「箱根へ——?」
「丸田さんはなわ張り内だから、深川永代のお夏っていうべっぴんを知っていなさるだろうね。相模屋の船徳の娘で、花柳の踊りの名取りだ」

「お夏がどうかしたのか」
知っている段ではない、たったさっきものにしそこねてきた執念の女だけに、定九郎市はぎくりとした顔だ。
「あの娘が殿さまのお目にとまったんだそうだ」
「ううむ、美濃さまのねえ」
「一度踊りが見たい、あすは十五夜だから、品川の下屋敷で月見をしよう、呼んでおけ、というお声がかりが出た。すぐに船徳のほうへお使者が立ったが、あいにく蔵前の丹波屋の家内のお供をして、箱根へ湯治へ行っているという返事なんで、そんなら箱根へ迎えを出せということになったんでさ」
こいつはことだと、内心定九郎市はおだやかでなくなってくる。
「しかし、今から迎えに行ったって、あすの月見にはまにあわねえだろう」
「なあに、踊りは十五夜にかぎるってわけじゃありませんや。十五夜は付け足りで、殿さまはお夏さえ見りゃいいんですからね」
「気に入ったら、めかけにでもしようっていうんかね」
つい口に出たが、われながらこれは愚問だった。その気がなくて、いくら花柳の名取りだって、町人の娘ふぜいをわざわざ箱根まで迎えに行くはずはないと思っていると、
「いや、自分のめかけにするんじゃなさそうだね。くれぐれもたいせつに扱うようにっていう話だからね」
と、清七はひどくもっともらしい顔をしている。

5

「というと、いったい、お夏をどうしようっていうんだね」
定九郎市はせきこまずにはいられない。
「おれたち下郎にはよくわからねえが、たぶん

大奥へあげるんじゃねえかと思うんだ」

「ううむ」

大奥といえば将軍家の奥のことで、当時はこの大奥が、本丸と西丸と両方にあった。本丸には十二代将軍家慶がおり、西丸には前将軍家斉が隠居して、大御所さまといわれていたからである。

家斉は代々の将軍のうちでももっとも女好きの将軍といわれ、後宮に一妻二十一妾を擁して、一生の間に五十五人の子女をうませた。そういう色好みの将軍だから、多少とも政治に野心のある大名旗本は、いずれも美人を選んで大奥へ女中にあげ、手のつくのを待っておのれの勢力をまず大奥へ植えつけることに腐心していた。家斉の三寵臣といわれた若年寄林肥後守、お側衆水野美濃守、小納戸頭取中野播磨守などが、諸侯の間に老中以上のにらみをきかせていられたのも、みんな自分の手から差し出した美人がとくに将軍家の寵愛を得ているからで、むろん、そういう大奥なるものは、本丸の家慶のほうにもある。

野心家の美濃守が、こんどは、そのどっちへ、なんの目的でお夏をはめこもうというのか、そのへんの機微は御家人くずれなどのうかがい知るところではないが、いずれにしても、一度水野にねらわれたとなると、お夏はいやでも早晩大奥へあがらなければならない運命を背負わされてしまうだろう。そうなれば、定九郎市がもうさかだちをしてみたところで、手のとどかない高嶺の花になってしまう。

――ちくしょう、そんなかってなまねをされてたまるもんか。

自分のかってはたなにあげておいて、定九郎市は内心かっとならずにはいられなかった。じゃまをしてやるなら、今なのだ。たとえ、しょせんは水野に折られる花にしても、一度は執念のお夏をわがものにして、傷物を水野につかませ、陰でざまあ見やがれと、赤い舌を出してやりたい。ふっと、そんな悪党根性さえ起こってくる。

「しかし、水の字も、妙な娘に目をつけたもんだな。お夏はたしかことし二十歳、お中臈さまに出すにゃ、少し年増になりすぎてやしねえのか」

「なあに、そのあぶらの乗りきってるところが、かえってつけめかもしれないね。美人に年なしで、あのお夏なら、だれだって、きっと目じりを下げますさあ」

そこは人情で、清七は自分のだんなの目の高いのを自慢したいような口ぶりである。

「船徳がよく承知したな。今までにもそんな話はいくどかあったのを、みんな断ってきたって話だが」

「こんどは違います。だいいち、相手が水野さまじゃ、承知も不承知もねえでしょう」

「そういいやまあそんなもんだが、お夏にもし男があって、生娘でなかったら、どうなるんだね」

「いやに丸田さん、けちをつけたがるぞ。生娘でなくたって、生娘だということにしておきゃいいやね。生娘でねえってしるしが、からだのどこに書いてあるわけじゃあるまいし」

けろりとしてわらっている清七だ。

6

「別にけちをつけるわけじゃねえが、ひょっとすると、お夏がうんといわねえんじゃないかと思ってね、そいつを心配しているんだ」

定九郎市はふっと思いついたことがあって、さりげなく切り出した。

「どうしてだね、丸田さん」

「迎えのお使者はどなただね」

「御用人の西野喜左衛門さまだ」

水野家の公用人黒田外記は美濃守のふところ刀といわれ、陪臣ながら諸侯に会釈をさせたというかみそりのような男だ。西野は、その黒田

の右の腕といわれる働き手である。そういう男が、わざわざこの使者に選ばれたということは、水野家がどんなにお夏を重く見ているか、したがって、お夏の運命がどんなにのっぴきならぬものになっているかを、定九郎市はあらためて認識させられたような気がする。
「西野さんなら如才もあるめえが、もしお夏にだだをこねられて、この役目が失敗したとなると、無事にはすまねえだろう。なんなら教えてやりてえことがあるんだが、おれに会ってみる気はねえかな」
仕事はまず西野のふところへ飛びこんでいってからだ。
「じゃ、丸田さんは、なにかお夏の内幕っていうようなものを知っているんだね」
「よく知っているとも」
ちょいと待っていておくんなさい、といって、清七は水屋へ引き返していったが、まもなく出てきて、
「御用人さまがお目にかかるそうです」
と告げた。
西野は四十がらみの柔和な顔をした男で、
「あなたは灘屋の舎弟分だそうですな」
と、応対も尊大ぶったところはなく、しごくくだけた調子である。
「そうです。清七からお夏を迎えに行く駕籠だと聞いたもんですからね。よけいなおせっかいだが、黙って通りすぎるのは義理に欠ける、さように思いましてな」
「うかがいましょう。なにかお夏のことについて御存じだそうですな」
「お夏が美濃さまの手で大奥へ推挙される、そんなふうにうかがいましたが――」
「いや、今のところは踊りが見たいという仰せをうけているだけです」
うそをつけ、ただ踊りが見たいだけで、わざわざ箱根までこんな迎えを出すもんか、と定九郎市は腹でわらいながら、

「ただ踊りだけなら、お夏にどんな男があったところで別にかまわないわけですな、それだと、少してまえの考えすごしだったかもしれない」
と、気をひいてみる。
「すると、お夏には情夫でもあるといわれるのか。当方の調べでは、絶対にそんな男関係はないように聞いているが――」
「あるとわかったら、どんなことになりますな」
定九郎市はもう一度突っこんでみる。

7

そのころ――。
ぼんくら天狗はお夏の供をして、相州と武州の国ざかい、境木村から権太坂へかかろうとしていた。この丘を一つ越せば、まもなく程ガ谷の宿へはいる。
「お夏さん、だいぶくたびれてきたようだな」
無理もない、けさからもう四里はたっぷり歩いているのだし、旅も二日めだから、坂道へかかるとさすがに足が重くなったのだろう。
「手をひっぱってやろうか、いくらか楽だから」
「いやだわ、恥ずかしいもの」
目でわらいながら、かむりをふってみせる。
この人のは本当の親切だ、いやらしい意味はみじんもない、とはよくわかっていても、まだ男と一度もそんななれなれしいまねをした経験がないから、人に見られるといやだと思った。
「じゃ、程ガ谷までがまんするんだね。そこで昼飯にして、ゆっくり休んでいっても、川崎へは明るいうちにつけるはずだ」
「早く江戸へ着きたいわ、あたし」
お夏はなんだか、じいんと胸が熱くなってくる。道中なんかなんでもないと思っていたのが、いやなめに二度も三度も遭ってみると、しみじみ江戸の空が恋しい。早く、おとっつぁん、おっかさんの無事な顔が見たい。
「丹波屋のことなら、考えないほうがいいよ。ここからいくらか心配したって、どうにもならな

いことなんだからね」
「そうじゃないの。それもあるにはあるけど、本当は急に家が恋しくなっちまったんです」
「なあんだ、子どものようなことをいうなあ」
天狗はにっこりしながら、
「しかし、家はいいなあ、両親がそろっていればなおさらのことだ」
と、これもしんみりした声になる。いい顔してるわ、この人、とそういう男のぼおっと夢を追っているような横顔をながめながら、
「太郎さんにだって、御両親おありになるんでしょう?」
と、お夏ははじめて天狗の素姓を聞いてみたい気がしてきた。
「両親がいれば、江戸へなんか出る気にならなかったろうな」
「あら。だって、太郎さんは、江戸へはお嫁をさがしに行くんだっていってたくせに」
「うむ、両親がいないから、せめて、いいお嫁でも早くさがそうと思ったんだ」
「お嫁でもだなんて、少し失礼じゃないかしら」
「ああ、そうか——。でもは、なるほど、お嫁に対して少し失礼だったねえ」
たわいのないむだ口は、いくぶんでも足の疲れを忘れさせてくれる。やっと坂をのぼりきろうとすると、
「太郎さん、——こっちだよ、太郎さん」
左側の森を背負った地蔵堂のかげから、ふいに呼びとめた男がある。
「やあ、貴公か——」
それは天狗にお夏を一両で売ろうとからかったお大名浅である。

8

敏感なお夏は、そのきりっとしたやくざふうの男を見て、すぐぴんときた。
「太郎さん、あの人じゃない、あたしを一両であんたに売ろうとしたのは」

薄気味が悪いから、思わず天狗のたもとをしっかりとつかんでいる。
「あれえ、やっぱり話しちまったんだね」
お大名浅は苦笑しながら笠をとって、
「あれは冗談だ、といまさらいったところでほんとうにもできなかろうが、ぜひおふたりさんの耳に入れておきてえことができちまったんだ。ちょいとこっちへ顔を貸しておくんなさらねえか」
と、まじめな顔になる。
「どうする、お夏さん」
天狗はお夏次第だ。
「あたし、一両で売られるの、いやだわ」
天狗さえついていてくれれば安心だから、お夏は意地の強い目をしてみせる。
「困ったなあ。あっしのは、今もいったとおり、ほんの冗談なんだが、冗談ではすまねえことが、このさきに待っているんだがねえ」
「定九郎市じゃないかしら」
それがいちばん気になっているお夏だ。
「それなんだ。往来じゃ人目につく。お夏さんがいやなら、太郎さんだけでもいい。ぜひ、話しておきてえことがあるんだ」
「うかがいます、おじさん。——太郎さんもいっしょに行ってくれるわね」
行くも行かないもない、お夏はもう天狗のたもとをひっぱって、浅吉のあとからずんずん地蔵堂の裏手へはいっていく。
「さあ、ここならいい」
お大名浅は往来から見えない林の中へふたりを連れてきて、やっと安心したように、
「お夏さん、八丁堀の笠井のだんなを知っていなさるかね」
と、早口に切りだした。
「知っています。いつもおとっつぁんをごひいきにしてくれるだんなですから」
「実は、おじさんは、その笠井のだんなにたのまれて、お夏さんをかげながら箱根まで迎えに

いったんだ。こんなことはなるべく黙っている約束だったんだが、それをいわねえとおれの話が本当に聞けねえだろうから白状しちまうんで、おれのことは、ただおじさんとおぼえていてくれりゃいい。まあ、そんなわけで、かげながらお夏さんのあとをつけていると、太郎さんはおれを、ごまのはえとまちがえたらしい。おれはまた太郎さんを、とんだ二本棒じゃねえかと心配になったもんだから、一両の件を持ち出して、ちょいと気をひいてみたってわけだ。——太郎さん、悪く思わないでおくんなさい」

「いや、そう聞いてみりゃ、おれこそ、おじさんうじをはえあつかいにして、赤面のいたりだ」

人のいい天狗は、心から申しわけなさそうな顔をしたが、

「そうか。すると、貴公はあれから、定九郎市のあとをつけていたんじゃないのか」

と、たちまち思い当たる。

9

「お察しのとおりさ。太郎さんがりっぱな男だとわかると、気になるのはあの野郎だ」

お大名浅の目が、なんとなく憎悪に燃えてくる。

「あんまり人のことはいえた義理じゃねえが、定九郎市ってやつは、とても一筋なわでいく悪党じゃない。途中でどんな悪だくみをするかもしれねえと思って、お夏さんのほうは太郎さんに任せておいて、あとをつけると、この坂を下ったすぐそこの程ガ谷の水屋という茶店に、もっと大きな悪党が待ってやがった」

「だれです、おじさん」

聞かないうちから、お夏は胸がふるえてくる。

「てっとり早くいうと、木挽町の水野美濃さまのお使者が、女乗り物を持って、お夏さんを箱根へ迎えに行く途中らしいんだ」

「あたしを——？ どうしてなの？」

「部屋頭の板橋の清七ってやつと、定九郎市の立ち話を、離れたところから聞いていたんだから、くわしいことはわからないが、あしたの十五夜に水野の殿さまがお夏さんの踊りを見たいといいだした。すぐ深川の相模屋へ使者が立ったが、お夏さんは箱根だとわかったんで、これから迎えに行くところなんだそうだ。むろん、殿さまはただ踊りが見たいんじゃなかろう。お夏さんを自分の側女に所望するか、どこかへ生き人形のわいろにでも使う気か、どっちみちただでは家へ帰れない迎えの使者なんだそうだ。——行くかえ、お夏さん」

「いやです、そんなこと」

めかけということばに、生娘だからかっと一度は赤くなったが、相手はいやだだけではすまされない権力を持っていることに気がついて、お夏はたちまち青ざめてくる。

「ことわってください、おじさん」

「そうだろうともよ。御威光で人の娘をかってにおもちゃにしようなんて、いくら大名でも、おれは気にいらねえ。だいいち、水野なんて野郎は、いい女と見りゃ、人の女房だろうとおかまいなしにさらっていっちゃ公方さまへ献上して、それをてがらにはぶりをきかせているまるで女衒みたいなやつなんだ。そんな野郎にねらわれた女こそいい災難よ」

お大名浅はいい気持ちでたんかはきったものの、さて、それをことわる段になると、相手があんまり大きすぎて、ちょいと当惑せざるをえない。

「まともにぶつかったんじゃ、笠井のだんなでも、こいつはうっかり手が出せねえだろう。いちばんいいのは、逃げちまうにかぎるんだがなあ」

「どこへ逃げるの、おじさん」

「さあ、そこだ——」

腕ぐみはしてみたものの、どこへ逃げたって、とうてい逃げきれるものではない、とわかって

いるだけに、急には返事ができない。
「お夏さん、心配しなくてもいい。おれが断ってやろう」
天狗がこともなげにいいだした。
「だいじょうぶか、太郎さん。相手は水野の使者なんだぞ、定九郎市とはわけが違うぞ」
半分はあきれているようなお大名浅の顔つきだ。

10

「おめかけにさえならなければいいんだろう、お夏さん。ただ踊りが見たいというだけなら、見せてやってもいいんだろう」
「それはそうだけれど——」
「じゃ、おれに任せておくがいい」
天狗があんまりむぞうさなので、
「いったい、太郎さん、なんといって断る気なんだね」
お大名浅はどうも不安だ。
「それは向こうのいうことを聞いてみてからでないとわからないよ。まだ相手もいないのに、ここでひとり相撲をとってみたってしようがないものな」
「そういっちまえば、それに違いはねえんだが——」
浅吉は苦笑して、しかし、このぼんくら天狗、人間は正直でりっぱなもんだが、江戸のあくどい世間を少しも知らないようだから、はたしてうまくやってくれるかどうか。なんともあぶなっかしい。といって、ほかにこっちにいい思案がないとすれば、おまえさんじゃたよりないともいいきれないし、
「どうするね、お夏さん」
けっきょく、お夏に相談するよりほかはなかった。
「あたし、太郎さんに任せます」
「そうかね。まあ、そうだろうな。じゃ、ここは太郎さんに任せるとして、おじさんはおじさ

んで、また別の手を打ってみるとしよう」
「おたのみします、おじさん」
「いいとも。おじさんは少しわけがあって、お夏さんが自分の娘っ子みたいな気がしているんだ。できるだけの手は、きっと打つ。安心していなせえ」
にっとわらってみせて、本心をさらけ出したような親しみ深い顔になったと思うと、
「じゃ、太郎さん、たのんますぞ」
気軽に会釈をして、さっさと街道筋のほうへ出ていってしまった。
「行こうか、お夏さん」
「ええ」
お夏はじっと足もとへ目をおとしながら、人の情けと、ここを出ればすぐそこに自分を待っているという恐ろしい敵のことが胸いっぱいにうずをまいて、いまにも涙があふれてきそうだ。
「元気を出せよ、お夏さん。正しいものは、きっと勝つ。正しいものには、たくさんの味方がある。なにも心配することはないよ」
「そうかしら」
「そうだとも。現に、おじさんうじだって、わしだって、お夏さんにははじめて会ったばかりだが、そのお夏さんが悪党にねらわれているとなれば、堂々と戦ってやろうという気になっているじゃないか。まだほかにも、正しい者の味方は、正しいものがいじめられていれば、きっといくらでも集まってきてくれるんだ。世の中は楽しいものさ。悪党なんかに負けてたまるもんか」
「負けないわ、あたし」
なんだか胸をうたれて、思わず天狗のたくましい顔を見あげながら、うれしいような、たのもしいような、お夏はとうとう涙があふれてきてしまった。

かけひき

1

「もし。失礼ですが、深川のお夏さんでございますね」
お夏が天狗とつれだって程ガ谷の宿の水屋の前へかかると、はたして若党が出てきて、ていねいに小腰をかがめながら聞いた。
「はい」
負けるものか、と腹はきめてきたのだが、お夏はわれにもなく天狗のほうへ肩をよせながら、しっかりとそのたもとをつかんでいる。
「てまえは木挽町の水野家の用人西野喜左衛門の若党でございますが、主人喜左衛門から、おりいってお話し申し上げたい儀がありますそうで、実は、さきほど、あれにてお待ちしていました。お手間は取らせません。恐れ入りますが、ちょっとお立ちよりを願うようにとのことでございます」
いんぎんな若党のあいさつだ。
「どうしましょう、太郎さん」
お夏は道々、どんなことでも天狗まかせという約束だから、相談するように聞く。
「御用件はなんです」
お夏にかわって、天狗が口を出した。
「失礼だが、このかたは――」
返事をする前に、若党はお夏にただす。
「拙者は丹波の産、姓は天狗、名は太郎、お夏の夫も同様の者です」
けろりとして答える天狗だ。あっとお夏はびっくりして、そんな約束はしなかったのに、と思わず顔が赤くなったが、――ああ、そうか、おめかけをことわるにはこの手がいちばんいいかもしれない、と読めるにはすぐ読めた。
「本当でございましょうな」
若党はふたりの顔を見くらべて、うさんくさそうな目を露骨にする。
「むろん、本当です」
「あとで、もしそれがうそだとわかるようなことになると、失礼ながら、座興だったではすまないことになりますぞ」
若党はそろそろ木挽町の水野をかさにきるような口ぶりをもらし始めた。
「貴公は、われわれをおどかすために、わざわざ呼びとめたのかね」
天狗はわざとあきれたような顔をする。
「よろしい。とにかく、貴公はここでお待ち願いたい。主人がお話ししたいのはお夏どのだ。――お夏どの、どうぞおいでください」
「せっかくだが、それは拙者から断ります。わしはやきもちやきだから、家内をひとりで他人の男の前へ出すことは好みません。どうか、あしからず。――お夏、出かけようかね」
「ええ、行きましょう。あたしも、ひとりじゃいやだわ」
あいかわらず男のたもとにつかまったまま、お夏は若党に軽く会釈をして歩きだそうとする。
「お待ちなさい」
若党はむっと顔色を変えて、ふたりの前へ大手をひろげた。
「あなたがたは、てまえ主人を愚弄する気か」
水屋の軒下へ朋輩がみんな出てきて見ているし、ここでふたりに行かれてしまっては、若党の立場がなくなるのだろう。

2

「誤解しないでもらいたいねえ。愚弄するもしないも、われわれは貴公の御主人をまるっきり知らないんだ。そういう貴公こそ、少し礼儀を知らないんじゃないかと思うな」
天狗はおだやかに笑いながらいった。
「聞こう。どうしてわしが礼儀知らずなんだ」
憤然とくってかかる若党だ。

「わからないかなあ。夫婦づれをつかまえて、家内にだけ用がある、家内だけこっちへこいだなんて、そんな常識があるかないか、一度御主人に聞いてきてごらんよ。わしは話のわかった男だから笑ってすませているが、もし短気な御亭主なら、大騒動になるところだろう。——ねえ、お夏、そうは思わないかえ」

「もういいわ。あたしさえ行かなければいいんでしょう、太郎さん」

お夏はわざと甘えるような口をきいてみせて、どうやら、芝居がやっと板についてきたようである。

「じゃ、きさまはどうしても木挽町の水野にたてをつく気なんだな」

「おかしなことをいうねえ。わしは田舎者で、江戸のことはよくわからないが、木挽町の水野さまというのは、どんなわがままをしてもいい、水野さまの御家中のことは、どんな無理でも、はい、はいとしたがえ、というようなおふれでも出ているのかえ」

「許さん、こいつ。もう一度いってみろ」

理攻めにされた若党は、かっとなって、うしろの人数をたよりに、とうとう刀の柄に手をかけてしまった。

「待て、利助——」

それと見て、茶店の中から供侍がひとり出てきて、

「おまえはさがっていなさい」

若党をさげておいて、ふたりのほうへ会釈しながら、

「拙者は水野家の家来、松川周三と申します。ただいまは、若い者がとんだ失礼をいたしました。あれは若党が勘違いをしていますので、おふたりでおいでくだすっていっこうにかまいません。用人西野喜左衛門からお夏どのに、おりいってお願いがありますそうで、ぜひお立ち寄り願いたく存じますが、いかがなものでしょう」

と、こんどは如才がない。

それでもいやだとはいえないし、こっちの目的は、まずお夏が亭主持ちだということを相手に知らせておくにあった。ふたりでもいいということは、明らかにそれを認めたことになるのだから、

「どうする、お夏」

と、天狗はいよいよ亭主づらをする。

「あたしはあんた次第だわ」

なるべくなら行きたくないお夏だが、そう答えるほかはない。

「じゃ、とにかく、お話というのをうかがってみようよ。せっかく、ああいわれるんだからね」

天狗はなぐさめ顔にいうのだ。

3

用人西野喜左衛門は、如才なく若いふたりを前の床几へ迎え、明日、月見の宴に主人美濃守がぜひお夏の踊りを所望している。そのために、これから箱根へ駕籠を持って迎えに行く途中だった、と主命を伝えた。

「むろん、相模屋のほうへは、そのおもむきをよく申し入れて、お夏どの次第ということになっています。そんなわけだから、そちらにもなにかとつごうはござろうが、ぜひ今夜は品川の下屋敷へ一泊され、ゆっくり旅の疲れを休めて、明夜は主人の前でひとさし手ぶりを見せていただきたいのだが、どんなものでござろうな」

水野美濃守という権臣の用人からあらためてそう丁重に申しこまれてみると、その踊りのあとに、なにか臭い野心があるのではないかとはさすがに突っこめない。また、その野心封じに、あらかじめお夏には亭主があるぞと、ちゃんと一本くぎをさしておいた天狗でもあるのだ。

「一度おとっつぁんに会ってから、御返事をしてはいけないでしょうか」

お夏は一寸のがれのようなことをいう。たとえ徳造に会ってみたところで、しょせん水野の権威にたてをつくことはできないのだ。

「もっともなことです。しばらく家を留守にしていたのですからな。それでは、明朝早く相模屋へ迎えの使いを出して、下屋敷へ来てもらうようにいたそう」
西野は軽くうなずきながら、今夜はお夏をぜひ品川の下屋敷へ泊める方針は変えようとはしない。
「妙なことをおうかがいするようだが――」
天狗がなにくわぬ顔をして切り出した。
「実は、お夏は、いっしょに箱根へ湯治に行っていた蔵前の丹波屋四郎兵衛の家内、お菊さんのことを心配しているのです。なにか留守宅にまちがいがあった。そのために、お菊さんが早駕籠で江戸へもどったので、あとを追いかけてきた。つまり、今夜にも丹波屋を見舞ってやりたいのが目的なのです。いったい、どんなまちがいが起こっているのか、それをかってながらそちらの手で一度問いあわせてもらえましょうかな」
「ほう、蔵前の丹波屋にな――」
西野はちょっと意外そうなおももちだったが、
「よろしい、ぞうさもないことだが、――しかし、とかく内輪のごたごたなどというものは、関係のないところへは知らせたがらないのが常だ。ことに、水野家は公儀にお役を持っているので、場合によっては、ぜひ隠しておきたい、そういうごたごただと、かえってきのどくをすることもある。どうだろう、これはいっそ、貴公の手で今夜にも調べて、お夏どのに知らせる、そのほうがよろしくはないかな」
と、逆襲してきた。
これは筋のとおった話で、万一水野の手で丹波屋の内情をしらべ、もし妙なことでもわかると、丹波屋は取りつぶされてしまう。
しかも、天狗が自分の手でしらべるとなると、いやでも今夜はお夏をひとりで下屋敷へやらなければならなくなる。

まったく、やぶへびになってしまった。

4

「お夏、おまえひとりで水野さまのお下屋敷へ行って待っていられるかえ」
天狗はけろりとした顔をお夏に向ける。
お夏はいそいでかむりを振って、
「いやだわ、ひとりじゃ。お侍さまのお屋敷は慣れないんですもの、あたしひとりじゃ心細い」
と、本当に心細いお夏だから、人前もなく思わず天狗のたもとをつかんでいる。
「そうだろうね。それじゃやっぱり、少し無理でも、今夜はふたりで江戸へ帰って、あしたの朝丹波屋をたずね、おひるから品川のお下屋敷へうかがうことにしようか。どうせお月見は夜なんだから」
むろん、それはならんと頭から権威をかさにきてくるだろうと思った。
向こうがおこりだせば、こっちもおこってけんか別れだし、もし向こうが暴力でくるなら、こっちも暴力でいく。
事件がおおげさになれば、天下の目が光っているから、いくら水野でも、そうあくどいことはできまいと腹をきめている天狗だ。
「御用人さま――」
部屋頭の清七が、離れたところから土間へ片ひざついて呼んだ。
「なんだな、清七」
「丹波屋のごたごたなら、ちょっと聞きこんでいることがございますんで、てまえにおまかせ願えませんでしょうか」
「ほう、おまえが知っているか。どんなごたごたなんだね」
「なんですか、丹波屋の主人四郎兵衛が、三、四日前から家へ帰らない。どこへ行ったか、だれも行くえを知らないんで騒ぎになったんだそうで。なあに、金持ちのことですから、ひとつ家の者をおどかしてやろうという気で、物好き

に自分からどこかへ隠れているんじゃないか、そんなうわさもござんす。ことによると、ひょっこりもう家へ帰ってきているかもしれませんので、てまえが今夜じゅうに調べてまいりましょう」

「どうだな、お夏どの。聞いてのとおりだ。おまえさんがたが今夜無理に行ってみても、今夜どうかたがつくというごたごたではなさそうだな」

　西野は少しも権威をかさにきようとはしない。

　あくまでも下手に出てくる。

　それだけに、油断のできない男なのであろう。

「お夏、それでは丹波屋さんのほうは、今夜はあのかたにお願いしておいて、あしたの晩踊りがすんだらすぐおいとまして、ふたりで行ってみることにしようかね」

　天狗も今は折れて出るほかはない。ただし、お夏ひとりではやらないという線だけは確保しておく。

「じゃ、そうしましょうか。――御用人さま、この人といっしょなら、あたし、どこへでも泊めていただきます」

　必死の場合だからいったようなものの、お夏はわれにもなく顔が赤くなる。

「それはふたりでかまわない。当方は主人に踊りさえお目にかけてもらえばいいのだからな。――いや、さっそくの御承諾でかたじけない。主人使者として、てまえからも礼をいいます」

　ていねいに会釈をしてみせる西野だ。

5

　けっきょく――お夏は迎えの駕籠に乗らなければならなかった。

「あんた、きっと、駕籠のそばについていてくれなくちゃいやだから」

　駕籠に乗るとき、お夏はわざと男の腕をつかんで、念を押すようにいった。むろん、あくま

で敵に見せつけておく芝居のつもりではあったが、その目にも、腕をつかんだ手にも、ただ信頼しているというだけでない激しい情熱がこもって、あら、あたしはほんとうにこの男が好きになってしまったのかしらと、お夏は自分でもびっくりしながら、それが人前だけに、思わず顔が赤くなってしまった。

「だいじょうぶだよ、お夏。ちゃんと、御用人さんが約束してくれたんだから。おれは決しておまえのそばを離れやしないよ」

　天狗は涼しい目でそれをうけて、――これはどこまでも亭主らしく、どっしりと落ち着いている。

　と感じたのはお夏だけで、水野家の連中は、人前でそんなかっこうを平気でしてみせる男を、とぼけたやろうだとけいべつし、ある者は苦々しい顔をしてそっぽを向いているものさえあった。

　――まず、よかろう。

　天狗はそれらの目を心眼で読みとりながら、お夏を駕籠にのせ、女のぬいだ草履を手ぬぐいにくるんで、わざとふところへしまった。そのままぽかんと駕籠わきへくっついて、絶対に離れようとしない。

「清七、やれ」

　西野の命令で、一行はいよいよ程ガ谷の宿を立つことになった。先頭は板橋の清七と仲間ふたり、供侍ひとりにその若党、駕籠わきは天狗、そのうしろから用人西野喜左衛門、つづいて供侍ふたり、若党、中間という順である。

　程ガ谷から神奈川へ一里九町、神奈川から川崎へ二里半、駕籠には手がわりがついているから、途中休みなく、川崎へついたのはもう夕方だった。

　ふたりきりの旅ならきょうはここへ一泊するはずだったが、一行は夜道をかけて、今夜じゅうに品川の水野家下屋敷へつかなければならないのである。六郷の渡しをわたって、品川へは

二里半、秋の日は暮れやすく、蒲田（かまた）へかかるころにはすっかり夜になって、十四日の月が水のように明るかった。

――なにかあれば、これからだ。

なにかとは、

じゃまになる自分を、どこかで処分することで、それでなければ、こっちからけんかを吹っかけている水屋の芝居を、西野ほどの男がおとなしくがまんするはずがあるものか。

と、天狗ははじめからにらんでいるのだ。

「お夏、眠っちゃだめだよ。かぜをひくからね」

天狗がときどき駕籠へ声をかける。

「眠りやしないわ」

そのたびにお夏は答え、こっちの声がしばらく間をおくと、

「あんた、そこにいてくれるの」

と、お夏のほうから甘えて聞いてくる。

6

駕籠の中と外で若いふたりがのんきに甘ったれあって歩くのに引きかえ、夕飯もとらずに先ばかり急がなければならない一行は、みんなむっつりとふきげんになっているようだ。

こうして、一行がやがて刑場のある鈴ガ森へかかり、海にそって寂しい松原が十町あまりつづく、その中ほどまできたとき、まったく突然、妙な事件が起こった。

ふいに、

わあっというときの声をあげて、十数人の雲助どもが松林の中からむらがりおこり、手に手に息づえをふりかざしながら、理由もいわず一行に打ってかかったのである。

「わあっ――」

遺恨か物とりか、そんなことを問いただしている暇さえない。

「浪藉者（ろうぜきもの）だ、切ってすてろ」

西野用人が叫ぶまでもなく、供侍も若党もいっせいに抜刀してこれを迎えた。

「たたき伏せろ」

「やっちまえ」

かれらは口々にわめきながらびゅんびゅんと息づえを振りまわし、たたきつけてくる。

「太郎さん、――太郎さん」

駕籠の中からお夏のおびえたような声が呼んだが、天狗は返事もできなかった。

抜きうちにひとりの息づえを切り払い、返す一刀にひとりの胴をなぎ、駕籠のそばから絶対に離れてはならぬとは思いながら、入れかわり立ちかわり相手があまりに凶暴なので、奮然と踏みこみ飛びこみ応戦しているうちに、駕籠は供侍たちの抜刀にかこみ守られ、どんどん品川のほうへ走っていく。

半数の雲助はそれを追い、残りの七、八人は天狗をやや遠巻きにして、

「たたっ殺せ」

「打ちのめせ」

と、口だけは達者だが、思ったよりびんしょうな天狗の烈剣にちょいともてあましぎみだ。

――こりゃ臭い。

松の老樹をこだてに一息入れた天狗は、すぐに気がついた。

これだけ激しい乱闘に、味方はひとりも倒れた者はないらしい。だいいち、この人数が本気になってかかったとすれば、ああやすやすと駕籠を通すはずはなかろう。

とすると、いうまでもなく、これは明らかにじゃまよけの小細工だったのだ。

――おのれ。

かっとなった天狗が一気に囲みを突いて切って出ようとしたとたん、

「よう、色男、うまくいっぱいくわされたようだな」

雲助のうしろからぬっと顔を出したのは定九郎市である。

「そうか。これは貴公のいたずらか」
「さよう、江戸の人間は知恵の働きが違わあね」
「と貴公はうぬぼれているようだが、漁夫の利をしめるのはだれだか知っているのかね」
わざとあわれむように冷笑しながら、こんどこそ勝負を決するときがきたと、とっさに腹をきめている天狗だ。

7

「山ざるがきいたふうなせりふを吐くぜ」
定九郎市はずぶとくせせらわらいながら、
「お夏はおれの女だと、けさ、あれほど断っておいたじゃねえか。いまさら、だれが他人に漁夫の利なんか占めさせてたまるもんか」
と、うそぶいてみせる。
「それなら、早く追いかけないと、駕籠はどこかのお下屋敷へかつぎこまれて手がとどかなくなりはしないかね」
「ふん、よけいなおせっかいさ。かつぎこませておいて、ゆっくり連れ出す、そこが利口な人間の知恵というものよ」
「そううまくいくかなあ」
「いくからふしぎさ。丹波の山ざるなんかとは腕が違うんだね」
「きのどくだなあ。いくらひとりでうぬぼれていても、肝心のお夏は、太郎さんでなければいやだというにきまっているんだがなあ」
天狗はひそかに脱出の機をうかがいながら、わざと定九郎市をおこらせようとする。
「しょってやがらあ。そんなにくやしかったら、てめえこそ、早く駕籠を追いかけたらどうなんだ」
定九郎市はあくまでせせらわらって、ひどく自信がありそうである。
「じゃ、そろそろ、けさの勝負をつけるかね」
「あかんべえだな。山ざるなんか相手にしたところで、一文の得にもならねえ」
「逃げるんかね」

「逃げるのはてめえのほうよ。——おい、なにを遠慮してるんだ」
雲助どものほうへ合図をするのを見て、なにかたくらみがあるなと直感したから、
「うぬっ」
天狗は猛然と定九郎市めがけて切って出た。とたんに、それ、やっちまえ、という声といっしょに、はたして雲助どもの手からばらばらとつぶてが飛び出し、その二つ三つが肩、腰に当たる。つぶて攻めにされてはかなわない。
「おのれっ」
それがあるから、刀も抜かずにいっさんに逃げだす定九郎市のあとを追って、天狗はただ走るほかはない。
その頭上を、足もとを、つぶては遠慮会釈もなく乱舞して、たちまち一つがあんと後頭部に命中してしまった。
——しまった。
くらくらっとめまいがして、思わずのめるように片ひざをつき、くそっと立ちあがろうとするからだじゅうへ、五つ六つ火の出るようなやつが集中してきたから、天狗は血だらけになって、それでも両腕の中へ頭だけはかかえこむようにころげまわり、
——すまん、お夏さん、おれは約束が果たせそうもない。
ついに意識が遠くなりながら、
「山ざるのくせに、ばかな野郎さ」
いつか、頭を、背中をひどくあしげにされていて、その声をたしかに定九郎市だと聞いたのを最後に、もうどうすることもできず、ぐったりと気を失ってしまった。

8

お夏は、天狗が今おいついてくれるか、いま声をかけてくれるかと、全身で心待ちにしていたが、とうとうそんな様子もなく、駕籠はむやみに先をいそいで、どうやら品川の水野家下屋

敷というのに着いてしまったようだ。
　もともと無理な強行のうえに、鈴ガ森からはほとんど走りどおしに揺られてきたので、横づけの玄関式台へおり立ったときには、まっさおになって、いまにもめまいがしそうである。それを歯をくいしばってやっとがまんしたのは、少しでもこっちが油断したらどんな目にあわされるかしれないという大きな不安があるからだった。
「お夏どの、お疲れのようだな」
　まだ玄関先に立っている西野が、如才なくほほえんでみせて、
「とにかく、ここまでくれば、もう狼藉者の心配はないから、座敷でゆるりと休息してください。——お女中衆、御案内いたすように」
と、そこへ出迎えに出て両手をつかえている腰元たちのほうへいいつけた。
「御用人さま、太郎はどうしたのでございましょう」
　お夏はあたりを見まわしながら聞いた。
「天狗どのはすぐあとから追いつくでしょう。鈴ガ森で狼藉者にかこまれたとき、まっさきに切って出てくれたので、おかげでわれわれは無事に一足先に難がさけられたのだが、こっちも三人ばかりあとに踏みとどまっているし、なあに、追いはぎ雲助の五人や十人、ひとりふたりがけがをすればたちまち逃げ出すでしょうからな。なお、念のために、いま十人ばかり屋敷の者を迎えに出してあります。とにかく、部屋でしばらくお待ちなさい」
「いいえ、お約束ですから、わがままを申してすみませんが、夏はここで太郎を待たせていただきます」
　天狗を遠ざけたのはこの人たちの計略、お夏はどうもそんな気がしてならないのだ。
「お夏どのはわれわれを疑っていられるようだな。われわれは水野家の家中の者で、決して山賊や海賊ではありません。当家にはお女中衆も

たくさんいる。むろん、お夏どのの接待はお女中衆がすることになっているのです。安心して少しくつろがれてはどうかな」
　なだめるように、どこまでも下から出られてみると、そこは女だから、それでもいやだとは強情が張りきれなくなってきた。
「疑うのではありませんけれど、あたし、太郎の身が心配になるのです。もしものことがあったら、どうしたらいいかと思って——」
「いや、それは当家にもじゅうぶん責任のあることだから、必ずここへおつれします。しかし、万に一つまちがいがあるような天狗どのではなさそうだな。腕まえもすぐれているようだし、肝っ玉もすわっている。その点、お夏どののほうがよく知っているはずだが」
　そこまで感心されてみると、うれしいような、恥ずかしいような、お夏は自分のことのようについ顔が赤くなって、それだけ警戒心のほうがゆるんでくる。

9

　水野美濃守は八千石の旗本にすぎないが、今をときめく権臣の随一だけあって、品川の下屋敷は目の下に海が見晴らせる谷ッ山の一角を相当手広くしめ、庭も建物も数寄をこらしているようだった。
　その一室へ案内されたお夏は、腰元がすすめてくれる夜食も、ふろも、あの人がきてからいっしょにいただきますからとことわって、ひたすら天狗のつくのを心待ちにしていた。疲れてはいるし、きょうはお昼に天狗の持っていた握り飯を分けあって食べたきりだから、おなかもすききっている。
　が、半分は意地もてつだって、そこに出ている茶にも菓子にも手をつけない。
　——だれがだまされるものか。もし、もうしばらく待ってみても太郎さんがこないようなら、あたしは自分でさがしに行くからいい。

お夏はちゃんと腹をきめているのだ。
あの人はめったに人に負けるような男ではないから、水野家のほうになにか悪だくみさえなければ、きっとここへたずねてきてくれるはずである。
いや、たとえ水野家にどんな悪だくみがあっても、太郎さんなら平気でそれを踏みこえ、必ず約束を果たしてくれるたのもしい男なのだ。
——強いし、江戸へ売りに行くほど知恵だってあるんだもの。
そう思うと、お夏はなんとなく胸が豊かになってくる。少しぼけたような、しかし、いやらしさのみじんもない男らしい顔が目先へちらついてきて、
「——好きだわ、あたし」
と、思わずそのおもかげへ話しかけたくなる。
「おれも、お夏さんは好きだな」
「じゃ、お嫁にしてくれる?」
「そうだなあ、お嫁にするには、お夏さんは少し気が強そうだからねえ」
当惑したような男の顔を思いうかべて、はっとした。天狗はたしかに好意は持っていてくれるけれど、芝居で夫婦のまねをしていたときも、始終涼しい目が澄みきっていて、恋の感情などかけらほども感じられなかった。
——あたしが生意気で、はじめのうち、あの人を疑ったり、こばかにしていたりしたからに違いない。
そんな反省がわいてきて、お夏は急に心の底から寂しくなる。
「いやだわ、あたし。どうしても太郎さんのお嫁にしてもらうからいい」
お夏はきっぱりと自分にいいきかせて、たった今、女というものの目がひらけたように、狂わしいまで天狗が恋しくなる。それは胸をしめつけられるような、せつなくて、とても居ても立ってもいられない気持ちなのだ。
「どうしたんだろう、あの人。どうして早くきてくれないのかしら」
われにもなくふらふらと立ちあがろうとして、お夏はぎょっと聞き耳を立てた。たしかに、だれか、廊下をこっちへ歩いてくる。

10

庭には中秋名月をあすにひかえた十四日の月が真昼のように青く澄んでいる。その廊下の障子へ、くっきり腰元の姿がうつって、しずかにひざまずき、
「ごめんくださいませ」
と、外から声をかける。
「はい」
お夏は宙にうかせた腰をあわててすわりなおして、もしや天狗からのたよりではないかと胸がはずむ。障子をあけて、そこへ両手をつかえたさっきの若い腰元が、
「ただいま、御中臈波ノ江さまが、こちらへおわたりになされますそうでございます。お知らせにあがりました」
という。つまり先ぶれなのだ。
「あの、お中臈さまといいますと——」
水野家は旗本だ。旗本でも奥にそんな職名があるのだろうかと、町家育ちのお夏にはよくわからないから聞いてみた。
「波ノ江さまは御本丸大奥のお使者役をおつとめあそばすお中臈さまでございますが、今夜はおしのびゆえ、改まった礼儀にはおよばぬ、お気を楽に、とのおおせでございます」
御本丸大奥の中臈といえば、将軍家に仕えているお女中で、老中と対座して話ができるだけの格式を持っている。そんな身分のひとが、あたしになんの用があるのだろう。いったい、どんなあいさつをすればいいのか、それさえわからないお夏だから、まあ、といったきり、急には返事もできなかった。
その間に、一度引き取った腰元が、こんどはふたりで、ひとりはりっぱな座ぶとんを、ひと

りは脇息を運んできて、上座に席をこしらえる。またひとり香炉をささげてきて床の間へおき、ひととおり座敷を見まわして、なにもおちどがないのを見とどけてから、静かにさがっていった。むろん、今までお夏の前へ出ていた茶器も菓子台もきれいに下げていっている。

——なんておおげさなんだろう。

お夏はあっけにとられてながめているうちに、そこは気の勝った性分だから、なにもこっちから会いたいといったわけではなし、向こうからかってに押しかけてくるんだもの、びくびくすることはありゃしない、先さまがおこったら、とんだ失礼いたしました、とさっさと帰ってしまうだけだと、妙な反発さえ感じてきた。

それにつけても、太郎さんに会いたい。こんなとき、そばに太郎さんがいてくれたらなあと思わずため息をつかずにはいられない。

やがて廊下にきぬずれの音がして、お中臈さまがわたってきた。先払いはさっきの若い腰元で、

「お越しでございます。お出迎えを——」

とお夏につげ、自分は廊下へすわって、しとやかに向こうへ両手をつかえる。

お夏はそうしたほうがいいだろうと思ったから、敷居ぎわまで進んで、静かに三つ指をついた。

——なんだかお芝居みたい。

われながらくすりとわらいたくなるほど落ち着いていられるのがふしぎな気持ちだった。

品川御殿

1

お中臈さまは、年ごろ三十がらみでもあろうか、白をかさねた緋羽二重の着つけに、白地に金糸銀糸で御所車の縫い箔をおいたけんらんたるうちかけをはおり、御殿ふうの厚化粧に髪は

片はずし、美人ではあるが、芝居の『先代萩』に出てくる八汐といった感じの強いおもだちで、そこへ出迎えているお夏を見ると、おうようにうなずきながら、すそさばきもあざやかに設けの席についた。

武家屋敷になれないお夏は、さすがに威圧された気持ちで、どうしていいかわからないから、そのまま敷居ぎわに両手をつかえている。ひどく自分がみじめに思えたのは、やっぱり位負けがしていたのだろう。

「お夏どのといいましたね。遠慮なくこちらへ」

波ノ江は案外くだけた調子でいったが、すわった姿はあくまで毅然として、妙に近づきがたいものを感じさせた。

「お夏さま、お進みなさいませ」

年かさらしい物なれた腰元が、すわるところをそっと目で教えてくれる。

「はい」

お夏はからだを堅くしながら少し前へ出た。

ふたりの前へ、あらためて茶と菓子が運ばれる。

「そなたたちは、しばらくさがっているがよい」

つるの一声といった形で、腰元たちはおじぎをしながらさがっていった。

ひんやりとしたふたりの対座に、沈んだ香のかおりがそこはかとなく流れてくる。

「お夏さん、今夜は表向きのお役ではなく、ごく内々であなたを見にきたのですから、そう窮屈にしなくともよいのですよ」

波ノ江は自分からくつろいでみせるといったように、はじめてにっこりしてみせた。

「はい」

「きょうは、あなたは箱根からの道中だったそうですね」

「はい」

「疲れておいでだろうに、まだお夜食もとらず、おふろも断ったと聞きましたが、どこか気分でもすぐれないのですか」

「いいえ」

「これはまだ内密のことですが、あなたはいずれ美濃さまのお手から大奥へあがり、尊いおかたさまに仕えなければならないおからだになるのですから、今からたいせつになさらなければいけませんよ。せっかく、万人にひとりとないしあわせな星の下に生まれながら、からだを悪くしてはつまりませんからね」

いたわるような波ノ江のことばに、お夏はあっと胸をつかれて顔をあげた。

「あの、あの大奥と申しますと――」

「そうです。上さまの大奥へあがることになるのです。心がけ次第で、もし上さまの御寵愛をこうむり、若君でも御誕生になれば、あなたの出世ばかりではありません、御一門がどのようにも御出世できるのです。こんなしあわせはまたとないのですからね」

さぞうれしかろうといわぬばかりに、御中臈さまはひとりでのみこんでいる。

2

なにかあるとはお夏も覚悟してきたが、まさか大奥へ召し出されるとは、まったく思いもかけなかった。

それは、天下の将軍家に仕えるということは女としてこのうえもない出世だし、波ノ江がいうとおり、もし若君でも誕生すれば、将軍家の御生母ということになれないともかぎらない。が、お夏は正直にいって、好きでもない男に身をまかせるのは、たとえ相手が上さまでもいやだ。それは美濃守の側妾になるのがいやなのとおなじ理屈で、出世などは少しもしたいとは思っていない。自分は船宿の娘でたくさんだと思っている。もし、出世が望みなら、今までにだって、ずいぶん諸侯や金持ちから玉のこしの話はあったのだ。それをみんな断ってきたのは、生娘の潔癖で、好きでもない男にと考えると、考えただけでもぞっとするからであった。

――あたし、不具なのかしら。

この年になるまで、まだ一度もあの男ならとおかぼれ一つしたことがないので、ときには自分でもふしぎな気がしたことさえあった。でも、太郎さんならお嫁になってもいいと、やっと好きな男にめぐりあえたところをみると、やっぱり不具ではなかったと、とてもうれしくなっていたのに、――いきなり上さまに仕えるからだなどと、いったい、だれがかってにそんなことを決めたのだろう。死んだってあたしはいやだと、妙に腹さえたってくる。

「お中臈さま、あたしはだめでございます」

お夏はきっぱりと顔をあげていった。

「なにがだめなのです」

「夏は、町家育ちで、武家方のことはなんにもわかりません。まして、大奥のことなど、困ります、あたし」

「ほほほ、なにをいいだすかと思ったら、子どものようなことを――」

波ノ江は口紅の濃い口へ扇をあててわらいだしながら、

「そのような心配は少しもありません。いますぐ大奥へあがるというわけではなく、あなたは当分このお下屋敷で行儀作法をしこまれ、美濃さまがこれならだいじょうぶとごらんになってから、上さまの御前へ出るようになるのです。うしろだてがきけ者第一の美濃さまですもの、大奥へ出しても、あなたに肩身のせまい思いなど露ほどもさせるものですか」

と、ひとりで引きうけている。

「いいえ、それに、あたしには、あたしには、御用人の西野さまも御存じなんですけれど、もう夫があるのでございます」

お夏は思いきって最後の切り札を持ち出してみるほかはなかった。

「お夏さん、そんな作りごとを、みだりに口にしてはなりません。そのために親御さまがどんな迷惑をするか、あなたは少しも考えてないよ

うですね」
　波ノ江の表情が急にきびしくなってくる。
「なぜでございます、お中臈さま」
　親の迷惑になる、それがお夏にはどうもよくのみこめないのだ。

3

「これはここだけのお話ですが、美濃さまほどのおかたが、かりそめにも上さまのおそばへ御推挙なさろうとする娘の素姓なり、日ごろを、おろそかになすっているはずはありません。念のうえにも念を入れてお調べのうえ、内々で深川の親御さまのほうへお使者をむけられ、あなたにそんな話のないことは、親御さまの口からちゃんとお聞きとりなっているのです。それをあなたは夫があるという。現に、きょう程ガ谷の宿では、天狗太郎とか名のる若い男が、自分はお夏の夫だと西野どのに申し入れていたそうですね。すると、親御さまはお上へ偽りを申し立てたことになります。まずその責任から問われるようになりますよ。あなたは親御さまたちにどんな迷惑がかかってもかまわないのですか」
　あっとお夏は顔色を失ってしまった。まさか、両親にまで迷惑がかかるとは、考えてもみなかったのである。しかし、そういわれてみれば、たしかにそういうことになるに違いない。相手は水野美濃守ばかりではなく、もっとも上の、絶対権力を持っている公方さまなのだ。
　が、将軍家の仰せなら、たとえどんないやなことでもがまんしてしたがわなければならないのだろうか。物の話に、千利休の娘は太閤さまに見そめられたが、どうしてもその意にしたがわなかったとも聞いている。
「お中臈さま、もし夏が大奥へあがるのはどうしてもいやだと申し上げたら、どうなるのでございましょう」
「まあ、そなたというひとは――」

　さすがに波ノ江もあきれたらしい。俗に後宮三千といわれ、その大奥に仕える三千の女という女が、上さまのお手のつくのを最大の名誉として、御意にとまる日が一日も早かれと、脂粉をこらし、綺羅を飾っているのに、たかが船頭ふぜいの娘が、その上さまを振ろうという、波ノ江の常識ではどうにもお夏の気持ちがわからないのだ。
「そなたはこんな出世をいやだとおいいなのかえ」
「はい、夏は出世はいりません。どうぞ、このまま町人の娘で捨てておいてくださいまし」
「大胆なことを――。ああ、そなた、もしや旅先であの天狗とかいう男に肌を許しているのではないかえ」
　ことによると、それがあるから大奥へあがるのがこわいのではなかろうか、と波ノ江は気がついたのである。
「は、はい」
　お夏はお夏で、この場を切り抜けるにはそう答えるほかはないのだから、思わず顔が燃えたようになる。
「親の許さぬ不義いたずらですね」
　一本冷たくきめつけておいて、男のにおいを捜しでもするように、じろじろからだじゅうを見まわしながら、
「西野どのが心配していたのも、実はそのことなのです」
　と、波ノ江は急に声をひそめた。

4

「あの男と道づれになったのは、箱根を立ってからでしょう」
「はい」
「昨夜はたしか藤沢泊まりでしたね」
「はい」
「すると、たった一夜のちぎり、そうですね」
「――」

そこまであけすけに問い詰められると、お夏は返事ができなかった。事実はまだなんにもないのに、恥ずかしくて身のおきどころがないような気持ちなのである。

「そなたは夢を見たのでしょう。夢なら気にすることはないから、そのようなことは二度と口外してはなりません。そなたのからだにはもう上さまのおぼしめしがかかっているのですよ。万一、まちがいでもあると、親御たちはいうまでもなく、一家一門が無事にはすまなくなります。このところをよく分別して、みだりな夢などきれいに忘れなければいけません。西野どのもそのつもりでいるのです。わかったでしょうね」

あくまで生娘として大奥へあげる、そういう波ノ江の口ぶりだ。

「あの、あの、太郎はどうなるのでしょう」

そこまでたくまれていると、なにより心配になるのは天狗の身のうえだ。

「安心するがよい。夢の中の男は、だれもとがめようはありませんからね。そなたはただ夢を忘れて、美濃さまのおさしずにしたがえばいいのです」

「太郎に、太郎に一目会わせていただけないでしょうか」

「なりません。どうしてそなたはそう聞き分けがないのでしょうね。そなたの心がけ一つで、親御も、夢の男も、思わぬ出世がつかめるか、それとも一生日の目が見られなくなるか、ここがたいせつな境めだということがわからないのですか。そなたはもう子どもではないでしょう。今夜一晩、よく胸に手をおいて考えてみるがよい」

波ノ江は冷たくいいきって、廊下のほうへ手をたたいた。はあ、と遠くから返事があって、まもなくさっきの腰元たちがもどってきた。

「お召しにござりますか」

「もどります。お客さまをいたわってあげますように――」

お夏をしりめにかけながらすっと立ち上がって、うちかけさばきもあざやかに、お中﨟さまは廊下へ出る。そのまま腰元をしたがえて、引き取っていった。

――どうしよう。

お夏はじっとくちびるをかみしめている。いいようのない忿懣と、絶望と、その胸の底から太郎恋しさのせつなさが、泉のようにわきあがってくるのだ。

――一目会いたい。だれが大奥へなんかあがるものか。

ひとをだましてこんなところへ連れてきてと、考えれば考えるほどくやしくなりながら、一方では、くもの巣にかかったちょう、それをはっきり自覚させられてしまったお夏なのだ。

5

玄関わきに近い用人部屋とも見える八畳で、西野喜左衛門は灘屋万五郎と対座しながら、中﨟波ノ江の下がってくるのを待っていた。

「親分、あの娘は少し変わっているようだから、うまくこっちのものにならんかもしれないな」

たいていの町家の娘なら、貴人から招きの使者をうければよろこんでうけるのが普通だ。それをきらうばかりでなく、敏感にも、あらかじめ側妾になりたくない用心までしている。とても物にはなるまいというのが西野の意見だ。

「なあに、そのくらい意地のある娘でなければ、こんどの役はつとまらない。また、どんな娘でも、ならすようにしてなら、女はきっとこっちのいうことをきくもんだ。まあ、見ていなせえ」

どう利口でしっかりしているといっても、たかが小娘のこと、女なんていうものは権力と金をえさにしてつれば、どんな堅い女でもきっとつれる。それでいけなければ、最後は暴力だと、灘万は自信があるのである。

少し形は違うが、この下屋敷の女あるじ織江がそれだった。去年までは番町の旗本で千五百

石宮島伊織の奥方で、ひどく気位の高い女だったが、はじめはどんどん金をつぎこんで下からおだてておき、いきなり手ごめにしてしまった。あとは自分から不義を夫の前でひたかくしにしながら、こっちのいうなりだった。病身で神経質の伊織は、一服盛るまでもなく、それを気に病んで、まもなく病死してしまった。家名は伊織の弟にゆずり、若い御後室さまはこの下屋敷に隠居して、切り髪にこそなったが、今は灘万のめかけも同様である。兄のあとをついだ当主伊織も、織江の里方でも、うすうす知ってはいるだろうが、こっちが如才なく下手に立ちまわって金をまわし、なにかことがあれば役向きへ手を打ってうまくさばいてやるだけの力を持っているから、みんな知らん顔をしている。世の中なんていうものは、たいていそんなものなのだ。

　今夜、この下屋敷を美濃守の屋敷にしたててお夏をここへ連れこんだについては、水野の公用人黒田外記と暗黙のうちに結んで、天下の大芝居をたくらんでいるその女役者にこしらえなければならない重大な仕事があってのことだった。それでなくてさえ、日ごろ公儀の裏をうまくくぐって、われこそ無冠のやみ将軍と自負している灘万だから、美濃守の権力と結んでの仕事なら、およそ世の中に不可能なことはあるまいと、心がおごってくるのは当然のことで、たかがお夏という一町娘の意志など頭から問題にしていないのである。

6

「申し上げます」

　若党が廊下へきて、障子の外から声をかけた。

「はいりなさい。——なんだ」

「ただいま御門へ丸田市之進というかたがみえて、西野さまにお目にかかりたいといっていますそうですが」

　どうしよう、というように、西野がまず灘万の顔に相談したところをみると、上座にひかえてはいても、西野は灘万に頭があがらないことになっているらしい。

「かまわねえでしょう。ここへお通しなさいまし」

　立てるものは一応立てておいて、無用のからいばりは決してしない灘屋だ。

「やあ、京橋の親分も同席か」

　用人部屋へ通されて、定九郎市はそこに灘屋がきているのを見て、ちょっと意外そうな顔をした。が、灘屋は軽くうなずいただけである。

「御用人さん、さっきのことをここで話してもいいだろうね」

　水野のことなら、どうせ灘屋も一役買っているはずだと思うから、定九郎市はすぐに切りだす。

「親分に遠慮はいらない。あの山ざるは、どういうことになりましたな」

「簡単にかたづきましたよ。口だけはどうやら一人まえにききますがね、することはまるっきりまだ餓鬼とおなじだ。ただ、腕だけは、田舎でくそまじめに相当修業はしているようでしたよ」

「ふいに雲助がおどり出しましたな。びっくりしました」

　西野はおだやかに微笑しながら、もっとくわしく説明しろとなぞをかける。

「御心配にゃ及びません。雲助どもには、あの山ざるがお家をみだす悪人だといっておきました。むろん、御当家の名は出さない。そんなくだくだしい説明はしなくても、しかるべき日当さえ出せば、文句なしに働いてくれる連中です」

「おほねおりでした。命は取らなかったでしょうな」

「それだけは助けておいたが、なにぶんひどく頭をやられたようだから、正気にかえってもあほうぐらいにはなるかもしれない。石が飛んだのです。つぶてがな。石のやったことだから、

しょうがない」
「けっこうです」
　西野は用意しておいた金包みを出して定九郎市の前へおいた。
「ほんのお礼のしるしです」
「いや、その心配には及ばない。ほかさまと違って、兄弟分の京橋のが日ごろ世話になっているお屋敷だからね」
　定九郎市は手を出そうともせず、
「ときに、お夏は無事についたでしょうな」
と、あらためて聞く。
「おかげで、無事につきました」
「おとなしくしていますかね」
「おとなしいようです」
「おとなしければそれでいいが、だだをこねているようなら、ちょいとしかってやってもようござんすぜ。なわばりというのもおこがましいが、深川はおれのうぶ湯を使った土地で、船徳のおやじとも懇意な仲だからね。なんとでも手は貸しますぜ」
　それとなく灘万のほうを見て、なんか半口のせてもらいたそうな定九郎市の口ぶりだ。
　灘屋は、聞くでもなく、聞かないでもなく、ふたりの間へ口を出そうともしない。と見たから、西野も、
「ありがとう。いずれお願いすることがあるかもしれないが――」
と、それとなく断るほかはなかった。

7

「親分、おれは引き取ったほうがいいようだな」
　灘屋さえいなければ、ここでちょいとしりをまくって西野に食い下がり、うまい機会をつかんでお夏を連れて脱け出す、そういう腹の定九郎市だったが、ここに灘屋の目が光っていたのでは、さすがにそんなすごみもきかせかねる。
「せっかく御用人さんが出しなすったんだ、清く礼をうけて、ここはまたあとの相談に待つとしたらどうだね。御用人さんのほうにも、いろいろごつごうがおあんなさるだろうからな」
　灘屋がおだやかに出た。
　いやでも定九郎市はおとなしく引きさがるほかはない。
「親分がそういうなら、黙って帰ることにしよう。だが、お夏はなかなか一筋なわではいかない娘だ。深川育ちの意地っぱりだからね。西野さん、よけいなことだが、明晩の殿さまの前で踊らせるのは、ちょいとほねがおれますぜ、うまく急所をつかまえないとね」
「御注意ありがとう」
　西野は万事灘屋まかせだから、取りあおうとしない。
　灘万は灘万で、御用人さま次第といった顔つきだから、定九郎市は取りつくしまがなく、それじゃ、といって金包みをふところに入れ、しぶしぶと立ち上がった。
「佐助、佐助――、お客さまがお帰りになるぞ」
　西野が手をたたいて若党を呼び、
「ここで失礼します」
と、ていねいに定九郎市に会釈をする。
「御用人、あの男に仕事をさせたのは、やっぱり少しまずかったようだね」
　あとで灘万が苦い顔をした。
「そうだったろうか。親分の舎弟分だと清七がいうし、山ざるがついていたんではじゃまだと考えたものだから、あの男のいうなりに任せてみる気になったんだがねえ」
「じゃまはここへ連れこんでから、なんとでも始末のつけようがありまさ。まあ、すんでしまったことはしようがない。あとはおれがなんとかするからいいが、ああいう悪党は、うっかりするとこまたをすくいたがるんでね」
「以後は気をつけることにしよう」
　一言もない西野だった。
「申し上げます。ただいまお中臈さまがお下がりでございますが」

若い腰元が知らせてきた。
「いままいりますと申し上げておいておくれ」
灘屋はやさしく答えて、腰元をかえして、西野に目くばせしてすぐに立ち上がった。

8

中臈波ノ江は、渡り廊下でつづく茶室に、ひとりで行儀よくすわって待っていた。その渡り廊下の外に、ちゃんと腰元がひとりすわって張り番をしている。
「やあ、御苦労だったな、御中臈さん」
西野のあとからつづいて茶室へはいった灘屋は、だれにも如才がないが、態度はがらりとかわっていた。
「いいえ、これも天下のためですもの」
にっこりわらったお中臈さまは、まだひざこそくずさないが、その強い顔からいつの間にか権高なところが消えている。
「で、どんな見たてだね、遠慮のないところ」
「いい娘ですねえ、少しとうは立っているけれど。あんなのが、かえって御意にかなうんじゃないかしら」
「そうか。まあ、こっちの見たてもそこなんだが、相当手ごわいようかね」
「変わってることは変わっていますねえ。たいていの娘なら、大奥といえば一も二もなくよろこぶはずなんですがねえ」
「育ちが育ちだから、こわがっているんじゃないのか」
「あたしもはじめはそう思ったんですが、少し違うようなんです。生娘だから、はじめて女にされて、なんでもかんでもその男が恋しい、操を立てなくちゃと思い詰めているんじゃないでしょうか」
「ふうむ。すると、旅先で、天狗とかいう男と、やっぱりできているんだな」
「それも、昨夜、藤沢の宿でたった一度ね。なんでも、一目太郎に会いたいというから、親に迷惑がかかってもいいかと念入りにおどかしてはおきましたけれど、うまくあきらめるかしら。変わっているだけに、ちょいと手がかかるかしれない」
「いや、御苦労でした。それならそれで、なんとかひとくふうしてみよう」
と、灘屋は別に動じた色もない。
「しかし、親分、たとえ一度でも男を知った娘とわかっていて大奥へ出すのは、殿さまの立場としてどういうものかな」
侍だけに、西野は主人の立場を心配する。
「ここだけの話だが、家来の女房にさえ手をつけた公方さまもありますよ。正直にいって、大御所さま御寵愛のお美代の方だって、生娘だったかわからない。また、生娘でなかったからといって、お手のついた女を、まさか手討ちにもしねえだろうじゃありませんか」
にやりとわらってみせる灘万だ。今、西丸の大奥で、いちばん権力をふるっている御愛妾お美代の方は、水野美濃守が自分の娘として家斉将軍のもとへ差し上げた女なのだ。つまり、大奥へあがる前に、おまえの主人がどうしているかわかるものかといわぬばかりの口ぶりなのだから、西野としては当然黙っていられないはずだが、
「まあ、そういえばそんなものかな」
と、あえてさからおうとしないのは、よっぽど灘屋に頭のあがらない義理があるのだろう。
そういう灘万の悪党ぶりを、波ノ江はなんとなくほれぼれとした目でながめている。

9

「それじゃ、今夜はひとまずこれでお中臈さまにおさがりを願おうかな。まさか、お城のお使者が泊まりこむというのは変なもんだからね」
灘屋ははっきりと申しわたす。
「だって、お城の門はもうしまっていて通れませんよ」

不服そうな波ノ江だが、灘万はもう取りあおうとはせず、
「御用人さんはどうしますね」
　と、西野のほうを向いている。
「そうだな。わしもお中臈さまを途中まで送りながら、これでおいとましよう」
　当然まだ道中をしているはずの西野には、こんなときゆっくり行って泊まりたい女が、どこかに囲ってあるはずである。
　灘屋はそういう西野に、重いふくさ包みをそっと握らせることを忘れはしなかった。そして、手をたたいて腰元を呼び、
「お中臈さまが御帰城をされますから、清七に、駕籠のしたくをといいつけておいてくれ」
　と、ひとりでてきぱきと事を運んでしまう。
　西野が一足先に茶室を出ると、波ノ江はいきなり灘万の腕をつかんで、
「親分、いつ来てくれるんです」
　と、強い目がぎらぎらと嫉妬に燃えながら、御守殿くずれのお波になっている。
「あした行く」
「まちがいありませんね」
「ばか。おれがいつまちがえたことがある」
　一足廊下へ出た波ノ江は、もうとり澄ましてお中臈さまにかえっていた。
　ふたりを表玄関まで送り出した灘万は、一度お夏を見てやる腹でいたが、奥に難物の御後室さまがひかえている。一皮むけばめかけも同様で、ちっともこわくはないが、なんといってもこの品川御殿の女あるじだし、表面はどこまでも、部屋頭の万五郎で仕えていることにしている灘屋だ。そのほうが、仕事をするうえに利用価値が増すからである。むろん、召し使いたちにもそれだけはちゃんと心得させてある用心深い灘万なのだ。
　――女を逆上させると、なにをしでかすかしれねえからな。
　まず織江のほうをなだめておいてからだと灘万は思いかえして、奥の居間へ足を運んだ。
「御後室さま、おそくなりやした」
「御用がいそがしくて、けっこうでございますこと」
　腰元に肩をもませていた織江は、じろりと見すえて、頭からそんないやみを口にする。三十を一つ二つ出たばかりの、あぶらの乗りきった切り髪姿で、そう美人というほうではないが、育ちだけに、数あるめかけの中でもいちばん気品のあるのが、下賤な灘万には物珍しく、いつも自分からへりくだっていながら、その実、野獣のように征服してやるのがおもしろくてたまらない灘万なのだ。
　いつものことなので、腰元たちはさがれといわなくても、黙ってさっさとさがってしまう。
「なにをそんなにお腹だちなんでげしょうな」
　灘万はとぼけた顔をして、そろそろあくどい道化役者に取りかかる。

10

　織江は暴力で貞操をうばわれ、しかもそのために夫を憤死させた灘万を、いまだに憎みきっている。が、前世の悪業とでもいうのか、一度このへびのような陰険な男に見こまれてからは、どうあがいても身動き一つできないからだになっていた。一つまちがえば、この男は、宮島という名も、里の家も、平気でつぶすだけの力を持っているからである。
　それに、自分さえ目をつぶってなにもかもあきらめていれば、金にだけは両家とも困らないようにしてくれる。もうこうなってしまったのだから、死ぬまでの因果とあきらめるほかはない。そう自分を悲劇の主人公にして、自分でなぐさめているのだが、ときとして、それでは割り切れないものをこのごろは、いや、以前からしばしば、感じさせることがないではなかった。
　三十という女のからだが、この野獣のように執

拗(よう)で、下劣で、激しい男の要求を、むしろひそかによろこんでいる。そう気がつくたびにはっと反省して、思わずくちびるをかみしめるのだが、そういう肉体のほうが、いつか憎んでいるはずの男へ、われにもなく嫉妬の感情をさえ起こしていることがあるのである。

　今夜もそれだった。夕方近く、ふいに乗りこんできた大奥の使者だという女が、夜になっても帰らない。腰元たちの話では、自分とおなじ年ごろのきれいなお中臈さまだそうで、この春灘屋の手で新築した離れの客のところへ用があって来たということだったが、この男のことだから、どこまで信用していいかわかったものでないと、織江はさっきからいらいらと嫉妬に女心をかきみだしていたのだ。

「お中臈さまはいまお帰りあそばしたようでございますね」

　こんな下賤な悪党に嫉妬していると見すかされるのは自尊心が許さない。できるだけ冷静に、意地悪く、相手の弱点をえぐってやる気だったのだが、とがった声だけはどうすることもできない。

「へえ、やっと年があけやした。ああいう気位の高い御殿者は、ほねがおれやす」

けろりとしている灘万だ。

「大奥のお中臈さまだそうでございますね。今ごろまで、お城の御門があいているでしょうか」

「世の中には裏と表がありやすんでね、そこがまたおもしろいところでさ」

「あなたはその裏ばかりに興味を持っているようですね」

「おかげで長生きができやす」

にやりとわらうあぶらぎった顔を見て、

「けっこうですね。きょうのお中臈さまも、裏のほうがお好きなかたでございますか」

と、せいいっぱいの皮肉のつもりだった。

「御後室さまはどっちがお好きですね」

灘万はすましてそんな下劣なからかい方をする。とうてい太刀打ちはできないとよく承知していながら、

「ほかにもあなたは今夜きれいな町娘をさらってきているというお話ですが」

と、つい目をつるしあげずにはいられない織江だった。

陰　謀

1

「なんだ、御後室さまはやきもちをやいているんかね」

　今夜は織江をからかって遊んでばかりはいられない灘万は、急にずぶとい顔になる。

「やきもちではありません。ともかくも、ここは宮島家の下屋敷なのですから、あまり外聞にかかわる女遊びだけは、ここでは遠慮していただきたいと存じます」

「なあに、ここでおれがうれしがらせてやるのは、どこかの後家さんだけです」

「では、うかがいますが、きょうの怪しいお中(ちゅう)臈(ろう)さまといい、町娘といい、なんのためにここへお呼びになったのでございます」

　あまりあけすけに出られると、さすがに嫉妬(しっと)より屈辱のほうが大きく、織江の顔がさっと青ざめてくる。

「男の仕事に口を出しちゃいけねえ」

「いいえ、どうせ織江はなんといわれようと、灘屋の側妾(そばめ)も同様の女、いつ死ぬときがきても身の因果とはあきらめておりますが、なんにも知らずに死におくれて、生き恥だけはさらしたくないと存じます。この屋敷うちでのことだけは、教えておいていただきます」

「なるほど、そいつあ理屈だな」

　灘万は苦笑しながら、ふっと気が変わった。これからもこの下屋敷はたびたび利用しなければならない。そのために、相当金もかけて改築

してあるのだ。いちいちこの女に神経をとがらせるより、ある程度まで打ち明けておけば、なにかの手助けぐらいにはなるだろう。もし、秘密を打ち明けて、それが仕事の災いになるようなら、いつでも一服盛ってしまえばいいのである。

「じゃ、ひととおり話しておくが、びっくりしなさんなよ」

「いまさらびっくりはいたしません」

織江としては現在ありうべからざる不倫の境遇におかれて、これ以上びっくりすることなど、世の中にはあるまいと思えるのだ。

「こんどの仕事はちっとばかり大きい。簡単に話せば、西丸の御所さまはもう七十に近い老齢だ。さんざん女道楽をしているだけに、今は達者であいかわらず女ばかりねらっているそうだが、いつぽっくり死ぬかわからねえ。その大御所が死んでいちばん困るのはだれだか知っているかね」

「さあ……」

下賤の身で、突然将軍家のことを口にし出したので、織江はただ目をみはるばかりだ。

「わからねえかな。木挽町の水野、向島の隠居中野石翁、それに林肥後、ほかにもいるが、この三人がかっぱが陸へ上がったようになる。三人がいまいばっていられるのは、大御所にかわいがられていればこそだ。そこで、隠居がいつ死んでも、自分たちがいばっていられるように、今からその手を打っておこうというのが、こんどの仕事なんだ。つまり、隠居が死ねば、当然、今の十二代さまの世の中になる。十二代さまにはまた十二代さまの気に入りの家来があるから、そうなってしまってからでは手の打ちようがない」

灘万はまるで自分が老中にでもなったようなことをいうのである。

2

「てっとりばやくいえば、今のうちに十二代さまをうまく丸めこんでおこうというのが木挽町の親玉のはらで、林肥後と向島の隠居が片棒かついでくれることになったんだ」

「どうなさろうというのでございます、上さまを」

織江には想像もつかないことだから、ただあっけにとられて息をのむ。

「なあに、別にあくどい細工をしようというんじゃねえ。十二代さまは将軍職をついだようなものの、いまだに大御所には頭があがらない。大御所さまのおぼしめしだといえば、たいていのことは通してしまう。よくいえば親孝行、悪くいえば多少ぐずなんだな。そこがこっちのつけめだ。べい助の大御所さまが、若い時分から何千何百となくなでぎりにしてきた女の中でも、いちばん気に入っているのはお美代の方だ。溶姫、仲姫、末姫と三人までおたねを産んで、もういい年だが、まだ御寵愛がおとろえねえ。つまり、ただ美人だというだけじゃなくて、ひどく才気のある女なんだな。二番めの仲姫はうまく育たなかったが、上の溶姫は加賀百万石の前田家へ嫁にいって、犬千代という男の子を産んだ。大御所からいえば、まさしく孫だ。この孫をかつぎ出そうという大芝居を書いているのよ」

灘万はこともなげにいってのける。

「どうかつぎ出すんでございます」

「十二代さまには家定という跡取りがきまっている。さいわい、これが病身で、あんまり利口じゃねえ。いまのうちに大御所さまのおぼしめしでこれをやめさせ、前田家から犬千代を入れて、十三代ときめておく。それがうまくいけば、大御所さまがいつぽっくり死んでも、こんどは十二代さまをおだてて大御所さまにまつり上げてしまい、犬千代を十三代さまにできるってわ

けだ。お美代の方は十三代さまのおばさま、木挽町の親玉はそのお美代の方の親ということになってるんだから、今までどおり、天下にこわいものなしで通せる。利口な人の考えることは、なんとうまいもんじゃねえか」
「そ、そのようなこと、うまく運ぶものでございましょうか」
　もし、うまくいくとすれば、御三家だの、老中だの、若年寄だのと、そういう公儀の重臣たちは、あってもなくても同じだ、ということになる。いや、そんな陰謀をたくらむということさえ、織江にはただ恐ろしい気がするのだ。だいいち、口ぶりではそんな天下の大陰謀に一役買っているらしい灘屋という男は、たかが一町人のぶんざいで、どれほどの力を持っているのだろう。いまさらながら、そのあぶらぎった顔をながめて、ふしぎな気さえしてくる。
「ふふふ、御後室がびっくりしているぜ」
　灘万はにやりとしながら、いきなりにじりよって、織江の肩を抱きよせ、わがもの顔に、すばやく豊かな胸へ手をすべりこませた。
「いけません。まだお話は終わらないではありませんか」
　お上品な織江は、思わずのがれようと身もがきして、そんな下賤な愛撫のしかたには、やっぱり屈辱を感じさせられるのだ。

3

「話はこうやっていたってできらあな」
　腕力にかけても相当以上の自信がある灘万だから、女の反抗ぐらいは歯牙にもかけない。お上品ぶった切り下げ髪の居ずまいがくずれ、半分はだめだと承知のうえでいたずらに身もがきする乱れた姿を目でたのしみながら、肩からまわした左手はもうぐいと思いのままに女の胸をさぐりあてて、
「木挽町の黒田さんがねえ、このあいだ、おれを呼んで――」

と、灘万はしゃあしゃあと話のつづきをはじめる。
　屈辱は屈辱ながら、織江は愛撫されている乳ぶさからしだいに全身の力が甘くしびれたように解けゆるんでいき、今はぐったりと男のなすに任せながら、肩を投げかけているほかはなかった。
「――灘屋、どこかに器量がよくて、一目で男の目をひくようないい肌をしていて、上べはおとなしやかだが、内心はしっかりした利口な娘はいないかねえ、と冗談のようにいうのだ。黒田さんのめかけになさるんかね、とおれがわらいながら聞くと、そうではない、御本丸の大奥へ進物にしたいのだ、ひとつほねをおってみてくれぬかと、まじめな相談だ。ははあ、いよいよ十二代さまに手をまわす気だな、とおれはすぐぴんときたから、お美代の方を若くしたような娘がいいんでしょう、うむ、そのとおりだ、心あたりはないか、ありやすよ、さっそくほねをおってみやしょう、というと黒田さん変な顔をしてね、灘屋、相手は公方さまだぞ、こっちが望んでいるのは、たとえば唐の楊貴妃のような天下の美人だ、そこらにころがっているただの小町娘ではない、だいじょうぶかな、とひどく念を押すんだ。心得ていやすよ、もし黒田さんが見て、ううむとうなるような娘を見つけてきたらどうしやす、よかろう、事が成就した暁には、旗本に取りたててつかわそう、ということになったんだ」
「今夜きている娘は、それなのでございますか」
「うむ。おれはいまさらなにも旗本なんか取りたててもらわなくたっていいんだが、旗本にならねえと、どこかのかわいい御後室さまと、いつまでも晴れて夫婦になれねえ。だから、ちょいと働いてみる気になったってわけだ」
　灘万はあいかわらず豊かな胸の感触をもてあそびながら、そんなうれしがらせを忘れない。
「どこの娘なのでございます、その楊貴妃にも

劣らないというひとは」
織江はふっと女らしい嫉妬を駆りたてられながら、そんな美しい娘を、この鉄面皮な男が黙って見のがすだろうかと、妙な不安さえ感じさせられてくる。
「深川の相模屋っていう船宿の娘で、お夏っていうんだが、おれもそれが心配だから、きょうお美代の方の名代のお中臈さまに首実検を願ったんだがね」
灘万はもっともらしく、うそと本当をうまく口先でつなぎ合わせていく。

4

「お中臈さまはどんな御意見でございました」
「ひらったくいえば、上つ方は案外人形食いのほうだから、あれでじゅうぶんだろうって鑑定だった。おれの欲からいやあ、もうちっとどこかの御後室さまのような男をとろかすような色気がほしいんだが」
肩から胸へからんでいる灘万の腕へ、じんわりと力がこもってくる。
「離れのお客さまといいますのも、こんどのことに関係のある人なのでございますか」
「さいでござんす」
「お中臈さまは、きょう、そのかたにもお目にかかったそうでございますね」
「よく御存じでござんすね」
「そのかたは、どういう御身分の、……あっ、そんな乱暴」
織江の肩はいきなり男の胸の中へあおむけに抱きこまれて、ものいう口をくちびるでぴたりとふさがれていた。
離れの秘密はまだ女などに話す時期ではない。
その関心を黙殺しようとする灘万のずるいたわむれが、女の弱点へ悪魔のようにまつわりからんでいく。それは執拗あくなき野獣のような露骨ななぶり方で、なぶられる織江は悩乱せんばかりにのたうちまわり、ついには悲鳴にも似たうめき声もせつせつに、苦痛と恍惚の間に失神していこうとする。
——ふん、いくら小利口ぶった口をきいてお上品に澄ましてみたところで、女はたいていこんなものだ。
その肌もあらわにさんざんに取り乱した嬌態をひそかにわらいながら、勝ち誇った灘万は、いつか自分もその興奮にまきこまれ、いっそ絞め殺してみてやるかな、そんな残忍な衝動にさえ駆られてくる。
「申しあげます」
ふすまの外で、なにかあわただしい腰元の声が呼んだ。
「用かね」
灘万はずぶとくまだ織江を押さえつけたまま、ぎろりとふすまのほうをにらむ。
たとえふすまをあけられてもびくともするような男ではないが、さすがに腰元はためらっているけはいで、
「親分さま、あの、あのお夏さまの姿がお座敷に見えません。どういたしましょうか」
と、ふすま越しに聞く。
「なにっ」
灘万はやっと織江を放した。織江はぐったりと背をむけただけで、急には起きあがる気力もつかないらしい。
「座敷にいねえって、次の間にだれか見張りがついていたはずだ。その見張りはどうしたんだ」
「お梅どのは眠ったきり正体がございません」
とすると、眠り薬でものまされたか。そして、それはお夏のしわざか、それとも外からくせ者がこの屋敷へ忍びこんだか——。
「よし、すぐ行く」
灘万はさすがに血相を変えざるをえなかった。

5

時刻はかれこれ九ツ（十二時）に近いらしい。

――いい気になって、少し後家をよろこばせすぎたかな。

灘万はつい自分まで悪魔の遊戯に陶酔して時を忘れていたことが、興奮からさめてみると、ひどく苦々しい気持ちだった。

今夜はそんなつもりではなかったのである。むしろ、お夏に会って、様子を見て、どうしてもおとなしくこっちの手にのって踊らないようだったら、その悪魔の遊戯をお夏にほどこして観念させる腹だった。それには、先にうまく後家のほうをなだめて納得させておかないと、同じ屋敷うちだけにぐあいが悪い。そう考えたから、先に織江のほうへ顔だけ出すことにしたのだが、例によって高慢ちきな顔をして、お上品ぶった口をきくのを見ていると、小生意気なとせせらわらいたくなり、とことんまで雌犬に下落させて、のたうちまわらせてやらなくては、気がすまなくなってしまった。

――おとなげねえ話だ。

が、一足淫蕩の間から外へ出た灘万は、もう冷酷で寸分も油断のない悪党の本性にかえっていた。腰元のぼんぼりを先に立たせて、お夏の座敷へきてみると、ちゃんとふとんはのべてあるが、そこへはいって寝た様子はない。部屋の片すみのあんどんもつけたままだ。

ふすま一重の次の間に、見張りの若い腰元がひとり、すわったままの形でうつぶせになり、両手を投げ出すようにして眠りこけている。

髪も姿もあまり乱れていないのは、なんの抵抗もしなかった証拠だ。抱きおこすようにして、そっと口のあたりに鼻をよせてみると、たしかに甘いような薬のにおいがほのかにただよっている。

「わたしが交替しようと思いまして、きてみますと、もうこうやっていたのでございます」

「そうか。――部屋頭の清七に、すぐ来るようにいっておくれ」

「はい」

腰元は青ざめた顔で走り去る。

見張りは一刻（二時間）交替だ。ここへきてなら湯水をのむはずはなし。

――このごろオランダから、においで眠らせる薬が長崎へはいった、と聞いている。それかもしれねえ、と灘万は気がついた。

お夏をねらった賊は、見張りの腰元が居眠りをしているうしろから忍びよって、オランダわたりの眠り薬をかがせたのだ。

「賊はお夏の顔見知りの男だ。それでなくて、お夏がおとなしくつれ出されるはずはない。しかし、定九郎市にゃこんな器用なまねはできねえだろう。本職だな、賊は」

しかも、薬のにおいがほのかに残っているところから見ても、見張りの腰元がいくらなんでも交替早々眠くなるはずはなし、賊がお夏をつれ出してからそう時間はたっていない。ことによると、女づれのことではあるし、まだ屋敷うちのどこかにいるのではないか、と灘万の頭は次から次へびんしょうに働いている。

6

谷ツ山から高輪の高台一帯にかけて、このへんは諸侯の下屋敷つづきで、品川御殿の北隣も南隣も、塀一重でそういう大名屋敷につづいていた。

東は品川の宿から海手が見晴らせる崖っぷちいっぱいに二丈ほどの石崖を築いて、その上へ塀をめぐらしているから、ここからの出入りはほとんど不可能といってもいい。だから、賊が忍び入るにしても、脱出するにしても、それは表門のある往来に面した西側だけということになるのだ。

しかも、灘万は美濃守の陰謀を利用して、自

分も一仕事してやろうとたくらんでからは、ここを本拠にするつもりで、中間部屋へも、侍長屋へも、ひそかに必要以上の人数を入れ、屋敷うちは絶えず厳重に警戒させていた。

　夜はことにそれがきびしくなるのはむろんのことで、とうてい賊など忍びよれるはずはないのである。

「親分、お夏のやつ、逃げ出したそうでござんすね」

　腰元から知らせをうけて駆けつけた板橋の清七は、それが自分の責任でもあるように、蒼白な顔をしていた。

　事実、そのための部屋頭なのだから、一つまちがえば、どんな仕置きをされても文句はいえないのである。

「逃げ出したんじゃねえ、つれ出されたんだ」

「つれ出された？　――だれにでござんす」

「そんなことは、おれに聞くより、てめえたちの手で早く捜し出せ、まだ屋敷の外へは出ていねえはず」

「へえ」

「こっちへ来てみろ」

　灘万は廊下へ出て、近くの雨戸をひととおり見てまわった。はたして、かわやのそばの手洗いのある雨戸の栈がはずれたままになっている。

「忍びこんだのはどこからだかわからねえが、出たのはここからだ。清七、てめえの首はしばらくあずけておくぞ」

「へえ」

　ぎろりとにらまれた清七は、死罪をいいわたされた男のように、ぶるっと一つ身ぶるいをしながら、廊下を駆けだした。

　苦い顔の灘万は、そこの雨戸を一枚くって、足袋はだしのまま庭へ出る。十四日の月がくまなくさえわたって、逃亡する者にとってはひどく不利な夜だ。

　灘万はいちばん気になる新築の離れへいそいだ。

　雑木林のまん中を切りひらいて建てた三十坪ほどの一棟で、まわりに建仁寺垣をめぐらし、風雅な格子門がついている。

　その小道へはいっていくと、門の近くの林の中から、

「だれだ」

　いきなり、中間がふたりすさまじい勢いで飛び出してきて、葉末をもれる月かげにこっちをすかしてみながら、

「なんだ、こりゃ親分じゃござんせんか」

　と、てれた顔つきになる。

「御苦労だな、別に変わったことはねえか」

「へえ。張り合いのねえくらい、変わったことはなんにもありやせん」

「そうか」

　灘万はうなずきながら、じっとあたりを見すえている。

7

　賊は離れのほうへ近づいていない。

　やっぱり、お夏だけが目的だったのだろう。そのほうはひとまず安心だが、出入り口はというと、内庭から外庭にかけて、一刻交替の夜まわりが絶えず目を光らせている。

　その網の目をくぐって、いったい、どこから忍びこみ、どこからお夏をつれて脱出しようとしているのか。

　灘万にはまったく見当がつきかねるのだ。

　しかし、どこからにもせよ、賊が忍び入ったことは厳然たる事実なのだから、必ずどこかに脱出する道も作っているに違いあるまい。

　とすると、それは案外、こっちが不可能だと見ている意表外の場所をついているのではなかろうか。

　――東側の崖っぷちだ。

灘万ははっとそこへ気がついた。
「おい、この屋敷へはいま、怪しいやつが忍びこんでいる。おまえたち、ここだけはしっかりたのむぜ」
「へえ」
「どんなことがあっても、持ち場を離れちゃいけねえ。みんなにもよくそういっておいてくれ」
中間たちに堅く念を押しておいて、灘万は東の塀ぎわのほうへいそいだ。
もう清七が一同に急を告げて非常の処置をとったとみえ、林の小道を出ようとするところで、ひとりがちょうちんを持ち、ふたりが六尺棒を持った三人一組みに出会った。
「おまえたち、おれといっしょに行け」
その一組みをつれて、日ごろこっちはだいじょうぶと見ているから、ほとんど夜番がまわってない奥の塀ぎわを、丹念に見ていった。もうしっとりと草に夜露がおりている。
やがて、北隣に近いあたりに、松の老木が一本、塀越しに外へ太い枝をはわせている。その下までくると、草の中にきらりと光ったものがある。
「ちょうちんを見せろ」
拾いとってみると、蒔絵に貝がらをちりばめた黒塗りの女のくしだ。
――しまった。
一足おそかったのである。細引きさえ一本用意してくれば、この枝から塀越しに、女を石崖の下の小道までつりおろせないことはない。逆に、相当あぶない仕事ではあるが、名の知れたぬすっとなら、このくらいの石崖はよじのぼってのぼれないはずはないはずだ。灘万はじだんだが踏みたくなってくる。
が、それにしても、敵は女づれだ。まだそう遠くまで行っていまい。石崖の下の小道は、高い丘の中腹を南北にのびて、南へ行けば品川新宿、北へ行けば高輪の大木戸へおりる。いや、たとえうまく逃げたとしても、お夏が帰るのは深川の親の家よりほかはないではないか。
「おい、清七にすぐこいといってくれ」
灘万はひとりにいいつけて、念のために松の木へのぼってみた。顔が塀の上へ出ると、月明の品川の海が青々と眼下にひらけている。

8

そのころ。――きりっと娘らしく片すそをはしょったお夏は、手ぬぐいをぬすっとかぶりにしたお大名浅のうしろから、谷ッ山の中腹をまわって品川新宿へ出る、道とは名ばかりのあぶなっかしい小道をいそいでいた。
思いがけない浅吉に助けられて絶望の座敷から庭へのがれ、海の見える松の木の枝からたらした細引き一本をたよりに、目もくらむような三丈の崖をどうにかこの小道まで伝いおりたときは、まったく死にもの狂いだった。それでも、日ごろ踊りでからだがきたえてあるのと、この綱わたりができなければ、どっちみち生きててはいられない命だというせっぱつまったどたん場だったから、半分は夢中でやってのけたことで、やっと足が地についたときには、われながら全身の力が一度に抜けてしまった感じで、たわいなくへなへなとそこへすわっている。
「お夏ちゃん、ここはまだ鬼の屋敷の真下だ。安心するなあ早すぎるぜ」
こんな急な石崖を、いつの間におりてきたのだろう、上で細引きの端を松の枝に巻きつけて持っていてくれたはずの浅吉が、もうそこに立って、細引きを手ぐって手早くたばねながら、冷淡にそういったかと思うと、待ったなしに、すたすたと歩きだしたのである。
「待って、おじさん」
お夏は、はっと立ち上がってあとを追ったが、浅吉はふりかえってみようともしない。
小道はやがて坂の中途へ出て、目の前にからりと海がひらけてきた。この坂を下りきったところが、遊女屋のある本街道になるらしい。

「どうするね、お夏ちゃん」
　足をゆるめながら、はじめて浅吉が話しかけてきた。
「なんのこと──どうするって──」
「すぐ深川の家へ帰るかね」
「さあ──」
　帰りたいが、家へ帰って無事にすむからだだろうか。お中臈さまにさんざんおどかされてきているだけに、考えるとお夏はどうしていいかわからなくなる。
「おじさん、太郎さんはどうなったでしょう。知りませんか」
　常人にできないようなまねをするこの男なら、なんでも知っているのではあるまいか。そう気がついたとたんに、天狗のことが胸に痛いほど心配になってきたのだ。
「うんうんうなって寝ているがね、さいわい命にかかわるほどの傷じゃねえ。ただ、若いもんだから、ふいにそんなめにあったのと、だいいち、お夏ちゃんをみすみす敵の手にわたしてしまった、申しわけねえと、それがくやしくってたまらねえんだな」
「そんなめって、おじさん、どんなめにあったんです」
「定九郎市の計略で、鈴ガ森で雲助たちのつぶて攻めにあったのさ。からだじゅう傷だらけでね、よくまあ、それでも命だけは助かったもんさ」
「まあ」
　お夏はただ目をみはるばかりだ。

橋場の寮

1

　翌朝、お大名浅は八丁堀の組屋敷のあたりをぶらぶらしながら、笠井平三郎が奉行所へのぼるのを待っていた。

　浅吉は、きのうずっとお夏の行列をつけてきて、鈴ガ森で雲助の襲撃があったときも、笠井との約束があるから、まず水野家の行列について走ることにした。そして、行列が品川の下屋敷へはいるのを見とどけ、ついでに屋敷のまわりをぐるりと見てまわってから、天狗のことも気になるので、すぐ鈴ガ森へとってかえしたのである。
　ちょうど鮫洲あたりまで行くと、月の街道をさんばら髪で、びっこをひきながら、よろめき歩いてくる天狗に出会った。着物もはかまも裂けているうえに、どこからどこまでどろまみれ血まみれで、それはなんとも無惨な幽鬼のような姿であった。
「太郎さん、──太郎さんじゃねえか」
　あまりのことに、浅吉は棒立ちになったまま二の句がつげなかった。
「おじさんうじか。面目ない」
　声だけは案外しっかりしているが、その顔さえどす黒く、ほこりによごれている。
「どうしなすった。だいじょうぶかね。歩けるかね」
「もう歩ける」
「傷はどこなんだ。どろだらけじゃないか」
「申しわけない。おじさんうじ、お夏さんはどうしたろう。どこへつれていかれたか知らんかなあ」
　ひどく責任を感じているのだろう、とたんにぎらぎら目が燃えてくるのだ。
「つれこまれた先はわかっている。安心しなせえ」
「ありがたい。わかっているか。教えてくれ、おじさん」
　天狗はいきなり浅吉の両腕をつかんだ。恐ろしい力だ。
「いてえ、太郎さん、いてえよ。──けど、そんな力が出るようじゃ、まだだいじょうぶらしいや」

「だいじょうぶだとも。おれはどうしても今夜じゅうにお夏さんを取りもどさなくちゃ男がたたない。だいいち、おじさんうじにも面目なくて、気が遠くなりそうだ」
「冗談じゃねえ。いま気が遠くなられたひにゃ、あっしが大弱りだ。いったいどうしたんだね。太郎さん。おめえさんほどの勇士が、そんな化け物みたいにされるなんて、たかが雲助ぐらいを相手に、どうしたっていうんだ」
「いや、つぶて攻めにあったんだ。があんとその中の一発が後頭へきて、気が遠くなってしまった。それはこっちの油断だからまあがまんもするが、ひっかえしてきた定九郎市が、かってな悪口をつきながら、さんざん土足でおれを踏みつけ、しまいには頭を踏んまえて、山ざる、命だけは助けておいてやるから、さっさと丹波へ帰れ。こんど江戸でてめえの顔を見かけると命がねえぞ、きっと忘れるな、といった。だれが忘れるものか。わしは誓って、江戸で、堂々とあいつと勝負を決する気だ」
そのくやしさ一つで、やっとここまで歩いてこられたともいえる天狗だった。

2

品川の女郎屋町の裏は目黒川が帯のようにまわって海へそそいでいるが、その川を一つへだてた海のふちに漁師町がある。そこの漁師で権七というのが、やくざあがりで、浅吉とは古い顔なじみだった。
浅吉はとりあえず天狗をそこへつれこんで、傷の手当をしてやることにした。どろだらけの着物をぬがせてみると、背中一面につぶてのあとがなまなましく、中には傷口が切れて血の流れているのさえいくつかあった。いちばんひどいのは、なんといっても後頭部の傷で、もし頭髪がなければ即死したかもしれない。
「こいつはひどい。よくこれで歩けたもんだねえ」

手当をてつだってくれた権七も、さすがにまゆをよせていた。
「相手が悪いや。雲助のくそ力でぶつけやがったんだからな」
傷口はいちいちていねいに焼酎（しょうちゅう）で洗い、薬を塗りこんで、しっかりとさらしもめんを巻きつける。やっと手当がすんで、さて床の上へ寝かされてみると、気がゆるんだせいか、傷の痛みより、むしろ定九郎市にところきらわず踏んだりけったりされたからだの節々がひどく痛みだして、天狗はどうあせりもがいてみても起きあがることができなかった。
「太郎さん、心配しなくてもいいぜ。あの娘はきっとおれが助け出してくる」
「面目ないなあ。お夏さんにも、おじさんにも、あんな大きな口をきいておきながら、おれ、いっそ腹を切ってしまいてえよ」
「冗談いいっこなしさ。ここで腹なんか切ったひにゃ、今夜のかたき討ちはだれがしてくれるんだ。しっかりしろよ、太郎さん」
「すまねえ。まったくすまねえ」
天狗はぽろぽろ大きな涙をこぼしていた。
――偉そうなことをいっていても、ああなるとまだからきし餓鬼だ。かわいいやつさ。
あとを権七にたのんで漁師町を飛び出したお大名浅は、すっかり天狗が好きになっていた。純情で、生一本で、正直で、悪党にかかるところりとだまされやすいが、ああいうのが一度おこりだすと、いのししみたいに強くなる。悪と見ると、損得なんか考えねえで、がむしゃらに取っ組んでいくからな。だから、世の中が地獄にばかり落ちきれねえで持っていくんだ。つまり、世の中の宝ってやつだな、と浅吉はうれしくなってくる。
――なあに、太郎さんにたのまれなくたって、おれはどうしてもお夏坊を助けてこなけりゃ、笠井のだんなに義理が立たねえんだ。
そして、お大名浅はあだ名のとおり、大名屋

敷へ忍びこむのは袋の中のものを探りあてるのと同じだった。品川御殿からお夏をつれ出すぐらいはぞうさもない仕事だったが、はたと当惑したのは、お夏の口から聞かされた水野美濃守のおもわくである。たとえ事件はまだ内々にもせよ、お美代の方の息までかかっているとすると、とても自分だけの力ではどう歯の立てようもない。

3

「おじさん、あたしがお下屋敷を逃げ出してきて、おとっつぁんやおっかさんに迷惑がかからないかしら」

お夏は、昨夜一晩じゅう天狗の介抱をしながら、そればかり心配していた。

「そんなことはねぇはずだ。おじさんあしたは早く深川へ行って、水野のほうからどんな掛け合いがあったか、おとっつぁんによく様子を聞いてきてやるが、たとえ公方さまのお声がかりだって、いやなものは断るよりしようがねえんだからな」

そうは答えておいたが、いやがいやで通らないことのほうが多い世の中だし、相手はいやをいやで絶対に通させない権力を持っているのだから、お大名浅もあんまり大きな口はきけないのだ。

「それはまあそれとして、お夏ちゃんは当分どこかへかくれていたほうがいいと思うんだ。どっか心あたりの家はないかね」

権七の家は二間きりで、子どもはないが、ふすま一重に夫婦が寝ている。気がねなことも気がねだし、だいいち、人の出入りが多いから、とてもかくれ家には向かない。

「ないこともないと思うわ。一度お菊ねえさんに相談してみます」

「ああ、丹波屋のおかみさんにね。けど、あそこもいまごたごたがあるようだからね」

「ですから、どうしても早く会ってみたいの。あした行ってみちゃいけないかしら」

「さあ、そいつは、おじさんが深川のおとっつぁんに会ってくるまで待ってもらいてえな。ことによると、おとっつぁんのほうに、またいい心当たりがないともかぎらねえからね」

「おじさん、あたし太郎さんと別々のところへ行くのはいやですよ。おとっつぁんにも、そのことだけは、おじさんから耳へ入れといてくださいね」

「わかってるとも、人間にゃ義理ってものがあるからね」

だが、お夏の看病のしかたには、ただ義理だけとは思えない情熱がこもっている。ここへ着いて、頭をぐるぐる巻きにされて寝ている天狗の無惨な姿を見るなり、

「どうしたのよう、太郎さん。しっかりしてくれなくちゃいやだ」

と、人前もなくおおいかぶさるように身を投げかけて、顔をのぞきこんでいた。

「あたしのために、こんなことになってしまって――」

「いや、おれこそ面目ねえだ。わらってくれ、お夏さん」

「いいのよ、そんなこと。雲助に石を投げさせるなんて、太郎さんが弱いんじゃないわ。定九郎市がひきょうなんだわ」

「いや、おれの知恵が足りなかったんだ」

「そんなこといっちゃいやだ。あんたが悪いんじゃない。あんたは強いんだわ。ただ、ひきょうな悪知恵にかかっただけなんだわ。本当なら、定九郎市なんかに負ける太郎さんじゃないわ」

顔を押しつけんばかりにして夢中になってなぐさめているお夏を見ながら、こいつはいけねえ、とお大名浅は当惑してしまった。

4

――困ったなあ。お夏坊め、とうとう太郎さんにほれちまったようだ。

はじめは山ざるあつかいにして、こばかにしていたようだが、どんな利口な娘でも、男の誠実というやつにはほだされやすい。

しかも、突然降ってわいた災難に、こうまでいためつけられてみると、そこは女だから、ついたのみになる男の力にすがっていきたくもなるのだろう。

——似合いの夫婦だ。おれならいっしょにしてやるんだが、そうもいかねえかもしれねえな。

笠井のだんながうまく承知してくれるだろうかと、お大名浅はそれが気になるのである。いや、お夏がもし金さんの落としだねだとすると、なにしろ金さんは今をときめく北のお奉行さまだし、いくら天狗がたのもしい男でも、田舎からぽっと出の浪人者じゃ、勝負になりそうもねえ、と浅吉はひとりで気がもめてくるのだ。

そんな心配もあるので、浅吉はけさ深川の徳造をたずねる前に、ぜひ笠井のだんなに会っておきたかった。

その笠井平三郎が、手下の手先をふたりつれて八丁堀の組屋敷を出てきたのは、やがて四ツ（十時）に近いころだった。

目ざとくお大名浅を見かけて、ついてこい、というように目で知らせ、さっさと呉服橋のほうへ歩いていく。

中ノ橋をわたって右へ折れ、本材木町一丁目の番屋へ寄って、まもなく浅吉はそこへ呼びこまれた。もう、ちゃんと人払いがしてある。

「早いな、浅。いつ帰ってきた」

本当なら、どう早くても女の足だから、きょう八ツ（二時）すぎでないと深川へ着けないはずだ。

なにかあったな、と平三郎の深い目が聞いている。

「実は、ゆうべ、品川へ泊まりやした」

「ふうむ。妙なところへ泊まったな。夜旅をかけたのか」

「へえ。だんなのほうへは、まだ相模屋からなんにも話がねえんですか」

「別になにも聞いていないな。どうしたんだ」

「おかしいな。こんな大ごとが起こっているのに、どうしたっていうんだろうな」

実は、といって、浅吉は一昨日お夏が天狗と道づれになった話から、昨夜の下屋敷の事件まで、残らず平三郎に報告した。

「そんなわけで、あっしはどうにか曲がりなりにも、だんなにいいつかったお役は果たしたつもりなんですが、お夏さんはすぐ深川の家へ帰ってもいいものかどうか、いま品川の権七の家で、天狗を看病しながら、あっしの帰りを待ちかねているんでさ。どうしたもんでしょうねえ、だんな」

「ふうむ」

平三郎は職掌がらあまり驚いた顔は見せないが、さすがにじっと考えこんでいる。

「お夏を程ガ谷で待っていたのは、たしかに水野家の御用人西野喜左衛門なのだろうな」

「へえ。あっしは会ったことはありませんが、自分でそう名のっていやした」

「それにしても、谷ッ山には水野家の下屋敷はないはずだが——」

「本当ですか、だんな」

浅吉は思わず目をみはる。

5

「とにかく、いま聞いただけの話じゃ、だいぶげせねえ節が多いようだ。一応こっちでもよく調べてから返事をするから、迷惑だろうが、もうしばらく、おまえ、お夏をあずかっておいてくれぬか」

大奥ということばが出ているだけに、笠井平三郎にも即答はできないらしい。

「承知しやした。なあに、迷惑なんてことはありやせんが、——じゃ、だんなのおさしずがあるまで、お夏さんは深川へ帰さねえほうがようござんすね」

「うむ、そうしてくれ。その品川の権七というのは信用していい男なんだろうな」
「そりゃだいじょうぶでさ。あっしとは古い友だちでござんすからね。ただ、なにしろ二間きりしかねえ狭い家ですから、近所の口がうるせえだろうと思いますんで――」
「なるほど、若い娘だから目だつな。よし、今夜にも引き取るようにするから、おまえはすぐ品川へ帰ってやってくれ」
「引き取るって、だんな、お夏さんだけでござんすか」
　天狗のことが腹にあるから、お大名浅はそれとなく聞いてみる。
「いや、その天狗とかいう若い男のことも考えておこう」
「そうでござんすね。なにしろ、二度も三度も助けられた命の恩人なんで、ゆうべなんか、お夏さん帯も解かねえ。ひとりで引き取られるんだといったら、うんといわねえかもしれません」
　しかし、平三郎はそれに返事をしようとせず、
「御苦労だった。おまえも乗りかかった船だから、ついでにもう少しめんどうをみてやってくれ。すぐ帰ってやってくれるだろうな」
　と、うながすようにいう。
「へえ、すぐ帰りやすが、もう一つだんな、――お夏さんは蔵前の丹波屋のおかみさんにぜひ会いたいといってます。あすこのごたごたも気になるし、もしできたら、おかみさんにたのんで、寮かなんかをかくれ家に借りたい腹なんでしょうね」
「それも含んでおこう」
　実はもう一つ口まで出かかったことがあるが、さすがにそれは遠慮して、ひとまず笠井にわかれを告げた。
　――まあいいや、太郎さんのためにゃ、いや、お夏坊のためにも、お奉行さまの落としだねでねえほうが、かえって気が楽かもしれねえからな。

　その日――。
　お大名浅を帰した笠井平三郎は、急にいそがしくなった。
　昨夜お夏が出会ったという事件は、たとえ水野美濃守の意志から出ているものにもせよ、婦女誘拐にも等しい怪事である。まして、当人にその意志がないのに、いきなりお美代の方から使者が立って脅迫がましい言辞をろうするなど、とうてい常識では考えられないことだ。
　――おそらく、水野の権力のかげにかくれて、なにかたくらんでいる黒幕があるに違いない。
　まず、そのかげの人物の正体をつかまえなければならないのだ。

6

　平三郎は手先のひとりを谷ツ山へ走らせて、お大名浅がお夏をつれ出したという崖っぷちの下屋敷が水野家のものかどうかを調べさせることにした。
　一方、永代の船徳が水野家の御用人西野喜左衛門からどんな掛け合いをうけているか、これは徳造とは旧知の間がらだから自分で出かけていって聞き出すのはぞうさもないが、万一、事件に案外大きな根があるとすると、なるべく目だたないほうが得策だろうと考えたので、福井町のおかっぴき重五郎をたのむことにした。福重は、いまの北町奉行遠山左衛門尉がまだ遊び人の金さんで、相模屋の二階にごろごろしていた時代、たびたびむずかしい捕り物を金さんにてつだってもらったことがある。つまり、金さんとも相模屋徳造とも二十年来のつきあいがあるし、もう五十を一つ二つ出たが、おかっぴきとしていい顔の親分になっている男だ。
「へえ、承知しやした。ここのところ相模屋へもごぶさたしていますから、顔出しかたがた、すぐ行ってみましょう。しかし、だんな、こいつはどうも、やっかいなことになりそうでござんすね」

委細を聞いた福重も、さすがに稼業の勘で、眉間に深いしわをよせていた。

「うむ。おれも案外根は深いところにあるんじゃねえかと心配しているんだ。まあ、じゅうぶん気をつけて働いてみてくれ」

「しかし、ここだけの話でござんすが、あんな人目につく娘をいつまでもひとりでおくから、つい魔がさすんです。お夏坊も少しわがままですからねえ」

「いくぶん、そんなところもあるようだな。——そういえば、重五郎、蔵前の丹波屋のほうは、その後どうだな。なにか変わったことはないようか」

蔵前と福井町はつい目と鼻の間だから、なにか変わった事実がおこれば、重五郎の地獄耳にはいっていないはずはないのだ。

「こいつがまたおかしな話でしてね。箱根へ湯治に行っているおかみさんを呼びかえしたくらいだから、主人四郎兵衛がいなくなったのはたしかなんでしょうが、いまだに真相はかくしている。店の者にさえ、ゆくえが知れないんじゃない、行った先はちゃんとわかっているんだから、心配するなといってある。そのくせ、おもだった親戚と大番頭たちがわざとお店をさけて橋場の寮のほうへ詰めっきりで、おかみさんを囲んで毎日なにか相談しているそうで、これが人殺しとか、財産横領とか、はっきりした事実が少しでも表面へ出てくれば踏んごんでいくという手もあるんですが、いまのところまったく手のつけようがありません」

「誘拐、監禁、脅迫、そんなにおいはないのか」

「さあ、いまのところなんとも」

「とにかく、ただごとではないな。如才もあるまいが、このほうもじゅうぶん探ってみてくれ」

「かしこまりやした」

まもなく福重は子分をつれて深川へ出ていった。

7

品川へ行った手先が帰ってきて、谷ツ山の崖っぷちには水野美濃守の下屋敷はない、話の場所にあるのは千五百石の旗本宮島伊織の下屋敷で、そこなら今、先代伊織の若い後室の住まいになっているとわかったのは、やがて八ツすぎであった。

一方、深川から帰ってきた重五郎の返事は、たしかに一昨日、木挽町の水野家から西野喜左衛門という用人がきて、この十五日の夜、主人が品川の下屋敷で月見の宴を催すことになっている。その節の余興に、ぜひお夏の踊りを所望したい、という話があった。しかし、あいにく、お夏は蔵前のおかみさんのお供で箱根へ出かけて留守なので、そのおもむきを話してことわっておいた。ただそれだけのことだというのである。

「ですから、こっちの話をしてやりますとね、船徳夫婦もびっくりして、そんな話はちっともなかった。とんでもないことだ。お夏がいやだというなら、なおさらのこと、お中臈さまだろうが、お部屋さまだろうが、まっぴらだ。お夏はすぐ家へ引き取らしてくれって青くなっていました」

「子ぼんのうだからな、無理はない。——重五郎、ことによると、もう一度品川まで行ってもらわなくちゃならねえ。呉服橋までいっしょにきてくれ」

笠井平三郎は福重をつれて北の奉行所へはいった。詰め所へ重五郎を待たせておいて、小姓にお奉行さまはと聞くと、いま奥へ引き取って休息中だという。お耳に入れたいことがあるのだが、と取り次ぎをたのむと、よろしいそうです、御案内いたしましょうという返事だ。

町奉行の官邸は、杉戸一枚で奉行所につづいている。遠山左衛門尉景元という、いかめしい名まえより、からだに桜のほりもののある遠山の

金さんのほうで江戸市民に親しまれている景元は、奥の居間で、書院窓の下にすえた小机に向かってなにか書類に目をとおしていたが、敷居ぎわへ平三郎が平伏したけはいに、すぐそっちを向いた。

「珍しいな、平三。なにか用か」

昔は幼友だちで、景元が市井にごろごろしていた時代にはずいぶん無心もいわれた仲だし、景元が奉行職についてからは、その配下の同心という重なる宿縁に結ばれていながら、用のないかぎり、めったに自分からは顔をあわせないようにしている平三郎だ。情実になれすがる、金さんのためにも自分のためにも、なるべく周囲からそんな目で見られたくないからだ。

「はあ、少々お耳に入れたいことがございまして――」

「もっと進んだらどうだ。ここはわしの居間だ。遠慮することはねえ。――それとも、公用のほうか」

さすがに行儀こそくずさないが、にっこりしてみせる顔は、昔ながらのすっきりとさばけたいい男の金さんで、この顔を若くするとお夏になる、あらそわれないもんだと、いつも平三郎は思うのだ。

「公用が半分、私用が半分、どっちかというとお奉行さままでないほうの金さんに聞いてもらいたい用件でしょうな」

ひざをすすめながら、平三郎も少しくだけて出る。

8

「平三、品川に下屋敷のある宮島伊織の先代は、憤死だといううわさがあるな」

ひととおり昨夜の事情を聞いた景元は、静かにいった。

「てまえもそんなことを耳にはしています」

「宮島家の部屋頭は、水野家へも出入りしているようだ」

「はあ」

「背後にどんな権力がついていても、悪事は悪事だ。しっかりした証拠さえあがれば、遠慮はいらぬ」

要するに、灘屋万五郎を召しとってみろという腹らしい。

「残念ながら、いまだにそいつが、だれにもしっぽをつかませません。困ったことです」

これまで灘万をねらった硬骨の士が、北にも南にもないではない。

が、どこからそういう情報がもれるか、ねらったものは逆にねらわれて、いつか姿を消している。

江戸市民百万の治安をあずかる町方としては、大きな黒星であり、このうえもない恥辱ではあるが、相手がその上を行く大物で、へたをすると奉行職にまで迷惑がかかりそうだから、なんとも手のつけようがないのだ。

「お夏をおとりに使ってみろ。さしずするわけではないが、相手も一度ねらった娘だ、家へ帰せば、きっとわなをかけにくるだろう。現場さえ押さえてしまえば、だれにも文句のつけようもあるまい」

「さあ、一つまちがうと、娘ひとりを殺すことになりますからな」

「平三、取り越し苦労はやめよう。もし、お夏が相模屋の娘でなければ、平三もすぐそこへ気がついていようし、実行もしているはずだ。勇気を出してみてはどうか」

「なお、よく熟考してみましょう」

平三郎は即答をさける。

自分の命が惜しいからではない。

お夏を犠牲にして、はたして灘万を屈服できるだけの才覚がこっちにあるか、その自信がつくまでは、うっかり手がつけられない大仕事だからだ。

「湯島の天神下に、野崎波江という御守殿くずれが華道の師匠をしているのを知っているか

な」
　景元がふっと話題をかえる。
「はあ」
　定町回りを二十年からやっている笠井だから、そんな女のいることをまるっきり知らないはずはない。
　が、奉行の口からその名が出るからには、自分以上になにかめぼしをつかんでいるに違いないので、うっかりしたことはいえない平三だ。
「むろん、如才はあるまいが、もと加州侯の奥につとめていたことのある女で、なにか失策があって、いとまが出た。が、朋輩がたくさんあるだろうから、いまだに加州家の奥へ出入りして、呉服類などの周旋をしている。加州家の奥方は溶姫さまで、お美代の方が御生母だ。耳に止めておいてくれ」
「はい」
「もう一つ、昔なじみだから、金さんがよけいな駄弁をろうしてみようかな」
　景元はわらいながら、じっと平三郎の顔を見つめる。

9

「おさしずを願います」
　平三郎は、きがねなどという他人行儀ではなく、思わず頭がさがってくる。景元のいうことには、それだけの英知と見識が自然備わっているからだ。
「昨夜、お夏が品川の下屋敷へ着いたのは、もう宵すぎだった。そのお夏をおどかすために、大奥からあらかじめ中臈が来ているなどということはありえない。それがたとえにせ中臈にもせよ、中臈は別に用があって宮島の下屋敷へのりこんでいた。そこへお夏がついて、当然よろこぶはずの大奥づとめを、案外迷惑がっているとわかった。そんなら、ついでに中臈を使って、いやおうなしに因果をふくめてしまおうと思いついたのだろう。その別の用というのを探って

みるのも、むだではなさそうだな」
「わかりました。できるだけやってみましょう」
「如才もあるまいが、お夏は蔵前の札差し丹波屋四郎兵衛の内儀お菊に会いたがっているそうだな。会わせれば、お夏の口から、丹波屋が世間にかくしている四郎兵衛の行動がわかるかもしれぬ。あれはたしか、福井町の重五郎のなわ張り内だな」
「そうです」
「内紛が家庭だけのことなら見て見ぬふりがよいが、内紛のかげには必ず犯罪がひそむか、これから起ころうとしているか、相手が金持ちだけに、こっちも捨てておいて手おくれになってからではおもしろくない」
「熟考してみましょう」
「いや、断行のほうがよかろう。大奥勢力争いは町方の管轄外だが、その勢力争いを下司が利用して、善良な市民に迷惑をかけているとすれば、断然許してはおけぬ。ただし、命がけの知恵くらべということになりそうだが、八丁堀にそのくらいの男一匹が出てももうよかろう。江戸っ子が溜飲をさげたがって、だいぶ待ちかねているようだからな」
「いずれ御返事をいたします」
　平三郎は自分の力を知っているから、奉行としての景元の前では容易にうむとはいえない。が、腹はすでにきまっていた。
　だいいち、お夏の問題があるから、負けても勝っても、やむなく自分が手をつけなければならない立場に追いこまれているのだ。
「とにかく、お夏のことは平三郎に、いっさいおまかせ願います」
「うむ、いいようにしてくれ。如才はなかろうが、手足につかう人間を吟味してかかることだな。わしと平三との合いことばは、金さんということにきめておこう。耳にとめておいてくれ」
「合いことば――？」
「おおげさにいえば、天下の毒虫をのぞく大仕

事だ。しっかりやってもらいたい」
微笑している景元の目が、おまえひとりは殺さぬといっているようにも見える。
「承知しました。男になるか、なりそこなうか、ひとつ、ひのき舞台の幕をあけてみましょう」
平三郎は景元の友情にほだされて、とうとう本音を吐かされてしまった。

10

その日、朝からあまり口数もきかず、天井ばかりにらんで考えこんでいた天狗が、昼近くなって、急にむくりと床の上へ起きあがった。
「どうしたの、太郎さん」
まくらもとで、権七の女房に針箱を借りて男のはだじゅばんを縫っていたお夏はびっくりして目をみはった。
天狗はまだからだじゅうの傷が痛むか、顔をしかめながらじっと歯を食いしばっている。
「どうしたのよう、太郎さん」
「だいじょうぶだ、もう起きられる」
「起きて、どうするの」
「水野の下屋敷へ行ってきたいんだ」
「そんなところへ、なにしに行くの」
「わかってるじゃないか。用人西野喜左衛門に会って詰問してやるんだ。ああいう背信の徒は許しておけぬ。返事の次第によっては、たたっ切ってやる」
「だめよ。そんなからだで行ったって、あべこべに、あんたのほうが切られちまうわ」
なにをいきなり子どもみたいなことをいいだすんだろうと、お夏はあきれながら、わらってしまおうとした。
が、天狗は強情にも、黙って立ちあがろうとするのである。
「いけないってば、太郎さん」
はっとして、お夏は思わずすがりついていった。
「放してくれ、おれは行く」

まっさおな顔をして、天狗は目を血走らせているのだ。
「切られたっていい。西野と定九郎市さえたたっ切れば、おれは死んだっていい」
「いやだ、――死んじゃいやだ」
「放してくれ、このまま生きているのは男の恥だ。行かしてくれ、お夏さん」
「いや、いや、お願いだから行かないで」
「おれはひきょう者になりたくないんだ。あんなに広言を吐いておいて、このままじゃおれはうそつきになる。おじさんうじや、お夏さんに、顔を見られているのが恥ずかしいんだ」
「いいのよ。うそつきでも、ひきょう者でも、いまはだれがなんと思ったって、いまにわかるんだから。ね、早くからだをなおさなくちゃ」
「いや、からだはもうだいじょうぶなんだ」
「だめだったら。どうして、あんた、そう強情なんだろう。あたし、泣くわよ」
とうとう押し倒して、上からおおいかぶさるように押さえつけて、お夏はほんとうに涙が流れてきた。
「ごめんなさいね。あんた、あたしがいったことが気にさわったんでしょ。あんたはあんなやつにきられるような弱い男じゃない。けど、きょうはだめだわ。あたし、あんたがもしきられたら、ほんとうに死んじまうわよ。あんたはもっと知恵があるはずじゃありませんか。どうして、急にそんな、そんなむてっぽうなことをいいだすのよう」
われにもなく男のほおへほおを押しあてて、いくらでも涙が出てくるお夏だった。

11

「いやだあ、太郎さんは」
気がついてみると、愛情をあけすけにして泣いたり甘えたりしているのは自分だけで、天狗はさっきから黙って、あいかわらず天井ばかりにらんでいる。

なんだか自分から男をくどいてるみたい、そう思うと、お夏はさすがに少し気恥ずかしくなってきた。が、一度、男にこっちの気持ちをすっかり見せてしまった今となっては、もう引っこみがつかないし、ほんとうに好きなんだもの、かまうもんか、とお夏は押さえつけた男の胸から離れようともしない。

「太郎さん、あんた、あたしがこんなに心配してるのに、まだ下屋敷へひとりで行く気なの」

「行く。もし、おじさんうじがいなかったら、お夏さんは今ごろどんな目にあわされているかわからなかった。それを考えると、おれはくやしくて、どうしてもがまんができないんだ」

「だって、今はこうやって無事にあんたのそばにいるんだもの、仕返しはからだがすっかりよくなってからだっていいじゃありませんか。あんたはちっともあたしのことなんか考えてくれないのね」

「そんなことはない。とても考えているんだ。考えているから急ぐんだ」

「どうして、――どうして、太郎さん」

「お夏さんはまだねらわれているんだ。そのねらっているやつを早くなんとかしてしまわなくては、いつまでたっても安心できないじゃないか。おれは正しい者が逃げたり隠れたりしていなければならないなんて、そんなみじめなことは大きらいなんだ。堂々と正面からのりこんでいって、ぎゅっという目にあわせてやらなければ承知できない」

その一本気はよくわかる。昨夜だまし討ちにされたのが、よっぽどくやしいのだろう。けれど、こんなおこり方は、あんまり子どもっぽくないかしら。なんだかたよりない。

「太郎さんは知恵を忘れちまったんじゃないかしら」

「知恵――?」

「あんた、きのう、知恵は江戸へ売りに行くほどあるっていってたでしょう」

「ああ、そうか、恥ずかしいなあ、おれは悪知恵に負けてしまったんだからな」

「だから、あたし、こんどはあんたにも知恵で仕返しをしてもらいたいわ。いくらくやしいったって、ひとりでむてっぽうに悪人のところへ飛びこんでいくなんて、まるで死にに行くようなもんじゃないかしら」

急所をつかれたらしく、天狗は急に黙りこんでしまった。

「ねえ、たった一つだけ約束してくれない?」

「おれ、頭をやられて、ばかになっちまったんかなあ」

「いやだったら、そんなこといっちゃ。お願いだから、あたしに黙って下屋敷へは行かないって誓ってくれなくちゃいやだわ。あんたが死んだら、ほんとうにあたし生きていないわよ」

天狗は返事をしない。

「ねえ、どうして返事をしてくれないの。あんた、そんなにあたしがきらいなの」

口に出してしまってから、もしきらいだと言われたら、こんどこそ恥ずかしくて生きていられないと気がついて、お夏は思わず青くなっていた。

12

「おれ、お夏さんは好きだ」

天井ばかりにらんでいた天狗の目が、のしかかるようにしてすぐそこに燃えているお夏の目を、はじめてじっと見かえした。静かではあるが、まるでこっちの愛情をそのまま吸いとってくれるような、澄んだきれいなひとみである。

「本当――?」

お夏はかっとほおが赤くなって、どぎまぎして、あんまり近すぎる男の目がたまらなくまぶしい。せつないまでに胸がはずんできて、どうしていいのか、どうしたらこの狂おしいまでの情熱の火が直接男につたえられるのか、もどかしくて、いきなり男のくちびるへ自分のくちび

るをかさねていった。それにこたえてくれるように、男の両腕がいつか背へまわって、しっかりと抱きしめていてくれる。

「いま帰ったぜ、権七。——おしまさん。なんだ、ふたりともいねえか」

土間で浅吉の声がして、ばたばたと足のほこりを払っている。

はっとからだを起こしたお夏が、満ちたりた目で、もう約束をしたんだから、というように甘えてみせながら、恋娘はこうもすぐ表裏を使い分けられるようになったものか、

「おじさんなの。——おかえんなさい」

と、ふすま越しに澄ました声をかけておいて、すばやく針を取りあげていた。

「ただいま——。みんな留守のようだね」

ふすまをあけてはいってきた浅吉は、なんとなくふきげんのようだ。

「おばさんはいま、お昼のものを買いに出かけたんです」

「しょうがねえな、これだから油断ができねえ。もし、留守にだれか来たらどうするつもりなんだ。早く帰ってきてよかった」

「ほんとうにおじさんが早く帰ってきてくれてよかったわ。太郎さんがいま、どうしても水野の下屋敷へ西野をきりに行くんだって、さんざんだだをこねていたところなんです」

「ふうむ。それでお夏ちゃん泣いたんかね」

泣いた目までは隠しきれなかったものとみえる。

「泣きました。泣かなければ、ほんとうに起き出しそうにするんですもの」

「いけねえな、太郎さん」

その天狗は暗い顔をして、またしても天井をにらんでいる。

「そうあせっちゃいけねえ」

「いや、おれは、西野と定九郎市だけは、きっと切る。今からでも下屋敷へ乗りこんでいきたいんだ」

むっくり起き直る様子が、どうもてれかくしの芝居とばかりは見えない。

「また、太郎さんは——」

びっくりしていざりよりながら、

「じゃ、あんたは、あんたはあたしをだましたんですか。あんなにちゃんと、約束したばかりだのに」

と、お夏はくやしくなって、人前もなく、つい、口走ってしまった。

13

「だましたんじゃない。おれはお夏さんが好きだ。好きだからこそ、西野と定九郎市を切らなければ、面目なくて、お夏さんをお嫁にくれとはいえないもんな」

天狗はもっと正直だった。うっかりくちびるの約束をしてしまったのが、本当はまだ恥をかかされっぱなしの自分だったのだと気がつくと、浅吉のてまえ、いよいよじっとしていられなくなってくるのである。

「だから、だから、きょうでなくたって、からだがすっかりよくなってからだって、——いやだ、あんたは。どうしてそう強情なのよう。あたし、また泣くわよ」

死なれてはそれこそ大変だから、お夏は天狗のひざを必死に押さえつけて、もうみえも外聞もいっていられない。

「待った。太郎さんもお夏ちゃんも、ちょいと待ってくんな」

お大名浅が苦笑しながら、若いふたりを制した。

「太郎さん、ゆうべお夏ちゃんがつれこまれた谷ツ山の下屋敷ってのは、水野のじゃなかったんだ。だから、あそこへなぐりこみに行っても、西野って用人はいないかもしれねえな」

「それはどういうわけだね、おじさんうじ」

天狗は正直に目を丸くする。

「おれも笠井のだんなに話を聞いてびっくりし

たんだが、いま帰りに調べてみると、たしかに水野の下屋敷じゃねえ。あそこは番町の旗本で、千五百石取りの宮島伊織って人の下屋敷だ。それで思い出したんだがね、いまそこには先代伊織の若い後家さんが住んでいる。宮島家の部屋頭は灘屋万五郎という人入れ稼業が表で、裏へまわるとばくちうちの大親分でね、こいつがまた天下無類の大悪党なんだ」
　お大名浅はくわしく灘万の悪党ぶりをふたりに話して聞かせて、
「定九郎市という野郎はその弟分になっているし、いまいうとおり、灘万は水野家へも取り入って、公用人の黒田外記ってのをすっかり丸めこんでいる。きのうのことは外記の頭から出たか、灘万の入れ知恵か、どっちにしても敵は定九郎市や西野じゃねえ。お夏ちゃんを追っている張本人は、灘万ということになりそうだ。そんなわけで、どうせなぐりこみをかけるんなら、およばずながら浅吉もひとはだぬぐから、もっとよく敵の裏を探ってから、ふたりでやっつけようじゃねえか。どうだね、太郎さん」
　と、年だけに分別深く、ひざを抱きこむようにして持ちかけるのだ。
「こわいわ、あたし。どうしよう、おじさん」
　ねらわれているのは自分のからだだけに、お夏は身ぶるいが出て、思わずしっかりと天狗の腕にすがりついている。
「そうか、そんな深いところに根があるんか」
　天狗はため息をつくようにいって、じっと考えこんでしまったが、
「よし、やるべ。おれは負けない、どんなことがあっても、このひとはきっと守ってみせる。そんな悪知恵なんかに負けてたまるもんか、断然やるべし」
　と、ようやく持ちまえのずぶとさを取りもどしてきたようである。

魔の手

1

　宵すぎて、中秋名月が明るく大川筋に照り輝いていた。永代から両国へかけて、さかのぼっては吾妻橋、向島、綾瀬のあたりまで、今夜は月見船が、風流をたのしむもの、月をさかなにむしろ弦歌を競うもの、おもいおもいの客をのせて、川幅いっぱいに流れただよっている。
　そういう川筋を、ひっそりと灯を消した屋根船が一つ、いま墨絵のような両国橋の下をくぐりぬけて、ぐいぐい吾妻橋のほうへいそいでいた。青い月かげがさしこむ船房に、ゆううつな顔を見合わせてひそひそと語りあっている客は四人。
「どうも、あっしには笠井のだんなの気持ちがわからねえ」
　腕を組みながら、またしてもそれをいいだしたのはお大名浅だ。
　まだすっかり暮れきらぬ夕方、ふいに品川の権七の家へお夏を迎えにきたのは、おやじの相模屋徳造だった。――実は、笠井のだんなのいいつけでできた福井町のおかっぴき重五郎から話を聞き、お夏は家へ引き取ったほうがよかろう、もし当人が丹波屋の内儀お菊に会いたいというのなら、お菊はいま橋場の寮にいるから、会わせてやってもかまわない、というさしずがあった、だから、すぐ船で迎えにきましたというのだった。
　天狗はいうまでもなく、浅吉も船徳と親しい口をきくのははじめてだったが、徳造のほうはきのうからのことを残らず福重から聞いているというので、初対面のあいさつもそうそう、話はすぐ相談に飛びこんでいった。
「おとっつぁん、家のほうが無事と聞けば、ひとまず安心だから、あたしすぐ橋場の寮へ行っ

てみたいわ。船で送ってもらって、話がすむまでみんなに船で待っていてもらって、帰りは寮の船着き場からまた船へ乗ればいいんだもの。そんなら別に心配はないでしょう」

お夏がひとりで箱根を立ってきた目的は、お菊に会って心配ごとを聞いてやろうというにあったのだし、なるほど、ここから船で橋場へ行って、船で家へ帰る分には、なんの心配もないはずだ。じゃ、そういうことにしようと話がきまって、権七夫婦にていねいに礼をいい、裏の目黒川からすぐに船に乗ってここまできたのだが、浅吉が心配するのは、今夜橋場をたずねるということではなく、笠井平三郎がむぞうさに、家へ帰ってもいいと徳造にさしずをしたことだ。

「ほかに、福井町の親分はなんにもいっていませんでしたかねえ」

「というと――」

「つまり、こっちにはこっちの手配りがあるから安心しろとか、こういうことは気をつけなくちゃいけねえとか」

「いや、別にそんなことはなんにもいわなかったようだ。ただ、水野さまのほうから掛け合いがあったら、すぐに返事はしないで、一応笠井さまのほうへ相談するようにとはいっていたがね」

事件が事件だけに、徳造もその点、腹の中ではひどく不安に思っているようである。

2

「太郎さん、気分どうなの。まだ起き出すの少し無理だったんじゃないかしら」

お夏は自分のことより、さっきからむっつりと船べりにもたれて、月の光のせいかひどく青い顔に見える天狗のほうが気になってしようがなかった。

「いや、もうなんでもない」

「どこもからだ痛くない？」

「心配しなくてもいいよ」

「大儀だったら、横になっているといいんだけど」

「そうだ、太郎さん、かまわねえから横にしてもらったらどうだね」

お大名浅がそばから口をそえる。

「それより、おじさんうじ、そっと外へ出てみないかね。この船をつけている船があるかもしれない」

天狗が涼しい目を浅吉に向けた。

「どうしてさ、太郎さん」

どきりとしたように、お夏の手はつい男へ行きたがる。

「いや、笠井という人には、おれ会ったことがないから、どんな人か知らないが、長く定回りをつとめているほどの人が、ゆうべのことをそう軽く見ているはずはないと思うんだ。相手が相手だから、お夏さんの動くところへは、きっと灘万というやつの手がのびる、その灘万をおびき出してつかまえるために、いわばお夏さんをわざとおとりに使う、とすれば、この船にはどこからか笠井さんの目が始終光っているはずだ」

「なるほど、こいつはうっかりしていた。つまり、笠井のだんなの船がついてくるっていうんだね」

「うむ。ことによると、灘万の船もついているかもしれないな」

「おどかしちゃいやだあ。あたしたちがこの船に乗っているの、どうして灘万のほうへわかったの？」

お夏は本気にできないから、天狗のひざをゆすりながら、しなだれかかるようにして顔をのぞきこむ。

「わからないことはないと思うな。おれがもし灘万なら、ゆうべから相模屋へ隠密(おんみつ)をつけておく。隠密はけさからの人の出入りを見ているから、おとっつぁんが船を出すのを見て、いよい

よお夏さんを迎えに行くんだと見当をつける。そんなことはないとは、だれにもいえないだろう」

「いけねえ。徳さん、おれはちょいと上へあがって様子を見てくる」

はっと腰をうかしたのは大名浅だ。

「おじさんうじ、なるべく敵に気どられないようにしないと、笠井さんのほうのじゃまをすることになるよ」

「がってんだ。自慢じゃねえが、忍びの術は本職だからね」

浅吉はうっかり語るにおちながら、もうするりと船房をぬけ出していく。

「こわいわ、あたし」

こんどはほんとうにこわくなって、お夏は思わず天狗の腕へしっかりすがりついている。

3

「なにがなんだか、さっぱりわからねえ」

徳造はため息をつくようにいった。ひどく心配そうな顔つきである。

「だいじょうぶよ、おとっつぁん。こうやって太郎さんもいてくれるんだし、おじさんもついていてくれるんだもの」

こんどはお夏が父親をなぐさめる番だ。浅吉のほうはともかくとして、おとっつぁんは太郎さんをどう見ているかしら、と恋娘はそんなほうへまで気がまわる。

「ほんとうに、こんどは太郎さんにすっかり世話になっちまいましたね。お礼のことばもありません」

「いや、そんなにいわれるとお恥ずかしいです。こんなみっともない負け方をしてしまって、本当はだれにもあわせる顔がないんだ」

「また太郎さんはそんなことをいう。これからは知恵でかたき討ちをするんだって、ちゃんと約束したじゃありませんか、忘れちゃいやだわ」

「忘れねえです。この仕返しは、きっとしてみせる」

「仕返しだけじゃないですよ。きっとあたしのそばについていて、悪人の手からあたしを守ってくれなくちゃいやだわ」

「おれ、一度約束したことは、命にかけてもやってみせるだ」

「安心だわ、あたし。太郎さんは強いんですもの」

その強いことを、早く父親にみとめてもらいたいお夏だ。

「まあ、どうか、今後ともよろしくお願いします」

徳造は律儀に頭をさげて、

「浅吉さん、おそいようだな」

どっちへともなくつぶやきながら、ひょいと腰をうかせた。

船はいまどのへんへかかっているのか、にぎやかな弦歌、浅酌低唱、さてはしのびやかなつまびき、そんなおもいおもいの月見船を送り迎えて、ぐんぐんこぎのぼっている。

「おとっつぁん、気をきかせたつもりなのね」

父親が船房から出ていってしまうと、お夏はいたずらっぽくくすりと笑ってみせた。

「そうじゃない。やっぱり、お夏さんのからだを心配しているのさ。いくら月夜でも、こう船がたくさん出ているようじゃ、どれが追ってくる船なのか、ちょいとわかりにくいだろうからな」

「いいえ、それもあるだろうけど、おとっつぁん、もう太郎さんが好きになったのよ。でなければ、わざとふたりっきりにしてくれるはずないわ」

「悪いなあ。じゃ、おれも上へ出てみよう」

「いやだったら。あたしひとりをおいて、もしさらわれたら、あんたどうする気なの。あんたって人、そんな薄情な人だったのかしら」

男の腕を胸で押さえつけるようにして、お夏は肩ですねてみせながら、生まれてはじめての

恋だから、ともすればこわいことさえ忘れがちになりたがる。
　船の上のお大名浅と徳造は、とうとう橋場の寮へ着くまで、船房へはかえってこなかった。

4

　徳造は船頭の三吉にさしずして、船を橋場の丹波屋の寮の桟橋につけさせた。対岸は向島で、須田村から水神の森のあたりが墨絵のように見わたせる。永代から両国へかけての大川筋ほどのにぎわいはないが、このへんにも風流な月見船がいくつとなく、あるいは流し、あるいはこいで、右往左往していた。
「どうも、おれにはそれらしい船は見あたらねえ。徳さんはどうだね」
　ずっと屋根に身を伏せるようにして尾行の船を見張っていたお大名浅が、小首をかしげながらいった。
「さあ、おれにも見当はつかねえけど、こっちにそれとわかるようじゃ、つけるがつけたにならねえからな」
　敵は見えないようにつけてくる、そんな不安が濃い徳造だ。真昼のように月があかるい水の上だとはいっても、視力には限界がある。まして、今夜のようにどこまで行っても船の切れめがなくては、その中からこれが怪しいと尾行の船を見つけ出すのはなかなかむずかしい。
「お夏、ついたよ」
　船房の中へ声をかけると、
「じゃ、太郎さん、すぐ帰ってくるから、待っててね」
　お夏は天狗にそういいながら、いそいで出てきた。
　桟橋をあがった道に、寮の裏木戸がある。ここがしまっていると、寮のわきを塀にそって往来の表門のほうへ回らなければならないのだ。
「浅さん、ちょいとお夏を送ってくるから、あとをたのみます」

　徳造はお夏をつれて船からあがった。このあたりはずっと寮つづきで、川ぞいの道は狭いから、昼間でも寮の者以外にはめったに人は通らないところだ。
「あいてるぜ、お夏」
　裏木戸へ手をかけてみた徳造は、そういいながら木戸をあけて中へはいった。ここへはたびたび来ているから、かってはよく知っている。広い庭の植え込みの小道を台所口のほうへまわろうとすると、
「ちょっと待ってくんな。おまえさんたちはどこへ行きなさる」
　物陰からふいに出てきて行く手へ立ちふさがったものは、ふたりづれのとびの者だった。事情が事情だけに、夜番でもたのまれているのだろう。
「御苦労さまです。あっしは深川の船徳といいやすが、娘がここのおかみさんに急用があって、夜分うかがいやした。相模屋のお夏だといって、奥へ取り次いでおくんなさい」
「さあ、今夜は少しとりこんでいるようだからな、おかみさんなんていうか、――なあ、あにい」
「そうよなあ」
　とびの若い者は月かげにぬれたお夏の美貌にびっくりしたような目をみはりながら、わざとむずかしそうな顔をしてみせるのである。

5

　台所へつれていかれて、そこもなんとなくごたごたしているようだったが、ちょうど顔なじみの女中のおたねがいて、
「あら、玄関のほうへまわればよかったのに――」
　と、あいそうよく迎えてくれた。
「いいえ、あたし船できたもんですから、ねえさん、もうおやすみ――」
「とんでもない、それどころじゃないですよ」

おたねはなにかいいたげだったが、いわなくても知ってるんでしょうというように、まゆをひそめてみせて、ほかの人じゃないからと、すぐにお菊の居間へ案内してくれた。
「まあ、お夏ちゃん、いつ帰ってきたの」
　きのうのお昼前に江戸へついたはずのお菊は、旅の無理と、降ってわいたようなこんどの心配事とに、めっきりやつれた顔をびっくりしたように輝かせながら、いきなり立ってきてお夏の手をとっていた。
「おととい、ねえさんが駕籠（かご）で立ったあと、すぐあたしも立ってきたんです」
「ひとりで――?」
「ええ、ひとりでよ。とてもねえさんのことが気になって、迎えがくるまでなんか待っていられないんだもの」
「しょうがないひとね。そうじゃないかと思ったから、あんなにとめておいたのに――。もし、途中でまちがいでもあったら、あたしがおじさんに申しわけなくて、それこそ合わせる顔がなくなるじゃありませんか」
「それがねえ、ねえさんには申しわけないんですけど、途中でたいへんなまちがいが起こっちまったのよ」
　そういうお夏の顔が、案外落ち着いていたずらそうにわらっているので、
「本当、お夏ちゃん」
　お菊はまだ半信半疑だ。が、おとといからのことをかいつまんで話して、お菊にならなにも隠す必要もない、今夜ここへくるにも、その浅吉と太郎さんが、おとっつぁんといっしょについてきて、船に待っていてくれるのだというと、
「どうしてあんたはそう度胸がいいのかしら。それで、お夏ちゃん、あんたちっとも自分のことが心配にならないの?」
　と、お菊はしみじみとあきれて、顔をみつめていた。
「心配は心配だけど、あたしには太郎さんやおじさんがついていてくれるんだし、――あらあら、あたしいい気になって、自分のほうのことばかし先におしゃべりしちまったけど、ねえさんのほうはどうなの? だんなさまは、いったい、どうなっているの。あたしが聞いちゃいけない話? あたし、自分のことより、それが気になって気になってしようがないのよ」
　そのお夏の気持ちにうそはないから、思わずいっしょうけんめいな顔になると、
「さあ、お夏ちゃんだから、あたしは話してもかまわないけれど、――どうしようかしら、うっかり話すと、うちの人の命がなくなるかもしれないのよ」
　と、お菊が急に暗くなる。

6

「そんなにこわい話なの」
　思わず息をのみながら、こわいと聞けばよけい聞きたくなるお夏だ。
「あたしのよりこわい話なのかしら」
「そうね。そういえば、お夏ちゃんもこわい目に会いながら、せっかく心配してたずねてくれたんだもの、そのお夏ちゃんに打ち明けないなんて、義理にかけるわね。じゃ、ひととおり話してみるから、だれにもいわないでくださいね」
　お菊はやっと腹がきまったらしい。
「実は今夜四ツ（十時）までに、うちの人はここへ帰ってくることになっているんです」
「まあ。じゃ、居どころがわかったのね」
「それがわからないのよ。だから、みんな心配しているんです」
　四郎兵衛がゆくえ不明になったのは、お菊が箱根へ立った翌々日の九日の夜だったという。その夜同業のつきあいで、五ツ半（九時）ごろまで柳橋の料亭青柳にいた。その桟橋から船に乗るところを見たという女中があるが、それっきり、翌日になっても家へ帰ってこない。若いがっしりした人がらで、お菊が恋女房だから、

ほかに女を囲っているといううわさもない。黙って家をあけたことのない主人なので、心あたりへ人を走らせながら心配していると、その暮れ方、大番頭の佐兵衛あてに手紙がとどいた。

──子細あって二、三日留守にいたしそうろう。心配いたすまじく、世間態はおだやかにして、公儀の手をわずらわすなどのことは絶対に避けること。

　手紙はただそれだけの簡単なもので、たしかに四郎兵衛の筆に違いない。だれがこの手紙を受け取ったのだと調べてみると、表へ水を打っていた小僧が、どこかの中間体の男から渡されたとわかった。

　文面に、公儀の手を避けろとわざわざ断っているところに、なにか容易ならぬものを感じる。大番頭の佐兵衛はすぐに、お菊の父親の佐原屋藤蔵と、主人には伯父にあたる同業の太田屋孫右衛門のふたりに来てもらい、いろいろと相談した。

　四郎兵衛は何者かに監禁されたのではないかとは三人とも同じ考えだが、当人が騒いでくれるなといっているのだから、なんとも手のつけようがない。一度手紙の連絡があったくらいだから、次のたよりを待つことにして、とりあえずお菊だけは呼びかえそうということになり、十一日の朝、箱根へ早駕籠が立った。

「──十日にきた二、三日留守にするという手紙から見れば、おそくも十三日か十四日には帰ってくるはずでしょう。それが、きのうになっても帰ってこないし、なんのたよりもないんです。そして、きょう、お昼まえに、こんどはここへ、あたしあてに、うちの人から手紙がきたのよ。ということは、敵はあたしが箱根からきのう帰ったことも、お店からこっちの寮へ移っていることも、ちゃんと知っているということになるじゃありませんか」

　お菊の顔はあおいながらに、なんとなく敵愾心に燃えているようにも見える。

7

「それで、どんな手紙なんです、ねえさん」

「それがねえ、今夕四ツ（十時）すぎに、一度橋場の寮のほうへかえるから、孫右衛門伯父、深川のしゅうとどの、佐兵衛の三人にきてもらっておくように。公儀へのさたは、命にもかかわることゆえ、かたく無用のこと、というのです」

「やっぱり、持ってきたのは中間なの？」

「そうなんですって。前のとおなじ人かどうかわからないけど、若い中間が玄関からたずねてきて、おかみさんにこれをわたしてくれ、返事はいりませんからって、さっさと帰ってしまったんですって」

「その時、だれかすぐあとをつけてみればよかったのにねえ」

　お夏はさっき船の中でそんな話をしたばかりだから、思わずそれが口に出る。

「そうはいかないのよ、お夏ちゃん。こんどのことを知っているのは、あたしたち四人だけで、奉公人にも、だんなはすぐ帰ってくるからと、なんにも知らせてないんですもの。だいいち、もしそんなまねでもしたら、それこそうちの人の命がどうなるかわからないじゃありませんか」

　当事者だけに、もってのほかだといいたげなお菊の顔だ。

「それもそうね。けど、今夜一度帰るってわざわざ断ってきたのは、どういうつもりなのかしら」

「それなんです。深川のおとっつぁんも、伯父さんもそれを心配して、命にかかわってはまさか公儀の力を借りるわけにはいかないが、町内の頭をたのんで夜まわりぐらいさせておいてもかまわないだろうと、それだけは今夜たのんでおいたんですけれどねえ」

「なんだか、少し心細いじゃないかしら」

　一度帰るということばの裏には、まだ悪人の

目が光っていて、用がすめばまた連れていくという意味があるのではなかろうか。いずれにせよ、だんなは許されて帰ってくるのではなかろう。とすれば、いざという場合、悪人と戦っても、今夜はだんなを助けなければならないのだ。町内のとびの者だけで、はたしてそれができるだろうか。

「あたしもたよりないとは思うんですがねえ。へたなまねをすればうちの人の命にかかわることだし、どうしたらいいか、実は途方にくれているのよ」

お菊はため息をつきながら、じっと思い沈んでしまう。だんだん四ツという時刻が迫ってくるにつけても、その刻々がまるで針のむしろにでもすわっているつらさに違いない。

「うそだわ。だんなの命をとるなんて、おどかしだと思うわ。悪人はどんな目的でだんなをさらっていったか知らないけれど、もしだんなを殺してしまったら、その目的が達せられなくなってしまうじゃありませんか。ねえさんはそう思えない？」

ふいに、意地っぱりな目を輝かして、お夏がいいだす。

8

「だから、どうするっていうの、お夏ちゃん」

誘われたように、お菊はお夏の顔をみつめる。

「あたし、太郎さんに相談してみるわ」

「ああ、お夏ちゃんを道中で助けてくれたというかたね」

「太郎さんなら、もうあたしと同じだし、なにかきっといい知恵があると思うわ」

「同じって、じゃ、お夏ちゃん、その人とはなにか約束でもしたことがあるの」

そういわれて、はっと気がつき、

「あらあら、あたしどうしようかしら」

と、お夏は生娘らしく、やっぱり顔が赤くなってしまった。

「いいじゃありませんか、お夏ちゃんが好きになる男なら、きっとたのもしい人に違いないわ」

「ええ、それはもう。ねえさんの目から見たら、こんな田舎者って思うでしょうけれど、とても実があるんです」

「ごちそうさま。いっしょうけんめいなのね、お夏ちゃんは」

おとなのお菊は、気苦労の中にもちょっとほほえましげな顔である。

「いやだわ。ねえさん、あたしそんなつもりで——」

「いいのよ。お夏ちゃんにそういう人が見つかったなんて、なんだか、あたしもうれしい。ほんとうに、おめでとう」

「だから、あたし、太郎さんに相談してみようと思うんだけれど——きっと力になってくれると思うの」

「でもねえ、なにしろ、うちの人の命にかかわることだし、どうしていいか」

たのみになる人がほしいにはほしいけれど、あとに取りかえしのつかないことになってはそれこそ大変だしと、さすがにいざとなると決断がつかないようである。

「だれにも知らせなければいいじゃありませんか。あたしがかってにすることなら、悪人にだってわかりゃしないと思うわ。あたし、きっとうまくやってみせるわ」

「そうねえ——」

「いいわ。ねえさんは知らん顔していてください。あたし、ここの縁側から、だれにも知れないように、そっと相談してくるわ」

押しつけるようにいって、もうさっさと立ち上がる気の強いお夏だ。

「まあ待って、お夏ちゃん」

さっとあおくなりながら、お菊はあたりへ耳をすます。

「だいじょうぶですってば」

その間にお夏はするりと廊下へぬけだして、

さいわいどこの雨戸も少しずつあいている。どこから主人が帰ってきても、すぐはいれるようにという心づかいからだろう。いそいで庭先を見まわしたが、あいにく庭下駄が見あたらないので、お夏はそのままはだしで土をふむことにした。

9

お夏は自分の身がねらわれているということを決してうっかりしていたわけではないが、お菊の話を聞いて、このほうはまもなく主人が妙な帰り方をするというのに、丹波屋ではなんの用意もしていない、もしものことがあったらどうする気なんだか、大番頭さんや深川のおとっつぁんがついているくせに、あんまり能がなさすぎるので、ついでしゃばりたくなってしまったのだ。一つには、天狗がどんなたのもしい男か、みんなをあっといわせてやりたいみえもある。

――太郎さんなら、きっとやってくれるわ。

そんなはずんだ気持ちで、お夏はだれにも知れないように木かげづたいに庭を走り、寮の裏木戸へ出た。しばらく様子をうかがっていたが、別に夜番の目もなさそうなので、するりと表へぬけ出す。広い川幅がからりと月に青澄んで、さっきから思うとだいぶ月見船の数は減ったようだが、すぐ目の前の桟橋にはうちの船がちゃんと待っている。浅吉や船頭の三吉の姿はどこにも見当たらない。が、けが人の天狗だけは船房に寝ているはずだから、いまのお夏には、だれもいてくれないほうが、かえってつごうがよかった。

「太郎さん――」

なんだか忍ぶ恋路みたい、とお夏は胸をわくわくさせながら、船へ乗りうつるなり船房の戸口へ走りより、なれているから足のほうから先へすばやく中へくぐりこんだ。

「あっ――」

待っていてくれるのはまだ頭に白い布をまきつけた天狗の恋しい顔だとばかり信じこんでいたのに、違う。人もあろうに、月かげに浮き出してくっきりと目についたのは、悪魔のような定九郎市のにやりとわらった顔だ。

どうしてこんなことに、などと考えている暇はない。魂も凍るほどぞっとして、夢中で身をひるがえそうとしたが、もうおそかった。さっと定九郎市の手が足へのびて、

「助けて、――太郎さん」

みんなまで叫びきらぬうちに、ずるずると強引に手もとへ引きずりこまれ、もうのしかかるように口を押さえつけられていた。

「うまくいきやしたねえ、丸田さん」

船房の奥には、もうひとり悪党がいたのだ。手ぬぐいでほおかむりはしているが、どうやら品川の権七らしい。

「権七、予定のところへいそげ」

ばたばたとすそもあらわに必死に身もがきするお夏を押さえつけながら、定九郎市は冷たくいいつけた。

「がってんだ」

権七は二つのからだのそばをすりぬけて、あたふたと船房を出ていく。

まもなく、さおをいれたらしく、船はぐいと一つ大きくゆれて、岸放れしたようだ。

「お夏、いいかげんに観念しねえか。江戸っ子のくせに、少しあきらめが悪すぎるぞ」

勝ち誇ったように、定九郎市がお夏の耳もとでいって聞かせる。

敗北

1

そのころ――。

天狗とお大名浅は、いざというときのために、ひととおり丹波屋の寮のまわりを見ておこうと

いうことになって、連れだって船をあがった。一つには、たしかに手配りがあるだろうと考えた笠井のほうの尾行が、まったく姿を見せない。かげながらお夏のからだを守ってくれるだろうと考えたのは、こっちの思いすごしか、あるいはこっちの目につかないほど尾行のほうが巧妙なのか、ふたりともそれをためしてみたい腹もあったからだ。

「三ちゃん、すぐ帰ってくるが、なにかあったら大きな声をたててくんな。おまえはこの船から決してあがっちゃいけねえぜ」

お大名浅は船頭の三吉にかたくいいおいて先に立った。

この寮ではたいてい自分の裏口の河岸へ、一隻か二隻ずつの船をつないでいる。丹波屋の桟橋にも、屋根船とちょきが一隻ずつもやってあった。ふたりの姿が寮の黒板塀にそって南側の小道へ消えたとき、その屋根のほうから、するりとほおかむりの男がはい出て、いうまでもなく品川の権七だ、ぱっと相模屋の船へ飛びうつるなり、背をむけて腰のたばこ入れをさぐっていた三吉におどりかかり、声一つたてるひまもなく、うしろからのどを絞めあげていたのを、ふたりは少しも知らなかった。

丹波屋の黒板塀と、南隣の生垣との間の道は百間ほどもあろうか、そこを出たところが橋場通りになっている。さすがに蔵前でも知られた丹波屋の寮だけあって、相当な敷地だ。むろん、どこにも人がひそんでいるけはいさえない。

足音をしのばせて表通りへ出ようとした浅吉が、ふいに立ち止まって、あとにつづく天狗の腕をつかんだ。

「だれかくる――」

はっとして、できるだけ暗い塀のすそへ小さくうずくまっていると、今戸のほうから、たしかにひたひたと地をふむ足音が近くなってきて、月のあかるい往来へ姿を見せたのは、年ごろ三十一、二、どこかのだんなとも思われる落

ち着いた身なりで品のあるおもだちだが、ひどく青ざめている。妙に目が引きつっている感じで、ときどき足もとがよろめいているようにも見えた。どうも、ただごととは思えない。

先ばかり急ぐようにさっさと行きすぎて、寮の門のあたりへ一度立ちまわり、今きた道のほうをくるりとふり向いた。じっとすかしてみながら、だれも人のいないのをたしかめると、つかつかと門のほうへ進み、くぐりがあいて閉まる音がした。

「太郎さん、あれはたしかに丹波屋のだんなだぜ」

「おれもそう思う。非常に興奮していたようじゃないか」

それはまるで悪人の手をのがれてやっと逃げてきた、そんなふうにしか見えないかっこうだったので、浅吉と天狗は、しばらく考えるように顔を見合わせてしまった。

2

――お夏ちゃんにあんなことを任せてしまって、だいじょうぶかしら。

ひとりになったお菊は、なんとなく後悔されてくる。自分があんなことをうっかり口にしたために、もし夫の身にとんだまちがいでもおこったら、それこそ生きていられない。

――いっそ呼びかえして、太郎さんの力をかりるのだけはやめておこうかしら。

どうにも不安になってきて、われにもなく腰をうかしたとき、

「あっ、だんなさまが――」

遠い玄関のほうから、そんなけたたましい女中の声がたしかに耳について、こんどこそ、はっと立ち上がっていた。が、それっきり、またひっそりとなって、そら耳だったかしらと立ちつくしていると、だれか廊下をいそいでくる足音といっしょに、

「ここか、お菊」
さらりと障子があいた。
「あ、あなた」
引きつったような夫の蒼白な顔が一瞬まじまじとお菊を見てあえぎながら大きく手をひろげたのと、お菊がかっと逆上したようにそのなつかしい胸の中へしがみついていったのと同時である。
「お菊――会いたかった、お菊」
「あなた、あなた」
「お菊――」
四郎兵衛は息もできないほど妻の肩を抱きしめて、狂ったようにほおずりし、くちびるを押しかさね、はっとあたりを見まわしながら、またしても抱きよせる。
「会いたかった」
「あなた――」
離れまじとしがみついて夫のにおいに酔い、とうとう帰ってきてくれたと思うと、お菊はうれしくて、とめどもなく涙が流れてくる。
「あはは、なんだか子どものようだな。おかしい。まあ、すわろう」
やがて理性がかえってきたように四郎兵衛は妻の肩を放して、だが、なにか恐れるようにしっかり手をつかんで、からだを引きつけるようにそこへすわるのだ。
「どうかしたんですか、あなた」
ただならぬ夫の顔色を見ると、お菊の胸にもじっと恐怖がよみがえってきた。
「いやっ、もう離れない、どこへも行ってはいやです」
「だれが行くものか」
「今まで、どこにいらしたんです」
「おれにもわからない」
「まあ。では、どうして今夜ここへ帰れたのです。ああ、きょうの手紙は、ほんとうにあなたが書いたんですか、――あなた、あなた」
じいっとこわい顔をしてあんどんをにらんでいた四郎兵衛が、
「ばかな話だ。おれはだまされねえぞ。そうだ、きっと戦ってやる」
と、突然、吐き出すようにいいだしたのだ。

3

「十万両出せと、わしにいうんだ」
「だれがです」
「鉄の仮面をかぶったやつだ」
「名まえはわからないんですか。なんのために、そんな大金を出せというんでしょう」
「それをいうと、話したおれも、聞いた者も命がないというんだ」
四郎兵衛はぶるっと身ぶるいをして、またしても忙しくあたりを見まわす。
「まあ、こわい」
「なあに、脅迫なんだ。人を監禁して、金を出せなどと、そんな不法なことが天下に通用するものかしないものか、おれは戦ってやる。そうだ、おじさんも、深川のおとっつぁんも呼んであるな」
「ええ。奥で、左兵衛どんもいっしょに、宵からお待ちになっていますけれど」
「そうか。わしはみんなと相談して、断然公儀へ訴え出てやる。お菊、おまえもこい」
「でも、あなた、話した者も聞いた者も首がないって、それはだいじょうぶなんですか」
「うむ」
一度はお菊の手を取っていきごんで立ち上がろうとした四郎兵衛が、ふとためらって、その顔にありありと苦悩の色がうかぶ。日ごろきかない気の夫が、こんなにも度を失っている。この七日間の監禁中に、どんな恐ろしいめにあってきたのかと、お菊はいまさらのようにいたわしくて、胸がいっぱいになってくるのだ。
「ねえ、お金なんかいらない。あたしは、あなたさえ、あなたさえあればいいんです。災難とあきらめて、命にかえられませんもの、見こま

れたんなら、みんなやってしまいましょうよ。泣く子と地頭にはかなわないってたとえもあるんですもの」
「いや、わしも、いざとなれば十万両ぐらい、それで丹波屋が身代かぎりをするというわけではなし、金なんか惜しいとは思わぬ。が、不法は許せない。天下にちゃんと法というものがあるのに、もしその裏をくぐって、他人を脅迫して、いうことをきかなければ殺すぞと、そんな無法な暴力に泣き寝入りするのはいやだ。——お菊、おれといっしょに死んでくれ。おれはどうしても、やつらと戦ってやる。おまえ、おれと死ぬのはいやかえ」
　夫の目がまたしても興奮にぎらぎらと燃えだして、ひしとお菊の手を握りしめた。
「いいえ、あなたと、あなたといっしょなら、いつだって、——でも、別々じゃいや。いっしょでなくちゃいや」
　どうしても死ななければならないんなら、死んでもいい。ほんとうにそう思ったとたん、どっと涙があふれてきた。
「なあに、死ぬのは最後の話だ。力いっぱいやつらと戦って、もし負けたらのことなんだ。くそっ、おれは負けるもんか。お菊、おいで」
　こんどこそ、ほんとうに腹がきまったらしく、四郎兵衛は妻の手を取って、しっかりと立ち上がった。

4

　奥の座敷では、太田屋の隠居孫右衛門、深川のしゅうと佐原屋藤蔵、それに大番頭の佐兵衛の三人が四郎兵衛が無事に帰ったと聞いて、ひとまず愁眉はひらいたものの、訳を聞かないうちは安心とまではいかない。
「なにしろ、若い夫婦が七日ぶりで会ったんだ」
　孫右衛門がいえば、
「そうですとも、それもただ別れていたというんじゃありません」
と、大番頭も年だけに主人夫婦に同情して、しんぼう強く四郎兵衛が出てくるのを待っていた。
　そこへ四郎兵衛が、お菊の手をひかんばかりにして、つかつかと顔を出したのである。
「おお、無事だったか、婿どの」
　まっさきに声をかけて、どこかにけがでもないかと、熱い目でじろりとからだじゅうを見まわしたのは、しゅうとの藤蔵だった。
「御心配をかけました」
　座について、一同に頭をさげてから、
「さっそくですが、てまえのからだは、まだ無事とはいえないのです。これからお話しすることは、なんといいますか、おおげさにいえば、天下の一大事、大奥の秘密に関したことですから、事の成否にかかわらず、どうか、だれにも口外しないでください。うっかり秘密がもれますと、話したわたしも、もらした人も、ともに命にかかわるかもしれません」
と、いきなり四郎兵衛は切りだしたのだ。多少興奮はしているようだが、もうお菊に見せたような取り乱し方はしていない。さすがに男だわと、その夫のうしろへさがってからだじゅうをかたくしているお菊は、そう思う一方、やっぱり胸が騒いでしようがない。
「ふうむ、ここにいるのはみんな身内ばかりだ。佐兵衛どんは丹波屋の大黒柱も同様な人だし、むろん他言をして悪いことは人にもらすようなことはないが、いったい、どうしたという話なんだね」
　年ごろだから、伯父の孫右衛門がまゆをひそめながら、しっかりと受けて答える。
　佐兵衛も藤蔵もともにうなずいて、じっと若い四郎兵衛の顔を見まもりながら、動じた色は少しもなかった。その落ち着いた空気が、四郎兵衛をいっそう安心させたのだろう。
「九日の夜、柳橋の寄り合いのくずれで、わたしを別室へ呼びこんだのは、灘屋万五郎という

男です。わたしはむろん初対面でした」
　聞き手が思わず暗い顔を見あわせたのは、三人とも、灘屋のうわさを耳にしていたからだろう。
「話は、木挽町の水野美濃さまが、内密でわたしに会いたいといっている、人目についてはこまることなので、お下屋敷で待っていられるのだが、いっしょに来てくれないだろうか、実は特別のおいいつけで、今夜は自分が使者に立ったわけだ、というのです。わたしは、少し酔ってもいましたし、なにかお金の御相談だなと、すぐ気がつきました」
　金持ちが、時の権臣から金の相談をかけられる、決して損になる話ではないと思ったから、裏の桟橋から船にのったのだという。

5

「船へのるとまもなく、わたしは眠ってしまったようです。翌日、どこかの下屋敷のりっぱな部屋で目がさめるまで、なんにもしらずにいたのですから、おそらく眠り薬をのまされたのでしょう」
　目がさめると、若い腰元が薬湯を持ってきてくれた。四郎兵衛はそれをのんで、気分はいくぶんさわやかになったが、眠り薬などを使って人をこんなところへ連れてくるようでは、この話にはうっかりのれないと、その時すでに考えたという。
　まもなく、灘屋万五郎が出てきてあいさつをした。
「昨夜はだいぶ酔っていられたようなので、そのままお泊まりを願いました。例のお話は、今夜御相談するそうでございます」
「それは失礼いたしましたな。てまえはそう酔ったつもりはなかったのですが、ふしぎと前後不覚になりまして、まことに赤面いたします」
　こっちは皮肉のつもりでいったのだが、
「いや、酒のみにはだれにもありがちなことで

すから――」
　と、むろん灘万は眠り薬のことなどおくびにも出さない。
「ついては、お話が夜分になるのでしたら、昨夜は店の者になにもいわずにこちらへまいりましたので、さぞ心配していようかと思います。一度出なおしてきたいと思うのですが」
「ごもっともです。しかし、昨夜も申し上げたとおり、こんどのことは少しでも世間にもれては困る、人の出入りには特に気をつけるようにと申しつけられていますのでな。こうなすってはどうでしょう。お店のかたへは書面で、二、三日留守にするが、決して心配するな、と知らせておいては」
　監禁する気だなと四郎兵衛はすぐに気がついた。考えてみると、あらかじめそのくらいの用意がなければ、眠り薬など使わないだろう。
「たってもどってきたいと申し上げましたら、どういうことになりましょうな」
「おきのどくですが、たっておとどまり願うことになるだろうと思います」
　灘万の返事ははっきりしていた。
「つまり、監禁ということになるのですか」
「今夜、ある人にお目にかかって、御相談というのをお聞きになれば、なにもかもよくおわかりになることと思います。あっしはほんの取り次ぎ役のようなもんですから、いいつけられたように動くだけのことです」
「上といいますと、水野さまですか」
「その返事も、今夜お目にかかる人と会って、直接にお聞きになってください」
　こうなっては、いまさらどうあがいたところでしようがない。相手はなにかそれだけの計画をちゃんと立ててかかっていることなのだ。とにかく、今夜、話というのを聞いてからのことだと、四郎兵衛は腹がきまったので、悪あがきはせず、灘万のいうとおり、第一回の手紙をしたためて渡し、夜になるのを待ったのだという。

6

宵になるとまもなく、腰元の前ぶれがあって、問題の人がただひとり、つかつかと四郎兵衛の居間へあらわれ、上座にすわった。身なりから見ると、たしかに殿さまといわれる身分の人がらだが、顔は目と鼻と口だけがのぞける不気味な黒い鉄の仮面をかぶっているから、全然だれともわからない。

下座にさがった四郎兵衛が、あっとびっくりしながら両手をつかえていると、

「わしもこんな異装だ、遠慮はいらぬ、楽にしなさい」

と、なぞの人物は低い声でいった。

「わしがだれだかは、いずれこの仮面をぬぐときがくればわかるだろう。こんど、内密に万五郎を使者として、そのほうに当下屋敷へきてもらったのは、西丸大奥のお美代の方さまから内意があってのことだ。お美代の方さまのお腹は、ひとりは加州へ、ひとりは芸州へとついでおられる。前田家へとつがれた溶姫が、犬千代どのをあげられたことは、そのほうも存じているかと思うが、つまり、犬千代どのは大御所さまの孫にあたらせられる。このたびお美代の方は、大御所さまの御寵愛（ごちょうあい）にすがって、犬千代どのを十三代の御家督になさりたい。それには当将軍家の嫡子家定さまを廃嫡願わなければならぬ。幸か不幸か、家定さまは御病弱で、重臣の間でもとかく問題になっているおかただ。お美代の方の希望は九分どおり成就の見こみではあるが、これをもう一押しするには、率直に申して、軍資金がいる。そこで、丹波屋に相談いたすのだが、どうだろう、そのほうの手で金子十万両ほど、お美代の方へ差し上げてくれぬか。その代償としては、犬千代さま十三代家督のあかつき、大奥の御用を一手に任せてもよい。また、旗本になりたくば取り立ててつかわそうということになっている。ただし、事情が事情ゆえ、

すべて事が成就するまでは口約束だ。なまじお墨付きなどがあると、万一のときにけが人が出るからな。そのほうを男と見こんでの内談だが、どうだ、口約束で承諾してくれぬか」

これは驚くべき大奥の大陰謀だ。一つまちがうと、関係者はおそらく生命の問題になってくるだろう。たとえ十万両出すとしても、お墨付きなどはめったにもらえない。

「失礼でございますが、承諾いたしかねると申し上げましたら、どういうことになりましょうか」

四郎兵衛は念のために聞いてみた。

なぞの人は、仮面の中からじっと四郎兵衛を見すえながら、

「いま、たって承諾してもらいたいのだ」

と、押しつけるようにいう。

が、四郎兵衛は、むろん、そんなあぶない仕事に十万両も投資する意志はないから、なんといって断ろうかと、しばらくことばを捜しているる。と見てとったらしい仮面の人は、

「商人にとって十万両は大金、即答せよと申すのも無理であろうな。まあ、よく考えておいてくれ」

冷たくいいすてたかと見る間に、すっと立ち上がったのである。

7

その夜、あとで灘万が様子を見にきたとき、四郎兵衛はきっぱりといってのけた。

「てまえは仮面のかたからひととおりお話をうかがって、よく考えておくようにと申されましたが、どう考えても、十万両という大金は御用立ていたしかねます。親分からよろしくお取り次ぎを願って、一応帰宅させていただきたいと存じます」

「なるほど――」

灘万はきのどくそうにうなずいたが、

「丹波屋さん、御用金のほうはむりにという筋

合いのものではございませんから、殿さまもたってとはいいますまいが、そうなると、つまり、こんどのことには同意できないということになりますからな。家へお帰しするというのは、どういうことになりましょうかな」

と、当惑な顔をしてみせるのだ。

「こういうことは、御承知のように、事前に世間へもれるようなことがあるとつまずきがちになる。しかも、失敗すれば、敵側から謀反人あつかいにされて、たくさんのけが人を出さなければなりません。おそらく、犬千代さまが十三代の御家督とはっきりきまるまでは、窮屈でも、この下屋敷へ御滞在願うことになるんじゃないかと思います」

「監禁する、というのですな」

「どうも、いたしかたないようです」

たぶんそうなるのではないかとは予期していたが、あらためてそう宣告されてみると、四郎兵衛はいいようのない忿懣に駆られてきた。自分のほうからかってに陰謀をうちあけておいて、なんの罪もない人間を監禁する、そんな無法なことがあるかと、できればどなりつけてやりたい。が、うっかりそんなことをすれば、相手は目的のためにどんな手段をとるかわからないのだ。

「親分はいま殿さまといわれたが、さっきの仮面の人は、木挽町の水野美濃さまですか」

四郎兵衛は戦法をかえた。

「それはあっしの口からいえないこと。というより、本当はあっしにもわからないというほうが本当かもしれやせん」

「親分、わたしは商人だ。親分さえはっきりわからないかたのいうことを真にうけて、十万両という投機ができるものか、できないものか、よく考えていただきたいな」

思わず胸の鬱憤が語尾にふるえている。

「いや、だんなが御承諾なさりゃ、味方ですか

らね、すぐにも仮面をおぬぎになるでしょうよ」

一服つけながら、にやりとわらっている灘万だ。

「では、こういうことにしよう。丹波屋も男だ。一度お美代の方さまにお目通り願いましょう。お部屋さまのお口からじきじきに頼むというおおせをうけたまわりましたら、十万両千両箱でそろえて、いつなりと御用だてしようではありませんか」

できないのは承知で、四郎兵衛はこう一本さぐりを入れてみたという。

8

「さあ、なんと仰せられますか、うかがってみましょう」

そう答えて出ていった灘万は、翌日もついに姿を見せなかった。

部屋は十畳に八畳の二間で、新しく建てられたものらしく、むろん外側には五寸角の格子が取りつけられて、座敷牢にできている。外は雑木林だから、これは下屋敷の林の中へ建てられた別棟なのだろう。蔵前からはどっちの方角にあたるか皆目見当はつかないが、空気の澄み方から見て、江戸の中とは思えなかった。

四郎兵衛の世話は、若い腰元がふたり、交替でしてくれた。扱いは決して粗略ではない。

——なにしろ、十万両のお客さまだからな。

四郎兵衛は苦笑させられるのだ。

翌十二日も、仮面の人はいうまでもなく、灘万も顔を見せなかった。おそらく、こっちから呼ぶのを待っているのだろう。

たとえば、こっちから呼んで、帰してくれといってみたところで、先方はこの一件が成就するまで監禁とちゃんと断言しているのだ。十万両出す腹にならないかぎり、ここは出られない。

四郎兵衛は懊悩煩悶した。相手の無法を憤り、自由の身になったらきっとふくしゅうはしてやるぞと、あらゆる手段を考えてもみた。が、け

っきょく、それはこっちの身が自由になってからの話で、その自由が狂おしいまでにほしい。こういうへびの生殺しのような無言の責め苦は、目の前に相手がいて、からだにむちを加えられるより数等つらい。いっそ十万両出してまず自由を買い、そのうえで、やつらにふくしゅうしてやる、だんだんそんな気持ちにさえなってきた。

　すると、十四日、きのうの午後になって、急に大奥からお美代の方の名代だという中臈がたずねてきた。表使いをつとめる波ノ江という者だと名のり、三十がらみの濃艶な女だった。

「お方さまは、そなたをたよりにしていられます。会いたいなら会おうとまでおおせられていますが、男禁制の大奥へそなたを通すのは手つづきがむずかしい。いずれ本郷へおなりか、寺方へお参詣のおりにでもと申すことで、きょうはわらわが忍びで名代に立ちました」

　だから、十万両出してくれ、とはさすがに口に出してはいわないが、むろんそのための名代であることは明らかだ。

「お中臈さまからお部屋さまへお取り次ぎ願います。御用金の話なら、人をこんなふうに三日も四日も監禁してのお話では、いくら町人に対してでもあまり非道でございましょう。一応帰宅させて、あらためて礼をもってのお話なら、必ずお部屋さまの御希望にそいましょう。罪人あつかいにされたのでは、丹波屋も男のはしくれ、御返事はいたしかねます」

　四郎兵衛はきっぱりといってのけて、相手がどんな表情を示すか見のがすまいと、お中臈さまの紅おしろいの濃い顔をじっと見すえた。

9

「そのおもむき、たちかえったうえ、たしかにお方さまにお取り次ぎいたしましょう。なにぶんとも、犬千代さまのおために力ぞえたのみ入ります」

　お中臈さまは至極冷静で、むだ言はひと言もいわず、丁重に会釈して、まもなく帰っていった。

　その返事は、けさになって、灘屋万五郎から伝えられた。

「だんな、お美代の方さまからのおことばがありましたそうで、今夜橋場の寮のほうへお帰しすることになりました。それについて、いうまでもないことですが、こんどの件については、だれにも他言しないこと、必ず三日のうちに十万両のほうのらちをあけてくれるように、これはこんどの件について、内々働いているかたがたから出たおさしずでござんす。よろしゅうござんすね」

「むろん、わたしが他言などするはずはない。しかし、十万両の返事のほうは、どこですればいいんだね」

　四郎兵衛は念のために聞いてみた。

「きょうから三日め、十八日の夜四ツ（十時）に、このあいだの仮面の殿さまが橋場の寮へ御自身お出向きになって、万事打ち合わせをなさるそうです」

「承知した」

「よけいなことですが、いやしくも将軍家御家督についての大事だ、このことには御老中以下の各重役、大名、その配下の諸役人が相当連判していなさる。鉄の仮面の殿さまもそのおひとりだが、だんなひとりの謀反が、みんなこれらの人たちの命取りにならないとはかぎらねえ。むろん、こっちの目もだんなのそばから離れっこありませんが、そのつもりで、だんなのほうもじゅうぶんおきをつけなすってください」

　灘万はこうくれぐれも念をおしてから、四郎兵衛にお菊あての手紙をかかせ、日が暮れるのを待って、座敷牢から駕籠で下屋敷を運び出されたのだという。

「それが、ずいぶん長い道でねえ、駕籠は外からしめきって、錠がおりているから、どこをど

う通ってきたものか少しもわからないが、さっきおろされたところを見ると、橋場の法源寺の前でした」
　あまりにも奇っ怪な話と、なるほどそれが事実なら天下の大陰謀ということになるので、聞いている人たちもさすがに緊張した顔を見合わせるばかりで、急にことばがない。
「で、四郎どんが法源寺で駕籠をおりたときはどんなぐあいだったね。供の者は何人ぐらいついていなすったね」
　まず口を切ったのはしゅうとの藤蔵である。
「ついていたのは若党ひとりでした」
「なにか話しかけてみなすったかね」
「むだだと思ったんで、御苦労さまといってやっただけです。若党はていねいにおじぎをして、駕籠をつれてさっさと今戸のほうへ引っかえしていきました」
「だれかにあとをつけられている、そんなふうはなかったかな」
　隠居の孫右衛門が不安そうに口を出す。
「外は明るい月夜ですからね。そんなことがあれば見のがすはずはありません」
　四郎兵衛の目はだんだん闘志に燃えてくるようだ。

10

「それで、十万両のほうは、だんな、どうなさるつもりでございましょう」
　大番頭の佐兵衛が主人の腹をたしかめるように聞いた。
「むろん、わたしは出しません。やりかたがあまり人を踏みにじっているから、腹がたつというばかりではなく、話がどうもあいまいすぎます。わたしがきょうまでに会ったのは、灘屋万五郎と妙な鉄の仮面をかぶった殿さまだというなぞの人物と、波ノ江というお中臈さまだけだ。いったい、だれを信用していいのか、そんなたよりない化け物を相手に、商人が十万両も現金

がつぎこめるかどうか、考えたって少し常識のある人物ならわかりそうなものじゃないか、ばかばかしい」
「すると、おまえの考えは、大奥のことなど作り話だというのかね」
　孫右衛門老人が暗い顔をする。
「作り話なのか、事実そういう陰謀があるのか、わたしにもまだはっきりしことはわかりません。どっちにもせよ、わたしは商人だ。きちんとした証文がないかぎり、脅迫で金を出すのはまっぴらです」
「しかし、だいじょうぶかえ。おまえが七日の間、妙な座敷牢へ入れられていたのは本当なのだからね。それに、話の様子では、おまえが金を出すと見たから、三日の期間つきで家へ帰してよこしたように思える。もし、それをいやだとなると、なにかおまえの身に災いがくるようなことはないかね」
「ですから、わたしはできるだけ戦ってみる。なんの罪もない者が、人の野心のために、むやみに殺されたり、座敷牢へ入れられたり、そんなかってなまねができるなら、天下に奉行所も法令もいらないではありませんか」
「すると、だんなはお上の力を借りる、つまり、訴えて出るお考えなのですか」
　そばから佐兵衛が心配しだす。
「いや、訴えるか、訴えないか、三日待ってみて、相手の出ようひとつさ。相手がこのうえ暴力でくるなら、わたしにも考えがある」
「それまで、このままでだいじょうぶでしょうかねえ」
　佐兵衛は相談するように、隠居と深川のしゅうとの顔を見くらべた。もし、お美代の方の陰謀が本当で、相手にそれだけ大がかりな用意があるとなると、どんな手を打ってくるかしれない。とうてい、丹波屋だけの手ではふせぎきれまい。
「なあに、ここはわたしの家だ。三日の間、わ

たしはどこへも出ないで、相手にどんな力があるかためしてみよう。佐兵衛、いまからたのんでおくが、もし三日の間に、わたしのからだになにかまちがいがあったら、かまわないから、すぐ奉行所へ訴え出ておくれ」
四郎兵衛はすっかり意地になっているのだ。
「番頭さん、お菊の帰りがおそいようなんだがねえ」
藤蔵がふっと気がついたようにいいだした。かわやへでも立ったのか、お菊はさっき座をはずしたっきり、まだ席へもどらない。だいじな話の席だし、しかも、七日ぶりに帰ってきた夫のそばを、ただでこんなに長く離れているはずはないと思うのだ。

11

「てまえが見てまいりましょう」
佐兵衛がすぐに立ち上がった。廊下づたいに、かわやのほうへ行ったようである。
「四郎どん、どっちみち用心するに越したことはない。四、五日家の若いやつらを夜番によこすことにしよう」
しゅうとの藤蔵がいった。佐原屋は木場の材木問屋だから、威勢のいい川波が始終家にごろごろしている。川波とは、いかだに組んできた材木や船で運んできた木材を、とび口一本で陸上げする仲仕のことだ。小力があって、びんしょうでないと勤まらない。気性も荒っぽいのがそろっている。
それを夜番によこそうというのだ。
「よろしくたのみます、おとっつぁん。わたしは不当な暴力なんかに負けたくない」
「そうだとも。まっとうに暮らしている人間が、世の中からいじめられるって話はねえ」
きかぬ気のしゅうとが目を光らせたとき、
「わあっ」
というような異様なうめき声が、かわやのほうの廊下できこえた。

「佐兵衛じゃないか」
「そうらしいな」
ぎょっとしたように、三人一度に立ち上がった。
「どうしたんだろう」
顔を見あわせて、すぐには走り出られなかったのは、いま鉄の仮面の不気味な話が出てたばかりだし、三人とも身の守りになる武器らしい武器はなに一つ持っていなかったからだ。
「行ってみよう。ここはわたしの家だ」
町内のとびの者に夜番もたのんであるし、召し使いたちもおおぜいいる。そうやすやすと人が忍びこめるはずはなし、もし忍びこんだとすれば、だれよりもお菊のことが気になる。かっとなって、まっさきに廊下へ走りだしたのは、若い四郎兵衛だった。しゅうとの藤蔵が負けずにつづき、伯父の孫右衛門もあとから走った。
少しずつあいている廊下の雨戸から、青い月光がしまを作って流れこんでいた。
奥へかぎの手に左折して、また右折した小座敷のはずれにかわやがある。手洗いの雨戸が一枚あいていて、そこの廊下に、だれかうつぶせに倒れているのだ。
「佐兵衛、佐兵衛じゃないか、どうしたんだ」
走り寄っていった四郎兵衛が、物のけはいに、あいた雨戸からふっと庭先へ目をやって、
「あっ」
思わず棒立ちになってしまった。袖垣のそばに、奇っ怪な鉄の仮面をかぶったなぞの殿さまが、人形のように冷然と立っていたからである。
「四郎兵衛、われらを裏切ってはならぬ」
仮面の殿さまは例の低い声でさとすようにいい放った。
「約束の十八日の夜四ツまで、お菊は身がわりにあずかっておくから、そのつもりでいよ」
そして、鉄の仮面はゆうゆうと月の庭を横切り、裏の河岸のほうへ消えていった。

血闘

1

丹波屋の寮の南側の路地にひそんで、四郎兵衛が表門からはいったのを見とどけたお大名浅吉は、
「太郎さん、おれは寮の中へはいって、ひととおり寮内を見とどけてくる。太郎さんは一足先に船へ帰っていてくんな」
と、天狗の耳へささやくのである。
「いや、ついでだから、おれもいっしょに行こう」
太郎はさりげなくいった。お夏は寮にいるのだ。そこへ四郎兵衛が突然帰れば、かねて知った仲だから、くわしい話を聞くまでは立つまい。どうせ手間がとれる。遠い船の中で待つより、近い庭で待っていたほうが、なにが起こっても安心だと思ったのだ。
「そんなに心配になるんかね」
浅吉はぬすっとかむりの中で、にやりとわらう。
「心配なんだ」
胸の中を見すかされても、浅吉になら恥ずかしくない天狗だ。
「けど、太郎さん、ぬすっとのまねはいけねえ。がまんしなせえ」
「そうかなあ」
「そのかわり、お夏ちゃんはきっと無事につれて帰る。船へ帰れば永代まで、またふたりっきりでお月見だ。ひざまくらぐらいかまわねえよ。若いうちだからな」
「あれえ、おじさんうじ、のぞいていたんかね」
来る船の中で、お夏がむりにひざを貸してくれたのだ。おとっつぁんに悪いからといったのだが、そんなのきらい、薄情だわ、とお夏がすねて承知しなかったのだ。のぞかれていたと思うと、やっぱり太郎は顔がほてる。
「なんだ、そうか。もうそこまで行っちまっていたのか」
お大名浅吉は目を丸くしたようである。
「しまった。いうんじゃなかったっけ」
「まあいいや、おそいか早いかの違いさ。ふふふ、これだから若い者のおいろごとの心配はするもんじゃねえ」
「おれじゃないんだ。お夏ちゃんが承知しないもんだから、つい――」
「おきなせえ。ちょいと肩を借りるよ」
浅吉はわらいながら立ち上がって、まだしゃがんでいる天狗の肩へひょいと右足をかけた。ぐいと体重を感じたとたん、もうその足が離れて、塀の内へ消えていったが、飛びおりたような音は少しも耳につかなかった。
――たいした腕まえだなあ。
天狗は感心して、しばらくぽかんと立っていたが、急に気がついて、もとのほうへ引きかえしはじめた。
まだ十足と歩かないうちに、右側の生垣のかげから、ぬっと月の中へ立った男がある。ぬすっとかむりやくざふうのしりっぱしょり、浅吉そっくりのかっこうだが、このほうが少し背が高いようである。
無言のまま、じいっと天狗の顔を見つめているようだ。

2

妙なやつだな、敵か味方か、と用心しながら、天狗も黙って突っ立っていた。
「おまえさん、太郎さんだね。姓は天狗、名は太郎、丹波の産だろう」
男はぬすっとかむりの中でにこっとわらったようだ。敵意はないようである。すると、福井町の重五郎というおかっぴきの子分かもしれない。
「よく知ってるな、おれになにか用かね」

「別に用ってわけじゃねえが、お夏坊がさらわれたのを知ってるかね」
「なんだって——」
　天狗は思わず左足をひいて、まだ柄にこそ手はかけなかったが、いつでも戦闘に移れる態度にかわった。福重の子分ならそれを黙って見のがすはずはないし、こいつ敵かもしれないと、とっさに思いなおしたからだ。
「おまえはだれだ」
「おれは正直で、親切な人間さ」
「お夏がだれにさらわれたんだ。正直にいってみろ」
「そいつは、太郎さん、少しおかしくねえか。おれは親切で知らせにきてやったんで、なにもおまえさんに頭からしかられるいわれはねえはずだ」
　ぬっと落ち着き払って、相手はそんな皮肉をあびせかける。
「悪かった」
　天狗は自分が度を失っているのにすぐ気がついた。
「勘弁してくれ。おれ、お夏にほれているもんだから、ついのぼせちまったんだ。すまねえ」
「のぼせちゃいけねえな」
　相手は低くわらいだしながら、
「すぐにのぼせるような男は、あんまり娘にもてねえもんだ」
　と、からかうような調子になる。
「いや、おれのはお夏のほうからさきにのぼせたんだから、たぶんだいじょうぶだ」
「ごちそうさま。お夏坊のほうから、ひざまくらをさせてくれたんだってね」
　どうやら、浅吉との話も聞かれてしまっているらしい。
「たのむ。お夏はだれにさらわれたんだ。教えてくれ」
「はっきりわからねえが、定九郎市のようだな」
「どんなふうにしてさらわれたんだね」

　声一つ聞こえなかった。船には三吉がいるはずだし、だいいち、お夏には父親徳造がついているはずである。うっかり手にはのれないぞと、天狗は腹に力をいれた。
「ちょいとうまい手口だったな。おまえさんたちが船をあがると、すぐそばの河岸についていた寮の屋根船から、ほおかむりの男がそっとはい出して、うっかりしている船頭のうしろからいきなり飛びかかって、のどをしめおとす。そいつを船房へほうりこんで、船を流し、そのかわり寮の船を桟橋へつけておいたのさ」
　ぬすっとかむりの男は、ゆっくりと話しだすのである。

3

「定九郎市というやつは、相当悪党で、度胸のすわったやつなんだな。太郎さんたちが先へ船へ帰ってきたら、ふいに切り倒してでもお夏坊を強奪する気だったんだろう。ところが、まもなく、どうしたことか、おあつらえ向きに、お夏坊がひとりで、はだしで寮を抜け出してきてね、同じような船だから少しも疑わねえで、太郎さんと呼びながら、いきなり船房へはいっていった。あっ、助けて……と一声叫んだときには、もう定九郎市がおどりかかって、口をふさいでいたんだろう。中から急いでさっきのほおかむりのやつが出てきて、たちまち船は岸放れするっていう手順だ」
　ばか、おまえはそういう娘の災難を黙って見ていただけなのか、と、聞いていた天狗は火のような目つきで相手をにらみつけていたが、もうそんなでくの棒を罵倒しているゆとりはない。思わずぬすっとかむりの男をかきのけて、河岸のほうへ駆けだそうとした。
「おっと、太郎さん、待ちなせえ」
　男はひょいと天狗の腕をつかんで引きもどし、
「いまから駆けだしたって、船はもう川の中ほ

どだぜ。月夜じゃあるが、ほかに月見船は出ているし、おまえさんにゃどれが定九郎市の船か見当がつくかえ」
　と、ひやかすように笑う。
「大きなお世話だ。どいてくれ」
「たとえば、船はあれだとわかっていても、川ん中じゃ泳いでいくか船で追いかけるか。おまえさん丹波の産だそうだが、船はこげるのかね」
「船はこげないが、泳ぎはできる。放してくれというのに。ぐずぐずしていて、船が見えなくなったらどうするんだ」
「その口でな、太郎さん、どうしておまえ、親切に知らせてくれてどうもありがとう、もしおじさんにその船がわかるんなら、いっしょにきて教えてくれないかと、ひと言仁義をつくさねえんだね。そんなみっともねえのぼせかたをするようじゃ、いくら一度はひざまくらを貸してくれた仲だって、いまにお夏坊にあいそをつかされるぜ」
　天狗はぎゃふんと参ってしまった。
「たのむ、おじさん。いや、知らせてくれてどうもありがとう。船を、その船を教えてくれ。たのむ、おれは泳げるんだ」
「そうか。そうこなくっちゃいけねえ。男は度胸といってな、いつでも腹がすわっているようでねえと、大きな仕事はできねえぜ」
「なあに、仕事のときは、おれ、相当腹がすわっているんだ。お夏のことだからあわてているんだ。もし、まちがいがあっちゃ、取りかえしがつかない。すまないが、おじさんもすこしあわててくれないか」
「なるほど。じゃ、少しあわてることにするかな。なあに、そう心配するにゃ及ばねえ。おじさんにゃ、ちゃんとめぼしがついているんだ。ついてきなせえ」
　男はわらいながらくるりときびすをかえす。いったい何者だろう、と、あとを追いながら、天狗は、この男がいうとおりを信じていいものか、悪いものか、まだ見当がつかなかった。

4

　そのころ――。
　定九郎市の船は河心へ出て、右手に水神の森を見ながら、月見船の間を怪しまれないように、ゆっくり綾瀬のほうへこぎのぼっていた。櫓をあやつっているのはむろん品川の権七で、灯を消した船では定九郎市にのどをしめられたお夏が、手早く手ぬぐいでさるぐつわをされ、うしろ手に縛られて、息も絶えだえにぐったりとそこへ失神していた。
　それでも力のかぎりはもがき争ったらしく、がっくり根の落ちた島田まげが床に解けたれ、苦しそうに薄目を閉じた顔が、窓障子をかすめる月かげに、死人のように青白い。くの字なりにからだを折り縮めた衣紋も、すそ前も、無惨にみだれはだかって、そこから娘らしい白々とした肌が、わずかながらむっちりとにおいこぼれている。
「ふふふ、ほねをおらせやがった」
　定九郎市は野獣のような目をぎらぎらさせて、お夏のからだじゅうを見まわしながら、荒い息のおさまるのを待っている。とうとう、天下の絶品ともいいたい名花が、今こそ自分の手にはいったのだ。まったく、思いもかけないもうけ物だった。
　昨夜灘万に別れて、品川の下屋敷を出たときは、せっかく旅先へまで追いかけていきながら、ついにとどかないところへ横どりされてしまったかと、がっかりしてしまった。やけで品川の青楼へあがり、金は西野用人からもらってきているから、豪遊をやってみたが、ちっともおもしろくない。きょう昼近くふらりと表へ出た往来で、ぱったり品川の権七に出会ったのだ。
　その権七の口から、ひょいとお夏の名がもれた。そこは勘が鋭い。近くの小料理屋へつれこんで、どうせ使いのこりの金だから十両つかま

せ、昨夜からのことをすっかり聞き出してしまったのだ。
「権七、てめえ、おれの味方になるだろうな」
「へえ、しようがありやせん。さらを食らえばなんとやらでさ」
「ばか、毒を食らえばだろう」
「両方食っちまうんだから、どっちだっておんなじことでさ」
　まさか、真っ昼間はどうすることもできない。日の暮れるのを待っていると、一度家へ帰っていた権七が夕方いそいでやってきて、お夏はいまおやじの徳造が船で迎えにきて、みんないっしょに帰った、話の様子では、帰りに橋場の丹波屋の寮へお菊をたずねるらしいという。
「よし。じゃ、こっちは駕籠で先まわりをしてやろう」
　その計略が図にあたって、ことによると、ひとりふたりは殺生なまねをしなければならないかなと覚悟はしてきたのだが、さいわいそんな荒っぽいこともせずに、名花は自分のほうから手におちてきたのだ。
「やっぱり、おれにくされ縁があるんだ」
　船の中で、絶対にじゃまははいりっこないのだから、定九郎市は少しもあせる必要はないのだ。

5

　水の上はしいんと月がさえて、やがて綾瀬のあたりへかかるのだろうか、実に静かだ。権七のこぐ櫓の音が、ぎいぎいと夢のように耳につく。
「さて、どうするかな」
　定九郎市は船房にこもるなまめかしい生娘の体臭に胸をくすぐられるような気がして、ごくりと生つばをのみこんだ。
　だれがなんといっても、お夏はもうおれのものだとあらためて思い、どうするのがいちばんいいのか、ふっとそんなことを考えさせられた。はじめはただ、是が非でも一度思う存分にこの

からだをもてあそんでやろうと、それだけしか考えていなかった。いや、一度自分のものにしてしまえば、いやでもおれの情婦になるよりしかたあるまいと、たかをくくっていた。
　船を綾瀬の支流へこぎいれて、二つめの橋が堀切橋だ。花しょうぶで有名な堀切村である。そこの往来から雑木林の道を右へ切れて隅田村へはいったところに、竹造という百姓あがりのばくちうちがいる。今夜そこへお夏をかつぎこんで、一晩泊まることにきめていた。いや、つごうで二、三日監禁して、強情な娘だから、さんざんに慣らしてからでないと、うっかりなわは解けないだろうと思う。
　問題は、そのなわを解いてからのことだ。灘万の目が光っているとわかった今は、たとえお夏がおとなしくなっても、江戸へはつれて帰れない。執念深いあの男のことだから、へたをするとお夏を持っていかれるばかりでなく、命までねらわれそうだ。
「このままわらじをはいたほうが、安全かもしれねえな」
　お夏をつれて旅に出る、そうなればお夏もあきらめて、おれひとりをたよりにする気になるだろう、悪くねえなと、定九郎市は思う。
「それなら、一刻も早く観念させてしまったほうがいいかもしれねえな」
　まだぐったりと正体もないお夏の豊かな胸乳のあたりをにらみながら、定九郎市はかっと激しい欲情に駆りたてられてきた。手が思わずお夏をつかんで、もう一度ごくりと生つばをのんだとき、
「先生、――ちょいと、先生」
　上から権七の声が呼ぶ。
　気のきかねえ野郎だ。そのために、てめえにゃ十両はずんであるんじゃねえかと、定九郎市はわざと返事をせずにいると、
「先生、怪しい船がつけてくるようなんだ。ちょいと出て見ておくんなさい」

と、追いかけていう。ぎくりとした。そんなはずはないと思うのだが、すねに傷がある身だから、用心するに越したことはない。惜しいお夏の肩を放して、黙って船房を出た。

　船はすでに綾瀬へはいって、ぐっと川幅はせまく、両岸は広々とした水田である。このあたりまでくると、もうほとんど月見船はなく、なるほど、ただ一隻、おなじような屋根船が二十間ほどあとから静かについてくる。

「ねえ、先生、怪しいでしょう。さっきからああして、ずっと離れねえんでさ」

　権七はこぐ手を休めずに告げた。

6

「権七、かまわねえから、船を堀切橋の南詰めへつけろ」

　定九郎市はじっと追ってくる船をにらみながらいった。

「だいじょうぶですかい、だんな」

　権七はひどく不安そうである。

「あの船が、たしかにこっちを追っているのかどうか、まだわからねえじゃねえか」

「そりゃまあ、そうでござんすがね」

　向こうの船には、こいでいる船頭のほか、まだ人かげはだれも見えないのだ。

「もし、追っているんだとすれば、おまえはだれだと思うんだ」

「あっしはどうもお大名浅のような気がするんですがねえ。野郎は、よく、目から鼻へ抜けるようなことをやりやがるんです」

　もしそうなら、友だちの信義を裏切ったのだから、権七はあとの仕返しがぞっとするほどこわいのである。

「だんなはだれだと思いやすんで」

「さあ、ぶつかってみなけりゃわからねえな。とにかく、堀切橋へつけろ」

「へえ」

「着けたら、てめえは早いところお夏をおぶっ

て竹のやろうのところへ逃げてしまえ。おれは途中で様子を見ていて、もし追っ手ならたたっ切ってやる」

　町方の者か、それとも権七がいうようにお大名浅というやつか、どっちにしても、いまさらむざむざとお夏は渡せない。有無をいわせずたたっ切って、災いを未然にふせいでおかなければならないのだ。

「承知しやした。なるほど、先生の腕まえならこわいものなしだ。やっつけやしょう」

　船が堀切橋の桟橋へつくと、定九郎市はお夏を船房から運び出して、権七の肩へ投げかけてやった。お夏はどうやら正気にかえっているようだが、もうだめだと思ってあきらめたか、まだそれだけの気力がつかないのか、ぐったりとして身もがき一つしない。

「権七、あの林までいそげ」

　船を捨て、往来へあがり、定九郎市があとを守りながら、月のあかるい道を小一町ばかり向こうに見える林までぐんぐん足を早めた。林のかげへはいってしまいさえすれば見とおしがきかないから、どこへでも逃げ道はあるはずである。

　定九郎市は途中で何度かふりかえってみたが、追っ手らしい人影は見えない。

「だんな、どんなふうです」

　重いものをおぶっているので、権七はさすがに息をはずませながら聞いた。

「まだだれも見えねえ。こっちの思いすごしじゃなかったのかな」

「もしそうなら、みつけもんですがねえ」

　道はとうとう林の中へはいってきた。もうこっちのものだ。

7

　両側が雑木林の往来を小半町ほど行くと、右へはいる間道がある。隅田村を抜けて、向島土手の木母寺の前へ出る道で、竹造の家はその雑

木林を出はずれのところだ。

「おれはここでしばらく様子を見ていく。てめえは一足先へ行っていてくれ」

定九郎市はその曲がりかどで立ち止まった。

「へえ、承知しやした」

お夏をおぶった権七は、そのまま間道をいそぎ足に消えていった。

それを見送っていた用心ぶかい定九郎市は、はてな、と気がついたのである。もし、追っ手ががかかっているとして、自分がこんなところに立っているのは、まるでこの奥にかくれ家がありますと追っ手に教えているようなものである。

——ばかな話だ。

それに、林のはずれまで行けば、堀切橋まで一目で見とおせるので、念のためにもう一度見てきてやろうと思いたち、いまきた道をぶらぶらと引き返しはじめた。

と知るや知らずや、ちょうどふたりづれのほおかむりの男が、いますたすたと林道へかかったところで、ひとりは着流しのやくざふう、連れは旅ごしらえした渡世人ふう、ちょっと見ると、どこかの賭場(とば)へ連れだって出かける、そんなふうにも見えたが、その鼻っ先へ定九郎市がぬっと立つと、ふたりともびくりとしたように一足飛びのいて、

「ああ、びっくりした」

そういいながらも、じりじりとあとずさりするのである。

——追っ手だな、おれの顔を知ってやがる。

早くも見てとった定九郎市は、ぐいと一歩迫りながら、

「おまえたち、おれになにか用があるようだな」

と、高飛車に出た。

「いいえ。なに、別に——」

どぎまぎしながら口ごもるふたりだ。

「うそをつけ。だれにたのまれてきたんだ」

「へえ」

「それみろ、返事ができねえだろう。かぶり物を取れ」

「へえ」

「早く取らねえか」

せっぱつまったらしく、ふたりのやつはちらっと顔を見かわしたが、

「野郎、くたばれっ」

同時に長脇差(ながどす)を引き抜いて、だっと切りかかってきた。

たぶんそうくるだろうと、ちゃんと読んでいた定九郎市だ。ひらりと飛びのいて、空を切って前のめりになった渡世人のほうの肩口へ、

「ばかっ」

抜き打ちにただ一太刀だった。

「わあっ」

どっと突んのめっていくやつに目もくれず、もうひとりのほうへ二太刀を振りかぶったが、と見るより早くその男は刀を引いて、いっさんにたんぼ道のほうへ逃げだしたのである。

8

——ばかなやつだ。

逃げ足の早いやつで、追ってもむだだと思ったから、定九郎市はそいつが堀切橋の向こうへ消えるまでじっと見とどけておいた。

往来へつんのめっているやつは、ざっくり切り下げられた肩口から道へ血だまりを作りながら、もう身動き一つしない。われながらあざやかな切り口だった。

——ふたりともおれの顔をよく知っているやつらしいが、いったい何者だろう。定九郎市は刀をぬぐって鞘(さや)におさめ、血だまりを踏まないように中腰になって、その野郎のほおかむりをとってみた。

「あっ」

灘万の子分の中でも代貸しをつとめ、きのうもお夏出迎えの供についていた板橋の清七だった。

「どこで、この野郎、おれを見つけたんだろう」

見つけたとすれば、品川よりない。そうか、お大名浅がお夏を連れ出したのを、灘万は一応おれにも嫌疑をかけて、昨夜から隠し目付けをつけておく、たぶんそんなことだろう。

どっちにしても、灘万にねらわれたとなると、いよいよ江戸にぐずぐずしてはいられない。現に、清七がここで切られたのを片割れが見て逃げているのだ。今夜のうちにできるだけ江戸から遠く離れてしまわないと、ああいう大きな勢力を持っている灘屋だから、たちまち袋のねずみにされてしまうのだ。

「こうとわかったら、片割れを逃がすんじゃなかった」

一刻でも時がかせげたのにと、いまさら後悔しながら、定九郎市はせかせかと間道のほうへ引きかえしてきた。

「やあ、丸田さん――」

その間道からのっそりと出てきて前へ立った男がある。頭に白い布を巻いた山ざる天狗だった。

「なんだ、山ざるか」

またとんだじゃまがはいりやがったと、定九郎市は苦い顔をして一足さがりながら、そろりと柄に手をかける。

「おまえ、よくここがわかったな」

気がついてみると、この男は権七がお夏をおぶって逃げたほうから出てきた。お夏はどうしたろうと、急にそれが心配になってくる定九郎市だ。

「ひとりか、てめえは――」

「いや、連れがある。しかし、わしはひきょうなことはきらいだ。決して助太刀はしないようにたのんであるから、安心したまえ」

山ざるは、例によって、無神経なんじゃないかと思われるほど、ゆうゆうとしている。

「どこにいるんだ、その連れというやつは」

「この林を向こうへ出はずれたところで待ってもらっている。お夏がいっしょだから、絶対にここへこない。お夏はひどく貴公をこわがっているんでね」

「うそじゃねえだろうな」

案の定、こいつはもうお夏を取りかえしているとわかると、定九郎市のそれでなくてさえ凶悪な目がかっと気ちがいじみてくる。

9

「わしは貴公と違うから、うそはいわない」

強敵を向こうにまわして、天狗は自分でもふしぎなくらい冷静でいられる。骨を拾ってくれる者があるからだ。

橋場の寮で出あったぬすっとかむりの男は、いっさいおじさんに任せるから、お夏を助けてくれと天狗があらためてたのむと、

「よし、引きうけたよ」

と、自信ありげに答えて、丹波屋の桟橋よりは二、三軒上手の桟橋へ走った。そこにちょきが一隻つないであって、ちゃんと船頭が待っている。

ふたりがそれへ乗りこむと、ちょきはすぐに岸を放れた。

「どこへつけやす、大将」

船頭が櫓をこぎながら聞いた。

「水神の森でいいだろう」

それは橋場の対岸で、ちょきはほとんどまっすぐ隅田川を横断したことになる。

――この男は、定九郎市がお夏をさらっていくところを知っているのだろうか。

どうもそうとしか思えない。ちょきが水神の森へつくと、船頭にそこで待っているようにいいつけ、木母寺の前へ出て、土手をつっ切り、それから隅田村の村道へはいって、両側がたんぼの並木道をどんどん歩いていく。

あんまり勘がよすぎるようなので、あとでしまったなどといわれたのでは追っつかない。よ

っぽど途中で、おじさん、だいじょうぶかねと、何度か口まで出かかったが、

「そんなに人が信用できねえんなら、かってにしなせえ」

と、いまさら突っ放されても困る。がまんしながらついて走って、たんぼ道がやがて雑木林の中へかかろうとする土橋のところで、

「あっ――」

林の中から出てきたほおかむりの男が、こちらを見て棒立ちになった。若い娘をおぶっている。お夏らしい。

と見たとたん、その野郎は、

「兄貴、――どうして、兄貴、こんなところへ」

と、あえぐようにいったが、いきなり娘をそこへずり落として、ふところのあいくちに手をかけた。が、それより、

「ばか野郎――」

と、飛びこんでいったおじさんの当て身のほうが早かったようである。

「正直んとこ、太郎さん、定九郎市に勝てると思うかね」

ふいに、おじさんが、わらいながら聞くのだ。

「勝てる、意地でも勝たなけりゃ、おれはお夏にあわせる顔がないんだ」

「そうか。そんなら、ひとつ勇ましくやってきねえ。この道を行くと、きっと定九郎市がやってくる。おれはお夏坊を介抱しながら、ここで待っていてやらあ」

つまり、切っても切られても、一度定九郎市と勇ましく勝負を決しないことには、おじさんの前にしても、お夏に会うことができない天狗なのだ。

10

「じゃ、山ざる、てめえはたしかにお夏を横どりしたというんだな」

定九郎市はすっと一足前へ出た。

「いや、まちがえちゃいけない。貴公がわしのお夏を横どりしようとするから、取りかえしにきたんだ。縛って女を自分のものにしようなんて、貴公は悪い人だ」

抜き打ちを警戒しながら、天狗は毒舌をやめない。勝負ごとというものは、なるべく相手をおこらしたほうが勝ちなのだ。まして、待ったのきかない真剣勝負では、技より腹のほうが物をいう場合が多く、つまり、かっとなったほうが負ける率の多いのは当然なことだ。

「抜け、山ざる」

そんな駆け引きは百も承知の定九郎市だが、きょうははじめから少し調子が狂っている。相手は昨夜鈴ガ森でさんざんあしげにしている山ざるだし、早くこいつをたたっ切ってお夏を取りもどし、灘万一味の手がまわらないうちに江戸を落ちなくてはと、始終胸にあせりがあるからだ。

「抜きたければ、貴公かってに抜け」

またしても揚げ足をとられて、むかっとなった定九郎市は、

「うぬっ」

少し距離が無理とわかっていながら、そこを踏んごむようにして、だっと抜き打ちに切り払った。

すっと一足さがって空を切らせた天狗は、すかさず一度ひいた右足を一歩踏み出しながら、

「とうっ」

こんどはこっちからたたきつけるような抜き打ちをかけたので、無理をして体勢ののびきった定九郎市は、わずかにかわしきれず、刀をつかんだ右手のひじからぽろりと切って落とされ、

「わあっ」

どっとそこへしりもちをつく。

そこを踏みこんで二の太刀を入れればそれまでの命だったろうが、天狗はそれをしなかった。たとえ、相手がどんな悪党でも、すでに戦闘力を失ったやつは、子どもを切るのとおなじだからである。

「やりやがったな、うぬっ」
　悪党のような形相にかわった定九郎市は、気丈にも残る左手でとっさに小刀を抜き放ち、寄らば切ろうと必死に振りまわしている。
「丸田さん、子どものようなまねはやめるんだねえ」
「なにっ」
「わしは戦う力のなくなった手負いを切るようなひきょう者じゃない。今夜の勝負はこれまでにしておくから、ゆっくり傷養生をして、くやしかったら、いつでもたずねてきたまえ。もう一度、堂々と勝負を決しよう」
　天狗はもう刀を鞘へおさめながら、にこりとわらってみせた。
「ふうむ。じゃ、命だけはあずけておこうっていうのか」
　意外そうな顔をした定九郎市は、急に小刀をふりまわすのをやめてがくりとなりながら、
「おい、山ざる、恩にきねえから、覚悟していろよ」
　それでも口だけはまだ達者なようだった。

11

　――おれは、りっぱに昨夜のしかえしはしたぞ。
　天狗はうれしかった。これで、お夏にも、みんなにも、ひけめを感じないで顔むけができる。しかも、踏んごんで切れば当然命のないやつを、男らしく許してやって、当人の反省にまつ。自分にそれだけの分別が残っていたことを、ひどく満足な気持ちだった。
「じゃ、丸田さん、お夏が心配してるだろうから、今夜はこれで失礼――」
　もうすっかり闘志を失った定九郎市に、天狗はわざとていねいにあいさつをして、ゆうゆうといま来た林の間道を、土橋のほうへひきかえした。
　――お夏はどうしたろう。もう元気を取りもどしたかな。
　手足を縛られたまま、権七の肩から路傍へ花のようにくずれ落ちたお夏の姿が目についていて放れない。思わず走り寄って抱きおこそうとしたとき、敵を当て身で倒したおじさんが、――正直んとこ、太郎さんは定九郎市に勝てるのかえといじわるく聞かれて、勝てると答えたら、
「お夏坊はおれが介抱しておくから、そんならひとつ勇ましくやってきなせえ」
　と、おじさんはとうとうお夏にさわらせてはくれなかった。つまり、定九郎市に負けるような男じゃ、お夏はやれないという腹があったんだろう。
　――こんどこそ、おおいばりだ。ちゃんとあの悪党に勝ってきたんだものな。
　大手をふりたい気持ちで、さっきの土橋のところまでもどってきたが、見ると、森閑と月かげがさえているだけで、だれもいない。当て身をくって倒れたはずの男まで、どこへ行ったか姿が消えているのだ。
「おじさん、――お夏」
　天狗は二声、三声呼びながら、そのへんをうろうろしてみたが、すぐにやめた。もうこんなところにまごついてはいないような気がしたからだ。
　考えてみると、天狗はまだ、おじさんというぬすっとかむりの男の名まえさえ聞いていなかった。はたして、敵なのか味方なのか。敵とすれば、灘万のまわし者だったかもしれないじゃないか。定九郎市がお夏をさらった。自分の手ではちょいと取りかえすのが厄介なので、うまくこっちの人のいいのを利用し、先まわりをしてお夏を奪って逃げだす。
「だまされたかもしれねえぞ」
　いつもおそまきながら、ぼんくら天狗はやっとそんな疑いを持ちはじめた。
「そうだ、こうしちゃいられない」
　そしてはなはだおそまきではあるけれど、天

狗はいっさんに水神の森のほうへ走りだした。
しかし、むろん、それは徒労に終わったのである。そこに待っているはずのちょきも、船頭も、どこへこぎ去ったのか。こぎ去ったとすれば、おじさんなる男とお夏をのせてのことに相違ないのだが、見わたすかぎり満々と夜潮をたたえた隅田川の上にも下にも、それらしい影はついに見当たらなかった。

度胸以上

1

深川の船徳の二階からは、すぐ左手に永代橋が見え、重い荷車などが通ると、わだちの音がまるで遠雷のように耳につく。このへんは大川ももう河口に近いから、潮の香をたたえた川幅がぐっと広くなって、朝夕はことに藍の色が深い。

「太郎さん、じゃ、どうしても品川へ行ってみる気かね」
その船徳の二階で朝をむかえた天狗とお大名浅は、さっきから気むずかしい顔をつきあわせて押し問答をつづけていた。
「うむ、おれはぜひ水野の用人西野喜左衛門に会ってみたいんだ」
昨夜、水神の森までお夏のあとを追った天狗は、そこに待っているはずのちょきが消えているのを見て、やっぱりお夏はおじさんと自称していたあのぬすっとかむりの男に横どりされたと思うほかなく、じだんだをふみたい気持ちで、対岸の橋場をにらみながら、ぼうぜんと立ちつくしていると、意外にもそこへ三吉が、自分の屋根船をこいで迎えにきてくれた。
「どうして、おれがここにいるのがわかったんだね。——いや、それより、きみはたしか、さっき悪党に、ふいにうしろからのどをしめ落とされたっていうじゃないか」

「へえ、大しくじりでござんした。さいわい、見ていてくれた船がありやしてね、福井町の重五郎親分の子分なんだそうで、あぶなく命びろいをしやしたが、いまもその人が、水神の森に太郎さんがいるからすぐ迎えに行ってくれ、と教えてくれたんでさ」
その船で橋場の丹波屋の寮の桟橋へ帰ってみると、土手へ身を伏せるようにしていた浅吉がむくりと起きあがって、
「太郎さんじゃねえか、どこへ行っていたんだ。船がねえもんだから、たいへんなやつを逃がしちまった。ここんちのおかみさんが、いま、さらわれていったところだ」
と、これもじだんだふまんばかりのくやしがりかたである。
「なに、お菊さんもか。——じゃ、おじさんうじは、お夏がさらわれたのも知っているんかね」
「えっ、お夏が——?」
こんどはお大名浅がびっくりする番だった。
そこへ徳造が血相変えて裏木戸から走り出てきて、
「大変だ、おかみさんが何者かにさらわれたそうだ。お夏もどこにもいない」
という騒ぎである。
三人が三人とも、なにがなんだかさっぱりわからない。が、よく話しあってみると、だいたいこういう順になるらしい。
お大名浅は天狗に別れて寮へ忍びこみ、夜番の目をくらましながら、灯のもれる座敷を目当てに、その縁の下へもぐりこんだ。ちょうどそこが、四郎兵衛がお菊をつれて、伯父やしゅうとに子細を話しにきた座敷だったので、意外な四郎兵衛の打ちあけ話は、おおよそ浅吉の地獄耳にはいった。

2

ずっと相談の席の縁の下にひそんでいたお大名浅は、どんなふうにしてお菊がさらわれたか

は目撃していない。が、不気味な鉄の仮面をかぶった男が、大番頭佐兵衛を倒し、物音におどろいて駆けつけた四郎兵衛に一本残忍なくぎをうちこんで、ゆうゆうと庭から裏木戸へ出てくるところは見のがさなかった。

　仮面の男は桟橋に待っていた船にうつり、灯を消した船房へ姿をかくすと、船頭はあざやかにさおをあやつって船を出し、たちまち吾妻橋のほうへこぎ去っていく。

「見のがしてなるもんかと思ってね、おれは裏木戸からはうように桟橋のところまできてみると、肝心なこっちの船が見えねえ。実は、やきもきしていたところなんだが——それより、いったい、お夏坊は、いつ、だれにさらわれたんだ」

「お夏ちゃんは、おれたちが船をあがって、表通りで丹波屋の主人が帰ってくるのを見かけたじぶん、はだしで裏木戸から出てきて、定九郎市にさらわれたんだ」

　それを知らせてくれた浅吉によく似たぬすっとかむりの男、その男の案内で、水神の森から隅田村まで先まわりして、土橋のところで品川の権七がお夏をおぶってくるのに出会い、そっちはぬすっとかむりの男にまかせて、定九郎市と林を出はずれたところで一騎討ちの勝負をやり、もどってきてみると、もうぬすっとかむりの男も、お夏も、権七も土橋のところにはいなかった。

「いそいで水神の森まで引っかえしてくると、福井町の重五郎の子分が教えてくれたといって、三吉うじが船で迎えにきてくれたというわけなんだ」

　おたがいの話はそれですっかりわかったが、考えてみると、この事件はまだわからないことだらけだ。

　だいいち、お夏はなぜひとりで、しかもはだしで寮の裏木戸から出てくるようなかるはずみをしたのだろう。それをわざわざ天狗に知らせて、隅田村までつれていき、定九郎市を討たせて、最後にはお夏を横どりしていったぬすっとかむりの男というのは、いったい、何者なのだろう。

　お菊をさらっていったのは、むろんお美代の方に一味する水野美濃、その手足となっている灘万一派の仕事であることは明白だが、鉄の仮面をかぶった殿さまという人物は何者か。たとえどんな権力があるにせよ、他人の寮へ無断で押しこみ、凶賊にもひとしいまねをするからには、事前に寮の内外にじゅうぶん手くばりがしてあったと見なければならない。どんな手くばりがしてあったか、これがわからない。

　手くばりといえば、しめ落とされた三吉を救ったのも、あとで三吉に水神の森を教えたのも福重の子分だという。してみると、福井町の重五郎はどこかからこっちの船を見まもってくれたことになる。その重五郎に会って聞いたら、ことによると、お夏の行くえがわかるのではないか。——そこにいちるののぞみがあればこそ、昨夜一同は、ともかくも深川へ船をかえすことにしたのだった。

3

「なにがなんだか、さっぱりわからねえ」

　現在自分が寮の台所まで送りこんで、ずっと下駄(げた)の番をしていながら娘をさらわれてしまった父親の徳造は、昨夜から青い顔をして何度もつぶやいていたが、けさは福重のほうからなんとかたよりのあるまで待っていられず、朝飯がすむとすぐ、さっさと福井町へ出かけていった。

　そのあとで、天狗が、品川の下屋敷へ行ってみる、といいだしたのだ。昨夜のぬすっとかむりの男が水野一味のまわし者だとすれば、お夏は当然、品川の下屋敷へつれていかれているに違いない、というのである。

「それに、話の様子では、丹波屋四郎兵衛も同じ十四日の夕刻前ごろ、波ノ江という中臈(ちゅうろう)に会

っている。すると、四郎兵衛が監禁されていたのも、品川御殿ということになるじゃないか。とすれば、四郎兵衛の身がわりにさらわれていった内儀も、きっと品川御殿へつれていかれているに違いないんだ。おじさんうじ、おれはどうしても西野用人をたずねてみる」

「もっともだ。太郎さんがいうとおり、なるほどお夏坊もお菊さんも品川御殿かもしれねえが、きのうも話したとおり、あそこは水野美濃の下屋敷じゃねえ。本当は宮島伊織の後家の隠居所なんだ。だから、正面から水野の用人西野といってたずねていっても、屋敷ちがいだと断られればそれまでじゃないかね」

「その時は灘万に会ってみよう」

「さあ、あの灘屋がそう簡単に出てくるかなあ。かりに出てきたとしても、いったい、太郎さん、なんといって掛け合うつもりだね」

「お夏はおれの女房だから、どうか返してくれと、正直に事情を話してたのむ」

本気なんだろうかと、お大名浅はあきれて顔を見なおさずにはいられなかった。そんな掛け合いで、ああそうかとお夏をかえしてよこすような灘万なら、だれも鬼か悪魔のように恐れはしなかろう。

「そりゃ、人間正直に越したことはねえが、その正直があの男にはとおらねえから、ちっとばかし困るんだ。それに、なまじへたなまねをすると、かえってお夏坊のからだが無事ですまなくなる」

「じゃ、おじさんうじに何かいい思案があるかね」

「さあ、突然そんなことをいわれたって困るんだが――」

「困るったって、おじさんうじ、お夏はもうゆうべから敵の手におちているんだ、ぐずぐず考えて困っているより、おれが乗りこんだほうが早いじゃないか」

「そりゃそうだが、むやみに乗りこんだって、

敵のわなにひっかかるだけのことさ」

「もし、おれが敵のわなにひっかかって帰ってこないようなら、たしかに品川御殿にお夏がいることになる。そうとわかったら、こんどこそ、おじさんうじが乗りこむなり、福重の手をかりるなり、そこではっきり取る道がきまってくるじゃないか」

つまり、天狗は捨て石になろうというのである。

4

福井町へ出向いた徳造が、疲れたような顔をして、しょんぼりと深川へ帰ってきたのは昼すぎだった。

「どうだったね、様子は」

この顔色ではろくな話は出なかったようだと思いながら、浅吉が聞いてみると、

「それがね、皆目見当がつかねえそうだ。あんまりだらしがなさすぎらあね」

と、日ごろおとなしいこの男にしては、ひどく中っ腹のようである。

「けど、ゆうべ橋場へ張りこみに出ることは出ていたんだろう」

「そりゃ出ていたんだそうだ。ずっと船からこっちの船を見ていて、定九郎市がお夏をさらってこぎだしたんで、そのあとをつけようとすると、別の屋根船が一足先につけている。こっちはそのあとからつけるようになったっていうんだがね」

「ふうむ、その別の船ってのは何者なんだね」

「あとでわかったんだそうだが、灘万の子分の船で、こいつは堀切村の林の入り口で、定九郎市に切られていたそうだ。そこで、手分けをして、一組みは隅田村の土橋のほうへまわり、一組みは定九郎市の足どりをたどった。このほうは、ちょうど太郎さんが市を切ったあとへぶつかったんだね」

「定九郎市はどうなったか、わかっているだろ

うか」
　自分が手をかけたやつだけに、天狗はやっぱり気になる。
「なんでも、鬼のような顔をして、太郎さんに切りおとされた右手の傷口を押さえながら、ひょろひょろと林の中を歩いていって、土橋をわたり、そこからあんまり遠くない百姓家へころげこんでいったそうだ。それが隅田村の竹造というやくざ者だって話だ」
「じゃ、その組は、土橋のほうへまわった組とはぶつからなかったんかね」
　浅吉が妙な顔をする。
「いや、そりゃあぶつかったんだ。土橋のほうへまわった組は、そこに気絶している品川の権七を縛り、林の中へかくれて待っていたんだ。だから、太郎さんが向島土手のほうへ駆けていくのは知っていたというんだ」
「すると、ぬすっとかむりの男がお夏ちゃんをさらって逃げたあとへ、その組は行ったことになるんだな」
「どうもそうらしいんだ。それから福重たちは船で橋場へ引きかえし、ひとりが三吉に太郎さんを迎えに行くようにと知らせた。――ゆうべは後手後手を踏んでまったく面目ねえが、おれたちが定九郎市の船を追っている間に、丹波屋の寮では思いがけねえ事件が起こり、橋場へ引っかえして、三吉に水神の森を教え、ひとまず引きあげたあとから、ほんの一足違いで、仮面のくせ者がお菊さんをさらって船で逃げた、こんな順序になるんだと、福重は頭をかいていたが、ばかにしやがる。頭なんかいくらかいたって、かわいそうに、お夏のゆくえはもうわかりやしねえや」

5

「じゃ、福井町の親分たちは、丹波屋のおかみさんがさらわれたことはちっとも知らなかったわけなんだね」

　お大名浅もひどく不服そうな顔になる。
「そのとおりなんだ。おれが浅さんから聞いた話をしてやると、そんなことがあったのか、こっちはまたお夏坊のことばかり気にしていたんで、そいつはとんだことだったとびっくりしているんだから、まったくたよりねえね」
「福重もそろそろやきがまわったな。それにしても、笠井のだんなはどうしたんだね。ゆうべは出張らなかったのかね」
「うむ、福井町があっしに任せておくんなさいとひとりで引きうけたのが悪かったって、さすがにしょげていたがね」
「いまさらいくらしょげてみせたって、あとの祭りだあね。だいいち、灘万て悪党をそんなに甘く見ている笠井のだんなもだんなじゃねえか」
　天狗は黙って行って、ひじかけ窓に腰をおろした。明るい秋日にさえた潮の青さが目にしみる。
　――お夏ちゃん。
　あの時、自分がぬすっとかむりの男におだてられて、なんの考えもなく定九郎市を切りに走ったのがまちがいだった。仕返しはゆうべにかぎったことではないのだし、まずお夏を安全な場所へ移しておくべきだったのである。
　――よし、おれはどうしても品川の下屋敷へ乗りこんで様子をさぐってやる。
　それにしても、今聞いた福重の話にはだいぶふに落ちないところがありはしないだろうか。
　堀切村で二手に別れて、その二組みが土橋のところで出会った。その時に、自分はもう水神の森へ向かって走っている。福重が権七をしばって、堀切橋に侍っている船まで引きかえし、綾瀬川から隅田川へ出て、橋場の桟橋についている三吉の船へ水神の森を教えたのでは、三吉の船があんなに早く自分を迎えにこられるはずはあるまい。自分は円の直径を走っているのだし、福重たちはその円の半分を大きく迂回しているのだ。

だいいち、自分はあの時お夏の名を呼んで、しばらくあたりを捜しまわっている。同じお夏をさがしている福重一家が、その自分を黙って見のがすというのは、どういう考えがあってのことなのだろう。

もう一つたいせつなことは、鉄の仮面の男は船で丹波屋の寮へ着き、その船でお菊をさらって逃げている。その船は、三吉の船が水神の森へ向かったすぐあとで寮の桟橋へつき、自分と三吉がその桟橋へこぎもどる少し前に、吾妻橋のほうへこぎ去ったことになる。福重の船は必ず桟橋の近くで、寮へこぎよせる鉄の仮面の船と出会っていなければならないはずだ。稼業がら、そういう船に不審をいだかないというのは変だ。

――福重は、たしかに、なにかうそをついている。なぜ、そんなうそをつかなければならないのだろう。

天狗にはどうもげせないことだらけである。

6

けっきょく、徳造が帰ってきても、お夏の消息はなにもわからなかった。

――お夏のいない世界など、生きていたってつまらない。

そこまで思い詰めて、天狗はもうじっとしていられなくなってきた。しかも、どう考えても、お夏は品川の宮島伊織の下屋敷へつれもどされたとしか思えないのである。そして、そこは水野の用人西野喜左衛門が、水野の下屋敷と称して、十四日の夜、お夏をつれていったところなのだ。ふいにたずねていってもいい口実はじゅうぶんある。

――とにかく、一度西野に会って詰問してやろう。

西野の背後に灘万という悪党がおどっていることも話の様子であきらかだから、もし西野に会えなければ灘万に会っても、お夏のことはわ

かっているはずなのだ。

――なあに、どんな悪党だって、最悪の場合は刺しちがえる気で掛け合えば、なんとかならぬはずはない。

まだ世間知らずの天狗だから、そこまで腹がきまると、もうなにもこわいものはなくなってきた。

徳造とお大名浅が、しきりにため息を吐きながら、昨夜の笠井や福重の無責任さを憤慨している間に、天狗はそっと二階をはずし、そのまま深川の相模屋を飛び出してしまった。

途中何度も道を聞きながら、やっと高輪海岸へ出て、大木戸のところから右へ高台のほうへ坂をのぼっていくと、このあたりはずっと諸侯の下屋敷つづきになる。道なりに谷ツ山のほうへはいっていき、ちょうど通りかかった御用聞きの小僧に、宮島の下屋敷はと聞くと、そこの土塀をめぐらした屋敷だと教えてくれた。

時刻はやがて八ツ半（三時）だろうか。黒い屋根門の前へ立ってみると、しいんと明るい秋日が、はき清められた敷石にやや黄ばんで、中からは人声一つしない。

――さあ、勝負だぞ。

天狗は深い呼吸を一つしてから、くぐりを押して中へはいった。前庭によく手入れの行きとどいた植え込みがあって、玄関はそのかげになっているらしい。右手の竹垣の中は家来の長屋になっているようだが、ここにも人の姿はない。

かまわず前の植え込みを回って、天狗はゆっくりと表玄関へかかった。

「たのうむ」

案内を請う自分の声が、玄関の白い障子にはねっかえるように耳についた。

しばらく待ってみたが、ひっそりとして、なんの返事もない。

「たのうむ」

天狗はぐっと胸をそらしながら、前より大きな声を出した。

とたんに、にらんでいた大障子が、中からするりとあいた。

7

「お越しあそばしませ」

そこへしとやかに三つ指をついたのは、紫矢がすりの若い腰元である。武家の屋敷でいきなり腰元が取り次ぎに出るのはあまり例がない。が、ここは表面、先代伊織の後室の隠居所ということになっているから、取り次ぎも腰元にしてあるのだろう。一度は目をみはったが、そんなことはどっちでもかまわない天狗だ。

「御当家に西野喜左衛門さんという御用人がいるはずですね。一昨日、程ガ谷の宿でお目にかかった丹波の産、天狗太郎がまいったと、お取り次ぎ願いたい」

「あの、西野喜左衛門さまとおっしゃるのですか」

腰元はまじまじと顔を見上げる。

「そうです。御用人の西野さんです」

「さあ、当家にそういうかたがいますかどうか、うかがってまいります。しばらくお待ちくださいませ」

ていねいにおじぎをして、腰元は奥へ引きとっていった。

脈があるぞ、と天狗は直感した。なれない新参者を取り次ぎに使うはずはないし、そういう用人がいるかいないか、腰元に即答ができないはずはない。聞いてくるというからには、なにかおぼえがあるから、そんな人はいないとはっきり独断でことわりきれないのだろう。

そういう天狗の直感は、たしかに当たっていた。

そのころ、水野家の用人西野喜左衛門は、ひそかに当家の灘万をたずねて、例の奥の茶室で密談にふけっていたのである。

「お夏に逃げられたのは、やっぱりまずかったようだな」

西野は何度もそれをくりかえして、暗い顔をしていた。

お夏をここへ連れてきて、大奥へ推薦しようとしたことは、公用人黒田外記も承知のことだから、世間へもれても決してさしつかえない。ただ、問題なのは、波ノ江という中﨟のにせ者を使って、多少お夏を脅迫していることだ。これとて、ただそれだけのことなら、将軍家の大奥という大きな力をかさにきて、そういう例はありがちなことなのだから、内聞にしてくれるようにということで済ませておいても、たいした災いにはならぬ。

困るのは、おなじ日に波ノ江を丹波屋四郎兵衛に会わせていることだ。どういう口実があるにもせよ、こちらは四郎兵衛を監禁して十万両出せと脅迫している。両方の口から波ノ江の名が出て、万一波ノ江を洗いあげられると、丹波屋の一件は申しひらきができないことになる。まして、そんなことから十三代将軍の継嗣問題が公になると、当将軍家側にも政治家がいくらもついているのだから、陰に陽にどんな暗躍活躍が始まって、どれだけの犠牲者が出るか、主人水野美濃守といえども、とうてい無事ではすまないおそれが多分にあるのだ。

8

「なあに、どんなことがあったって、殿さまや西野さんに迷惑のかかるようなことはしねえから、まあ任せておきなせえ」

灘万はあいかわらずどっしりとしたつらがまえで、不安などというものはみじんも持っていないようである。

「しかし、親分、波ノ江だけはなんとかせんと、町方の手がはいってからではまにあうまい」

「いや、あれはもう手まわしよく旅に出たようだから、町方でも手のつけようがないだろう」

「旅にねえ」

西野はなんとなく目をみはっている。

「安心なせえ、まさか帰らぬ旅に出したわけじゃない。お波はおれの思いものだからね、ちょいと住まいをかえさせただけさ」
灘万はくすりとわらって、
「正直にいうと、西野さんに注意されるまでもなく、湯島のお波の家の近所へは、きのうあたりから妙なやつがうろつき出したんで、そこはこっちも如才ねえ、すぐ手をまわしてみると、北の定町まわり同心で笠井平三郎というやつが動き出したとわかった。すると、親玉はほりもの奉行の金的ということになる。こっちはもうそこまで調べあげているんだ。むろん、先方の出ようによっちゃ、やつらにこそ帰らぬ旅に出てもらわなくちゃなるめえが、とにかくこっちは、決して油断しているわけじゃねえ。まあ、親船に乗った気で、なにがあっても平気な顔をしていなさるがいい」
と、けろりとしてすごいことをいいだすのだ。
「ううむ。じゃ、遠山左衛門尉が動きだしているんかね」
さっと西野の顔色が変わる。若いときはやくざの飯を食ったこともあって、よく下情に通じている名奉行の評判があるだけに、なんだかしりへ火がついたような不気味さを感じるのだ。
「やっぱり、お夏のほうから道がついたんじゃないかな」
「今のところ、丹波屋のほうはお菊という人質があるから、うっかりした口はきけまい。となると、こいつはお夏のほうから道がついたと見るほかはない。ところが、残念ながら、そのお夏をおとといの晩だれがここから連れ出したか、いまだにそれがわかっていねえ。しかも、お夏はゆうべ橋場のお菊をたずねて、それを定九郎市がさらって逃げた。それから先のことがまだわからねえ。この二つさえわかれば、こっちにも手はいくらもあるんだが、まだどこからも新しい手がかりがない。実は、それだけがちょいと気がかりなんだがね。それも、きょうじゅうにはいいたよりがあるだろうと思って、心待ちにしているのさ」
「しかし、北が動きだしたとなると、わしは程ガ谷で名を出しているんだから、用心する必要はないかねえ」
西野は人のことよりわが身のほうが心配になるようだ。

9

「西野さん、そりゃよけいな心配さ。いくら金的でも、まさか木挽町の殿さまにはたてつけねえ。なにもこっちはお夏に悪かれと思って大奥へあげようとしたわけじゃない。あいにく、相手が変わり者だから、いやだといって逃げ出したまでで、万一そんなことを町方から突っこまれたら、下見のためにお夏を踊りの師匠としてこの下屋敷へ招いたのは本当だとありのままいっておいてかまわねえじゃありませんか。町方だって、それ以上突っこんでくることは、まあ、しやあしません。なあに、そのうちにお夏のゆくえをつきとめて、こんどこそりっぱな口はきけねえからだにしておくから、まあ、任せておきなせえ」
灘万はあいかわらず不安などということは少しも知らない男のようである。
「それにしても、問題はお夏の口だからな、早くつかまえて、こうなったらまた親分に奥の手を出してもらうんですな」
女と見れば、暴力をふるってでも平気でわが物にして、たいていは泣き寝入りにめかけにしてしまうこの男の強引なやり方を、日ごろは決して好感を持っていない西野だが、お夏の場合は自分の身に危険があるので、つい相手をそそのかすようなことばが出る。われながら身がってなものだと思わざるをえない。
「いや、こんどだけは、その奥の手の出しおくれでね。手ごわいとわかったとき、すぐにお灸

をすえておきさえすれば、逃げようったってもう逃げられなかったんだ。千慮の一失とかいうやつでさ」
　けろりとして答える鉄面皮な灘万だ。
「ふしぎとまた親分は、若い女にも年増にも好かれるようにできているからねえ」
「そりゃ西野さんなんかと違って、かわいがり方が親切にできているからな」
「その手で、例の人質にも、もうお灸がすえてあるんじゃないかね。あれもなかなか美人のようだから、ただそっとしておくような親分じゃあるまい」
　西野はそれとなくかまをかけてみる。
「ここはおれの阿呆宮さ。ここへ連れてこられた女は、いずれただじゃすまないだろうね」
「しかし、娘と違って人の女房だからな。まして、十万両という大金のかかったたいせつな人質だし、これだけはあとがめんどうにならんようにせんとな」
「なあに、灘万ともあろう豪の者が、あとにめんどうなど起こすものかね。女なんてものは、口にしちゃいけないことは、亭主にだって決してしゃべらねえものさ」
　つまらぬことを聞くんじゃなかったと、西野のほうが後悔したくらいである。
「申しあげます」
　腰元が廊下の外へきて両手を仕えた。
「あけてもいいよ。なんだね」
　障子をあけたのは十八ばかりのぽったりとしたかわいい腰元で、これもお灸の組かと思うと、西野はどうにも顔を見ていられない気がする。

10

「あの、ただいま玄関へ天狗太郎さまとかおっしゃるかたがおいでになりまして、御用人西野喜左衛門さまにお目にかかりたいと申しています。当家にそういうかたはいないようですが、一応うかがってまいりますからと、こう申しあげておきました。どういたしましょうか」
　腰元は心得顔に取り次ぐのである。
「天狗太郎！」
　西野はおぼえがあるから、思わず灘万のほうを見た。
「はい。頭に白布をまいている若い侍でございます」
「とにかく、座敷へ通しておいてもらおうかね。だれが会うなどと、よけいなことはいわなくてもいい。たって先方で聞いたら、当家の者がお話をうかがうそうですから、といっておきなさい」
　とっさになにか思案がきまったらしく、灘万はあっさりいいつけて腰元を去らした。
「このあいだ、定九郎市は、当分起きられないようにたたきのめしておいたといっていたが、本人がきょうここへ来るようじゃ、たいしたこともなかったようだな」
　それとなく西野は灘万の腹を読もうとする。
「ああいうおっちょこちょいのいうことなど、本当にするほうがおかしいのさ。――しかし、西野さんの話じゃ、天狗というやつは、若いがなかなかしっかりしているそうだね」
「うむ。多少とぼけたところはあるが、頭もよく働くようだ。それにしても、どうしてこの屋敷をかぎつけたかねえ」
「お夏からわかったのさ。ということは、天狗はお夏のいどころを知っている、ということにならないかね」
　にやりとほくそえむ灘万だ。
「それを知っているんなら、なんの目的でわしをたずねてくる必要があるのかな」
「そいつは当人に会ってみなければわからないが、おそらく大奥へはあげられないと、もう一度はっきり断りにきたんだろう」
「なるほど。相当人をくったところもあるから、そうかもしれないね。しかし、それだと少し度胸がよすぎるようだな」

「なあに、若いから向こう見ずなのさ」
「会ってみるかね、親分」
「うむ。かもが向こうから飛びこんできたんだからね。会って、お夏のいどころを吐かしてやろう」
「さあ、そう簡単に吐くかどうか」
「吐かせるようにして吐かせるまでさ」
「まさか、拷問にもかけられまい」
「甘いねえ。西野さんはそんな弱気だから、町方なんかが気になるんだ。こっちの仕事につごうの悪いやつは、みんなおとなしく眠ってもらう。そのくらいの度胸がなくちゃ、天下を相手に大きなばくちは打てやせんぜ」
こともなげにいってのける灘万は、むろん度胸以上のものを持っている男なのだ。

善魂悪魂

1

十畳の座敷へ案内されて、さっきの腰元が茶を一つ運んできたきり、天狗はずいぶん長い間待たされた。
――なにを相談しているんかなあ。
天狗はそんなことを考えながら、いつまでもしんぼうづよく待っていた。ことによると、屋敷違いだといって玄関払いをくわされるかもしれない。それだと、いすわる口実がないので、いちばん困ると考えていただけに、とにかくだれかが会ってくれるというのだ、待たされるぐらいはしかたがないと、天狗ははじめから覚悟していたのである。
旗本の下屋敷にしてはかなり大きな構えで、庭も広そうだが、それにしてもしんとして、さ

っきから人声一つしない。まるであき屋敷のようだ。
――お夏はどのへんに監禁されているんだろうな。
場合によっては切り死にも辞さない腹だから、なるべくなら方向なりとつけておきたいと思うのだが、お大名浅と違い、まるっきりそういう勘は働かない天狗だ。
――なあに、おれの帰りがおそければ今夜はきっとおじさんうじが奥の手を使ってくれる。おれはその前座みたいな者なんだから。
しかし、一目会えるなら、どうかしてお夏に会いたい。おれは決してひきょう者ではなくて、こんなにいっしょうけんめいになっているんだと、ぜひ死ぬ前にお夏に知らせてやりたい。
――ありがとう。あんたの心よくわかったわ、うれしいわ。
ひと言そういってもらえば、おれは安心する。そして、恋なんて変なものだなあと、天狗はしみじみ考えるのだ。もう命もいらないし、出世もいらない。一度くちびる、いや、一度じゃない、三度だったか四度だったか、かっとなってお夏のにおいをかいだだけで、恋しいお夏のためなら火の中へでも水の中へでも飛びこもうと考えているんだ。
「本当だよ、お夏」
思わず口の中でつぶやいたとき、廊下の障子があいて、またさっきの腰元がお茶をもってきた。
「お待たせいたします。もうすぐお目にかかるそうでございますから」
「いや、ゆっくりでもかまわねえです。別に退屈はしないから」
皮肉かしら、というように、腰元がちらっと顔を見上げた。
「失礼ですが、お腰元さんは恋ってやつをやったことがありますかね」
天狗は人のいい顔をにっこりさせて聞いてみ

た。
「まあ」
腰元はびっくりしたように身をひいて、まっかになりながら、いそいで立ち上がった。
「ごめんなせえまし。おれ、別に悪気があって、そんなこと――」
みんなまでいわないうちに、腰元はもう廊下へ逃げ出してしまっていた。

2

障子に夕方のけはいがただよってくるころになって、やっと五十がらみのあぶらぎった、しまの着物の男が出てきた。年配から見ても、これが灘万というやつだなと見ていると、座について、
「お待たせいたしやした。あっしは当家の部屋頭で灘屋万五郎という者だが、なんの御用できなすったね」
と、どこかおうへいな口のきき方だ。ひと目見るなり、これも相手を丹波の山ざると頭からこばかにしたくなったのだろう。
「わしは天狗太郎といいます。親分は木挽町の水野さまの御用人で西野喜左衛門さんという人をごぞんじでしょうね」
「まんざら知らねえとはいえないだろうね」
「実は、その西野さんが、お夏を将軍さまのおめかけにしてやるといって、この屋敷へ十四日の晩つれこんだんです。お夏にはわしという亭主がある。たとえ将軍さまでも、おめかけなどまっぴらだといって、その晩は逃げて帰りました。すると、ゆうべまた、お夏がだれかにさらわれてしまったんだ。わしは、きっと西野さんがこの屋敷へつれてきたに違いないと思います。今もいうとおり、お夏はわしの女房なんだ。親分からよくその訳を西野さんに話して、お夏をわしにかえしてもらえないだろうか。どうか、御尽力をたのみます」
はてな、というように、じっと灘万は天狗の

顔を見た。いうことがすきだらけで、突っこめばいくらでも突っこんで追いかえせる。だいいち、お夏が昨夜さらわれたから、また西野がここへ連れてきたんだろうなどというのは、ひどく独断だ。が、その独断より、お夏が現在敵の手にいないということに、灘万は気がひかれたのだ。
「ゆうべ、お夏がさらわれたといいなさるんかね」
「そうです」
「どんなふうにさらわれたんだね」
「正直にいわないと事情がわからないから、ひとどおり話すことにするが、ゆうべお夏は橋場の寮へ丹波屋のおかみさんをたずねたんだ。船で行って、裏木戸からおやじの徳造が台所まで行って待っていた。わしもついていったが、お夏が寮へはいるとまもなく、わしは橋場の往来まで行ってみた。ちょうど丹波屋四郎兵衛が寮へ帰ってくるところだった。そのあとで、船にひとりで残っていた船頭が、かくれていた品川の権七と定九郎市にふいに絞めつけられ、桟橋の船は定九郎市の川の船とかわってしまったんだ。そこへお夏が、どういうわけかわからないが、ひとりで、はだしで出てきて、船がかわっているとは知らないから、わしの名を呼びながら船房へはいった。つまり、自分から定九郎市のわなに飛びこんでいったことになるんだね。むろん、船は権七がこいで、すぐに桟橋を離れたということを、ある男がひとり、陸から見ていたんだ」
どういう考えがあるのか、天狗は平気で昨夜の事実をみんなぶちまけていく。

3

「ぬすっとかむりをしたやくざふうの男だったが、いまお夏が定九郎市に船でさらわれた、どうすると、わしのところへ来てくわしく教えてくれたんだ。どうするもこうするもない、すぐ

取りもどしに行くというと、それじゃおれが行く先を知っているから案内してやろうと、ちょき舟にのせてくれてねえ、対岸の水神の森へわたったんだ。そこから隅田村を突っ切って土橋のところまで行くと、なるほど、林の中から手足を縛ったお夏をおぶって、権七が出てきた。ぬすっとかむりの男が、いきなりそいつに当て身をくれて倒し、あとからきっと定九郎市がくるに違いない、おまえ勝てるなら早く切ってこいというんで、丸田市之進にはゆうべのうらみがある、お夏はその男にまかせて、わしは林の中へ駆けこんでいった」

　灘万はまじめに聞いているんだかいないんだか、まったく無表情な顔つきでたばこを吸いながら相づち一つうつでもなく、ときどきそっぽさえ向いてみせる。明らかにこっちを青二才とみくびってこばかにしている無礼な態度だが、天狗はいっこう意にも介さないふうで、ゆっくり話をつづけるのだ。

「その林を突きぬけた向こうの往来で、わしは定九郎市に出会った。むろん、けんかになって、わしは市之進の右の手首を切り落としてやったが、命はとらなかった。あれで改心すれば、世の中のためにも、当人のためにも幸いだが、どうしても改心できなければ、天が制裁をしてくれるだろうと考えたからなんだ。それから急いでもとの土橋のところまで引っかえしてみると、お夏も、ほおかむりの男も、権七の姿さえ消えている。まるできつねにでもつままれたような気持ちだ。けさになって聞くと、わしが定九郎市を切った往来から小一町ほど堀切橋のほうへ寄ったところに、板橋の清七という男が切られていたそうだ。この男は、程ガ谷で西野さんがお夏を待っていたとき、その行列の中にいた男だ。おそらく、お夏をさらっていく定九郎市たちのあとをつけて、それと勘づいた市之進に切られたんだろう。すると、前のぬすっとかむりの男も清七の仲間じゃなかったかと、わし

は気がついたんだ。それなら、お夏はきっとこの屋敷にいる。西野さんに会って、お夏はわしの女房なんだから、よく事情を話して返してもらおうと思ってね。――こういうわけなんだから、親分、あんたからひとつ西野さんにたのんで、お夏をかえすようにいってくれないか。どうかたのみます」

　天狗はきちんとひざに両手をおいて、ていねいに頭をさげた。

「板橋の清七が切られたってのは本当かね。おまえさん、だれからそんなことを聞きなすった」

　この情報は初耳だったし、清七はあの晩以来、定九郎市につけてあった。こいつが帰ってきさえすれば、あるいはお夏のゆくえがわかるんじゃないかと、今の今まで心待ちにしていただけに、灘万も思わず目を光らせずにはいられなかった。

「ゆうべ、お夏をよそながら守っていってくれた者がほかにもあって、そのかたから船徳のおやじさんが聞いてきたんだ」

　天狗はあくまでも正直である。

4

「その間じゅう、船徳さんはなにをしていたんだね。ぼんやり丹波屋の台所で待っていたんかね」

　灘万がなにげなく聞く。

「そうなんだ。あんまりおそいから、どうしたんだろうと心配していると、そのうちに丹波屋の内儀がかわやへ立つところを、何者かにさらわれたという事件が起こった。聞いてみると、お夏もどこへ行ったか、座敷にはいない。四郎兵衛が帰ってきたとき、すでにお夏はいなかったということまでわかった。なにがなんだかさっぱりわからないと、きのどくなほどぽかんとしている」

「おまえさんは丹波屋の事件を知っているようだね」

「相当くわしく知っている」
「だれから話を聞いたんだね」
「丹波屋ではあとのたたりを恐れてひたかくしにしているが、きのうある男が、寮の縁の下にもぐりこんで四郎兵衛の話をすっかり聞いていたし、大番頭に当て身をくわした男も見ていた。その男からくわしく聞いたんだ」
「ふうむ」
灘万は黙りこんでしまった。
天狗もそれっきり口をつぐんで、しだいに夕方の色がこくなってくる障子のほうをぼんやりとながめている。
――こいつは利口なんだかばかなんだかわからない。
多少あきれている灘万なのだ。お夏のことはともかくとして、世間へ知れては困る丹波屋の一件を知っているとわかれば、こっちが無事にかえすはずはないと気がつかないのだろうか。
いずれにしても、こんなばかをあばれさせては、案外てごわい。だまして座敷牢へ押しこむか、それともうまくひもをつけて帰して、お夏のゆくえをつきとめたうえで、そっと始末をしてしまうか、とにかく相手の出方を待っていると、
「おじゃましました。わしは失礼することにしよう」
と、急にこっちを向いておじぎをするのだ。
「ふうむ。帰るかね」
「うむ。わしはお夏も丹波屋の内儀お菊といっしょに、たしかにこの屋敷だと思ったんだが、どうやらまちがっていたようだ」
「じゃ、お夏はどこにいるか、当たりはついたかね」
「たいてい当たりはついた。ただ、これだけは親分から西野さんによろしく伝えておいてください。大奥へあがるということは、女の出世だからありがたいことだが、お夏にはわしという亭主があるんで、それを好まないんだ。どうか、そういう出世をよろこぶ娘さんのほうへおはちを回すことにして、以後お夏のほうはあきらめ

てもらいたいんだ。たのみます」
「まあ、待ちなせえ。なるほど、おまえさんは見かけほどばかじゃないようだね」
灘万はいくぶん冷笑をふくんだ顔つきで感心してみせる。

5

「ほめてもらって、ありがてえです」
天狗はにこりとわらった。
「お夏がここにいないってのは、どうしてわかったね」
「板橋の清七という男が定九郎市に切られたのを、親分が今まで知らなかったようだ。あの男がここへお夏をつれてきているとすれば、そんなはずはねえです」
「ついでだから断っておくが、お菊もここにはいねえよ。ここは宮島さまの御後室の隠居所だ。おまえさんはばかじゃねえんだから、変なとまどいはしねえでもらいたいな」
ぬけぬけとそんなことをいってうそぶいてみせる灘万だ。
「丹波屋の内儀のことは、おれが心配したってどうにもならねえです。だから、本当はどこにどうされていようと、おれはただ、きのどくだなあと思うだけのことです」
そういう天狗の顔は、うそをついてもみんな知っているよと、冷笑しているようだ。
「まあ、それがいちばん利口なようだな。じゃ、おとなしく帰んなさるかね」
「失礼しますべ」
灘万は廊下のほうへ手をたたいた。
「お呼びでございますか」
さっきの腰元があらわれて、そこへ両手をつかえた。
「天狗さんがお帰りなさる、お見送り申し上げておくれ」
「おじゃましました」
天狗は会釈をして立ち、腰元のあとから廊下

へ出た。このぶんなら、屋敷を出るまでは無事だろう。いや、ひもをつけておれにお夏のゆくえをつきとめさせようというのが灘万の腹で、だからそれまではまず無事だ、と天狗は早くも読んでいた。

それにしても、この屋敷のどこかに監禁されているお菊は、どんな気持ちでいるか。それを思うとやっぱり義憤を感ぜずにはいられない。丹波屋にもなにか考えがあるだろうから、よけいなおせっかいは慎むべきだが、時のはずみでその機会さえあれば、こっちはいつでも灘万を切ってすてる気だった。一つには、意外にもお夏がここにいないとわかったからのちの機会にゆずったので、いずれは生かしておけないやつなのである。

「ああ、お腰元さん――」

玄関へおりて草履をはいてから、天狗は思い出したように、そこへ三つ指をついて見送っている腰元のほうをふりかえった。

「さっきは、おれ、たいへん失礼なことをいいました。あれは、おれがいま恋というものをしているので、うっかり口に出たです。どうか勘弁してくだせえまし」

あっとあきれているような腰元に、ていねいにおじぎをして、天狗はさっさと裏門のほうへ歩きだした。

西の空はまだ明るいが、足もとは、もううっすらと、たそがれが忍びよっていた。

6

――お夏は、笠井同心か、福井町の親分の手で、無事にかくまわれている。

つまり、敵をあざむくには味方からの筆法で、わざと家のほうへも知らせずにあるに違いない、と天狗は思った。だから、お夏のほうはまったく安心である、と考えたとたんに、天狗の心境がふいにかわった。

安心なお夏にひきかえて、ここにとらわれて

いるお菊と、その不幸な妻の身のうえを橋場の寮で心配している丹波屋四郎兵衛の気持ちはどんなだろう。自分はまだお菊に一度も会ったことはないが、お夏とは姉妹のようにしていて、だからこそお夏は身の危険も忘れて、昨夜橋場へなぐさめに行ったくらいなのだ。

そのお菊が、現にこの屋敷のどこかに監禁されているとわかっていながら、このまま手をつかねて帰ったら、あとでお夏に恨まれはしないだろうか。

――いや、ただ恨まれるだけではすまねえかもしれねえぞ。男らしくなさすぎるって、あれは勝ち気だから、きっとけいべつされるに違いない。

こりゃ大変だと、天狗はわれながらぎくりとした。いまさらお夏にけいべつされるくらいなら、死んだほうがましなのである。

天狗の足は裏門のところまできてぴたりと止まってしまった。

――そうだ、たとい救い出せないまでも、どこに監禁されているか、この屋敷の様子ぐらいはさぐっていかなくては、いや、うまくいったら、なんとかして救い出して、そうできたら、だれよりいちばん喜んでくれるのはお夏だろうからな。

すばやくあたりを見まわすと、来たときとおなじようにここは森閑として、人っ子ひとり見えない。つごうのいいことには、まもなくとっぷりと日が暮れるだろうし。

「ようし、やるべ」

天狗はつかつかと、長屋があるほうとは反対側の、枝折り戸のほうへ飛びついていった。その向こうは前庭の植え込みになっていて、林の下はもう薄暗く、

――すっかり暮れきるまで、かくれていたほうがいいかな。

もう植え込みの下をくぐって歩きながら、天狗はそう考えないではなかったが、用心深くど

こを見ても人のけはいはせず、まるっきりあけっぱなしのようなので、だんだん大胆になり、なるべく塀(へい)ぎわにそって、北から東へまわってみた。

くまざさの中の小道がしだいにつまさき登りになって、ここをのぼりきると屋敷全体が見晴らせるところへ出るのではあるまいか。

「それにしても、どこにも人かげが見えないのは……ああ、わかった、ちょうど夕飯どきだからな。そういえば、おれも少し腹が減ってきた」

そのどこまで行ってもどこにも人かげが見えないというところに、かえって敵の作意があるのだとは、ついうっかりしている天狗なのだ。

7

東がわの堀(ほり)に近い小高いところから見おろすと、北におもやの灯が見え、それとはずっと離れた南寄りの外庭の林の中からも、ちらっと灯がもれてくるようである。

——庭番の小屋かな、それとも離れか。

しかし、もし人を監禁するなら、ああいう母屋とは離れた林の中のほうがつごうがいいに違いない。天狗はそんな気がしたので、まずそっちを見さだめておくことにした。

空には星がまたたきだして、林の中はもうほとんど暗くなってきた。

さっきからまるっきり人に出会わないのだから、いくぶん用心する気もうすらいで、小道づたいに離れの灯のほうへ近づいていくと、

「だれだ」

ふいにそこの茂みのかげから六尺棒を持った中間がふたり飛び出してきて、前へ立ちふさがった。

「やあ」

さすがにびっくりして棒立ちになった天狗は、急にうまいことばも出ない。

「今晩は——」

「なんだと」

「丹波屋のおかみさんは無事かね。太郎が見舞いにきたと取り次いでくれないか」

「てめえは、だれに許されて、こんなところへはいってきたんだ」

「親分が許してくれたんだ。おかみさんが家へことづてがあるかもしれないから、会っていけといわれてねえ」

「うそをつけ。だまされるな。そいつは敵のまわし者だぞ」

背後からどなったやつがあるので、あっとふりかえってみると、ここにもいつの間にか退路をふさいで中間折助どもが十四、五人、手に手に六尺棒、そでがらみなどを持って、ひしめきたっている。

——そうか。はじめからおれが庭へまわったのを陰から見て、わざとここへ追いこむようにしたんだ、とやっと気がついたが、いまさら驚くことはない。多少あばれるようになるだろうとはきめてかかっている仕事だったから、そう気がついたとたん、人数のすくない前のほうへ、抜刀しながらだっと血路を求めて出た。

「わあっ」

またたく間にふたりを峰打ちに倒して、数間走ると、黒板塀にかこわれた木戸の前へ出た。手をかけてみるとがらりとあく。飛びこんで、すばやくあとをしめ、とっさに思いついて目についた錠をおろしてしまった。

「逃がすな」

「たたっこわせ。早く木戸を破れ」

表へ殺到した中間どもの怒号を聞いて、しめた、どんなときにも知恵は働かすもんだと、いささか得意だったが、いけない。

「やろうっ」

木戸の中にも伏勢があったとみえて、いきなり背後から力いっぱい組みついてきたやつがある。

8

「あっ」
　天狗はとっさに身を沈めて、そいつを背負い投げにたたきつけたが、その間に右の足へも左の足へも両方から組みついたやつがあって、両足をすくわれてはかなわない。思わず前へつんのめって、しまったと思ったときには、もう両手を両方から別のやつにいやというほどねじあげられていた。
「早く縛っちまえ」
「なわだ、なわだ。なわを持ってこい」
　からだじゅうを踏みつけられ、けとばされ、とうとうぐるぐる巻きに縛りあげられてしまったが、天狗は運が悪かったなあと思うだけで、このあいだ定九郎市にやられたときほどあせりはおぼえなかった。お夏だけは無事なところにいる。それがなにより安心だからだ。
　一つには、はじめっから相手を切りまくる腹でかかれば、こんなに造作なくつかまりはしなかった。無益な殺生はしたくない。その仏心が闘志を欠いて、案外たわいなく敵に乗じるすきをあたえてしまったので、
　――まず、しようがねえだ。これからどんなことになるかわからねえが、もともと生きて帰る気でこの屋敷へのりこんだんではなかったもんな。
　と、天狗はわれながらあきらめがいい。
「立てっ、この野郎」
「どこへ行くんだね」
「親分の前へつれていくんだ。田舎侍のくせに、行きがけの駄賃にこの屋敷の様子を探っていこうなんて、てめえがあんまり生意気すぎるんだ」
「すまねえです」
　さんばら髪で、どろだらけになって天狗はすこぶる神妙だ。
「おれたちにあやまったってしようがねえ。親分とてもおこってるから、へい、へいとなんで

もすなおにいうことをきいて、早くあやまっちまわねえと、二つとかけがえのねえ首が飛んじまうぞ。ばかな野郎だ」
　あんまり神妙だと、いくら折助どもでも、そこは人情だから、つい惻隠の情がおこるらしい。
「おれ、自分の悪いところは、きっとあやまるです」
「あたりめえよ。こうなっちゃ、いくらいばったって、それだけ痛い思いするだけだ。歩けっ」
　折助どもは離れの横手をまわって庭先へ出てきた。
　そこの廊下に、さっき別れたばかりの灘屋万五郎が、むっつりと腰をおろして、中間どもが五、六人、手に手にちょうちんをかざしている。
「すわらねえか」
　なわじりをとっていたやつが、灘万の前までくると、いきなり天狗の弱腰をけりつけた。いやでも敷石の上へ土下座するようになる。まるで罪人扱いだ。
「親分、野郎を連れてきやした」
　下郎どもはひざまずいて、みごと獲物をつかまえてきたのだから、はなはだ得意そうである。

9

「おまえさん、なんだっておとなしく帰らなかったんだ」
　灘万が底光りする目で見すえながら、ふきげんそうに口を切った。
「親分には申しわけねえが、どうせ来たついでだから、ちょいと丹波屋のおかみさんの様子を見ていってやりたくなったです」
　天狗はにっこりとして少しもわるびれない。
「さっきは、おまえさん、丹波屋のことはおれの知ったことじゃねえといっていたね」
「うむ、そう思っていた。だが、玄関を出ながら、ふっと考えが変わったです」
「どう変わったんだ」
「お夏さえ無事ならそれでいいと考えるのはて

まえがってだ。おれがお夏のことを心配するように、丹波屋もおかみさんのことを心配しているんだ。せめて会えるものなら一目会って、ことづてがあるなら届けてやろうと思ってね」

「よけいなおせっかいだ。人を甘く見ちゃいけねえ」

「性分だから、しようがねえです」

「そうか。おとなしく帰るんなら黙って見のがしておこうと思ったんだが、そういう了見じゃ勘弁できねえ。おめえも覚悟するがいいや」

なんとなく灘万の顔に冷酷な色がうかんでくる。

「というと、丹波屋のおかみさんはやっぱりこの屋敷に監禁されているんだね」

「おめえなんかの知ったことじゃねえ」

「おれは山ざるで天下のことはわからねえが、いくら公方（くぼう）さまのごたごたのためでも、それになんのひっかかりもない人間を監禁してまで自分の野心をとげようというのはよくないな」

まるで世間話でもしているようなのんびりとした顔つきで、天狗がやりだすのである。この野郎、一つまちがえばこのまま冥土（めいど）行きになるかもしれねえのに、無神経なのかなと、中間たちはあきれているようである。

「下民どもがうっかり公方さまのことなんか口にすると、首が飛ぶぞ」

「なあに、ここには公方さまはいないから、聞こえないだろう。聞こえないのが残念なくらいなものだ。たとえ公方さまでも大名でも、正直ない人間を苦しめたんでは、世の中は治まらない。因果応報といってね、人はだれでも、一度は死ぬ。死ねば、冥土には公方さまも大名もないから、みんな同じ亡者（もうじゃ）になる。悪いやつは地獄へ行くけど、いい人間は極楽へ行く。この世でかってなまねをして、さんざん他人をくるしめた公方さまや大名が、地獄へおちて鬼に針の山へ追いあげられている図を考えると、なんだかおかしくなるな」

天狗はおかしそうに笑いだした。

「おめえはもうすぐ極楽へ行けるだろう。なにか遺言があるんなら聞いておいてやるぜ」

太々しいつらがまえで、灘万はひややかにこの青二才を見おろしている。

10

「そうだなあ。遺言より、親分、丹波屋のおかみさんに一目会わせてくれないかなあ」

平気でそんなことをいいだす天狗の顔を見ていると、灘万は妙につらにくくなってくる。こいつのはやせがまんなのか、ほんとうに恐怖というものを知らない無神経なのか、その腹の底を見きわめてやらなくては、どうもむしがおさまらなくなってくるのだ。

「お菊に会って、どうしようというんだね」

「せめて、力をつけておいてやりたいんだ。女は気が小さいから、あんまり悲観させておいちゃかわいそうだ」

「てめえがそんなざまになっていて、どう力がつけてやれるんだね」

「なあに、善人はここに縛られているおればかりではねえもんな」

天狗はけろりとしていってのける。おれが助けられなくても、ほかの善人がきっとお菊を助け出す、つまり、いくら今は勝ち誇っていても、悪人は決して善人に勝てるものではない、といいたいのだろう。

「おい、お菊をつれてくるようにいってやれ」

灘万は中間のひとりにあごをしゃくってみせた。青二才め、どうするか見ていろという悪魔根性が、むらむらと頭をもたげてきたのだ。

「へえ」

中間は足のほこりを払って廊下へあがり、走るように奥へ消えていった。

東の空に十六日の月がのぼりだして、さっと青白い光が廊下から庭の半分へみなぎり流れてきた。

まもなくその明るい廊下へ、白々とうなだれたお菊が、中間にともなわれて姿を見せた。
別に縛られている様子はなく、きのうさらわれたままの身なりで、ただ髪だけがくしまきにかわっている。
一夜の監禁にげっそりとやつれの見えるのが、美しい若女房だけにひどく痛々しい。
「御用、なんでございましょう」
傷心のお菊はあたりを見まわすだけの気力もないように、灘万の姿を見かけると、六尺ばかり離れたところへひっそりと両手をついた。
「ああ、おかみさんか。御苦労だね。なあに、この男が一目おめえさんに会わせてくれというもんだからね」
冷たくいって、庭先の天狗のほうを目で知らせる。
「はい」
お菊はちらっと見て、そこに見知らぬ若い侍がさんばら髪で縛られている。はっと目をみはって、いぶかしそうな顔をした。
「おかみさん、おれ箱根の帰りに、深川のお夏と道づれになった天狗太郎です。ゆうべお夏から、なんにもそんな話は出なかったかね」
「まあ、太郎さん——あなたが」
はっと目を輝かして、
「すっかりうかがっています。お夏ちゃんは、お夏ちゃんはどうしたでしょう」
と、思わず縁側へ泳いで出るお菊だ。

良友

1

「お夏もゆうべどこかへさらわれたんで、たぶんここじゃないかと思ったもんだから、おれ迎えにきたんだがね、お夏はここじゃなかったんだ。それで、ついでだから、おかみさんにひと目会っていきたいと思ってね」

天狗は自分が縛られているのを忘れてしまったようなことをいう。
「じゃ、お夏ちゃん、どこへ行ったんでしょう。寮へきたのがやっぱりいけなかったんじゃないでしょうか」
ついつりこまれているお菊だ。
「なあに、お夏のほうはお夏のほうで見つけるから、たぶんだいじょうぶだと思う。それより、おかみさんのほうだが、あんまりよけいな心配はしないほうがいい。どんなわけがあってこんなことになったか、むろんおれには詳しいことはわからない。わからねえけれど、だんなの四郎兵衛さんも、深川のおやじさまも、これについてはいろいろと夜の目も寝ずに相談して、どうかおかみさんが無事にもどれるようにと、ほねをおっているに違いねえだ。おれの取った道は、丹波の山ざるで少し向こう見ずだったが、夫婦親子の愛情というものは、なにを捨てても、きっとおかみさんを助け出してくれる。そういう善人の真心は、また必ず天に通じるものだ。どんなことがあっても、自分ひとりで苦しんでいるんじゃない、自分ひとりが不幸なんじゃない、みんなが自分といっしょに苦労して、いつでも自分を守っていてくれるんだ、そう考えて、気をしっかりと持っていることだ。わかったね」
お菊は、なんだか涙が流れてきてしようがない。昨夜から、どうなることだろうと、まったく人ごこちもなかったが、いま天狗にいわれてみれば、夫も、深川のおとっつぁんも、あたしのためにどんなにか苦労して、最善の道をつくしていてくれるに違いないのだ。そこへ気がつくと、とても力強くて、ほのぼのと胸があたたかくさえなってくる。
「ありがとうございます。あたし、なんですか、おかげさまで心じょうぶになりました」
「そうだとも、それでいいのだ。どんなときにでも、希望はすててはいけねえだ。おれ、おせっかいだとは思ったけれど、ひょっとおかみさ

んがあんまり悲観してからだでも悪くするといけねえと考えたもんだから、ひと言力をつけてやりたかったんだ。わかってもらえば、これに越したことはない」

　天狗は満足そうににっこりわらって、その顔を灘万のほうへ向けた。

「親分、ありがとう。もうこれでいい。おかみさんは女のことだから、くれぐれもいたわってやってください」

「おめえは男だから、いたわってもらわなくてもいいというんかね」

　灘万は妙に皮肉ないい方をする。

「男は別にいたわってもらわなくても、常にそれだけの腹は持っているからねえ」

　くそ落ち着きにといいたいほど、みじんも動じた色のない天狗である。

2

死に直面したと同じ運命にありながら、天狗があまりにも平気な顔をしているのを見ると、この若僧めと、灘万は妙にこしゃくにさわってきたらしい。

「どんな場合でも希望をすてるなって、おめえはそれでもまだ生きて帰れる希望を持っているんかね」

　灘万がじろりと冷酷な目を向けてきた。

「死生天にありで、おれはいつでも希望はすてねえです」

　天狗はにこりとわらった。

「おめえの死生は天にあるものか。ちゃんとおれが握っているじゃねえか」

「そう考えるのは、人間のあさましさだと思うな。一寸先のことはだれにもわからない。だから、ことにあたって驚きあわてないだけの修養が人間には必要なんだ」

「広言を吐くぜ。じゃ、おれがいま一寸先のことを見せてやるから、驚きあわててほえづらをかかねえようにするがいい」

「なるべく、ほえづらはかかないつもりだ。みっともないからねえ」

「よし。だれか母屋へ行って、槍を持ってこい。おめえたちはこの山ざるをその松の枝へつるしあげろ。あんまりおれを甘く見ているから、ここでこの野郎をはりつけにしてやるんだ」

　灘万がそんな恐ろしいことをいいだした。

へいと、ひとりがすぐに母屋のほうへ駆けだし、おめえたちと指さされた二、三人が、ばらばらと天狗に飛びついてきた。

「親分、待ってくださいまし」

　どうなることかとなりゆきを心配していたお菊が、さっと顔色をかえて思わず両手をつく。

「どうしたね、おかみさん」

「あの、あの、太郎さんがどんなふつごうを働いたか存じませんが、命だけは、どうぞ命だけは助けてあげてくださいまし」

　自分の命さえどうなるかわからない身で、しょせんはむだかもしれないとわかっていても、黙ってはいられないお菊だった。

「力をつけてもらったから、その恩がえしに命請いをしようというんかね」

「はい。太郎さんは決して悪い人でございません。ただ、お夏さんの身を思うばかりに、あとさきの考えもなく、お屋敷へまぎれこんだんだと思います。親分のごつごうで、今は外へ出すことができなければ、縛っておいてもかまいません。命だけは助けてやってくださいまし」

「ふうむ。そんなに、おかみさん、この男の命請いがしたいかね」

「太郎さんがここで死ぬようなことがあっては、お夏さんがかわいそうです」

　昨夜うれしそうに天狗の話をしていたお夏が、ありありと目に残っている。お夏にとっては、これが初恋の男なのだ。純情で、人間もしっかりしているようだし、お夏とは似合いの夫婦だと思うにつけても、なんとかして命だけは助けてやりたい。

3

「助けるなら助けないでもないが、あいにくおれは善人じゃないんでね、ただというわけにはいかないな」
灘万の目がそれとなく白々としたお菊のからだじゅうへ光りながら、むっつりと答えた。
「あの、どうすれば――」
なにげなく顔をあげて、その不気味なけだものののような視線に出会うと、はっとお菊はからだがすくんでしまった。なにをいいだそうとしているのか、敏感にさとってしまったのである。
「わかりゃそれでいい。どうだ、若僧の命と引きかえに、おとなしくおれのいうことをきくかね」
みだらな目が露骨になって、にやりとあぶらぎった笑いをうかべる。
「あたしは、あたしは、丹波屋四郎兵衛という夫がございます」
たとえ冗談にもせよ、女にとってこんな屈辱なことはない。お菊は全身に怒りを感じてきた。
「そんなことは知っているよ。だから、離縁してもらえばいいのさ。そして、この灘屋のめかけになる。いやかね」
「おことわりいたします。そんな、そんなけがらわしい」
「そうか。けがらわしいか。それじゃ文句をいうことはない。若僧がはりつけになるのを、黙って見ていればいいのさ」
お菊はどきりとして、天狗のほうを見ながら、どうしていいかわからなくなってきた。世にも悲しげな顔である。
「おかみさん、それでいいんだ」
その顔へ天狗が静かに話しかけた。
「悪魔にだまされちゃいけねえだ。おかみさんは、どこまでも女の道を守って、しっかりと生きていくことだ。悪魔は人をだまして、あとで笑うのを楽しみにしているんだ。おどかしたり、

甘いことをいったり、いろんな手をつかうだろうが、こっちがしっかりさえしていれば、そのことばにみんな大きなしっぽがはえているから、すぐわかるもんだ」
「てめえたち、なにをぐずぐずしているんだ。早く山ざるをつるしあげねえか」
「へえ」
ことのなりゆきについぽかんとしていた中間どもが、なわの一方を松の枝へ投げわたして、三人がかりでぐいぐいひっぱりだす。うしろ手に縛られたまま、天狗のからだがつるべのように宙に浮きあがり、からだじゅうのなわがぎりぎりと肉へ食いこんでくる。
「思ったより痛いもんだな」
天狗は宙でぶらぶらとゆれながら、正直につぶやいて顔をしかめた。
「痛いのはこれからだ。まもなく、てめえは五体を槍で突かれて、さんざん痛い思いをして、少しずつ死んでいく。行く先は極楽ときめているようだから、まあ、たのしみに待っていろ」
灘万はそれを半分お菊にいってきかせているようである。

4

「はりつけは、あんまりありがたくないな」
天狗が、冗談ともまじめともつかない声でいう。
「泣き言か、山ざる」
灘万はじろりと見上げてせせらわらった。
「泣き言じゃない。本音だ」
「一寸先がやみでねえことがわかったろう。世の中は、知恵のある者が勝つにきまっているんだ」
「おれは死ぬのはいやだけれど、負けたとは思っていないね」
「なんだと――」
「早い話が、おれが死ぬと、お夏が泣いてくれるからな。親分が死ぬと、だれが泣いてくれる

ね。おれは死ぬまで、親分はあんまり利口でないなとけいべつしていられるけれど、おれをはりつけにする親分は、本当のところ、あとが恐ろしくないかね。なんといったって、世の中には善人の数のほうが多いんだ。悪いことなんてものは、いくら悪知恵を働かせたって、善人の数の目にはかなわない。それが証拠には、人間が悪いことをするには、いつもびくびくと善人の目をごまかしていなければならない。違うかね、親分」

少しもわるびれていない天狗の顔つきだった。

「おい、槍はどうしたんだ。早く持ってこねえか」

灘万はわざと太々しい顔をして、中間たちのほうへどなりつけた。

「へい、ただいま」

ひとりがあわてて立ち上がったところへ、ばたばたと、あわただしい足音が庭をまわってきて、

「親分、たいへんだ。母屋が火事だ」

と、さっき槍を取りに行った中間が大声で告げた。

「なに、火事——?」

「へい。座敷の障子がいきなり燃えだしたんでさ。あれえと見ているうちに、もう座敷じゅう火になっちまって、火事だあとおれがどなったんで、やっとみんな気がついたって始末でさ」

「おい、お菊をもとのところへ入れておけ。かぎを忘れるな」

灘万はいそがしく立ち上がりながら、そうさしずすることを忘れなかった。さすがに駆けだしもしなかったが、そのままさっさと庭を出ていく。

「やっぱり、親分、一寸先はやみだね」

天狗が話しかけたが、ふり向いてもみなかったのは、おそらく火事のほうへばかり気をとられて、もう耳にはいらなかったのだろう。

中間たちはみんな灘万についていってしまったし、お菊ももとの座敷牢へつれもどされたらしく、この庭にひとり取り残されたのは、松の枝につるされた天狗だけになってしまった。

一瞬しいんとなった中に、火のはぜるような音と、男女の叫びあう声とが、やや遠く耳についた。

「まったく、一寸先のことはわからねえもんだ」

宙ぶらりんの天狗は、しみじみとそう思う。

5

——だが、困ったぞ。

みんな火事場のほうへ気をとられて、行ってしまった。助かるなら今だと思うのだが、かめの子のようにこうつるされていたんではどうしようもない。たった一つできそうなことは、からだを振ってみることだが、それでなくてさえなわめが肉に食いこんで、やっとがまんしているのだから、思いきってやってみる気にもなれないのだ。

「困ったなあ、なんとかならんものかなあ」

思わず口に出したとき、突然なわが松の枝を放れ、はっとしてとっさに身を縮めたから、どすんとそこへ軽くしりもちをついてしまった。

「ああ、びっくりした」

いそいであたりを見まわすと、松の根方にぬすっとかむりの男があいくちを持って立っている。たしかにお大名浅らしい。

「おじさんうじかね」

「おじさんうじもねえもんだ。あんなにおれが止めたのに、いうことをきかねえから、こんなめにあうんじゃねえか。ほんとうにはりつけにされたら、太郎さん、どうする気なんだ」

浅吉は口小言をいいながらそばへ寄ってきて、小言は小言、することはすることと、てっとりばやい男だから、もうさっさと天狗のなわを切りほどいている。

「ははあ、おじさんうじだね、火事をこしらえ

たのは。偶然にしては、どうもあんまりうますぎると思った」
「人聞きの悪いことをいっちゃいけねえ。火つけは重罪だ、火あぶりだぜ。ありゃ天が火をつけたので、天の火というやつさ」
　けろりとしていってのけるお大名浅だ。
「なるほど、それに違いない。おれも天の火だと思うな。灘万というやつは、どうしても焦熱地獄へおちるやつだ」
「感心していねえで、さっさと刀をさすんだ。太郎さん、やっとうのほうはあんまり強くねえようだな」
　取りあげられた刀は、さいわい縁側へおいたままになっている。天狗はしっかりと帯へたばさみながら、
「なあに、さっきは少し遠慮したから悪かったんだ。こんどはもう負けねえだ。遠慮して、善人がはりつけになっちゃつまらねえもんな」
「あたりめえさ。お夏ちゃんはやっぱりこの座敷牢か」
「違う。お夏はこの屋敷にいねえ」
「なんだって――？」
「お夏はいいんだ。どこにいるか、もうたいていの見当はついているんだ。あとでくわしく話すから、すまないが、おじさんうじ、丹波屋のおかみさんを助けてやってくれ。この奥だ。おれはここで見張りをしていて、もしだれか来たら、こんどこそたたっ切ってやる。いそいでもらいたいな」
「がってんだ」
　お大名浅はひらりと廊下へ飛びあがって、奥へ走りながら、さすがに足音一つたてないのである。

6

　母屋の火は屋根へぬけたらしく、そっちの夜空がまっかに染まって、大きな火の粉がここまで降りだしていた。狂奔している人たちの必死の叫喚が、手にとるように聞こえてくる。
「天の火だもんな、しかたがねえだ」
　天狗ははかまのももだちを高く取り、下緒をとってたすきにして、いつでもこいというしたくができると、どっかりと廊下へ腰をおろした。
「おじさんうじ、うまくいったかな」
　奥のことがしきりに気になる。
袖垣のかげから、飛び石づたいにつかつかと庭へはいってきた者があった。槍をこわきにかいこんだ灘万だ。立ちのく前に、天狗を突き殺していく気できたのだろう。六尺棒を持った中間が三、四人ついている。
　廊下に、ゆうぜんと腰かけている天狗を見ると、さすがに灘万は目を疑うように、はっとそこへ立ち止まった。
「親分、これは天の火だねえ」
　ばらばらと降ってくる火の粉を指さしながら天狗はわらった。
「てめえ、器用なことをやったようだな」
「火の手がなわを切ってくれたです。だから、どんなことがあっても、善人は希望を失わねえです」
「また縛られねえように気をつけることだ」
　灘万はあくどい顔をしてせせら笑う。
「また天の火が切ってくれるさ」
　負けずにやりかえしながら、天狗が気になるのは奥のことだ。
「親分――」
　その奥から廊下へ走り出てきた中間がふたり、勇ましいかっこうの天狗を見ると、あっと棒立ちになってしりごみをした。
「なんだ、てめえたち」
「座敷牢のかぎがあいて、中のおかみさんが消えています」
　そうか。おじさんうじ、早いところお菊を助け出して、無事に逃げたなと、天狗はほっとした。
「ばか野郎、てめえたちがさっきあわてて錠を

しめ忘れたんだろう」
「とんでもござんせん。かぎは確かにかけやしたんで。うそじゃねえんです」
「やっぱり、天の火らしいな。親分、小者たちをしかったってしようがない」
「やろう」
　灘万が力いっぱいさっと槍を投げつけてきた。
　すばやく身をかわして、天狗が庭へ立ったので、槍はうしろの障子を突き破って座敷へ飛びこんでいった。
「野郎をたたっ殺せ。人数を集めろ」
　鬼のようなつらをまっかにして怒号する灘万のすさまじい形相に、
「やっちまえ」
「たたっ殺せ」
　ついていた中間たちが、一度に六尺棒を振りかぶって襲いかかってきた。

7

「おのれ」
　こんどは容赦しない天狗だ。降りかかる六尺棒を抜きうちに払って、左をなぎ、わっとふたりがそこへしりもちを突くすき、目ざすのは灘万ただひとりだから、まっしぐらにそっちへ飛びこんでいく。
「野郎っ」
　第二陣があわててばらばらと前へ立ちふさがった。
「くそっ」
　右を切って、左へ払う。
　わあっと第三陣が棒をふりかぶってくる。
　何人切ったか、切っては走り、来れば切り、ただ前へ前へと走っているうちに、いつか離れの木戸を出て、丘の林へかかっていた。どこかへ消えたか、もう灘万の姿は見えない。
　見ると、母屋全体がすでに火につつまれて、

この林の中までまっかだ。中間どもも半分はそっちへ気を取られているのだろう、ここまで追ってくる者はないようだった。
「灘万のやつ、火事場かな」
　それならそこまで追いかけていって切ってしまいたいと思ったが、お菊をつれて逃げた浅吉のほうも気になる。浅吉の逃げ道はただ一つ、さっき見ておいた東の塀ぎわの松の木に違いない。
「灘万はまた切る機会がある。とにかく、おじさんうじのほうを見てやらなくては」
　天狗は思いかえして、いっさんに林の小道をそっちへ走りだした。
「野郎っ」
　ふいに横合いから棒が飛んできて、いわゆる投げ棒というやつだ、みごとに足の間へからまったから、先にばかり気を取られていた天狗は、あっと思う間に、どすんと前へつんのめっていった。
「しまった」
　それでも手をつくなりはねおきようとしたがもうおそい。
「うまくいったぞ」
「それ、つかまえろ」
　先まわりをして待ちかまえていたらしい一組み三人が、どっと折りかさなるようにして背中へ飛びついてきた。
「くそっ」
　はねっかえそうとしたが、全然こっちの体勢が伸びきったところをやられたのだから、どうにも力の入れようがない。たちまち、またしても両腕をねじあげられて、
「痛いっ」
　と、思わず音をあげたとき、
「わあっ」
　そのねじあげていたふたりのやつが、突然悲鳴をあげてひっくりかえった。
「うぬっ。だれだ、てめえは」

残るひとりが棒を取り直してしりごみするところを、無言で飛びこんだ男の棒が、まるで流星のようにぴしりと相手の肩へきまるのを、天狗はあっけにとられてながめていた。

8

「やあ、おじさんうじか」

むくり起きあがった天狗は目をみはって、

「おかみさんは、お菊さんはだいじょうぶなんだろうね。どこにいるんだね」

と、あたりを見まわす。

「あの連中はもううまく逃げたから、心配しなくてもいいぜ」

ぬすっとかむりの中でにやりとわらった感じも、声も、どうやらお大名浅とは違うようだ。

「あれえ、おじさんうじは、ゆうべの橋場のおじさんだな」

「そのとおりさ。太郎さんはお大名浅とまちがえたようだな」

「おじさん、お夏を、お夏をどこへやったんだ。お夏をかえしてもらおう」

思わず目を光らして詰めよる天狗だ。

「太郎さん、男はいつの場合でも、そんなのぼせあがった目をするもんじゃない。女の子にきらわれるぜ」

伝法なことばつきだが、どこか浅吉などとは違う重みがあるようだ。姿かっこうはおなじやくざでも、貫禄が違うのだろうか。

「そうだった。礼儀は礼儀だからな。ただいまはあぶないところを助勢してもらってありがとう。礼をいいます」

天狗はていねいに頭をさげてから、

「おじさん、おれは女の子に好かれなくてもいいんだ。お夏をゆうべどこへ隠したんだね。まさか知らないとはいわないだろうな」

と、相手の出ようによっては、鬼にも蛇にもなりそうなつら魂である。

「太郎さんは、お夏がここにいると思って、死

にに来たんだってね」

「うむ。おれはお夏を取りもどすためには、どこへだって死にに行く」

「死んじまっちゃ、お夏に会えないぜ」

「死生は天にある。お夏を無事におやじさまの手へもどしてやらなければ、一度約束したおれの男がたたないんだ」

「よかろう。その意気があるんなら、自分の知恵でお夏をさがしてみるんだな」

相手はからかうように、そんな意地の悪いことをいう。

「ふうむ。じゃ、おじさんはお夏のいるところを知らないんかね」

「およそ見当はついているが、本当は知らない」

「およその見当なら、おれにだってついているんだ」

「そりゃけっこうだ。男というやつは、とことんまで人の力をたよりにするもんじゃねえ。自分のことは自分の器量でかたづける、それでなくちゃうそだ。しっかりやってみることとさ。一つだけ教えといてやろう。太郎さんのことを心配して、高輪海岸へ船徳が船をつけているはずだぜ。いくら男でも、年寄りにあんまり心配をかけるのは感心しないね。じゃ、縁があったらまた会おう」

にこりとわらって、ぬすっとかむりのおじさんはもうさっさと歩きだすのだ。

9

――あの男は、いったい何者だろう。天狗は血刀をさげたまま、しばらくぬすっとかむりの男のうしろ姿をぽかんと見送っていた。

今夜も現に、自分のあぶないところを助けて、ここで三人まで中間をなぐり倒してくれたほどだから、むろん敵ではない。

しかも、昨夜といい、今夜といい、いつも自分たちの身のまわりに目をつけているところから見ると、お夏に特別の関心を持っているとい

う同心笠井平三郎か、福井町の重五郎か、いや、今の腕まえ、いっていることばから察すると、町人ではなく、笠井の変装と見るのが当たっているのではなかろうか。

「そうだ、おじさんうじに聞いてみればわかる」

浅吉はお菊を助けてすでにこの屋敷を逃げ出したというし、お夏のいないここにはもう用のない天狗だ。というより、たとえ相手がだれにもせよ、知恵でお夏を取りもどせと挑戦された以上、一刻も早くここを出て、みごと自分の手でお夏のゆくえをつきとめてやらなければ、だれに対しても大きな口はきけなくなる。

「そうだとも。おれがみんなにけいべつされて、いちばん悲しがるのはお夏だもんな」

天狗は刀をぬぐって鞘におさめ、塀ぎわの松の木のほうへしっかりと歩きだした。もう火事場のほうなどふりかえってもみない。

例の松の木にのぼってみると、はたして、塀の外へのぞいている太い枝にちゃんと細引きが、くくりつけられて、崖下の小道までたれさげてあった。お大名浅は、今夜もここからこの屋敷へ忍びこみ、母屋へ天の火をつけて、無事にお菊を助けると、またここから外へのがれ出たに違いない。

「まったく、ぶっそうなおじさんうじだな」

天狗はその細引きをつたわって、するする谷ツ山の中腹の小道へおり立った。

——徳孤ならず。

一度は生きてかえれぬと覚悟した身だけに、いまこうして無事に悪魔の屋敷から自由の世界へのがれ出てみると、さすがにこんな感慨が胸に去来する多感な天狗だった。

「正しいことのために生き、正しいことのために死ぬ、人間はそれでいいんだ」

そういう美しい人情の世界に住む多くの味方の顔を思いうかべながら、天狗は希望にあふれながらどんどん大木戸のほうへ駆けだしていた。

途中で、火事場へ駆けつける火消し組や、火事につきものの野次馬と何度か肩をぶつけあい、

「気をつけろ、まぬけめ」

と、気の立っている連中にあびせかけられたが、

「勘弁してやるべ。お夏をさがし出すまでは、おれのからだではねえもんな」

天狗はそのたびに自分にいいきかせて、決してけんかは買おうとしなかった。

10

大木戸をはいるとまもなく、徳造とお大名浅が、高輪の海ばたに立って、高台の火の手をながめているのに行きあった。野次馬はそのあたりまで右往左往している。

「おじさんうじ」

「やあ、太郎さんか。いま心配していたとこなんだ」

浅吉が大手をひろげんばかりにして迎えてくれる。

「おやじさま、心配かけてすまねえです」

天狗は徳造のほうへ、律儀な頭をぺこりとさげた。

「太郎さん、お夏はあの屋敷にいなかったってな。あんまりむてっぽうしちゃいけねえや」

ひどく浮かぬ顔ながら、それでも天狗が無事に帰ってきたのでいくぶんほっとしたらしい船徳である。

「すまねえです。おじさんうじ、お菊さんは」

桟橋につながれて波にゆれている屋形船のほうをのぞきながら、天狗が聞いた。

「心配しなさんな。丹波屋のおかみさんは、そこにゃいないよ。屋敷で笠井のだんなに預けてきたんだ」

「笠井のだんな？ ——あのぬすっとかむりのおじさんうじによく似た男のことか」

天狗が目を輝かす。

「太郎さんがゆうべ橋場で会っていっしょにお夏坊のあとを追いかけたってのもあの人かね」
「そうなんだ」
「ありゃ笠井のだんなじゃねえ」
　お大名浅はちらっと船徳と顔を見あわせる。
「すると、だれなんだね、あの男は」
「それが、おれにもはっきりわからねえんだ」
　お菊の手をひっぱるように浅吉がやっと丘の林の中へ逃げこんだとき、頭巾を目深にかぶった着流しの笠井平三郎にばったりと出会った。これは徳造とふたりで天狗を救い出しにかかるとき、あらかじめ三吉を使いに走らせてここを知らせておいたのだから、出会うのにはふしぎはない。しかも、だんながたでも旗本の屋敷ではむやみに踏みこむわけにはいくまいと思ったから、天にたのんでわざわざ火事までこしらえ、敵の手で門をひらかせるようにしておいたのだ。
　だから、そういう笠井のだんなのうしろに福重が子分をつれていっているのもまた当然で、その福重とならんでいるぬすっとかむりの男、お大名浅は一目見てはっとした。たしかに昔の金さんだ。向こうでもじっとこっちを見ていたが、そんがほんとうに金さんだとすると、遠山左衛門尉景元、今の北のお奉行さまということになる。
　そのお奉行さまが、なんであんなかっこうをして品川くんだりまで微行したのか、その気持ちがどうもわかるようでわからない。いや、わかっちゃ失礼にあたるような気がするお大名浅だ。
「たしかに、どこかで見た顔、そんな気はするんだけどなあ」

11

「思い出してもらいたいな、おじさん」
　天狗は真剣な顔つきである。
「おれはあの男に、今夜また助太刀をしてもらって、あぶないところを助かった。助太刀はありがたいが、ゆうべお夏を、いや、お夏さんを――」
と、おやじの徳造の前だからさんづけにいいなおして、
「どこかへ連れていって隠したのは、たしかにあの男なんだ。だから、おれはお夏さんをかえしてくれと掛け合ったんだ。ところが、あの男は、自分の知恵でさがしてみろ、見当はついているが、本当はおれもどこにいるかはっきりは知らないと、しらをきって行ってしまったんだ。おじさんがあの男のことを思い出してくれないと、おれもう一度火事場へ引っかえさなくちゃならなくなる」
「どうしような、徳さん」
　お大名浅は相談するように船徳の顔を見た。
「すると、お夏はその人がかくしたっていうんかね」
「太郎さんの話だと、どうもそうなる」
「それならそれで、笠井のだんながなんとかひと言ぐらいおれの耳に入れてくれるはずだと思うがなあ」
　徳造の顔色はやっぱりさえない。お夏のこととなると目のない親ばかなだけに、ちゃんとわが手にもどってみないかぎり安心はできないし、もし娘をかくしたのが浅吉のいうとおり昔の金さんだとすると、徳造にはまた別の心配が起こってくるのだ。
「浅さん、おれ笠井のだんなに会って聞いてこよう。どうも心配になっていけねえ」
「そいつは今夜でねえほうがいいようだな。おめえにすりゃ無理もねえが、いまあのごたごたしている火事場へ行ったって、だんなに会えるかどうかわからねえし、おめえの身にまちがいでもあっちゃ、それこそことだ」
「けど、おめえの目で見て、今夜のぬすっとかむりの男は、たしかに金さんだったかね、浅さん」

念を押して聞かれてみて、ああそうかと、それは勘のいいお大名浅だから、船徳がなにを心配しているのか、たいてい察しがついてきた。
「徳さん、その相談なら、船の中でゆっくりしよう。なにもあわてることはありゃしねえ。さあ、太郎さんももう船へ乗ろうじゃねえか、今夜はまたばかにいい月夜だと思ったら、十五夜のあくる晩だったっけな」
浅吉がふたりをうながして桟橋へおりようとしたとき、
「おじさんうじ、福井町の重五郎親分じゃないか」
天狗がいそいでたもとを引いた。
一丁の町駕籠が、いま高輪通りを足早に、えんほい、えんほいと札の辻のほうへ走りすぎる。それについて走ってくのは、まぎれもない福井町の重五郎だった。

かりの声

1

「たしかに福井町の親分だ」
すると、駕籠の中は、というようにお大名浅も船徳も目をみはったが、重五郎はこっちへ捨て目をくれたまま、なんとなくこわい顔で、どんどん走りさる。
「おじさんうじ、あの駕籠の中は、丹波屋のおかみさんだな。――よーし」
「どこへ行くんだ、太郎さん」
「おれ、急に知恵がわいてきたです。ことによると、お夏ちゃんのゆくえがわかるかもしれねえ。おじさんたちは一足先へ帰っていてもらうべ」
そういい捨てて、天狗はすぐに駕籠のあとをつけだした。

お夏をかくしたのは笠井のはからいだとすれば、むろん灘万一味の魔手から守ろうというのが目的に違いない。すると、丹波屋のお菊も、ねらわれている橋場の寮へかえすはずはない。当分、お夏とおなじ隠れ家へかくすことになりはしないかと、天狗は思いついたのだ。
駕籠は、まだ野次馬でごったがえしている間を縫うようにして、高輪海岸を走り抜けた。札の辻を左に見て、まっすぐ本通りを本芝から金杉橋のほうへ走る。そのあたりまでくると、もう宵すぎの町筋は人通りもまばらに、十六日の青い月かげが道にあかるかった。
駕籠の中のお菊は、からだをぐったりと揺れるに任せて、今はなにも考えていなかった。
――もうすぐ恋しい夫に会える。
ただそのよろこびで胸がいっぱいである。
恐ろしかった昨夜一夜の監禁、橋場の寮でそばへ立って、ふいに鉄の仮面のりっぱな侍に当て身をくわされたまではおぼえているが、正気にかえったときは、もう座敷の床の中に着たまま寝かされていたのだ。
「いったい、ここはどこなのだろう。あたしはどうなったのだろう」
はっと魂も凍る思いで起き直ると、それを気配でさとったか、まもなく腰元が薬湯を盆にのせて運んできてくれた。
――そうか、夫が監禁されたとおなじ座敷に違いない。
その時、はじめてはっきりと気がついた。
もうだめだと思う気持ちと、いいえ、あたしは夫の身がわりに人質にとられたのだから、きっと十八日の夜までには夫が助けてくれると思う心と、きょう一日じゅう食事を運んでくれる腰元のほかはだれの顔も見なかっただけに、よけい夜がくるのが恐ろしかった。ほかの責め苦なら我慢のしようもあるが、もしやからだにいたずらでもされたら、それこそ生きて二度と夫にあわせる顔がなくなるからである。

「それから、太郎さんの前へ引き出されて――」
灘万というやつは、なんという悪魔のような男だったろう。いまさらのようにぞっと身ぶるいをしながら、
「そうだ、太郎さんは無事に助かったかしら」
お菊は松の枝につるされた天狗の無惨な姿をありありとまぶたに思いうかべるのである。

2

「太郎さんのほうは、心配ありやせんや」
福井町の重五郎の子分だという男が、座敷牢から助け出してくれるとき、たしかに引きうけていてくれたから、だいじょうぶだとは思うけれど、もし自分だけ助かったんだとすると、なんだかお夏に申しわけないような気がする。
――そういえば、太郎さんの話では、お夏ちゃんもゆうべだれかにさらわれて、ゆくえが知れないというし。
駕籠は柴井町へかかろうとして、急に右へ折れ、福重はそこへちょいと立ち止まって、いそがしく前後を見まわした。どこにも怪しいやつの尾行はないと見てから、駕籠のあとを追う。
この横町は左手に長い松平肥後守の中屋敷のへいがつづいて、突き当たりは御浜御殿が見える海になって行きどまりだ。
駕籠はその海から二、三軒手前の右側のこぢんまりした屋敷の門の前で立ち止まった。
「御苦労だったな」
福重は若い衆をねぎらっておいてから、
「おかみさん、着きやしたよ」
と、駕籠の中へ声をかけた。
「はっ」
たれをあげて、若い衆がそろえてくれた草履をはき、なんだかたいへん近かったようだけれど、あたりを見まわしながら立ち上がるお菊だ。
「さあ、おいでなさい」
その手を取らんばかりにして、重五郎はくぐりをあけ、自分から先に中へはいった。

――違う。いいのかしら。
むろん、橋場の寮ではないし、まだ一度もきたことのない屋敷のようだ。が、ついていってくれるのがよく知っている重五郎だし、
「福重、如才もあるめえが、じゅうぶん気をつけてくれよ」
と、この駕籠へ乗せられるとき、同心笠井平三郎が特に念を押していたのも知っている。なにか訳があるのだろうと思ったから、黙ってついてはいると、重五郎はあとをしめて、桟を掛けてから、
「心配しなくてもいいんですぜ、おかみさん。ここは笠井のだんなの預かっている隠れ家でね。いますぐおかみさんを橋場か蔵前へおつれしては、敵がまたどんな細工をするかもしれねえ。ひとまずここへお連れしておけといいつかってきたんでさ」
と、玄関のほうへ案内しながら、説明してくれた。
「あの、いつごろうちの人に会えますかしら」
思わず口に出て、お菊は顔が赤くなった。
「なあに、そう長いこっちゃありやせん。ここにもうひとり、早くあの人に会わせろって、だだをこねている女がいるんでさ」
ものなれた福重は、そんなことをいいながらにこりとわらっていた。
暗い玄関はどうやら武家構えのようである。

3

「今晩は――」
重五郎が奥へ声をかけると、それを待ってでもいたように、すぐに玄関の障子があいて、笠井の若党小川太吉が顔を出した。
「やあ、親分、いらっしゃい」
「太吉さん、例の人は無事だろうね」
「無事ですよ。まちがいがあったひにゃ、われわれ切腹ものだからなあ」
「ちげえねえ。御苦労さんだな」

「まったく御苦労さんでさ。ぜひ一度家へ帰してくれって、昼間から親分のくるのを待ちかねているんだ。こわいのなんのって」
「強情だからね、なかなか――。とにかく、通してもらうよ」
　福重はわらいながら、
「さあ、おかみさん、おあがんなすって」
　と、上へあがる。
　お菊は若党に会釈をして、重五郎のあとへつづいた。
　廊下へ出て、あまり広くはないようだが、さびた庭ぞいに奥へ進むと、かぎの手に一つ曲がった座敷の障子にあかるく灯がうつっていた。
「今晩は――」
　その前に立ち止まった重五郎は、外から声をかけておいて障子をあけ、
「お夏坊、いい人をつれてきてあげたよ」
　と、中へ告げた。
「だれ、おじさん」
　中で答えるのと、お夏と聞いてやっぱりそうだったかとお菊がいそいで座敷をのぞいたのといっしょで、
「お夏ちゃん」
「あら、ねえさん」
　ふたりはもう両方から抱きあうように進みよって、
「会いたかったわ」
「どうしたのよう、ねえさん」
「なにから話していいのか、大変だったのよ」
　と、ただうれし涙が出るばかりで、しばらくは満足なことばさえ出なかった。
　いっそふたりきりにしておいたほうがいいとでも思ったか、重五郎は黙って障子をしめて出ていく。
「とにかく、すわりましょうよ」
　涙の目でわらいながら、お夏が押入からいそいそと座ぶとんを出してくると、
「落ち着かなくちゃねえ」

　と、お菊も涙をふきながら、やっと向かいあってすわるのだった。
「お夏ちゃんも、ゆうべさらわれたんですってね。だれにさらわれたの」
「定九郎市なのよ。あたし、ゆうべ、庭から太郎さんを呼びに行ったでしょ。うちの船だと思って、ずんずん船房へおりていったら、定九郎市なんです。いきなりのどを絞められて、もうだめだと、その時あたし、ほんとうにそう思ったわ」
　お夏は生娘らしいまゆをよせて、絶望の表情をしてみせる。

4

「女っておかしなものね。息が苦しくなって、もうだめだと思ったとき、はっきりと思い出したのは、両親の顔でなくて、太郎さんの顔なのよ。あたし、親不孝者にできているのかしら」
　ふいにそんなことを心配しだすお夏である。
「いいえ、それでいいのよ。お夏ちゃんばかりじゃありません。いざとなると、あたしだって、うちの人ばかりがたよりで、深川のおとっつぁんのことなんか、一度も考えなかったんですもの。だれだってみんな、そうなんじゃないかしら」
　そういいながらも、お菊は橋場の寮で、さぞ自分のことを心配しているだろう夫の顔を思い出して、じいんと胸が熱くなってくる。
「親子は一世、夫婦は二世って、きっとそれなのね」
「ふふふ、あたしたちのはもう本当の夫婦なんだからたしかに二世だけれど、お夏ちゃんのはまだ太郎さんの手を握っただけなんでしょう。一世半ぐらいかしら」
　ちょいとからかってみたくなるお菊だ。
「ひどいわ、ねえさん。これでも、ちゃんとひざまくらだってさせたし、きっと夫婦になろうねって、二度も三度もかたい約束をしているん

ですからね。あの人、いまごろどうしているかしら。会いたいなあ」
「そういえば、お夏ちゃん、あたしついさっき、太郎さんに会ってきているのよ」
「あら、どこで、ねえさん」
さっとお夏の目が燃えるようになる。
「それがねえ、いま考えてみると、お夏ちゃんが十四日の晩つれていかれた品川のお屋敷と同じ家だったんじゃないかしら」
お菊はゆうべからのことをかいつまんで話して、
「太郎さんて、とても生一本で、男らしくて、りっぱな男ねえ。さすがはお夏ちゃんだと思ったわ」
と、これは心から感心しているのだ。
「まあ、じゃあの人、松の木へつるされたの？」
「ええ。つるされながら、平気で灘万をからかっているんです。あれだけの灘万が、じっと太郎さんの顔をにらみつけてねえ、心ではびっくりしていたらしいわ」
「あの人、まだそのまんまつるされているんじゃないのかしら。いやだわ、ねえさん」
お夏はそれどころじゃない。顔色を変え、つと立ち上がろうとさえするのだ。
「お待ちよ、お夏ちゃん、なんですねえ、顔色をかえて」
「だって、あたし心配だわ。相手は灘万だし、ちょいと行って見てきます」
「ここのお屋敷、あたしたちを黙って出してくれるかしら」
出られるのなら、お菊もいっしょに出て、太郎の様子をさぐったうえで、一刻も早く橋場へ帰りたいと思う。
「出さないったって、あたしは出ていきます。かまうもんですか」
お夏はひどく興奮しているようだ。

5

福井町の重五郎がお夏とお菊をなだめてやっと隠れ家の門を出たのは、もうかれこれ四ツ(十時)に近かった。
――女なんてものは、自分のことばかりしか考えたがらねえんだから、しょうがねえもんだな。
まったくほねのおれる連中だった。
お夏をあの隠れ家へかくしたのは、笠井のだんなの深謀からだった。こっちは昨夜、船から手落ちなくお夏を見張っていたが、結果は意外にも金さんに先まわりをされて、金さんの手からお夏を、あらためて託されることになってしまった。
笠井のだんなとしてはなんとも面目ない。いや、面目などという問題より、昨夜も明らかに灘万のほうの尾行がついていたとわかると、どうにもお夏を家へかえすのはあぶない。
「なあに、そんなに心配をしなくったってよかろう。大物をとるには、どうしてもおとりがいるからな」
金さんは反対だったが、これだけは笠井も自説をまげず、船徳にさえないしょでお夏をあそこへかくした。
ところが、昨夜はそのあとで、橋場の寮に鉄の仮面事件がおこっていたのである。これは笠井としても、金さんとしても、重大な手落ちということになる。
だから、金さんも心配して、今夜もまた自分から出馬してきたのだ。
さいわい、目ざす下屋敷の中から火事がおこった。火事をおこしたのは、おそらくお大名浅だろうとは、だれにも想像はつく。
いい機会だ。火消し人足といっしょに屋敷の中へ押し込んで、金さんは笠井のだんなに、
「灘万と見たら、かまわず切りすてろ」
と、そっと注意していた。罪状明白だが、事

件が案外奥深いところまでからんでいるので、生きて召しとっては、事はめんどうと見ているのだろう。
　が、灘万のほうがもっとすばしこかった。町方の手がはいったと見るやいなや、一度庭へ避難した後室織江を一突きにして、火の中へ始末をつけ、お大名浅の行き方がもう一足おくれると、天狗もお菊も命がなかったところだ。このほうはついに果たさず、離れの座敷牢へも火をかけて、どこからか逃亡してしまった。
　灘万が生きているかぎり、お夏も、そしてお菊も、必ず命をねらわれるのだ。だから、笠井は、お菊をお夏と同じ隠れ家へ運ばせたので、よく話してやったから、それらの事情は女たちにも一応のみこめたようだが、
「じゃ、太郎さんだって、丹波屋のにいさんだって、ねらわれているんじゃありません？　あたし心配だから、今夜すぐ、ふたりもここへつれてきてください」
お夏がむきになってそんな理屈をこねだすのだ。
　これには福井町の重五郎もあいた口がふさがらなかった。

6

　――金さんが自分で飛び出してくる。あれでやっぱり、娘はかわいいんだろうな。
　その秘密を知っているのは、現在親になっている徳造と、笠井のだんなと、自分だけなのだ。お夏坊はそんなことを夢にも知らないから、昨夜金さんの手でなわをほどかれ、
「どこもけがはしなかったかね」
と、金さんがやさしく聞くと、
「あんたはだれ――？」
　いきなりとがめるような目をして立ち上がったそうだ。
　それを、ちょうど別組になって行きあわせた笠井のだんなが見かけて、ふしぎな親子の対面

だと思ったから、遠慮して遠くから見ていたのだという。
「おれは浅吉の兄弟分の、金っていう男だよ」
「いまあっちへ駆けだしていったの、太郎さんでしょ」
「うむ、太郎さんだ」
「あんた、浅おじさんの兄弟のくせに、ずいぶん薄情なのね」
「どうしてだね」
「定九郎市ってのは、御家人くずれで、とても強いんですよ。太郎さんひとりでやって、もしけがでもしたら、あんたどうしてくれる気なんです。浅おじさんなら、こんなとき、決して太郎さんひとりなんかやりません。たとえかなわないまでも、いっしょに行って、石ぐらいぶつけてくれます。それが本当の男じゃありませんか」
　早く助太刀に行けといわぬばかりに、てきぱきとやっつけられて、
「気がつかないことをしたなあ、ごめんよ」
と、金さんすなおに頭をさげていたそうである。
　――ふふふ、金さんもさぞびっくりしたろう。お夏坊は気性も顔も母親のお玉そっくりなんだからな。
　福重はなんだか胸が熱くなってくる。
「親分、お帰りでござんすか」
　片一方が松平邸の土塀、一方が町家つづき、もう本通りへ出ようとする町家の路地口から下っ引きらしいやつがふたり出てきて、おじぎをした。笠井のだんなのいいつけで、夜どおしここで隠れ家の見張りをさせておくのである。
　隠れ家の裏は海からの掘り割り、東隣は旗本屋敷で、道はこれ一本だから、ここさえ守っていれば、だれも近づけないことになるのだ。
「御苦労だな。別に変わったことはねえか」
「ありやせん」
「出入りはひとりもないんだな」

「そういえば、さっき田舎侍がひとりやってきましたよ」
「田舎侍？――若いやつか」
「へえ、二十四、五でしょうかね。おまえさん、ここは海へ行きどまり横町だが、どこへ行きなさると、いきなり出ていって聞いてやると、なんだ、行きどまりか、と目を丸くしていやした」
天狗だなと、福重はすぐに気がついた。

7

「で、その田舎侍はどうした。おとなしく引きかえしたのか」
「へえ。とぼけたやつで、実は大のほうの用が足したかったんだが、おまえたちがいるんでは失礼だからな、ほかの横町をさがそうと、のこのこ帰っていきやした。冗談じゃねえ、こんなところで大のほうの用なんか足されてたまるもんかと、あとで大笑いしたもんでさ」
「そうか」
うまい口実を考えたもんだと重五郎は苦笑し、しかし天狗ならかまわないようなものの、あんなに気をつけていたのに、尾行されているのを少しも知らなかった。まったく油断はできねえもんだと、なんとなく背筋が寒くなる。
「ほかに変わったことはねえか」
「ありやせん」
「こいつ臭いなと思ったら、ひとりはきっと先まわりをして、屋敷へ知らせなくちゃいけねえぜ」
「承知してやす」
「きっとたのんだぜ」
福重は念を押して表通りへ出た。すばやく前後を見まわしたが、からんと月の明るい大通りに、今は人っ子ひとり見えない。安心して、さっさと愛宕下のほうへ歩きだした。
海手のほうから、かりが鳴きながら渡ってくる。ふけてくると、もう寒さが身にしみた。
「張りこみってやつは、あんまり楽な仕事じゃ

ねえな」
ひとりが貧乏ぶるいをしながらつぶやく。
「しようがねえやな。こいつが一人まえにならなけりゃ、いつまでたっても親分にゃなれねえんだからな」
「まあ、そう思ってしんぼうはしているんだがね」
せめて、ときどき、人でも通ってくれれば張りあいもあるが、ふけてはそれさえなくなるのだから、退屈してしまうのだ。
「おい」
ひとりがふっと相棒のわき腹をこづいた。
「なるほど」
ふたりの目が、じっと横町のかどへそそがれる。ちょうちんの灯が一つ、こっちへ曲がってきたのだ。歩いてくるのはふたりである。
「ひとりは女らしいな」
たしかに、そのとおりだった。お高祖頭巾をかぶった武家屋敷の腰元とも見えるなりで、先に立ってちょうちんをさげているのは若い中間である。
「失礼ですが、ちょっとお待ちなすって」
いきなり、ふたりつながって、その前へ飛び出していった。相手は女だし、退屈しきっていたところだから、ひとりは屋敷へ知らせろといわれていたことをついうっかりしてしまったのだ。
うっかりしたといえば、この夜ふけに腰元が出歩く、たとえ中間がついているとはいえ、まずそれからして一応怪しいと見なければならなかったのである。

8

「なにか用かね」
ふいに前へ飛び出されたのだから、中間はびっくりしたように一歩さがった。
「失礼でござんすが、この横町は海で行き止まりになっています。どちらへおいでなさいます

んで——」
　相手が武家奉公の者と見て、下っ引きのひとりが小腰をかがめながらていねいに聞いた。
「おまえさんがたはどなただね。なんでそんなことを聞きなさるんだ」
「あっしたちは御用の者です。今夜は少し訳があってここを固めていますんで、お名まえをうけたまわりとうござんす」
　そういっている間に、お高祖頭巾の腰元はこっちを甘く見たものか、かまわずすっと奥へ進もうとした。相棒がむっとしたようにその前へ立ちはだかって、
「お待ちなすって——」
　と、両手をひろげた。
「無礼でしょう。わたくしはこの奥に屋敷がある井上の者でございます」
「井上——？」
　それは隠れ家の東隣になっている旗本の屋敷だ。思わずはっと顔を見ようとしたとたん、
「お控えなさい」
　権高な声といっしょに、腰元の白いこぶしがさっと相棒のみぞおちへ走った。
「ううむ」
　胸を押さえて、がくんとそこへひざを突いたから、あまりのことに、ぎょっとそっちへ気をとられたすき、
「えい」
　中間の右のこぶしが、これもしたたか相棒のみぞおちにきまった。
　ほんのまたたく間に、張りこみの下っ引きふたりは、そこへ長々と気を失ってしまったのである。
　腰元と中間は、しばらくあたりを探るようにうかがっていたが、もうほかにはだれも見張りはないようだと見定めると、中間のほうが腰元を手まねきして、奇怪にもひたひたと表通りのほうへ引きかえしていった。
　まもなく、御用ぢょうちんを持った下っ引き

ふうの男がすたすたとはいってきて、隠れ家のほうへ小走りに駆けだすそのあとから塗り駕籠が一丁、侍ふたり若党中間に前後を守らせてしずしずとあらわれ、隠れ家の門の前へ行って止まった。
「今晩は——。もし、小川さん、今晩は」
　下っ引きふうの男が、門をたたきながら呼びたてる。
「どなただね」
　門の中にも寝ず番がいるらしく、すぐに返事がした。
「福重の家の者ですが、すいませんが、小川さんを急いで呼んでおくんなさい。実は、笠井のだんなのいいつけで、お連れ申してきたかたがあるんです」
　小川とは笠井の若党小川太吉のことだから、門内の番人もつい油断したようだ。
「御苦労さま、今あけやすから」
　ひとりが太吉を呼びに内玄関のほうへ走り、ひとりがなにげなくくぐりのしまりをはずして、それでも一応は細目にあけてのぞくと、たしかに御用ぢょうちんが目についたので、
「さあ、おはいんなすって」
　と、安心していっぱいにとびらをあけた。
　とたんに、さっと突き出した白刃をまともにみぞおちのあたりへ受けたから、
「ううっ」
　大きくのけぞり倒れながら、声さえたてられなかった。
「それっ」
　外に待っていた供侍ふたり、若党、中間ふたり、五人が手に手に抜き身をひっさげて一団となり、表玄関のほうへ進む。
　あとに残った下っ引きふうのやつは、ちょうちんを吹き消して、駕籠のそばへ寄り、
「殿さま——」
　と、声をかけながらとびらをあけた。
　中から無言でぬっと降り立ったのはりっぱな

武士で、宗十郎頭巾の上から不気味な鉄の仮面をかぶっていた。

そのころ——。

月のあかるい裏庭では、天狗が奥座敷の雨戸の前へ忍びよって、じっと内へ耳を澄ましていた。

宵に横町の入り口で、張り込みの下っ引きに追い払われ、とにかくこの横町の奥ということだけはわかったので、不本意ながら、ひとまず深川へ引きかえそうとすると、

「太郎さん——」

ふいに近くの路地口から手招きしたのはお大名浅だった。

「なあんだ、おじさんうじか」

どうやらこれも、お菊の駕籠を追ってきたらしい。

「おかみさんを運びこんだ家はわかったぜ。海手から三軒めの屋敷だ。なあに、帰りの駕籠屋をつかまえて、うまく聞き出しておいたのさ」

そういう小才のまわり方は、さすがに世なれた浅吉だった。

しかし、お菊の運びこまれた先はわかったが、はたしてそこに肝心のお夏がいるかいないかまではわからない。たぶんいるだろうだけではすまされない問題なのだ。

これもお大名浅の知恵で、屋敷の裏は、海からの掘り割りになっている、船でこぎよせて庭へ忍びこんでみようということになり、やっと船をつごうしてきて、船には浅吉が残り、天狗がここまで忍びこんだところだった。なれない天狗があえてぬすっとのまねをしたのは、恋ねこを呼び出すには恋ねこにかぎるという、これも浅吉の入れ知恵からだった。

屋敷の中では、まだだれか起きているとみえて、ふっと女の笑い声がもれてくる。ひとりで笑い声が出るはずはないから、ふたりいるのだろう。

——お夏とお菊に違いない。

天狗の胸はどきんと鳴った。

10

天狗はあたりを見まわしながらとんとんと雨戸を軽くたたき、

「お夏ちゃん——」

と、一声呼んでみた。

もし中の話し声の相手がお夏でなかったとしたら、どんなことになるのか。——つかまったときのことで、言いわけのしようはあるにしても、まるでどろぼうねこにも等しいことをやっているのだから、天狗は胸がどきどきする。

中の話し声がぴたりとやんだようだ。

「お夏ちゃん——」

もう一度そっと呼んでみる。

だれか急いで雨戸の外へ立ってきた気配がして、

「だれ——?　太郎さん?」

たしかにお夏の声である。お大名浅のねらいどおり、やっぱり恋ねこは敏感だった。

「うむ、お夏ちゃんかえ」

「まあ、——今あけるわ」

とうとう見つけたぞ、と思ったとたん、かっと天狗はからだじゅうが熱くなって、ひとりで顔がほころびてくる。すみの雨戸が一枚あいたので、引きつけられるようにそっちへ寄っていくと、

「太郎さん、会いたかったわ」

お夏は廊下へひざをつきながら、いきなり首っ玉へしがみついてきた。

「よかったなあ。もう、おれ安心だ」

「うれしい。離れないわ、もう」

「そうだとも——」

しっかりとお夏の胸を抱きしめて、しみじみその甘い肌のにおいに酔いながら、ぼうぜんとなってくる天狗だ。

「あ、そうそう。お上がんなさいよ、太郎さん、お菊ねえさんも来ているのよ」

お夏ははっと障子一重にいるお菊のことを思い出す。
「いや、おれ表からはいってきたんじゃないんだ。本当は、裏の塀を乗りこして忍びこんだどろぼうねこだもんな。いくらなんでも、上がっちゃ悪い」
「かまやしないわ。あたし、福井町のおじさんに、むりにこんなところへ連れてこられたんですもの。太郎さんをどろぼうねこだなんていうんなら、あたし、だれがなんといったって、もうこんな家にいてやらないからいい」
「そうかなあ。けど、福井町の親分のは、親切から出たことなんだからな。やっぱり上がるのはよそう。ここでも話はできるよ」
「いやよ。こんなとこ寒いんですもの。それに、お菊ねえさんにだってあいさつしてくれなくちゃ困るわ」
お夏はだだっ子のように腕をひっぱってきかない。
「親分はここに泊まっているのかえ」
「いいえ、ここは笠井のだんなの若党さんと、若い者たちが七、八人玄関のほうに詰めていてくれるんです」
その玄関のほうから、突然ただならぬ叫び声が起こった。

11

「くせ者だ。みんな出ろ」
「早くたたき伏せろ。一歩も家へ入れるな」
人々の絶叫と、入り乱れる足音がどかどかと聞こえてくる。
ぎょっと聞き耳を立てた天狗は屋敷の者の狼狽ぶりで、敵はひとりではないなと、とっさに悟った。
「どうしよう、太郎さん」
ひしとすがりついてくるお夏だ。
「お夏ちゃん、どうしたんでしょうね」
お菊も顔色を変えて、廊下へ走り出る。

「心配はいらねえです。おれがついているだ」
天狗は女たちににっこりとわらってみせてから、
「お夏ちゃん、裏の掘り割りに、おじさんうじが船で待っている。ふたりとも落ち着いておれについてくるがいい」
といい聞かせた。
「早く行きましょう、ねえさん」
「そうね。――太郎さん、おたのみします」
女たちは、はだしで月の庭へ飛びおりた。手を取りあって、天狗のうしろから駆けだそうとしながら、
「あっ、お夏ちゃん」
お菊は、ぎょっとそこへ立ちすくんでしまった。
表からまわってきたらしいくせ者がふたり、袖垣の陰からぬっと現れて、そこに天狗が立っているのを見ると、向こうでもちょいとびっくりしたのだろう、ぴたりと足を止めたひとりのほうは下っ引きふうのやつだが、ひとりはりっぱな武士で、頭巾の上から不気味な鉄の仮面をかぶっている。
「まあっ」
話に聞いているから、いや、突然見たって気弱い者ならきっと腰を抜かすだろう、昨夜橋場の宵へあらわれたのはこれに違いないとわかったから、お夏も思わずぞっと背筋へ悪寒が走る。
「やあ、今晩は――くせ者というのは、あんただったのか」
度胸がすわっているのは天狗だけだった。もっとも、背後に恋人がついているのだから、いやでも度胸をすえなければならない場合でもあった。
「うぬっ、またじゃまをしやがる」
ついていた下っ引きふうのやつが、さっと長脇差を引き抜く。
またとは、こいつ、どこかでこっちを知っているに違いない。と思って見直した顔に、どう

やら見おぼえがあるようだ。
「そうか、おまえは灘万の子分だったね」
「なにをっ」
「灘万親分は、品川御殿からうまく逃げのびられたかね」
「てめえなんかの知ったことじゃねえや」
「あんまり知りたいことでもないが、あの男ももう先は長くあるまい。ずいぶん悪いことばかりしたからなあ」
ゆうゆうと相手をこばかにしているような天狗を見て、鉄の仮面も腹にすえかねたか、ぎらりと抜刀した。

12

——こやつだけは許せぬ。
冷酷な仮面のやり方には、激しい憎悪(ぞうお)を持っているので、無言で抜きあわせた天狗の顔に、珍しくみなぎるような殺意があふれる。
ふたりにひとり。
三本の白刃が互いに血を求めながら月下に相対峙(あいたいじ)して、女たちは思わずはっとし、恐怖に息をのむ。
「太郎さん、助太刀するぜ」
植え込みのかげから、お大名浅が大声に呼びながら駆けつけてきた。
「おじさんうじ、おれはいい。女たちを早く船へたのむ」
りんぜんたる天狗だ。
「ちくしょう」
肝心の女たちを逃がしては、あとで仲間の制裁がこわいのだろう。長脇差の男が、死にもの狂いでだっと切って出た。
ひらりとかわした天狗は、空を切ってあわてて立ちなおろうとする相手の肩口へ、
「えい」
踏みこみざましたたか一刀をたたきつける。
そいつが大きくのけぞったのと、切った天狗の体勢がやや斜めになったところへ、

「うぬっ」
鉄の仮面が火のようにおどりかかっていったのと同時——よけるもかわすもない追い打ちだったが、天狗はとっさに片ひざついて身をしずめざま、返す一刀を流星のごとく横へ払っていた。
だれの目にも相打ちと見えたから、お大名浅はいけねえと肝を冷やし、お夏はお菊の肩へしがみつくようによろめいたが、
「ううむ」
異様なうめき声といっしょに、一瞬がくんと棒立ちになって、次の瞬間朽ち木倒しにばたんとあおむけにひっくりかえっていったのは鉄の仮面のほうで、と見さだめた天狗は血刀を引っさげて月の中へむくりと立ちあがった。
「やったぜ、太郎さん」
お大名浅が夢中でそばへ駆け寄りながら、うれしまぎれに力いっぱい平手で天狗の肩をたたきつける。
「あ、痛っ。ひどいな、おじさんうじ」
「ちっとぐらい、がまんしねえな。男じゃねえか」
「おじさんうじ、早く船へ引きあげるべ」
天狗は表のほうへちょっと耳をすましながらいった。表の乱闘は、口のほうが達者だとみえて、やっちまえ、たたきのめせ、油断するなどと、必死の叫喚が手に取るように聞こえる。
「ちげえねえ。じゃまがはいるとめんどうだ——けど、この野郎の正体だけは見ていかなくちゃね」
倒れている鉄の仮面のそばへ寄ってしゃがみながら、手早く不気味な仮面をむしりとったお大名浅は、
「あれえ、この野郎か」
と、ひどく意外そうな声だ。

13

「さあ、いそぐべ」

天狗はちらっと鉄の仮面の正体へ目をやっただけで、さっさと女たちのほうへ進みながらいった。

「太郎さん、あれだれなの」

お夏とお菊もやっと人ごこちはついたが、さすがに死骸のそばへ寄る気がしないらしい。

「程ガ谷でおれたちを待ち伏せしていた西野って用人さ」

「まあ」

女たちふたりは顔を見合わせたが、それがたとえだれであろうと、こうして死んでしまえばもう安心である。

「よかったわねえ、お菊ねえさん」

「うちの人も、これで助かったわ。太郎さんのおかげで」

天狗のほうへ感謝のまなざしを向けながら、早くそれを夫に知らせて安心させてやりたいし、急にうちの人が恋しくなるお菊だ。

「行きましょう、お夏ちゃん」

「船はどこ、太郎さん」

「こっちだよ。おれについてきなせえ」

お大名浅が答えて先に立ち、植え込みの中を裏木戸のほうへ歩きだすお夏とお菊が手を取りあいながらつづき、天狗がうしろからそれを護衛するように、四人はたちまち植え込みの中へ消えていった。

いつの間にか、玄関のほうの乱闘の声はぴたりとやんでいた。

雨戸が一枚あいた廊下へ、ひょいとぬすっとかむりの男が顔を出し、いま四人が去った植え込みのほうを見送っていたが、やがて庭へおりて、ゆっくり鉄の仮面の死骸のそばへ行って立った。

あとからもうひとり、黙ってぬすっとかむりの男と肩を並べた男がある。同心笠井平三郎だった。

「水野の用人、西野喜左衛門でございますな」

平三郎が死骸の顔を見て小首をかしげる。

「今夜のは代理のようだ」

ぬすっとかむりの男が答えた。

「すると、お見込みはやっぱり——」

「本物は灘万だと思うね。この男はただ金で動かされているだけで、自分から悪党になれる度胸はない。今夜は灘万にいいつけられて、お菊とお夏の口をふさぎに来たのだが、かえって自分の口をふさがれる結果になったまでのことだ」

「しかし、あぶないところでしたな」

これが、天狗のほうが一足おくれて逆になっていると、生きていられない笠井だった。

「いや、あぶないのはこれからかもしれぬて。灘万が生きている間はな」

そういいながら、ぬすっとかむりの男は、ふっと裏のほうへ耳を澄ました。

「まだなの、おじさん」

若い女の声が、せきたてるように水にひびいて、

「出すよう」

男の声がそれに答え、まもなく艪の音がしだしたからである。

14

ここは遠山家の控え家で、愛宕下の本邸からはあまり遠くはない。笠井は品川御殿の火事がおさまってからひとまず金さんについて本邸へ引きあげていたが、そこへ福井町の重五郎がお菊を送ってもどってきて、

「だんな、油断ってものはできませんね。あっしはずいぶん気をつけたつもりなんだが、いま帰りに張り込みのやつらの話を聞くと、さっき太郎さんがあの横町へはいろうとした、というんでさ。ここは行きどまりだというと、そうかといって出ていったそうですがね、訳がなくてこんな横町へくるはずはない。どうも、あっしの駕籠をつけていたんじゃないかと思います」

と、わらいながら笠井に話した。

それをそばで聞いていた金さんが、急に、控

え家へ行ってみよう、といいだしたのだ。

来てみると、はたしてこの騒ぎだった。

「生きたものを隠すということは、なかなか完全にはいかないものですな」

ここへお夏をいちじ隠そうとは、自分がいいだしたことだけに、笠井はかぶとをぬぐほかはない。

「城の堀を深くして安心だと思うのとおなじ理屈だな。敵と戦い、敵を妨ぐには、やはり人の和が一番ということになるのだから」

「わたしのほうは、かなりうまくできているのですが、攻勢と守勢とでは、どうも守勢のほうが一歩おそくなりがちのようです。もっとも、こんどは灘万のほうも、当分、守勢のほかはなくなりましょうが」

「さあ、その見込みはどうかな。敵はこっちから攻勢に出られないように、証人の口はみんなふさいである。これからも、極力ふさごうとするのだろう。どうも始末が悪い」

たしかにそうだ。敵は、大きな悪事のほうは水野の権勢の裏にかくれて手のつけられないように城壁をめぐらしているし、ぼろの出そうな口は、宮島の後室といい、この西野喜左衛門といい、たいてい自分のほうで始末している。今夜の西野の場合は、わざわざ西野に鉄の仮面をかぶらせて、お夏とお菊の口をふさごうとした。失敗すれば、西野自身の口をふさぐことになると、灘万はいつものずるい計算を立てていたのだろう。

とすると、第二、第三の刺客が、お夏にもお菊にも、いや、丹波屋四郎兵衛にも用意してあると見なければならない。

「さっそく、手配をしましょう」

笠井はおそまきながら顔色を変えた。いまお夏とお菊をのせて深川へ向かっていくお大名浅の船でさえ、どこで灘万の刺客にねらわれるかしれないと、気が気ではなくなってきたのだ。

「しかし、この切り口は、なかなかあざやかなものだな」

金さんはそれには答えず、二つの死骸の切り口をみながら、ぽつんといった。その胸の中では、お夏と天狗とをひそかにならべて、ほほえましい感慨がうずいているのではないだろうか。

15

天狗とお夏、お菊をのせた船は、お大名浅がこいで、いま石川島あたりへかかっていた。

月はきれいだが、海をわたる秋風がなんとなく身にしみるようだ。お夏ははじめは遠慮していたのだけれど、いつの間にかふなべりへよりかかっている天狗の肩にぴったりと肩をよせていた。

お菊はそれと向かいあったふなべりへ、横ずわりになってひじを持たせ、その手で額をささえながら、じっと目をつむっている。もう安心だと思うと、昨夜から極度に恐怖におびえつづけた気疲れが一度に出て、口をきく気力さえなくなってきたのだろう。

天狗もこうしてお夏を無事に取りもどしてみると、急にぐったりとした気持ちだった。妙に元気のない顔つきである。

「いやだわ、そんな顔しちゃ」

お夏が肩をこづきながら、小声で鼻を鳴らした。

「そんな顔って、どんな顔だろうな」

「とてもつまらなそうな顔をしているんだもの。あんた、そんなにつまらない?」

あたしがこうやってそばにいても、といいたげな目顔だ。

「そんなにつまらない顔かなあ。おれ、とても今はうれしいんだけどなあ」

「なら、もっとうれしそうな顔できないの」

「にやにやわらっていればいいんかね」

天狗は正直ににこりと笑った。とても無邪気な顔になる。

「おかしいわ。ひとり者がおかずをもらったみたい」
「そういえば、おれ、とても腹がすいているんだっけ。まだ晩御飯を食っていないんだ」
「うちへ帰ったら、御飯たいてあげるから、もう少しのしんぼうよ」
「お夏ちゃんがたいてくれるのかえ」
「あたしがたかなくて、だれがたくの」
　お夏はもう夫婦になったような気がして、じいんと胸がくすぐったいような幸福感にあふれている。
「早く食いたいなあ」
　天狗は色気より食いけだ。
「いやな人――。そんなにおなかすいたの?」
「おれ、ひや飯でもいいな」
「いじわる。せっかく、あたしがたいてあげるといってるのに」
「そのたいたのも食うよ」
「いやだわ、そんな人――」
　お夏は思わず吹き出してしまった。はっと気がついて、お菊のほうを見たが、お菊は眠ってでもいるように、身動き一つしない。
「ねえ、鉄の仮面が死んでしまったんだから、お菊ねえさんももう安心だわね」
「うむ、安心だと思うけど、まだ灘万が生きているからなあ」
　その話になると、天狗の目が急にいきいきとしてきた。

16

「灘万って、そんな悪いやつなのかしら」
　お夏は直接灘万のあくどさに遭っていないのである。
「悪いやつさ。おれの知っている人間の中で、いちばん悪いやつだな。どうしても、あいつだけは切ってやろうと思って、追いかけるには追いかけたんだが、とうとう逃げられてしまったんだ。そういえば、ゆうべ、お夏ちゃんを向島

で助けてくれたぬすっとかむりのおじさんね、あれだれかわからないかえ」
　天狗はその男がふしぎでたまらないのだ。
「わからないわ。あんな薄情な人きらいよ」
　お夏は至極あっさりしている。
「薄情――?」
「薄情だわ。太郎さんをおだてて、ひとりで定九郎市を切らせにやるなんて、――あたしかまわないから、ずばずばいってやったの。浅吉おじさんなら、そんなことはしません。たとえかなわないまでも、石の一つぐらいぶつけに、きっといっしょに行ってくれます。太郎さんがけがでもしたら、あんたどうしてくれるんですって。――ふふふ、そいつは気がつかないことをした。あやまるですってさ。あんなあんぽんたん、大きらい」
「しかし、おれはそのおじさんうじに、今夜も品川御殿であぶないところを助けられているんだ。おれにとっては、やっぱり命の恩人だからな」
「じゃ、こんどきたら、しようがないから、冷や飯ぐらいごちそうしてやってもいいわ。それでたくさんよ、あんな人」
　天狗は別にさからおうとはしなかったが、お夏はきっとかかあ天下になるだろうと思い、思わずにやりとわらってしまった。
「なにがおかしいの、太郎さん」
　たちまち見とがめるお夏だ。
「なんでもねえだ」
「正直にいってくれなくちゃいやだったら」
「しかられるとこわいから、よすべ」
「いや、いや、いやだったら。しからないから、白状おしなさいってば」
　どすんとからだをぶつけてくる。
「もし、もしかだよ、おれがだれかさんをお嫁にしたら、おれ、きっと、しりに敷かれそうだと思ったんだ。だれかさん、とても気が強そうだもんな」

「ふふふ、お菊ねえさんの前で、そんなことをいう人がありますか、おばかさんね」

ふふふ、と目をつぶっているお菊が、目をつぶったままわらっていた。

ひっそりした水の上だから、船房の話はたいていお大名浅の耳へもはいる。

「ふふふ、おやじに冷や飯を食わせる気だぜ。もっとも、かわいい娘のやることなら、金さんもわらって、冷や飯のごちそうになるかもしれねえな」

やがて永代橋に近い。

海のほうから、また、かりの声がわたってきた。

ぼんくら与力

1

明治戊辰三月十三日の朝、といってもやがて昼に近いころ、北町奉行所詰め与力宇田川倹吉は馬喰町二丁目の呉服商甲州屋多兵衛方へ出向いた。昨夜押し込みがはいり、死人まで出たという訴えがあったからである。

当時江戸の市街はどんな状態であったかというに、この正月鳥羽伏見の一戦に敗れた前将軍徳川慶喜は急遽身をもってのがれるように大坂から幕艦開陽丸に座乗、十二日江戸へ帰城した。

慶喜をむかえた幕府有司の間には、昨慶応三年十月将軍が大政奉還の決断に出て以来、それを機にみだりに朝権を弄し、ことごとに徳川氏をたたきつぶそうとかかっているかに見える薩長を、断じて討つべしという主戦論が相当に強かった。が、慶喜はこれをいれず、正月二十三日幕閣を任免して非戦派の勝安房を首席におき、いっさいをこれにゆだねて、自分は二月十一日上野大慈院の一室へ引きこもってしまった。朝廷に対して、ひたすら恭順謹慎の態度に出たのである。

そこで、勝は八方手をつくして、前将軍の恭順貫徹にこれ努めたが、廟堂はなにか期するところがあるらしく、どうしてもこれを取り上げようとしない。あくまでも慶喜を朝敵とみなして追討の師を発し、三月五日征東大総督府は駿府へ進み、その先鋒はまもなく六郷まで迫った。一方、東山道隊は板橋の宿へはいり、三月十五日未明を期して同時に江戸総攻撃の火ぶたを切らんと待機している。

こんな状態だから、江戸の治安は極度に悪化していた。この治安の悪化は去年の秋以来のことで、隊を組んだ浪人どもがしばしば富裕な町人商家を襲撃する。内偵してみると、それらの

浪人者の一部は三田の薩摩屋敷へはいったことがわかった。なるほど、薩摩には当時、やはり浪士ととなえる徒が数百人集まっている。市民はこれらを一口に薩摩強盗と呼んで非常に恐れをなしていたが、ついに暮れの二十五日、庄内藩その他の薩邸焼き討ちとなり、浪士軍の主力は京へ敗走して他は四散した。しかし、江戸の辻切り、強盗はいっこうにあとを断たない。してみると、薩摩浪士ならざる浮浪悪徒が、薩摩強盗の名にかくれて、かってに江戸を荒らしていたのが相当あったわけだ。

それが、今年になって、幕軍利あらず前将軍家は恭順謹慎ときまると、いよいよ江戸の物情は騒然と動揺をきたし、その虚につけいってあらゆる社会悪が百鬼夜行の姿で踊りだした。一方に悪が横行すれば、一方にはこれを押さえておひざもとの人心は自分たちの手で鎮撫してみせようという旗本血気の士が、党を結んでぞくぞくと立ちあがった。彰義隊がその尤なるもので、何々隊、何々組と数えあげれば中小以下は限りがない。むろん、それらのうちのまじめな連中の真の目的は、主戦論、すなわち薩摩討つべしというのが目的だが、いちおうはどれもこれももっともらしい江戸の治安維持、巡邏見回りを標榜した。

そのために、江戸開府以来市民の治安をあずかってきた南北奉行所の与力同心は、お株をすっかり持っていかれた感があったが、実際はこれら急ごしらえの警衛団はあまり役にたたず、むしろ弊害のほうが多かった。市中へ夜警に出た歩兵組が、町家から酒肴を徴発してきて、さんざん飲んだり食ったりしたあげくぐうぐう寝込んでしまい、二、三軒先へ押し込みのはいったのを朝まで知らずにいた。そんな話や、旗本などの次三男で別手組（直参の子弟をもって組織し、平時は外国使臣その他特別の警衛にあたり、有時は軍務に従事する）にはいるのはいやだし、新徴組（文久二年に幕府が募集した浪人

組で、当時庄内藩酒井左衛門尉の支配下にあり）に加入するのはなおさらいやだといったなまけ者で、遊蕩の味のしみこんだ連中が、表には何々組という私党を名のり、裏へまわって押し込みをやっていた例も少なくない。

　牛込細工町の質舗立花屋へ押し入った数人の強盗があった。隣は出店の立花屋酒店で、一方の隣はこれも出店同様の豆腐屋である。この三軒へ一度に押し込んだもので、騒ぐと砲だぞ（小銃を撃つぞという当時の略語）を口々におどかす。酒屋の小僧はあきだるの中にもぐっていたが、夜中から朝までいた強盗のうち顔見知りのものができ、その強盗が、小僧おっかねえか、などといってからかった。横寺町の出店から泊まりにきていた正吉という男は、それと知って寝床から朱鞘の刀をもって逃げ出したが、台所でつかまり、その朱鞘の刀で峰打ちをくわされ、夜明けまで気を失っていた。立花屋の主人長四郎は刀で首筋を切られ、死にはしなかったが重傷だった。この晩強奪されたのが、千両箱一つと、ほかに金や品物で千両、合わせて二千両持っていかれた。

　ところが、上野の戦争があった朝、彰義隊の加勢に行く十八、九人の一隊が立花屋の店の前を通ったのを店の者が見ると、なんとその大将らしいたけの低い太った武士が、例の強盗の首領だったので、みんなびっくりしてしまった。その武士は築地に屋敷のあった旗本で、講武所の槍の先生をしたことがある人だ。

　こんな実話が残っているくらいだった。また、当時のことをこう書きのこしている人もある。

「二月になると上さまは上野に御謹慎、戦争はないということに決まった。弔いいくさをしないでどうするか、このまま敵に降参か、そんなことができるものか、あるもんかと、ただむやみにはやるのはわたしどもぐらいの年かっこうの者のいずれも口にする議論。剣術の師匠へ行っても、柔術のけいこ場へ行っても、みんなそんなことばかり、泣くのもあれば、ののしるのもある。――ただ、この際の江戸市中は、商売もなく、交通もなく、暗夜のごとくであったろうと思われようが、それがそうではない。やはり、繁盛は繁盛の都会の大江戸であったから、むしろおかしい。なるほど、一時は騒いだことは騒いだ。それは官軍がいま江戸へはいろうという二月末から三月へかけてのことで、いまに市中が黒焼けになる、早く逃げろというので、わたしの家でもだいぶ逃げた。もちろん、その逃げるのは足弱の家族だけ、当主はさすがに家にいた。で、それらの女は、手まわりの荷物を人足を雇ってかつがせる。車に積み、馬に負わせて運ぶというので、しまいにはその馬も車も人というのもなくなって、めいめい荷物を背負って出かけるのすらもあった。そのおちつく先というのは、知行所のある人は知行所、ないものは、近いところで練馬付近、遠いので相州の厚木、武州の川越、八王子、下総の行徳、市川辺、まずそこらだ。ところが、おかしいのは、熊谷辺へ逃げたものは中仙道からくる官軍に追われて逃げ帰る。市川辺へ出かけたものは、脱兵の戦争で死にはぐれのめにあったというのもあった。そのほかの者も、不自由とどろぼうの多いのに恐れて、五月ごろにはまたもみんな江戸の古巣へかえってきた。そのころの人夫馬車の賃銭というものは、右の欠乏をむりに雇うのだから法外なばか値、下総の市川まで駕籠一丁が金十両とか、荷車一台が同じく七両とか、ただ取られるような賃銭をむさぼられて、それで向こうは狭いきたない百姓家へおおぜい押しこむというのである」

　当時大工の手間は一匁七分五厘（四銭五厘）とされ、月に一両分もあれば一家五人ぐらしで寝酒が飲めた時代だった。

2

　それは花曇りともいう少し底冷えのする日で

あった。倹吉は若党宮本勝平をしたがえて、なんとなく騒然たる江戸の大通りを馬喰町二丁目へ急いだ。白衣と称する着流しで、羽織のすそをはしょり雪駄ばき、八丁堀のだんなは正面をきって足早に歩く。それでいて悪いやつはけっして見のがさないという眼力を持っていなければ、にらみがきかない。

　当の甲州屋は堅く大戸をおろしているが、店の前の通りはいっぱいの人だかりだ。この御時勢だというのに、あいかわらず野次馬は絶えないものとみえる。

「立つんじゃねえ、歩け歩け、往来のじゃまだ。人さまの不幸が何がおもしろくて立つんだ」

　たびたび下っ引きや町役人が追い払うのだが、またいつの間にか集まってくる。

「しようがねえな。いうことをきかねえと水をぶっかけるぞ」

「その水でてめえたちの顔でも洗え」

　群衆のうしろのほうで野次ったやつがあった。

　倹吉はいつもの習慣で、現場へはいるまえにちょっと群衆のうしろへ立ち止まっていた。野次ったのは三人連れの歩兵のうちのひとりで、むろんそう大きな声ではなかったので、連れの者と、ほんのあたりにいた数人が笑っただけだ。

　幕府の歩兵は俗に茶袋といわれて、遊び人やごろつきなどの食い詰め者の寄り集まりだから、たいていは非常に質が悪かった。この三人もそれで、どれもあまり人相はよくない。ことに、野次を飛ばしたやつは大柄な男で、左のほおに刃物で切り下げられた一寸ばかりの古傷がある。と、見ているうちに下っ引きのひとりがひょいと倹吉の姿を見つけて、

「のいたのいた、八丁堀のだんなの御出役だ」

　しかりつけるように前のほうの野次馬を追っ払った。三人連れははじめて気がついたように倹吉を振りかえって、ふふんと鼻の先でわらいながら、急に両国のほうへ歩きだした。

「宇田川様、御苦労さまでございます」

　出迎えるように声をかけたのは、同心大原定兵衛手付きの小者である。

「定兵衛が出張っているとみえるな」

「へえ、どうぞおはいりになすって」

　倹吉はあいているくぐりから薄暗い店の中へはいった。

　町方与力は南北町奉行所に二十五人ずつ、その下に同心が百人ずついて、これだけの人数で江戸八百八町の治安を維持してきたのだから、市民に対しては大いに権威があった。その与力のうちでも、民事刑事の審理にあたる吟味がいちばん幅がきく。が、倹吉は初役以来の非常取締方で、いっこうに出世しない。非常取締方というのは、町の突発事件を受け持って検視または調査にあたる役で、定員は与力が八人、その下に同心が十六人、つまり外まわりの追いまわしという役どころだ。それを六年もつとめて平然としている倹吉は、与力仲間にいわせると少し変わり種に属する。

　八丁堀には八丁堀ふうというものがあって、旗本の士ではあるが、職掌がら町人と接触する面が多く、自然まげの結び方、着物の着こなし、ことばづかい、すべて一般の武家よりいき好みであくぬけがしていた。「与力、相撲に火消しの頭」と、江戸三男の筆頭にうたわれるゆえんであって、ひと目であああ八丁堀のだんな衆だなとわかるのを自慢にしていた。倹吉にはそれがない。べつに無作法な身なりをしているわけではないが、他にくらべるとひどくやぼったい。ただ身なりがやぼったいばかりでなく、だれに対しても世辞や迎合がないので、話せねえ男だなということにもなる。

　それに、与力は二百石高ではあるが、諸大名や富豪町人からなにかにつけて相談をうけ、過分の進物がとどいた。相当派手な生活ができるはずであり、また事実、あまり豪侈なまねをして罰せられた者さえあるが、倹吉は目だって遊

ぶということはなく、むしろその名のごとく質素倹約、悪くいえばつきあいを知らねえけちんぼうに見られがちな生活ぶりでありながら、ひどく貧乏しているようだ。屋敷へ行ってみても、これはという道具らしい道具もない。いったい、あの男はみんなどこへつかってしまうのか、それとも小判にして縁の下へ埋めておくのが道楽なのではないか、そんな疑問に加えて、男三十にもなりながらいまだにひとり者で通している。八丁堀の七不思議が一つふえて八不思議になったと、もっぱら組屋敷じゅうのうわさにされている倹吉であった。

「宇田川さん、八丁堀の七不思議が、このごろ八不思議になったのを御存じかね」

人の悪い男が、御用部屋の忙中閑を見つけて、これから外まわりに出かけようとする倹吉をわざわざ呼び止めながらきいた。八丁堀の七不思議とは、

奥さまあって殿さまなし
女湯の刀掛け
金で首が継げる
地獄の中の極楽橋
貧乏小路にちょうちんかけ横町
寺あって墓なし
儒者、医者、犬のくそ

第一は、殿さまの夫人でなければ奥さまとはいわない。侍の女房は御新造で、町人の家内はおかみさんと、ことばづかいがきまっていた時代である。与力はだんなと呼ばれるのだから、そのつれあいは当然御新造であるべきを、八丁堀にかぎって奥さまと呼ぶしきたりになっていた。第二は、与力が朝ぶろへ行く。男湯のほうは朝からはいる者があるが、女湯は朝はがらあきだ。与力たちは湯のきれいなそのほうへはいるので、女湯に刀掛けが必要となる。第三と第四は与力の権勢を諷したもの。第五、第六は文字どおり。第七は、与力の邸地は三百坪、同心は百坪、広いからその一部を貸した。借りた者は主として儒者、医者が多く、貸すほうも体裁のうえからそのほうがよかった。犬のくそとは、事実どういうものか犬のくそが多かったそうである。その七不思議が一つふえたというのだ。

「さあ、つい気がつかなかったが、なにが一つふえたんだね」

倹吉は例のものごとにこだわらぬ調子でその男の顔を見た。

「勘定合って銭足らず、というんだそうだよ」

むろん、倹吉の倹約ぶりを諷しているので、その実、おまえは金をためこんでいるのだろうという人の悪い揶揄なのだ。

「ほう。それじゃ一つふえて、一つ減ったわけだな」

「一つ減る——?」

「さよう。わからないかね。おれの場合には、奥さまなくて殿さまなし、その一条が棒引きになる」

あとで、この勝負どっちの負け公事かと、そこは職掌がらだいぶ議論に花が咲いたそうである。

与力では吟味方がいちばん幅がきくように、同心のうちでは三回りといって、定町回り、臨時回り、隠密回りが最上とされていた。それだけに、三回りになるには、十五年から二十年の功をつまなければならない。大原定兵衛は小男ながらその定町回りのうちでも腕っこきといわれ、あだ名を小定と呼んで悪党仲間から恐れられている男だ。年配も倹吉よりひとまわりほど上で、役目からいえば同心は与力の配下だが、経験からいえば若い倹吉などとかく鼻の先であしらわれがちである。特に小定にはそういう気質が強かったので、若い与力仲間からけむったがられていた。

倹吉がはいっていくと、小定は奥の座敷で雇い人をひとりずつ呼び入れ、昨夜の聞き書きをとっているところだった。家の中の検視はもうひととおりすんでいるらしい。

「早いな、定兵衛」
　ちょうど調べていた小僧が終わって、ひとくぎりついたところで倹吉は声をかけた。
「御苦労さまです」
　小定はあらためてあいさつをして、それを機にたばこ入れを取り出す。
「くせ者は庭先からはいったっていう話だが」
「さようです、ひとりが塀を乗り越してはいり、中から裏口の木戸をあけて仲間を入れたようです。家の中へ押し込んだのは四、五人らしく、座敷の雨戸を外からはしごで押し倒し、一手は店へ押し込んで、番頭、小僧を縛り上げる。短筒を持っているうえに、表にも裏にも手配りがしてある。声をたてると命がねえぞといっていたそうで、みんな頭巾をかぶった侍だったということです」
「切られたっていうのは——?」
「茶の間の次の間に鳶の者がふたり用心棒と泊まりこんでいました。そのひとりのほうの、に組のまとい持ちで金次というのが、外へ脱け出して近所から加勢を呼ぼうとした。茶の間から台所へ抜け出そうとして、中廊下の障子をそっとあけた。運悪く、そこにひとり立っていたのですね。だれだ、とふいにとがめられた。くそっといって、——これはいっしょに用心棒に泊まっていた嘉吉という男の話なんですが、くそっという金次の声といっしょに、なにか堅いものをたたきつけるような、ひどく大きな音がした。とたんに、ううんとうめきながらだれか倒れたそうで、嘉吉のやつは思わずふとんをかぶってしまった。あとで見ると、敷居ぎわに金次が倒れていたそうで、右の胴へ一太刀みごとにきまっています。用心に鳶口を持って出た。それが鴨居の柱へ突きささっている。相当度胸のいい男だったそうですが、とっさのことで、やっぱりいくらかあわてていたんでしょうね」
　小定は淡々たる調子で説明していく。

　甲州屋は一代分限で、主人多兵衛がかつぎ呉服から仕上げ、番頭小僧を十人から使うだけの店を築きあげた。共かせぎだった偉物の女房は十年まえに死んで、お糸という十八になる娘がひとりある。これは、乳母のお作というのがしっかり者で、物音を聞くとすぐ押入へ隠してしまった。強奪されたのは現金千五百両あまり、ほかに品物はなにも持っていかなかったそうである。八ツどき（午前二時）から明けがたまでの仕事で、近所では夜が明けて店の者が騒ぎだすまでなにも知らなかったという。
「御苦労さまでございます」
　小定の話をだいたい聞き終わったところ、主人の多兵衛があいさつに出た。六十を一つ二つ出たかと思われるおちついた人物だが、第一印象はひどくげっそりと疲れているように見えた。
「とんだ災難で、きのどくだったな」
「はい」
「しかし、まあ、けが人がひとりですんでよかった」
「はい。金次はかわいそうなことをいたしました」
「それも運というやつだろう。如才はあるまいが、あとの始末だけはよく見てやってくれ」
　そろそろ昼食どきである。万事小定に任せておけば手ぬかりのあろうはずはなかろうし、陰ではぼんくら殿とわらわれている青二才与力などは、いつまでもまごまごしてはかえってじゃまになるだけだ。
「定兵衛、あとはよろしく頼む」
　倹吉はそういって立ち上がった。しかし、ひととおり賊の手口、死体の検視だけは、役目のてまえしておかなければならない。土地の岡っ引き常次郎の案内で、まず賊のはいりこんだ裏木戸から押し倒した雨戸、主人の居間を見てまわり、その主人の居間から奥のほうへかぎの手になっている離れの六畳が、娘と乳母の寝ていた部屋だという。常次郎が障子をあけると、気

分でも悪いか床をのべて横になっていた娘が、びっくりして起き上がった。下町娘らしいふっくらとした器量よしで、色彩豊かな寝巻き姿がいかにもういういしく見えた。

「じゃまをする。そのままでいい、かまわず寝ていなさい」

倹吉はいたわるように声をかけて、敷居の中へははいらずに引き返した。

問題の茶の間へくると、金次の死骸はもうふとんに移されてさかさびょうぶをまわし、顔には白い手ぬぐいがかけてあった。思いがけなかったのは、そのまくらもとへ、手堅い商家には珍しいいきな身なりの女が、なまめかしいえりあしを見せてひっそりひとりで泣いている。女は足音にふっと白い顔をあげた。

「やあ、お蘭じゃないか」

倹吉は意外の目をみはった。女が二十一といえばもう年増の部にはいるが、柳橋芸者のなかでも芸達者と意地っぱりで通るお蘭は、五本の指に数えられる土地での売れっこだ。変わり種といわれる倹吉だが、つきあいで柳橋へ誘われることもあるので、お座敷での顔見知り、それくらいの知識はある。

「まあ、宇田川のだんな――」

お蘭は赤く泣きはらした目をふいて、いそいですわり直す。

「金次の妹でござんす」

常次郎がそばからそっと教えてくれた。

「そうか。そりゃきのどくなことをしたな」

「だんな、お願いです。どうか、かたきを、かたきをとってやってくださいまし」

お蘭は両手をついて思いつめた様子だったが、そのままくずれるように突っ伏して激しく泣きだした。

「おい――」

倹吉はかまわず常次郎をうながす。

「へい」

心得て、常次郎は死骸のふとんをはね、顔の

手ぬぐいをとった。金次は組の半纏、腹掛け、もも引き、ちゃんと足袋まではいているのは、用心深くそのかっこうでふとんへもぐりこんでいたのだろう。日ごろから責任感の強い男だったことがわかる。傷は右のわき腹へたった一太刀、切り上げぎみにじゅうぶん切りこんであった。切り手は相当腕のたつ男だ。

「くやしいだろうね、にいさん。これから、これからやっと男になれると、たのしみにしていたのに――」

お蘭は検視のすむ間じゅう、仏の青ざめた顔をなでてやりながら、あきらめきれないというようにかきくどいては涙をふいていた。よほど情愛の深いきょうだいだったとみえる。

「常、もういい」

倹吉は常次郎に合図をして、死骸にふとんをかけさせた。

「お蘭、金次には女房子はなかったのか」

「ひとり者なんです、にいさんは。まとい持ちになるまでは家を持たないといって」

さすがに面と向かわれると、ふだん着のままあわてて羽織だけ着がえて駆けつけたそういう姿が気になるらしく、お蘭はそっと両そでを胸のあたりで合わせている。そんなしぐさの一つにも、おのずと争えないあだっぽさがにおいこぼれるのである。

「金次はに組のまとい持ちと聞いているが」

たしか小定はそういっていた。

「ええ、やっととこんど頭のおかげで一人まえにしてもらった。これからだって喜んでいたところなんです」

「そうか。両親は――?」

「ずっとまえになくなりました。きょうだいふたりっきりだったんです」

「妹おもいの仏だったとみえるな」

お蘭がまたしても急に目がしらを押さえるのを見て、

「なあに、天道さまは見とおしということわざ

がある。あまりくよくよするな」
倹吉はそうそうに茶の間を立った。
甲州屋を荒らした賊の手口は、とにかくなんらかの主義主張があって軍用金狩りをやっている連中のやり方とは思えない。そのほうはなんといっても素人の寄りあつまりで、近所に知れないように押し込むというような器用なまねはできもしないし、またはじめからそんなことは眼中におかない。堂々とやる。が、甲州屋のは明けがたまで近所で知らなかった。裏口から押し込んで、いきなり家の者を残らず縛りあげたり、裏表に手配りがあるとおどしたり、これは明らかにものなれた盗賊の手口だ。それがみんな侍のかっこうをしていたというのは、おそらく軍資金狩りの名にかくれようとする連中で、同じ押し込みのうちでも、これらは時勢の混乱につけこんで悪事を働く最も卑しい根性の憎むべきやつらである。
「常、あとでひとつ川筋を洗ってみろ」
倹吉は店のくぐり戸まで送ってきた常次郎を振り返って注意した。これが事実単なる盗賊のたぐいの仕事だとすれば、千五百両からの金をまさかかついで歩くわけにはいくまい。とかくのうわさはあっても、町々にはそれぞれ巡邏隊が受け持ちをきめて警備についているのだ。それらの目をくぐろうとするには、船がいちばん便利である。
「承知しました」
常次郎がのみこみよく頭を下げるのを見て、倹吉はくぐりから陰気な店を外へ出た。

3

表には珍しく薄日がもれていた。店の前はあいかわらずの人だかりである。すぐ近くに両国の盛り場を控えて繁華な馬喰町の表通りだから、通行の者と立っている野次馬とがごったがえして、そのあたり絶えず砂っぽこりがうずまいていた。

倹吉はなにげなくその群衆を見わたして、おやと思った。ずっと後ろのほう、甲州屋とは筋向かいになっている生薬屋の軒下あたりに、ちらっと見おぼえの顔があわてて人のかげへかくれたからである。
「勝んべ、甲州屋の前で大亀の顔を見なかったか」
さっさと人ごみを通りぬけてから、倹吉は供の若党宮本勝平を振り返った。
「さあ、うっかりしていましたが、亀吉がどうかしたんですか」
「いや、——それじゃおれの思い違いだったのかもしれない」
口ではいったが、どうも人違い、見誤りではなかったようである。
大工の亀吉は、倹吉が道楽で世話をしている入れ墨者のひとりであった。法のさばきをうけて獄門島送りになるような人間のうちにも、その犯罪の動機をたずねてみると、案外同情すべき者が多い。斬罪以上に処せられて、おのれの命で罪をつぐなわなければならなかった者はしかたがないとして、倹吉は自分が手をかけた罪人は、伝馬町牢にいる間からできるだけ力になってやることにした。娑婆へ出て、行くところがなかったら、遠慮なくたずねてこい、だれにもそういっておいてやる。そして、たよってきたものは、なんとか正業につけるようになるまで、めんどうをみてやることにしていた。倹吉の生活が他の八丁堀のだんな衆にくらべていつもあまり豊かでないのは、そういう道楽を人にかくれて持っていたからである。
大亀はばくちで身を持ちくずした入れ墨者であった。入れ墨者といえば、世間ではけっしてあたたかい目で迎えてはくれない。それが入れ墨者に三度の罪を犯させるようになる。さいわい、亀吉は大工という年期を入れた職を持っていたので、倹吉の協力者である本所多田薬師横の木賃宿佐原屋のおやじ源兵衛のしり押しで、

案外早くもとの職へかえることができた。今では薬師裏に一軒持って、女房をむかえ、子までもうけて、世間の目から見ても働き者といわれるようになった男である。

その亀吉が、甲州屋の野次馬の中にいた。そのことはべつに不審がる必要はない。問題は、なぜ自分の顔を見て、あわてて人の背へかくれるようなまねをしたかにある。

善意に解釈すれば、なにか用があって馬喰町を通りかかった。人だかりがしているので立ち止まっているところを、ふいに自分に顔を出されて、堅気の職人が昼日中ぶらぶらしていると思われたくない、そんな気持ちで急にかくれる気になった、そうとれないことはない。もう一つの考え方は、犯人のうちにはどうかすると犯罪の現場を見にかえりたがる癖のやつがあるというそれで――。

「よそう。そこまで考えるのは岡っ引き根性だ」

倹吉は気がついてやめた。亀吉を入れ墨者として、その上へかってな想像を築いていくことは慎まなければいけない。それがああいう人間を誤らすもとなのだ。

両国広小路へ出ると、ここは芝居、軽わざ、因果者、娘浄瑠璃、デロレン、講釈などが雑然とこも張り小屋の軒をならべ、一方には俗に四文屋という屋台店が安い値段で食わせる食い物横町を作って、すし、大福、おでん、なんでも一つ四文で客を呼んでいる。盛り場といっても、中以下の職人、小僧、折助などの集まるところだからいつもはただ殺風景でごたごたと騒々しいが、さすがにきょうはだいぶ人出が少ないようである。その広小路を横切ってまっすぐ並び床のある通りを突き当たると柳橋だ。

神田川を境にして柳橋を一つわたると、あたりのふぜいが急にがらりと変わるからおもしろい。ここは、吉原、やぐら下をのぞいては、まず柳橋と第一に指を折られる花街で、橋をわたった右手が「万八」、左のほう河岸通りには軒ごとに掛けあんどんがならぶ船宿である。例年今ごろは花見客の送り迎えで、川筋といわず、なまめかしい脂粉の香が春風にむらがって花と妍を競うのだが、ここもやはりひっそりと火が消えたようである。見わたしたところ、岸離れする屋根船一つない。御時勢とはいいながら、ひどいさびれ方だなと感心しながら、倹吉は橋から五、六軒めの「むさし屋」と書いた油障子の前へ立ち止まった。とたんに、中からさらりとその障子があいて、

「あら――」

張りのある声がぎょっとひと足あとへ退いた。いつも歯切れがよくて如才のないむさし屋のおかみお柳という大年増である。ふろへ出かけるところらしく、黒えりのかかった黄八丈のはんてんを羽織って、手ぬぐいを持った手にぬか袋を持ち添えている。

「どうした、ひどく殊勝にびっくりしているな」

「おいでなさいまし。あんまり出あいがしらなもんですから、つい、つい」

「つい、押し込みとでもまちがえたか」

「まさか。さあ、どうぞおはいりくださいまし――宮本さん、御苦労さま」

お柳はあいそうよく供へも声をかけて、身を片寄せながら招じ入れるようにした。

「ふろらしいな。かまわねえから行ってこい」

「いいえ、いいんです。この書き入れどきに、船宿の女房がまっ昼間からおふろだなんて、ほんとうに涙がこぼれます。なんて御時勢なんでしょうね、だんな」

「一言もない。当節は八丁堀のにらみも昔ほどはきかなくなった。つらが赤くなる」

「いやですよ、だんな。なにもそんなつもりで、わたしふぜいが、――それじゃまるっきり口がきけなくなります」

「あははは、そんなおとなしいあねごでもなかろう」

「たんとおなぶりなさいまし」

お柳は逃げるようにとんとんと二階へあがっていって、すぐ引き返してきた。おしたくができましたから、どうぞという。
「この土地にお蘭というきれいな妓がいたな」
まもなく茶を運んできたお柳にきくと、
「ええ、土地のねえさん株のうちでも指折りの妓です。——だんなは甲州屋さんへおいでになってお帰りですね」
さすがに目はしのよくきく女である。
「早いな。もうここまで知れているのか」
「いいえ、お蘭さんとは妙に気が合うもんですから。実は、けさもうちへ遊びにきていて、そこへ米二の頭のところから迎えがあったんです。どんなぐあいなんでしょう、金さんの傷というのは」
「きのどくだが、即死だ」
「まあ、——そうじゃないかと、わたしも思ったんです。迎えの者は深手だといっていましたけれど、ことばの様子でおかしいと気がつきました。かわいそうに、それじゃいくら気丈なお蘭さんでも、さぞびっくりしたでしょうね」
お柳は心からきのどくそうにいった。
「きょうだい仲はどんなふうだったね」
倹吉はちらっとお蘭の愁嘆ぶりを思いうかべながらきいてみた。
「そりゃだんな、うちやましいくらい。金さんて人は、ほんとに妹思いでしたよ。早い話が、お蘭さんにはだんなってものがありません。なかなか意地っぱりですから、それこそ芸ごと一本やりで、その表看板に偽りなしってのが人気ではやりもするんですが、なにしろはでな稼業でしょう、表看板だけではとても楽はできやしません。季節季節は衣装だけでも一苦労です。それをいやな顔ひとつしないで、いつも金さんが助けてやっていました。その金さんだって、こういっちゃ失礼ですけれど、たかが鳶人足ですもの、ふところはけっして楽じゃない。いつだったか、お蘭さんがしみじみいっていました。

——おかみさん、にいさんはまとい持ちになるまでは家は持たない、女房はもらわないといって、いまだに頭の二階においてもらっていますけど、ほんとうはそうじゃありません。せっかくかせいでためたお金を、みんなわたしにとられてしまう、家を持つどころじゃないんです。それを思うと、ほんとにすまなくて、と涙をこぼしていました」
話している当人の目が、いつの間にかじんわりとうるんで見えた。
「そうか。しかし、お蘭も少し知恵がなさすぎたな」
「どうしてです——?」
「ほんとうにすまないと思ったら、いっそ芸者なんかやめて、早く人の女房になることだ。なにもそんなに苦労してみえを張っていることはなかろう」
「そうおっしゃれば、まあそんなものですけれど——」
お柳は話の腰を折られた形で、一瞬ぽかんと倹吉の顔をみつめた。そして、その冷淡さが急に癇にさわってきたらしい。
「じゃ、だんな、いっそだんなの奥さまにもらってやってくださいまし、功徳になりますわ」
それとなく逆襲してくる。
「考えておこう」
「いったい、その甲州屋さんの押し込みってのは、やっぱし薩摩強盗なんでしょうか」
江戸の意地っぱり女、どうしても一度は相手をへこまさないと虫が納まらないという顔つきだ。
「まあ、そんなたぐいかな」
「早くかたきをつかまえてやってくださいましよ。いくら鳶人足だって、切られっぱなしじゃうかばれません。ぐずぐずしていると、いまに薩摩っぽに江戸じゅう火の海にされちまうんじゃないでしょうかね」
「まさか、そんなこともなかろう。江戸を焼い

たってだれの得にもならない」
「だって、薩摩の兵隊がきょうはもう品川へはいってるって話ですよ」
「品川へ、――ほんとうか――？」
　さすがに目をみはらざるをえない。
「うちの三吉が、けさ品川までお客さまをお送りしてちゃんと見てきたんですから、まちがいっこありません」
　どうだ、こんどは驚いたろうという顔をして、お柳はやっと溜飲がさがったようだ。
「三吉はおるか」
「おります。呼びましょうか」
「いや、飯がすんだら船河原橋までやってもらいたいんだ」
　倹吉ははじめ多田薬師横の源兵衛をたずねるつもりだった。それとなく大亀の様子も聞いておきたかったし、きのどくな金次に香典をやりたい、そういうときはいつも佐原屋のおやじの名義にして、おやじに足を運んでもらうことにしている。しかし、そのほうは勝平に手紙を持たしてやるだけでも用は足りるし、今となっては品川へ薩摩の兵がはいったという事実のほうが捨てておけないような気がした。
　前将軍の恭順がどうしても官軍にいれられない。それは徳川家にとって家名の興廃にかかわる重大問題であると同時に、江戸市民にとっては江戸が直接火のちまたになるかならぬかの生命の問題でもあった。そして今、しばらく六郷に待機していた官軍先鋒隊がいよいよ動きだしたということは、その江戸攻撃が今明日に迫ったと解釈するほかはない。それはまた、今日まで主家の救護にあらゆる手段をつくしてきた幕臣の努力が水泡に帰して、ついに徳川の家名は断絶と決定したことにもなる。
　いまさら一町方与力がどうあがいてみたところでしようはないが、きょうの官軍の動きを御用部屋では知っているか、それに対して、どれだけの手配がしてあるか、倹吉はやっぱり心配

せずにはいられなかった。

4

　小石川の船河原橋まで三吉の船で送られた倹吉が、牛込赤城の組屋敷へ関口良輔を訪問したのは、やがて八ツを過ぎるころであった。
　関口は、前将軍が上野大慈院へ退去以来、その御謹慎所出仕を仰せつけられている旗本中での進歩党で、中条金之助、山岡鉄太郎、松岡万、大草滝次郎など相当の同志を持っていた。したがって、各方面の情報がたいてい集まってくる。倹吉にとっては九段の練兵館時代からの先輩であった。
　留守かもしれぬ、半分はその覚悟でたずねたのだが、さいわいいま上野から帰ったばかりだというところへ行きあわせた。座敷へ通されてみると、意外な先客があった。練兵館の当主二代め斎藤弥九郎である。
「ごぶさたしております。老先生もますます御壮健だそうで、陰ながらおうわさはいつも耳にしているのですが――」
　初代弥九郎は篤信斎と号して、すでに代々木へ隠退していた。が、世間普通の隠居とは大いに趣を異にし、代々木の山荘は文久以来塾生相手に自分の手で山を開墾して作ったものであり、そこから九段の道場まで毎日歩いて通って、いまだ政府の諸道場を断然睥睨しているという矍鑠ぶりである。
「ありがとう、おかげで老人もあいかわらずだ。しかし、きみのほうはなかなかたいへんだろうね、こういう御時世になってくると」
　弥九郎は好意を持って微笑を向けた。
「いや、まったくお話以上のものがあります。――さっそくですが、関口先生、きょう品川へ薩摩の兵がはいったという話、御存じですか」
　弥九郎がどんな用件で来ているかわからない。早く自分のほうの話をすませて引きさがるつもりで、倹吉はすぐに切り出した。

「やあ、きみもそれを心配してきたのか。実は、斎藤先生もそれでみえたんだが、あれは心配しなくてもいいようだよ」
　関口はもうたしかな情報を得ているらしく、声も顔も明るかった。
「そうですか。斎藤先生もそれで来られたんですか」
「うむ、塾生のうちに見てきたという者があって、知らせてくれたもんだから。議論はとにかくとして、無辜の江戸市街を焼くのはどうも賛成できないからね」
「同感です」
　倹吉はうなずいて、説明を求めるように関口の顔を見た。
「それについて、勝さんが先生一流の名言を吐いていたそうだ。――戦争が私闘になってはいかん。私闘を開いて国民を苦しめることがあるもんか。国民は租税を納めて国に益を尽くしているじゃないか。そんなことより、外国のことはどうするんだ、とね。直接聞いたわけじゃないから真偽のほどはわからんが、勝先生のいいそうなことで、おもしろいじゃないか」
「しかし、なんでもかんでも江戸を焼くという場合に、なにか手は打ってあるんですかね、その何の罪もない江戸市民のために」
　倹吉にはそれがいちばん問題だ。
「なるほど、きみの立場からいえば、それが当面の重大問題になるね。むろん、そりゃなんらかの手は打ってあるだろうが、しかし、こっちは初めから戦う意志はない。恭順貫徹一本やりに全努力を打ちこんできた。だから、だいたいにおいて、戦禍の責任は向こうに負ってもらうよりしようがあるまい。わしにいわせれば、その責任をはじめから勘定に入れての江戸攻撃でなけりゃ、王師の名にそむくと思うんだ」
「そこです。篤信斎などもその点を非常に心配しているようです」
　斎藤は律儀にすわり直った。

「そうでしょうな。こんどは老先生の立場も大いにつらいものがあるでしょう」
　篤信斎ははじめ水戸の烈公に厚遇をうけ、越前の春嶽にも知遇をうけた。大いに徳川家に恩顧がある一方、毛利藩からも信望を得て、長州の桂小五郎、太田市之進、山尾庸三、井上勝等、大村藩では渡辺昇などみなその塾生であった。
「しかし、安心してください。戦争のほうだけは、どうやら無事にまぬがれそうです」
「ほう。そうなれば、江戸のためにも、王師のためにも大慶至極なんだが」
「いかがでしょう、関口先生、その辺の事情について、おさしつかえなければほんの輪郭だけでもおもらし願えないでしょうか」
　倹吉はたずねてきたかいがあったと思いながら、正直にひざをのりだした。
「お話ししよう。まあ、一杯やりながら、ゆっくり聞いてくれたまえ」
　関口は気軽にわらって、家人のほうへ手をたたいた。まもなく酒肴の膳が運ばれて、主客はひとしきり杯をかわしてから、
「実は、わしは先月の末、上さまからある密命をうけて小田原へ行き、昨日江戸へ帰ってきたばかりです」
　主人はあらためて話しだした。それは、前将軍の恭順を朝廷へ貫徹するために、上野輪王寺宮さまに駿府の大総督府まで御動座を願った苦辛談から、小田原藩に不穏の主戦論があるという情報がつたわったので、上さまの内命で事実をたしかめに小田原へ急行した話など、とうとう座敷にあかりがはいるようになっても、容易につくるところをしらない。
「この小田原行きには妙な因縁があるんです。先月二十七日に、わしは突然、上さまからのお召しをうけた。しかも、夜の一時近く。松岡万が馬を飛ばしてきて門をたたいての話だ。――来たな、とわしはすぐ思い当たる節がありました」

というのは、関口はその三、四日まえ、上野の松源で友人と豪飲していた。ただ飲んだばかりならいいが、つまらぬことから隣室の客と激論をやったのだという。相手は九段の歩兵屋敷の指図役とかで、大崎彦之進と名のったが、向こうもふたり連れ、こっちもふたり、――事の始まりは、隣室のふたりが盛んに政事堂の罵倒をやっている。しまいには、勝安房というやつは官軍に買収されて、徳川家八百万石を金で売る相談ができているのだ、けしからん、ああいう裏切り者は今のうちに切ってしまわなければならん、などとやりだした。

そういう血気浅慮の残念組は当節珍しいことじゃない。ほっておけばよかったのだが、そこはこっちも酔っているし、あまりうるさいから、

「少し静かにせんか。野中の一軒屋ではない」

と、ついふすま越しにしかりつけてやったという。

「なにっ、――だれだ、きさまは?」

「だれでもよろしい。隣近所にも客があるのだから、くだらん書生論はやめて、おとなしく飲んで帰りたまえ」

「くだらん書生論とはなんだ」

がらりと向こうから間のふすまをあけたのが大崎とかいう指図役の軍装をした男で、もうひとりはまだ二十歳まえの良家の子弟らしい美少年だったという。こんなのを相手におとなげないとは思ったが、もうしようがない。関口はひととおり前将軍の立場を述べ、政事堂の苦衷を説いてきかせたが、てんで問題にならない。相手は理屈もへちまもなく、ただ薩長軍に負けてなるものか、どうしても一戦やらなければ徳川武士の面目がたたぬといきりたつばかりだ。

「では、負けいくさとわかっていても貴公らはやろうというのかね」

「負けいくさとはだれが負けるのか」

「今いくさをすれば、きみたちのほうが負けるよ」

「黙れっ。われわれは絶対に勝つ。薩長ごとき田舎侍に負けてたまるか。こう見えても、われわれは鳥羽伏見で実地に弾の中をくぐってきている。きさまのような畳の上の腰抜けどもとはわけが違うんだ」

その実戦を踏んできているというのが、かれらの唯一の誇りなのだ。

「うぬっ、許さぬ。きさまは味方が不利ないくさをやったのを手をたたいて喜んでいるんだな。裏切り者め、表へ出ろ。たたっ切ってやる」

こんな調子で、まったく侍としての教養もなければ思慮もない。まるで町のごろつき同然だ。

こんなのが歩兵指図役でいばっているのでは、鳥羽伏見の敗戦も当然だと、関口はそのときつくづく考えさせられたという。

その場は、両方に連れがあることだし、たたっ切るとはいっても人間ひとり、そう簡単に切れるものじゃない。けんか別れということになってすんだが、――すまないのは関口の立場だ。

上さま御謹慎中かかる所為は家来としてあるまじき不謹慎だと非難する者が出た。まったく一言もない。謹慎恭順ということは、ひとり上さまだけがしていればいいという問題ではないのだ。

そんなことがあったばかりなので、この夜中松岡の迎えは、てっきりおしかりだなと関口は覚悟したという。おしかりをうければ侍として生きて帰れぬ。腹を切るつもりで、家内の者とは水杯をかわし、松岡といっしょに馬をならべて家を出た。

御前へまかり出ると、上さまはいつもの六畳の部屋に端座しておられた。上さまのはまったく昼夜をわかたず文字どおりの謹慎で、ひげ月代はのび、いたく憔悴した顔を拝すると、関口は思わず目がしらが熱くなった。同時に、自分のやった不謹慎が、我ながら申しわけなく、まことに慚愧にたえない。

「そちは先日、酒楼へのぼってなにか口論に及

んだそうであるな」

「はっ」

「罪をただすべしと申す者がある」

「はっ」

「面をあげよ」

おそるおそる顔をあげると、上さまは微笑をふくまれていたという。

「邦家の形勢まことに多端である今日、予はさような些細なことで、あたら侍を殺すに忍びぬ。ついては、このたび、山岡、大草の両名へ小田原への使者を命じておいた。そちも共にまいって、特に働いてくるがよい」

つまり、そばがうるさいから、なにかてがらをたてて罪をあがなえというおぼしめしである。

こんな訳で、関口は大いに感激しながら、翌二十八日、山岡鉄太郎、大草滝次郎のふたりとともに小田原へ向かった。小田原の主戦論というのはうわさほどのこともなく、山岡、大草のふたりはすぐに江戸へ引き返したが、関口は上さまのおぼしめしもあるので、念のためしばらくあとへ残ることにした。

そのうちに、官軍の先鋒隊が箱根を越えて、六郷まで進出してしまった。もう侍姿では敵の陣営のある道中はできない。しかたなく職人に化けて、きのうの昼ごろ、どうにか神奈川まで帰ってきた。宿はずれの茶屋で弁当を使っていると、早駕籠が三丁砂塵を巻いて宙を飛ぶように江戸のほうへ駆け抜けていく。なんの気もなくながめていると、まんなかの駕籠の横から見おぼえのある刀のこじりがのぞいている。山岡の貧乏は有名なもので、なにかあるときはよく刀を借りにくる。小田原へ行くときも貸してやったが、たしかにそれだ。おやと思って見ると、駕籠の主はまちがいもなく山岡だ。向こうもこっちを見たようだが、そのときはお互いに知らん顔をして別れたという。

「それが、けさ山岡に会って聞いてみると、前

の駕籠が中村半次郎、後ろのが益満休之助、どっちも薩摩の士で、山岡め、偉い芝居を打っての帰りだったんだね」

簡単にいうと、小田原から帰ってまもなく、山岡は上さまのいいつけで駿府の大総督府へこっちの恭順貫徹に行くことになった。勝安房に相談すると、それなら西郷に手紙を書いてやろうということになった。そのうえ、薩摩屋敷焼き討ちのときつかまえておいた首領株の益満休之助という男を用心棒につけてくれた。これが成功して、道中敵の中を無事に駿府へつき、西郷に面会して、つぶさに将軍の苦衷を訴えたところ、――よろしい、それでは江戸へ行って、とにかく勝先生にお目にかかろう、そこまでこぎつけてきたというのである。

「偉いことをやったものです。こっちの誠意がなんとしても朝廷へとおらない、というより、むしろ通さないんじゃないか、そんなふうにさえ見えた。これはほんの私見だが、徳川は武力で天下を取った。だから、武力でたたきつぶしてやろう。そのほうがあとの始末がよろしい、おそらくそういう考え方が廟堂の一部にあったんじゃないかと思うんだ。だから、勝さんあたりが向こうの腹の中へ飛び込んでいって、こっちはこういう訳だと素っ裸になってみせれば、案外早いんじゃないかという説もあった。しかし、その勝安房を向こうのつごうで体よくとりこにされてしまったらどうする、という議論も出てね、――また、実際問題からいっても、この際あの人に一日でも江戸を留守にされるのは万事に困るんで、とうとう実現を見なかった。それを、山岡が単身西郷参謀にぶつかって、誠意一本やり、命がけで西郷ひっぱり出しに成功したんだ。この事実は、どうか諸君もほめてやってください。つまり、薩摩の兵が朝品川へはいったというのは、西郷が勝さんに会うために、高輪の薩邸へはいった。それを護衛してきたものです。これで事態は必ず好転する。わしは断

言してはばかりません」
長い説明を終わった関口の眼は、希望と信念とに明るく輝いていた。

5

倹吉が関口の屋敷を辞したのは、春の夜もかなりふけてからであった。

「宇田川君、こんな御時勢できみたちのほうはさぞやりにくいだろうが、江戸の治安は一日もゆるがせにできないことだ。どうか自重して、なにぶんともにたのみます」

玄関まで送って出た関口が、別れぎわに特にいっていた。倹吉のようなじみな仕事に従事している者にとっては、うれしいそれは知己の言であり、さすがにこの人は政事家だなと思った。

「微力ながら尽力するつもりでいます」

空は曇ってはいたが、雲のどこかに月があって、寝しずまった町から町へそこはかとなき明るさを漂わせていた。話に熱中して思わず酒量をすごしたほおへ、夜風がひんやりと気持ちよい。

江戸が戦禍のちまたから救われる、それはなんといっても一大快報であった。が、それはまた城明け渡しという幕臣にとってはむごい現実が目前に迫ったことにもなるので、麾下無謀の士の激昂暴発はとうていまぬがれない。この混乱につけこむにせ軍用金狩り、強盗、辻切りなどの横行はますますふえるばかりで、江戸の治安は当分悪化する一方だろう。

「勝んべ、佐原屋のおやじさんは家にいたか」

船河原橋の船宿から屋根船を仕立てさせた倹吉は、供の勝平にきいた。昼間むさし屋を出るとき、佐原屋へ手紙を持たせてやった、その返事をまだ聞いていなかったのである。

「はい、今夜米沢町の頭の家へ通夜に行くそうで、そのときおいいつけの香典は置いてくるといっていました」

「そうか」

馬喰町の甲州屋へはいった強盗、切られていたに組の鳶の者金次、その妹だというお蘭の悲嘆、甲州屋の前の群衆の中にいて、あわてて人ごみの中へかくれた大工の亀吉、そういうけさからのできごとが、あらためて倹吉の脳裏へはっきりとよみがえってきた。それらは山岡らが奔走している国事にくらべてあまりにも小さな市井の雑事ではあるが、関口に念を押されるまでもなく、倹吉はそれをおのれの分とし、けっして足もとを忘れるような男ではなかった。

（そういえば、関口の今夜の話の中に、大崎彦之進の名が出ていたな）

歩兵指図役大崎彦之進は、倹吉の親戚にあたる岡部久左衛門の屋敷へ、このごろよく出入りしている男である。久左衛門は歩兵頭として前将軍に従い大坂へ出張中、この正月伏見の戦闘で戦死していた。家には、夫人民代と、十七になる長男教馬、その姉で十九になる娘久枝がある。大崎は久左衛門の部下として、とにかく伏見ではいっしょに戦ってきたのだから、帰府以来岡部へ足しげく出入りするのに不思議はないが、性質放蕩無頼、しかも小才がきいていて表へはめったにぼろを出さない危険な人物だ。岡部家の家がら財産に野心がなければ、けっして自分から足を向けるような男ではない。――関口の話の松源でいっしょにいた連れの美少年というのは、おそらくその数馬ではあるまいか。

（一度たずねて注意しておいたほうがいいかもしれぬ）

倹吉はそんなことを考えながら、やがて昼間からの疲れでついうつらうつらしてきた。船は艪の音もしずかに神田川を下り、お茶の水の鬱蒼たる断崖の間を抜けて、昌平橋、筋違橋、やがて右手に黒々とした柳原堤が見えてきた。左は佐久間町の原で、このあたり水に影をうかべるあかり一つない。

だーん！

突然一発、そう遠くない川下にあたって、鋭

い銃声が水にこだました。はっとした倹吉が耳を澄ますとたん、また一発。驚いて飛びたった水鳥が、ばたばたとぶきみな羽ばたきを残して船をかすめ去った。
「勝んべ、あかりを消せ」
「はい」
　その間に倹吉はすばやく艫へ抜け出す。船頭が艪を握ったまま頭をひくくして、はうようにじっと前方を透かしてみていた。船はちょうど柳原稲荷の森のあたりへかかっている。
「船頭、今のはたしか堤のほうだったな」
「へえ、ぴかっと火が、――あの辺でござんした。和泉橋のたもとあたりですぜ、きっと」
　声をひそめて指さすあたりに、和泉橋が墨絵のようにかすんで見えた。銃声は二発きりで、春の夜はふたたびおぼろやみの底にしいんと静寂を取りもどしている。
「辻切りでなくて、辻撃ちときやがる。すごい御時勢になりやがった」
「船をそっとあの森の下へつけてくれ」
「お上がりになるんですか、だんな」
「うむ」
「あぶのうござんすよ」
　橋までは小一町もあろうか。しかし、くせ者がこっちの船へ気がついているとすれば、飛び道具だけにたしかにあぶない。
「つけますか、だんな」
「つけろ。やみ鉄砲だ、当たらぬと相場はきまっている。静かにつけろよ」
　できればくせ者を逃がしたくない用心である。
「合点」
　若い船頭は多少好奇心もあるらしく、棹を使って器用に船を柳原稲荷の森の下へ持っていく。距離を計っていた倹吉は、船がまだ岸へあたらぬまえに、ひらりと草の上へ飛んだ。勝平がすぐあとにつづく。無口でぶあいそうだが、勝平は少年のころからいっしょに育ってよく気心のわ

かっている間だから、こういうときは黙っていてもたいていの用は足りる。今も、倹吉が堤下の道をとおると、勝平はさっさと堤の上へあがっていた。
「物取りにしては大胆すぎるようだ」
　倹吉はいつでも伏せられる姿勢をとって、用心深く進みながら考えていた。柳原堤はだいたいにおいて、辻切り、追いはぎのかせぎ場所とされてはいるが、和泉橋の近くには藤堂家の上屋敷がある。
　そこの辻番は、御府内でも強くてやかましいので知られていた。銃声を聞けば必ず飛び出してくるものと、くせ者のほうでは予想してかかるはずである。また、橋のすぐ南詰めは旗本富田中務の屋敷だ。そういうものを無視してかかるいわゆる軍用金狩りの一党ならとにかく、単なる追いはぎ強盗のたぐいでは銃器は使いきれない場所だ。とすれば、遺恨の殺人、これなら撃ってすぐ逃げればいい。
「おそらく、下手人は逃げてしまっているだろうな」
　和泉橋の下まできて、倹吉はふっとなまあたたかい血のにおいを感じた。いる、――橋の上から見ればちょうど真下になる汀に、ひとむらの川柳が芽を吹いているやぶの根もとにささえられて、たしかに人らしいものが倒れていた。撃たれて堤からころげ落ちたか、あぶないと見て自分からここへ飛び降りてきたか、――銃声は二発だった。最初の一発で逃げられたから、二発めを追い撃ちにした、まずその辺だろうか。
「おい、どうした。――しっかりしろ」
　倹吉はうつぶせに倒れているさんばら髪の男の肩に手をかけて軽くゆすってみた。職人体のやつで、どうやらまだ息はあるようである。
「ちくしょう、やりやがった」
　うめくようにいって、急に身を起こそうとしたが、その力はもうないらしい、わずかに顔だけが右のほおを地にうずめてこっちを向いた。

「亀吉、――大亀じゃないか」
　倹吉はがくぜんとした。地に漂うほのあかりに、すでに血のけを失った蒼白の顔ではあったが、それはついいましがたまで気にかけていた大工の亀吉に紛れもない。
「だれだ、――どなたです」
　大亀はびくっとしたようにうつろな目をあいた。
「おれだ、八丁堀の宇田川だ。わかるか」
「ああ、だんな、――だんなですか」
　いきなり左手をのばして、さぐるように地をなでまわす。
「いけねえ、目があがってやがる」
「しっかりしろ。なんだ、男がこれっぱかしの傷で。今すぐ医者を呼んでやる」
　倹吉はその手を強く握ってやりながら、口ではしかりつけたが、おそらくもう絶望だろう、はっきりと顔に死相があらわれて、息づかいが激しく肩に迫っている。
「ありがてえ。だんなに会えるなんて」
　亀吉はあえぎあえぎいった。
「だんな、あっしはもうすぐ死にます」
「ばか、弱いことをいうな」
「いいえ、横っ腹へ一発、背中へ一発、――野郎はやっぱりたしかな腕でさ」
「野郎とはだれのことだ。下手人はだれなんだ」
「すんませんが、だんな、あっしはここに五十両、悪い金じゃありません、借りてきたんでさ。高い抵当をおいてね。きっと悪い金じゃねえんです。こいつを、どうか、こいつを幸助に、甲州屋の番頭なんで、その幸助って男にそっと届けて、――頼みます。お願いでござんす」
　倹吉が握ってやっている手にわずかに力がこもって、これだけはいっておかなくては死にきれない、そういう必死の形相に見えた。
「よし、馬喰町の甲州屋、番頭の幸助だな」
「へい」
「わかった。きっと届けてやる。ほかにいうことはないか」
「佐原屋のとっつぁんに、かかあと餓鬼を、――だんな、お情けに、すがりますでござんす」
「心配するな、それも引き受けてやる」
「ありがてえ。だんなの御恩は、あの世へ行っても忘れやしません。あっしは真人間なんだ。だんなのおかげで、安心して目がつむれる」
「亀吉、下手人はだれだ」
　耳もとへ口をよせて、声に力を入れた。が、亀吉はもう力がつきて、がくりと目をつむる。
「亀吉――」
「芳坊、真人間だとも、おとっつぁんは」
　かすかに口もとに微笑がういて、さすがに倹吉もこれ以上追及しかねているうちに、すっと息が絶えていった。
「極楽へいけよ」
　そのおだやかな死に顔につぶやいて、倹吉は思わず合掌した。
　せっかく真人間になりながら、この男はついに畳の上では死ねなかった。が、口ぶりから察しても、往生ぎわから見ても、当人としてはけっして良心に恥じない死であったことだけはたしかだろう。ただ残念なことは、すべての条件から見て、これは入れ墨者らしいきわめて奇怪な死といわなければならない。
「おうい、何かあったのかね」
　ふいに橋の上から声をかける者があった。見上げる目に、ちょうちんが一つゆらゆらと、人魂のように宙にういている。

6

　翌日、倹吉は昼まえに柳橋の船宿むさし屋へ出向いて、甲州屋の番頭幸助を、わざとこっちの名はいわずに迎えにやった。
　その日は、京軍を代表する西郷参謀と、徳川家の代表勝安房とが、江戸高輪の薩邸で正式に会見する日であり、同じ江戸のちまたでは昼から鳶の者金次の葬式が、に組の頭取吉五郎の家

から盛大に送り出されようとしている日でもあった。そして、また夜は、本所多田薬師裏の長屋で大工の亀吉の通夜が、佐原屋源兵衛の世話でささやかにいとなまれることにもなっている。

　昨夜、倹吉はあれからちょうど駆けつけてきたちょうちんの主、藤堂の辻番を呼んで手を借り、亀吉の死骸を船にのせて多田薬師前の河岸まで運んでやった。佐原屋を起こさせると、源兵衛はたった今金次の通夜から帰ってきたところだといいながら、びっくりして船へやってきた。あらましの子細を告げて、このごろの亀吉の様子をきいてみたが、

「さあ、べつに変わったところなどはありませんでしたよ。朝は早いし、夜もきちんと帰ってきて家で飯を食う。芳坊の顔を見るのがいちばん楽しみだといっていたくらいで、家の中は明るかった。けさはたしか両国橘町の長屋の手入れだとかいって出かけたが――かわいそうに、とんだことになりましたね」

　ただ暗然としているばかりであった。甲州屋の番頭幸助という名も初耳だという。親がわりになっている源兵衛が知らないようなら、女房にきいてもむだだろう、そう思ったから、倹吉はとにかく亀吉のふところから出たなぞの五十両の金はおやじに預け、あとをたのんで八丁堀へ帰った。

　当人は、借りてきた金だ、高い抵当が入れてある、けっして怪しい金じゃないといっていた。まさか、死んでいく人間がうそをつくとは思われないが、大工が借りた金にしては少し金額が多すぎる。しかし、それをかわいい子どもにとはいわず、甲州屋の番頭幸助にやってくれといっていた。幸助という男は、いったい亀吉にとって何にあたるのか。

　それに、亀吉は下手人の名を知っていた。殺されるかもしれないという予感さえ持っていたらしい口ぶりである。その名をどうしても口に

出さなかったのは、出したくなかったのか、出すひまがなかったのか。

　いずれにせよ、幸助に会いさえすれば、だいたいの見当がつくだろう。そこに唯一の望みをかけている倹吉であった。

「だんな、おみえになりました」

　お柳の案内で、まもなく幸助が二階へあがってきた。縞のもめん物の対をきちんと着て、前だれ掛け、年のころ二十一、二でもあろう。まず中番頭格というところか。男ぶりもにやけたところはなく、しっかり者らしい若者である。顔はきのう甲州屋でたしかに見覚えがあった。

「忙しいところを御苦労だった。まあまあ楽にしてくれ」

「恐れ入ります」

　幸助もきてみて意外だったのだろう。相手が相手だけに、思わず堅くなったようだ。

「おれの名は知っているだろうね」

「はい」

「きょうは役目で呼んだんじゃない。そのつもりで、気を楽にして話してくれ。実は、一杯やりながらと思ったんだが、堅いお店の番頭さんを呼んで、昼間っから酒でもあるまいと、これは遠慮することにしたんだ。まあ、甘味でもつまみながら話すとしよう」

　倹吉はまず自分から一つつまんでみせたが、幸助は手をひざにおいたままじっと用件を待っているというふうだ。

「突然だが、大工の亀吉という男を知っているだろうね。本所多田薬師裏に住んでいるんだが」

「――」

　ぎくりと顔をあげて、一瞬当惑の色がうかんだ。

「佐原屋のおやじさんのおかげで、あれもりっぱな真人間になった。陰ながらおれもよろこんでいる男なんだが、おまえとはどういうかかりあいになっているんだね」

「兄でございます、てまえの」
「なに、兄弟――？」
「はい。だんな、どうかしたんでございましょうか、亀吉が」
　きっぱりと名のって、幸助は心配そうな目をみはった。
「そうか、兄弟だったのか」
　意外ではあったが、それで読めた。兄は入れ墨者、弟は堅気の番頭、その弟の身を考えて、源兵衛にさえこれだけは明かしていなかった。亀吉としては一生だれにも知らせたくない腹でいたのかもしれぬ。――それが、きのう、橋町に仕事にきていて、甲州屋へ恐るべき強盗がはいったことを耳にした。弟の身が心配になって、つい甲州屋の前まできてうろうろしているところを、いちばん悪い人に見つけられそうになったので、思わず人の背にかくれた、そうだったにちがいない。
「おまえはきのう亀吉に会っているね」
「はい、会いました」
　幸助はべつにかくそうとはしない。目にいちまつの不安そうな色は漂っているが、迷惑そうなところがけぶりにも見えないのは、けっして兄を憎んでいない証拠と見てよかろう。
「亀吉は兄弟おもいの男だったとみえるな」
「はい。世間さまではなんと申しますか存じませんが、てまえにはたったひとりの兄、いい兄でございます」
「そうだろうな」
「兄がどうかしたのでございましょうか」
「驚くなよ。きのどくだが、昨夜亀吉は和泉橋のそばで人手にかかった」
「えっ、あの兄が、――死んだのでございますか、だんな」
「うむ、妙な縁でおれはその場へ行きあわせたんだが、凶器はピストルだ。右の横っ腹へ一発、背中へ一発、さいわいまだ息があって、おれの声がわかった。――頼みがある、ここに金を五

十両持っているが、けっして悪い金ではない、これを甲州屋の番頭幸助という男にわたしてくれ、そういって絶命したんだ。それ、この金だ」
　倹吉は別に用意してきた切りもち二つ、裸のまま幸助のひざの前へならべた。ほんものは源兵衛にあずけてある。出どころが知れないうちは、いかに亀吉のたのみでも、役目がらそれに手をつけられないのである。
「感心な男でな、おまえを弟だとは親がわりの佐原屋にさえ話してなかったようだ。堅気のおまえに肩身を狭くさせたくなかったのだろう。だから、ここへ来るまではおれも知らなかった。兄弟ならなおさらのこと、せっかく兄が命にかけてまで頼んでいった金だ、ありがたく納めておきなさい」
「ごめんくださいまし」
　急に幸助は両手で顔をおおい、ううっと嗚咽をもらした。がまんしきれなくなったか、はてはそこへ突っ伏して、肩をふるわしながら泣く。どうにも涙がとまらないというふうであった。
　倹吉は黙って待っていた。不幸だった亀吉のために、心から泣いてやってくれる、それは亀吉にとってどんな名僧知識の手向けよりは供養になるにちがいあるまいと思ったからである。
「お恥ずかしゅうございます」
　幸助はやっと悲嘆を抑えたという顔をあげた。
「なあに、男は泣かぬものと、むりにきめることもなかろう」
　倹吉はなぐさめるようにいってやった。
「兄は今、どこにいるのでございましょう」
「多田薬師裏の家へつれていってある。佐原屋がきもいりで、今夜は長屋の者がささやかながら通夜をするといっていた」
「ひと目兄に会いたいと思います。てまえが行っては悪いでしょうか」
「そんな遠慮はいらぬことだ」
「ありがとうございます。それでは、主人にた

のみまして、今夜は通夜さしていただきます」

「そうか、そうしてやれば亀吉もよろこぶだろう」

「だんな、兄には小さい子どもがあるそうでございますね」

「うむ、芳太郎という二つになる男の子がある」

「兄は目の中へ入れても痛くないように話していました。わたしどもは不幸な兄弟で、てまえはまだその甥にも、兄嫁にも名のらずにいます。身寄りといってはもう兄の家のほかにはありませんので、一度たずねたいとわたしは申したのですが、これだけはどうしても承知してくれませんでした。出世まえのわたしの身に傷がつくようなことがあってはと、そればかり心配していてくれたのでございましょう。――だんな、この金は甥の芳太郎にやってはいけませんでしょうか」

幸助としては、この場合そういう気持ちになるのが自然だったかもしれぬ。

「さあ、それはおれにもなんともいえないが、いったいきのう亀吉とどんな話があったんだね」

その話の中に、なにかこの五十両のいきさつが出ていたはずである。

「なにもかもお話し申し上げます。お聞きくださいまし」

幸助はすなおにこういって、すぐ話しだした。

きのうの昼ごろ、横山町のそば屋から迎えがあって、行ってみると兄の亀吉が待っていた。顔を見ると非常によろこんで、――お店はとんだ災難だったが、おまえにけががなくてなによりだった。人の話で、切られたのは鳶の者だとはわかったものの、顔を見ないうちは安心できない、それで呼んだのだが、手間を欠かしてお店へ悪くはなかったかと、まず遠慮そうにきいていたという。

「にいさん、お店はもうだめかもしれない」

幸助は兄の心に甘えて、つい口に出してしまった。

「なにがだめなんだ。どうかしたのか、お店が？」

「うむ、ゆうべ強盗に持っていかれた千五百両は、問屋へ支払いをするたいせつな金だったんです。こういう御時勢だもんだから、お店でも諸家さまからの売り掛け金が思うように集まらない。去年あたりから相当無理をしていたんです。こんどの千五百両も、だんなが苦労なすってどうにかこしらえたもので、あれを問屋へ入れないと品定めになってしまう。――幸助、弱り目にたたり目だなって、けさは珍しくだんなが愚痴をこぼしていました」

「けど、あれだけの店を張っていなさるんだ。それに、長年の信用ってものがある。訳さえ話せば、問屋だってわかってくれようし、世間さまにだって同情ってものはあるだろう」

「同情は同情、支払いは支払い、別々なのが商売の道なんです。事情を聞いて同情ばかりしていたんでは、問屋も共倒れになっちまう。信用だってそのあてがある間だけの話で、損をしてまでだれも信用はしちゃくれません」

「まあ、そういってしまえばそんなもんだろうが、――お店はそんなに融通が苦しくなっていたのかね」

「店も家財もみんなもう借金の抵当になってしまっているんだそうです。残っているのはお嬢さんぐらいのもんでしょうよ」

「そりゃどういう訳だ。妙なことをいうぜ」

「お嬢さんを嫁にくれれば、三千両支度金に出そうって人があるんだそうです」

「ふうむ、金で買うなんて、そいつはかたわ者か」

「かたわじゃないけど、にいさんは神田鍋町の質屋で立花屋浪右衛門てのを知りませんか。質屋は表看板で、高利貸しのほうが本業なんです。あだ名が化右衛門というほどの醜男で、しかも年が親子ほども違うんです」

「で、だんなはやる気になっているのかえ、そんなところへ」
「だんなよりお嬢さんのほうが、お店のためならしようがない、親のためには苦界へ身を沈める人さえあるんだからと、迷っているようなんです」
「そりゃいけねえ。立花屋はいけねえよ、幸助。まさか、だんなは承知しねえだろうな」
「だんなは、ひとり娘のことだから、そりゃお嬢さんを売り物なんかにしたくはないでしょう。――おれはかつぎ呉服からこれだけの店にした。もう少し若ければ振り出しからもう一旗ということもあるが、年が年だ。それは無理としても、なあに、親子ふたりぐらいのこと、まさか路頭に迷う心配もなかろうと、お店のほうはすっかりあきらめておいでのようです」
「そうか。だめなものなら、いっそそのほうがいい。人間は無理をするときっと、その無理がどこかにたたってくる。――けど、幸助、だんなはお年でも、おまえはまだ若いんだぜ。かつぎ呉服でもなんでもできるからだ。ひとつ、だんなにかわって、そのかつぎ呉服からもう一度甲州屋を盛りかえしてみろ。いうまでもねえことだが、今になってだんなやお嬢さんを路頭に迷わすようじゃ主従の道がたたねえぜ。いったい、そのかつぎ呉服を始めるにゃ、どのくらいの元手がいるもんなんだ」
「そりゃ商売のことだから、一両しか元手がなければ、それからだってやってできないことはありません。けれど、ひととおりの仕入れをして、はじめからいい得意を相手にするには、どうしても五十両はいるでしょう。仕入れが現金だから現金でなければ商いはしませんでは、なかなか客がつかない。どうしても金が寝ますからね」
「なるほど、そういうことになるな。五十両か、なんとかしてやりてえものだな」
「にいさん、それこそ無理な心配はしないでください。わたしにも考えはあるんですから」
「うむ。むりにといわれたところで、その日かせぎの職人に五十両は大金だ。右から左へどうしてやると大きな口はきけねえが、できればなんとかしてやりたい。ほねだけはおってみようよ。ただな、幸助、立花屋の話はいけねえぜ。金が目あての婚礼なんてのに、あとのよかったためしはありゃしねえ。これだけは、おまえ、きっとお止めするのが御主人さまへの恩義だぜ」
　亀吉はくれぐれも念を押していたという。
「そんな話をしてきのうは別れたんですが、――だんな、もしも兄は、この五十両のために命を落としたんではないでしょうか」
　幸助ははじめてそこへ気がついたように、急に目の色をかえた。
「さあ、それはなんともいえぬが、――その甲州屋と立花屋の縁談は、今のところどうなっているんだ」
　倹吉としては、馬喰町の甲州屋がそんな悲境に立っていたとはちょっと意外であった。そういえば、きのう会った主人多兵衛の第一印象が、なんとなくげっそりやつれて見えたことを思い出す。
「兄にはすっかりあきらめていると申しましたが、実はまだ主人も半分迷っているようでございます」
「そうだろうな。娘のほうはどうだ」
「正直に申しますと、そんな家へは行きたくない、といって親のためだからいやだといいきることもできない。そんなふうに見えます」
「立花屋のほうはそんなに執心なのか」
「てまえはよく存じませんが、大番頭さんの話では、至極先方は乗り気になっているということでございます」
「すると、その話は大番頭が橋渡ししなんだね。なんという名だ」
「忠造と申します」

倹吉はしばらく考えてから、
「で、おまえの気持ちはどうなんだ。こりゃよけいな話になるが、亀吉のことばどおり、今となっちゃそれが遺言ともいえる。その兄のことばに従う気か、それとも黙ってなるに任せるか」
「……」
幸助はじっとうなだれてしまった。だれにしても、これはちょっと返事のしにくいことだろう。
「まあいい、しいてどうしろとおれはいうんじゃない。が、おまえの一生はここできまるんだ。いわば、男の花道ともいえるだろう。よく考えておくことだな」
「だんな、てまえは、わたしは――」
突然、幸助が燃えるような顔をあげた。
「わたしはやります。やっぱり、兄の遺言どおりやっていくのがほんとうでした。わたしはきっとやります」
「そうか。それならこの五十両はもっていけ。この金には亀吉の魂がこもっている、忘れるなよ、それを」
「ありがとうございます、いただいてまいります。――にいさん、このお金はたしかにいただきます」
幸助はひざの前の五十両を取りあげて、ひしと押しいただいていた。
「これで亀吉もまんざらむだ死にはなるまい」
幸助を帰したあとで、倹吉はなにか明るくそう思ったが、さて、依然わからないのは亀吉の下手人である。
五十両の金が亀吉を殺した、それはほぼまちがいないとうなずけるが、その五十両をどこから亀吉は借り出してきたか。

7

「定兵衛、ひとつ鍋町の立花屋浪右衛門という男の素姓を洗ってみてくれぬか」

その日、倹吉は定回りの小定に会って、こういいつけた。大亀が撃たれた和泉橋は、鍋町からほど近い。大亀はきのう弟と対談中の席で、娘を立花屋へ嫁にやることをひどくきらっているような語気を漏らしている。それは単に支度金などで若い娘をもらおうとする立花屋の好色をけいべつしてのことか、なにか立花屋の秘密をつかんでいてのことか、これはいちおう調べておいてむだではあるまいと思ったからだ。
「しかし、亀吉が鍋町からの帰りだとすると、少し道順が違いやしませんか」
小定はあまり乗り気がしないような顔つきで、だめを押してきた。なるほど、本所へ帰る亀吉が鍋町からわざわざ和泉橋へ出るのはちょっとおかしい。
「いや、これはおれの想像だが、大亀はおそらく五十両手にして、ふっとこいつが百両にできたらと、もとの癖が出たんだろう。あの近所にはいい賭場があるにちがいない」
「それもそうですね。とにかく、一度洗ってみることにしましょう」
そうは答えたが、やっぱり口先だけのようだった。腕っこきといわれるだけに、自分の勘へぴんと来ないかぎり、容易に人のことばには納得しない気質があるのだ。
すると、それから五日ほどたって、神田佐久間町へピストル強盗があらわれた。びしょびしょ雨の九ツ過ぎ、烏金を貸す盲人徳の市という者の家へ賊がひとり押し入り、二十一と十八になる娘姉妹を縛りあげ、徳の市のほっぺたへピストルを突きつけて、金を出せと迫った。徳の市がしぶしぶ手文庫の中からあり金三百両ばかり出してやると、
「なんだ、たったこれっきりか。思ったより少ねえな」
賊はつぶやくようにいって、いきなり徳の市を縛りあげたうえ、姉娘のほうをなぐさみものにして立ち去ろうとした。徳の市がくやしがっ

て、
「ちくしょう、おぼえていろ。七代たたってやるぞ」
思わずこう浴びせかけると、賊はくるりと振り返って、一発ぶっぱなして出ていったという。
その銃声は近所でも聞いたが、時節がらだれもこわくてすぐには飛び出せない。近所じゅうで声をかけあってからいっしょに行ってみると、徳の市は胸を撃たれて絶命していた。姉妹は縛られている。町内じゅうの大騒ぎになったが、むろん賊はもうどっちへ逃げたか影さえ見たものはなかった。
翌朝、小定が係で現場を検視し、倹吉も立ち会った。賊は黒い布ですっかり顔をつつんでいたそうで人相はわからないが、中肉中背のがっしりした男で、黒っぽい着物のすそをはしょり、下には紺の腹がけももひきをはいていた。足袋はだしで、そこらじゅうに残っている足跡から見て、大きさは十文見当、男としては普通の足であり、中背というのにも符合する。念のために、医者に徳の市の胸からのピストルの弾を抜かせてみると、大亀のからだから出たものとぴったり合った。
「宇田川様、鍋町のほうはお見込みちがいのようですぜ」
それを見た小定がわらいながらいった。
「どうしてだね」
「おことばがあったんで、あれからすぐ洗いにかかり、ゆうべも家を張らしておきました。野郎はゆうべはひと足も外へ出なかったっていいます」
なるほど、それがほんとうならまったくの見こみ違いだ。大亀の下手人と、ここへ押し込んだ賊は同一人ということになるから、立花屋はなんの関係もないことになる。しかし、真人間になっていた亀吉が死のまぎわまで怪しい金ではないといっていたのから考えて、亀吉は少なくともきょうのような凶悪な強盗から五十両借

りるはずはないので、――過去はとにかく、相手も今は真人間になって相当裕福に暮らしている、だから五十両の無心をした。とすれば、立花屋のような男ではないかと想像されたのだ。
「で、立花屋の素姓はいくらかわかったかね」
「だいたいわかりました。あれは先代立花屋の甥とかで、八年ほどまえに養子に直ったんです。顔は人三化け七だが、なかなかの働き者で、高利というほどじゃないが、相当の金を大どころへ手堅く融通しているようです。酒もたばこもやらず、いまだにひとり者で、家には飯たきばばあがひとりきり、ほかに女っけはありません、そのかわり、めかけがほうぼうに三、四人ある。まだ四十二という男盛りだから、このほうは達者なようですよ」
「そのめかけってのはどんな女だ」
「浅草並木町に小料理屋を出しているのが仲居あがり、神田明神下に小間物屋を出しているのは後家だそうで、両国同朋町に待ち合いを出しているのは深川あたりの芸者あがり、みんな二十五、六から三十二、三までの大年増で、きれいな女だそうです。自分が人三化け七で、正面から行ってはとてももてる顔じゃない、金で縛って腹いせをするってやつでしょう」
多少常人と変わっているようではあるが、これだけでは特に怪しいという筋はない。ことに、ゆうべは外出しなかったとなると、この事件にはまったく関係がないことになるのだ。
「けっきょく、むだぼねをおらしたことになったかな」
倹吉はあとを小定にたのんで、惨劇の家を出た。青い顔をしてうなだれていた姉娘の器量があわれに目に残る。きょうの賊の手口は、いちばん憎むべき凶悪な部に類する。女をもてあそんだうえ、殺さなくてもすむ人を殺しているのだ。普通の神経ではできないまねだ。そして、こういうやつはけっして一度ではすまない。天網にかかるまでは何度でも罪を重ねて歩く。

「困ったやつがあらわれたもんだな」
それにしても、また香典の口ができた。倹吉は佐原屋をたのむつもりで、雨の中を茅町通りへ出ると、番傘を前かがみにしてせかせかと来る男が、あやうく突き当たりそうになりながら、ひょいと傘をあげた。
「ああ、こりゃだんな」
横山町の岡っ引き常次郎だったのである。
「常か、ちょうどいいところで会った。急ぎでなけりゃちょっと顔を貸してくれ」
「へえ、お供いたします」
目の前にちょうど茅町の自身番がある。そこへはいって上がりかまちへ腰かけながら、
「どうだ、常、川筋を洗ってみたか」
倹吉はさっそくきいてみた。
「へえ。わざわざお知らせにあがるほどのこともねえんで、ついでのときと思っていましたんですが、――なんでも、あの晩、永代の船宿で、つないであった船を一ぱい持っていかれたそうでして、二日目にその船が今戸河岸辺に流れているのを知らせてくれた者があったんで、おといの話できょうやっと取ってきたと話していました」
土間へ片ひざついた常次郎は、あまり洗いばえもしない話なので、申しわけなさそうな顔をする。
「いや、耳寄りな話だ。おぼえておこう」
倹吉は如才なくひとことねぎらっておいて、
「で、その後、甲州屋のことについて、なにか聞きこんだことはないか」
「身代限りになりそうだって話は、御存じですか、だんな」
「そんな話だな。なにか娘に支度金つきのいい縁談があるように聞いたが――?」
「それが妙な話なんでしてね、――相手は化右衛門てあだ名のある神田鍋町の質屋立花屋浪右衛門てやつですが、はじめ三千両支度金を出すような話があったそうです。それでも甲州屋は

返事を渋っていた。ところが、こんどああいうことになったんで、大番頭の忠造っていうのが自分ひとりの了見でもう一度先方へ話を持ちこんでみた。うむとうなずいたら、そこで主人を説きつける腹だったんでしょう。すると、先方は足もとをつけこんで、そんな話ならもうたくさんだ。金にころんでくるような娘など嫁にもらったってしようがない。しかし、せっかくおまえさんがそうやって足を運んでくれたんだから、千両まで出しましょう。ただし、嫁にもらうんではなくて、それでよければめかけにする、そういうあいさつだったそうです」
「ひどいことをいうやつだな」
倹吉は苦笑して、そのくらいなことはいいそうな男だと思った。話に聞いただけでも、ひどく常人とは違う性格を持っているようである。
「常、実はいま小定にわらわれてきたところだが、おまえもう一度立花屋をよく探ってみてくれぬか。たたけばなにかほこりが出る、おれはたしかにそうにらんでいるんだ」
小定とのきょうのいきさつをくわしく話して、倹吉はこう常次郎にいいつけた。
「すると、だんなは、徳の市殺しも野郎だ、そういうお見込みをまだ持っておいでになるんですね」
「そうだ。こういうとなにか小定にけちをつけるように聞こえるが、そうじゃない。小定のは年期をこめた定跡で行く。そのほうが確実なんだが、悪党には定跡以上のやつがいないともかぎるまい。おれは立花屋をそういう類例のない型破りと見るんだ。つまり、ゆうべはたしかに家にいたとは断定できない点を考えてみて、そこをもう一度突っ込んでみてもらいたいんだ」
「なるほど、ゆうべは張り込みがうっかりしていたとか、野郎のほうで張り込みのうわてを行ってうまく目をくらましたとか、そういうこともないとはいえませんね」
「そうだ。そして、立花屋がそういう種類の悪

党だとすれば、近いうちにまた必ず抜け出すにちがいなかろう」

「ようござんす。ひとつやってみましょう、だんな」

　常次郎は功名心にかりたてられるように目を輝かした。

「そうか、たのむ。如才はあるまいが、相手にけどられぬよう、金と人手は遠慮なく使うがいい」

　とりあえず倹吉はなにがしの手当を与えて激励することを忘れなかった。

8

　四月十一日未明、倹吉は千住大橋のほとりの、とある町家の軒下に立って、それとなくあたりを見張っていた。その付近どこからともなく三三五々集まってくる人々が、おもいおもいの場所を選んで土下座を始めている。けさ上野大慈院の謹慎所を出て江戸を去る前将軍を、ここで見送ってよそながらなごりを惜しもうとする人たちであった。

　まだ暗くてだれの顔もわからないし、どのくらいの人が集まっているかも見とおせない。人人はただひっそりと暁暗の底に黙して、よけいな口をきこうとする者さえなかった。たまたま暁の霧にちょうちんの光がぼうとにじんで、だれか近づいてきたなと見ていると、

「上さまお通りはまだでございましょうな」

　品のよい老齢の武士が、そこにすわっている人に小腰をかがめてたずねるのであった。

「まだでござる」

　問われた人がことばすくなに答える。

「お、それではまにあいましたか」

　老人はほっとしたように会釈して、供の者にちょうちんを消させ、人々の後ろへさがってやがて同じように土下座をしていた。

　むだ口はきかずとも、互いに父祖幾代あいついでわが主人と仰いできた将軍家の末路をいた

み、その悲痛なる退去をおのれの目で見送らなくてはいられない心の誠は、みな同じである。それら同志の土下座の数がしだいに多くなるにつれて、人々の無言の感傷も自然にたかぶってくるらしく、なかにはときどきすすり泣きの声をもらす者さえ出てきた。

　暁暗はまだ明けようともしない。江戸はちょうど若葉から青葉に移ろうという季節、おりから荒川を横切ってほととぎすの声が二声三声、上野の森のあたりへ消えていったりした。

「天正十八年八月朔日、徳川家康江戸城にはいり、慶応四年四月十一日、徳川慶喜江戸の地を去る」

　そういう感慨がふっと倹吉の胸に迫った。この間実に二百七十有余年、徳川氏の栄華は今、一朝にして歴史のかなたへ押し流され去ろうとしている。多くの旗本たちが暗澹たる悲憤の情に、前後もなく激昂したくなるのもまた無理はない。

　しかし、前将軍が死一等を減ぜられたうえ、生家水戸へ謹慎という寛与に処せられ、きょう一兵にも血ぬらず、一砲をも発せず、無事に江戸城を明け渡すまでにこぎつけた人々の労苦もまた、ひととおりではなかった。が、しょせんは瓦解ときまっている徳川幕府の運命である。だれがどこで、どの程度に食い止めえたからといって、とうてい幕臣全部を納得させる結論は出てこようはずはない。

（現実というやつは、常にひどい顔をしているものなんだ）

　その一面を倹吉はきょうもまた目前に見ようとしているのだ。

　ふいに、ひたひたと二、三人小走りにお道筋を駆けてきた者があって、大橋のたもとで立ち止まった。くるりと振り返って、手にしたちょうちんを大きく二、三度いま来た道のほうへ振ってみせて、ふたたびひたひたと大橋を駆けわたっていく。

「お通りだ」
　声なき声が一瞬しいんと人々のえりを正さしめた。思わず倹吉もそこへすわって両手を突く。ひえびえとした大地の感触だった。
　東の空がわずかにほんのりと白みかけて、対岸の千住は、家並みも、森も、まだ黙々と一色に眠りからさめやらぬふぜいだが、明けるに早い荒川の水だけがいぶし銀を見るように夜明けをそれと映し出してきた。
　まもなく、霧深い静寂の中を、粛々とした歩行のけはいが耳に感じられた。少しく目をあげると、先頭に立つ前将軍は黒もめんの羽織に白小倉のはかまをつけ、麻裏草履、髪もひげもあたらぬ六十日間謹慎そのままの姿で、顔色見るからに憔悴、いま目の前のお道筋をしょうぜんと歩み去らんとする。従う者は、若年寄浅野美作守以下数士、少し離れてこの行を水戸まで護衛する中条金之助、大草滝次郎ら精衛隊の十数士にすぎぬ。
「おなごり惜しゅうございます」
　土下座の中からだれか、思わず出たというような断腸の声を漏らした者がある。
「お別れ申し上げます」
「さぞ御無念、御無念にござりましょう」
　ううっと幾人かの嗚咽の声が急に高まってくる。
　前将軍はわずかに振り向いて、ずっと土下座の人々を見わたしながら、これら惜別哀別の声に軽く会釈された。それを見た人々は、はっと胸うたれて、一様に地に平伏してしまった。
　その間に将軍は大橋へかかり、明けそめれば早い初夏の朝霧の中を、ひと足ずつ進んでいく。橋をわたりきればすでに江戸の地でなく、水戸街道になる。国滅びて山河あり、人むなしゅうして楼閣存す。橋上の将軍はこの江戸最後の一点にかかって、はたしてはるかに父祖伝来の城郭を振り返りみたであろうか。
　鶏鳴がおりから上げ潮の荒川をはさんで、しきりに夜明けを告げかわしている。倹吉は懐紙を出して、そっと涙をぬぐった。うしろで供の勝平がはなをすすっている。

　この朝、江戸城はまた無事に官軍に明け渡された。夜来雨あり、勝安房は諸士の動静をうれいて前夜は家へ帰らず、雨をついて単騎城外を巡視すること一、二回、ついに夜明けにいたったという。
　さいわい城下においては諸士の暴発を見なかったが、江戸開城を快しとせぬ麾下旗本幕兵の脱走は相当の数にのぼった。
「その当時の江戸における脱兵の人気というものは、それはおそらく想像のほかであろう。その理屈を尋ねてはちとこまるが、つまりは、大義だの、名分だのというのを離れた感情いっぺんの所作とか現象とかいうもので、すなわち官軍は強い、脱兵らは弱い、というその是非もない人情と、も一つは三百年のうんぬんなどもいくぶんかその中に含まれていたのだろうが、とにかく順逆正否の論は抜きにして、当時の脱兵の人気というはすばらしいものだった。現に、旧幕士の青年にして、そのころ都下にぶらぶらしている者などをば、あのだれさんは脱走ひとつしえないでと、子もり娘までが指をさしてあざわらったほどのものである。されば、ある人などは、その老年の後のひとり子、それを某隊（脱兵の）へ連れてきて、両親そろって涙を流して、この何太郎をなにぶんお仲間に願います。わたしも皆さまがたのお供をしたいが、この老齢ですからわざと控えます。ただし、これが討ち死にと聞きましたら夫婦とも死ぬ覚悟でございます。これも手放したくはございませんが、せめて人間なみの者にしてやりたいと存じますばかりで、――と、ぼろぼろ泣きながらひそかに頼んでいたところを、わたしも見たことがあった。――しかし、一方では、小料理屋、さかり場、吉原、その他四宿（千住、板橋、新宿、品川）の遊女屋、総じてその類の商売はなかな

かにぎやかで、つまりそれは、官軍のほうは知らぬが、わたしどものほうは、毎日諸方へ寄り合っては妙な相談に夜間までふける、なに、いつまで生きているものかというふうで、そのくずれが多くそこらへしけ込む。それからであったのだ、そのころ夜中に官軍が切られた、浪士が殺られたというのは、たいがい右の悪所場の帰途などであった様子で、しかもその衝突の激しかったのは、吉原土手、浅草広小路から上野山下辺、すなわち官軍と彰義隊との落ち合う場所などが特に血なまぐさかったのだ」(『五十年前』より)

江戸城明け渡し以後の江戸は、こんな状態であった。

倹吉は、前将軍を見送った帰途、ちょうどいいおりだから湯島の岡部家をたずねてみることにした。倹吉が伯母さまと呼んでいる岡部の未亡人民代は、相当勝ち気なひとである。あるいはせがれ数馬に脱走を強要しているようなことがないともいわれない。できればきょうの大勢を説いて納得させておきたいし、例の大崎の松源の一件もある。このほうもそれとなく注意しておいてやる必要があると思ったからだ。

「薩賊討つべし」

そういう声で殺気だっている彰義隊の膝下、上野山下で軽い朝飯をすませた倹吉が、湯島天神前の岡部家をたずねたのは、かれこれ四ツ(十時)まえであった。門のそばの塀越しに大きな柳の木が枝をたれている屋敷がそれで、来てみると珍しく門扉が八文字に開いている。

「ほう、なにかあるのかな」

そう思いながら玄関に立って案内を求めると、顔見知りの若党が取り次ぎに出てきた。

「伯母さまにお目にかかりたいのですが、どなたか来客中かね」

玄関に当時としては珍しい長ぐつと、真新しい雪駄とがきちんとそろえてあるのだ。

「はあ。しばらくお待ちくださいまし」

若党が引っ込むとまもなく、娘の久枝が出てきた。白を重ねた振りそでに正式に帯を結んで、高島田という正月でも来たような盛装ぶりである。ことしはたしか二十歳、父久左衛門がこの二、三年江戸におちつかなかったのと、母親の望みがあれこれと多すぎたために、ついに婚期を逸した感はあるが、それだけにまた評判の美人でもあった。

どっちかといえば倹吉は戦死した伯父久左衛門にその率直を愛されていたので、気位の高い夫人は他の一般旗本がそうであるように、八丁堀を不浄役人として一段下に見たがる潔癖があった。自然、主人留守がちのここ二、三年は遠のきがちになっていたので、

「お越しあそばしませ」

久枝はすっかり他人行儀に取り澄まして三つ指をつく。

「やあ、ごぶさたしました。だれかお客さまのようだね」

「え、大崎さまと、部下の松田さまとかおっしゃるかたがおみえになっております」

「ほう」

この長ぐつはたぶんそうではないかと思っていたが、それにしても久枝の盛装はどういう意味だろうと見ていると、

「どうぞお上がりくださいませ。きょうは数馬が彰義隊へ加盟させていただくことになりましたので、その立ち祝いのまねごとをしておりますの。よろしかったら、ちょうどいいおりだから列席していただくようにと母も申しております」

久枝はしんけんな顔をあげた。忠告しようと思ってきたことが、偶然二つながら実現しているのだ。

「へえ、数馬さんが彰義隊へねえ」

「なんですか、お昼までにまいって、頭取のかたにお目にかかるのだと申しています」

「大崎もはいるのかしら」

「いいえ、あのかたはもう先に加盟しておいでになります」
「ああ、そうか。その大崎の手引きで、こんど数馬さんがはいることになった、そういう順なんだな」
　困ったなと、倹吉は思った。理屈はともかくとして、母や妹にとってはたいせつな跡取りを死なせにやる覚悟の出陣祝いなのだ。だから、こうして盛装まで凝らしているその門出にあたって、あえてけちをつけるようなまねをすべきだろうか。
「倹吉さんはどうおきめになりましたの」
　男は当然脱走すべきものときめているような久枝の口ぶりである。
「とにかく、伯母さまにお目にかかろう」
　倹吉は腹をきめた。現実のむごさをこの温室育ちの一家に知らせてやるなら、今をおいてほかに機会はない。どっちみち今後にきたるべき幕臣の運命は相当苛酷なものときまっている。今からそれをじゅうぶん知らせておいてやるのが、ほんとうの親切かもしれぬ。

9

　立ち祝いはいつもの書院の間で行われていた。床の間に故陸軍歩兵頭岡部久左衛門の位牌を安置して香華がたむけてあるのは、夫とともにせがれの門出を励まそうという夫人の心づかいからであろう。
　倹吉は夫人に軽く会釈して、まず位牌の前へ進む。香をたき、しばし合掌して礼拝をすませ、末座へさがってあらためて一同にあいさつをした。床を正面にして、右手に当家の嫡子数馬、次に夫人、久枝と三人並び、数馬と向かいあった左手の上席に自慢の士官服をつけた大崎彦之進、その隣が初対面で松田松五郎と紹介された。大崎の部下で、やはりこんど彰義隊へ加盟した彦根の浪人だという。年ごろ三十七、八、いかつい人相の左のほおに刀傷があって、身なりは羽二重物のりっぱな羽織はかまだが、どこか板につかぬ下品なところがある。そこは役目がら倹吉はくさいやつだとひと目で直感した。そして、はっきりと思い出したのである。この男は、先月十三日の朝、甲州屋の前の群衆の後ろに立って町役人をひやかしていた三人連れの歩兵のうちのひとりで、そのときはほかのふたりと同様、たしか茶袋歩兵ばかまをはいていたはずだ。
「倹吉さん、今すぐお膳のしたくをさせますから、さあお席についてください」
　ふいの闖入者でちょっと座のしらけたのを取りなすように、夫人は傷松の隣の席をさした。年よりはずっと若々しく、切り髪もまだつややかな未亡人ぶりである。
「いや、ここでけっこうですよ、伯母さま」
　倹吉は床を正面に見る末座から動こうとしなかった。えたいの知れぬ傷松などの下座へさがるのは恐れ入るし、どうせきょうは憎まれ役をつとめなければならぬ。みんなの顔がひと目で見られる位置にいたほうが、にらむにも、にらまれるにもつごうがよかろうと思った。
「そうね、そこでよければそこになさい。あなたはどうせ変わり者なのですから」
　本来なら大崎の上座へおくべき男である。夫人もさすがに気がついたのだろう、たってとはいわず、うまいところへ変わり者を持ち出して、
「梅、皆さまにお酌を、――さあ、大崎さんも松田さんも御遠慮なくお過ごしなさいませ。わたしどもは女でいっこうにお相手はできませんが、今この人が代理をしてくれるそうですから」
　と、如才なく座を取り持っていく。給仕の腰元がちょうしを取って、すぐに大崎の前へ進んでいった。それを潮に、
「隊長、拙者はひと足先に失礼しましょう。もうじゅうぶんいただきました。山へ帰ってきょうの支度もありますから」
　傷松がなにげなさそうに腰をうかす。――さっそく逃げるなと、倹吉は腹の中でおかしかっ

た。こっちの顔に見覚えがあるかないかは知らぬが、身におぼえのあるやつなら見とおしの席へ八丁堀にすわられては、こそばゆくていたたまるまい。
「それにしても、まだ早いじゃないか」
「いや、早いほうがいいでしょう。拙者は先へ行って、万事数馬さんを迎える用意をしておきましょう」
「それもそうだな。じゃ、そうしてもらおうか」
大崎もしいては止めない。
「まあよろしいではございませんか」
口ではそういったが、夫人にしてもあまり引き止めておきたい客がらではなかったろう。それでもわざわざ立って自分で玄関まで送り出していったのは、今後せがれが世話になると思えばこそであったにちがいない。
「お酌しましょう、倹吉さん」
夫人が立った間に、倹吉の膳部が出たので、もてなすつもりらしい、久枝が立ってきてちょうしを取りあげた。
「恐縮――」倹吉は笑ってうけながら、
「久枝さんは伯父さまにお酌をしつけているからね」
案外久枝の手ぎわのいいのに感心してみせた。
「倹吉さんはおとうさまにお酒を教わったようなものでしょう」
「まあ、そうだな。伯父さまの酒はいつも話題が豊富で、たのしい酒だったね」
「倹吉さんはよく議論をなすっていたようですね、条約がどうかとか、万国公法がどうだとかと」
はなやかなりし父在世中の団欒が思い出されるのであろう、久枝の顔に思いがけないいきいきとした感情があふれてきた。
「いや、わしのはただ生意気でなまっかじりを振りわしていたのさ。そこへいくと、伯父さまのは深かった。ちゃんと幕府今日のあることを

予言して、政権一途に出るようになれば開国でなくちゃ納まらぬ。世間は夜があけてかんかんお天道さが照っているのに、一軒だけ雨戸を締めて、おれの家はまだ夜が明けないと力んでみたところでどうなるもんじゃない。だいいち、家の中のあんどんより、すきま漏る日光のほうがいやでも明るくならあねって、歯切れがよかったからね、伯父さまとくると」
その才物を先代に見こまれて、小身の家から岡部家のひとり娘、今の未亡人の婿にもらわれた伯父であった。
「なんのお話です」
夫人が席へもどってきながらきいた。
「伯父さまの酒の話をしていたところです」
「飲みだすとあと引き上戸でね」
家つきの夫人は、相当な女天下であった。飲むと大あぐらで談論風発という下品なまねは、あまり好まなかったのである。
「宇田川君、町方の動静はどういうふうだね」
大崎が自分のほうからそれとなく水を向けてきた。これはじゅうぶん久枝の美貌に下心があるらしく、話題をおのれのつごうのいいほうへ取りあげて、得意の才弁をふるってみせたいのだろう。
「動静って、なんの動静かね」
倹吉はわざとそらっとぼける。
「八丁堀は恭順か、脱走か、どんな意見です」
大崎ははっきりとこっちを向いた。一同の目がそれとなく倹吉に集まる。
「そういえば、大崎君、貴公はこのあいだ松源で激論をやったそうじゃないか」
倹吉は軽くかわした。
「よく知っているね。あのときは数馬さんといっしょだった。たしか関口某とかいう旗本だったね、数馬さん」
はたして、相棒は数馬だったのである。数馬は昂然と若々しい目を輝かしてうなずく。
「ありゃ勝一派の腰抜け恭順党だ。いたずらに

朝敵という薩長がかってに押しつけてきた越権に恐れをなして、やれ外国がどうの、名分がどうのと理屈をつけ、一にも恭順、二にも恭順、その恭順の結果はどうなったか。上さまは水戸へ謹慎、城は明け渡せ、軍艦もよこせ、いったいあとに何が残るんです。ばかばかしいにもほどがある。かれらは今日なんの面目あっておめおめと生きていられるんですか、実に慨嘆にたえません」

半分は女たちに聞かせているような大崎の気炎である。

「すると、彰義隊の趣旨は、城を取りもどして、もう一度上さまを江戸へお迎えしようというにあるのかね」

「むろん、その気概はみんな持っている。われわれは断じて薩長の不法に屈服はできないのだ」

「戦えば必ず負ける、そうわかっていてもやるか」

「やる。われわれは三百年の恩顧に一死ただ報ゆるのみだ。ねえ、数馬さん」

「そうだ。薩長の横暴は断じて許せぬ」

若いから数馬は生一本に命を捨てるつらだましいである。

「三百年の恩顧というが、きみたちが死んで喜ぶのはだれかね」

「喜ぶよろこばないの問題じゃない。われわれは同志相寄って、ただ臣子としての義を果たそうとしているまでだ」

さすがにずるい大崎は容易にすきをつかませない。

「そうか、死ぬのは諸君のかってだが、なるべく三百年恩顧の主人へ迷惑をかけないほうがいいね」

「倹吉さん、きみはわしの門出にわざわざけちをつけにきてくれたのか」

数馬が憤然と色をなして詰め寄った。

「いや、けちをつけにきたわけじゃないんだ。実は、こんなこともありはしないか、それならぜひ引き止めなければならないと思って寄ったんです」

こういう結果になるんだろうとは、あらかじめ覚悟していたことである。倹吉はあらためて数馬のほうへ正面をきった。

「忠告なら断る。せっかくだが、このまま帰ってくれたまえ」

「恨みますよ、倹吉さん」

夫人まで顔色をかえているのである。

「伯母さま、それはいけません。数馬さんは岡部家のたいせつな跡取りだ。一時の感情から、烏合の衆の中へおとしてむだ死にをさせてはなりません」

「宇田川、貴公は彰義隊を烏合の衆というのか」

一家じゅうの反感を見てとって、大崎は内心ひそかにほくそえんでいるのだろう、すかさずことばじりをつかんできた。

「けさまでの彰義隊はそうでなかったかもしれぬ。曲がりなりにも江戸の治安維持、前将軍家御警衛という任務を持っていたからだ。しかし、今暁、上さまは江戸を退去され、江戸の地また官軍の支配下に移るのだから、彰義隊はいちおうその任務を終わったことになる。当然解散しなければならぬはずだ。それを解散せずして、もし貴公がいうがごとき主張のもとに行動をつづけるとすれば、これは目的も名分も失った烏合の衆といわれてもしかたあるまい」

「いや、りっぱに名分もあれば目的もある。ただ、貴公らごとき腰抜け恭順党に通じないまでの話だ」

「その目的とは打倒薩長、名分とは三百年恩顧に報ゆるの義、貴公はそういいたいのだろうが、――それではきくが、今日以後彰義隊を維持していく費用、薩長と戦いをする戦費はどこから出るんだね」

「さあ、金のことなんか知らんね」

大崎はけがらわしいというように冷笑する。

「知らなければ教えよう。軍費の一部は、行きがかり上、上野山内の寺々からも出るだろう。また、義理があるから多少は親藩諸侯からも出る。が、それではとうてい足りない。その足りない大部分の金が、江戸市民ないしは近在の豪家からむりにかり集めなければならんのだ。場合によっては刀にかけてまで強奪してこなければならない。そういう何千何百という百姓町人を泣かせ、苦しめた金でいくさをやって、自分だけ義だの恩だのと、貴公たちはひとりでうぬぼれようとしているのだ」

「倹吉さん、旗本の家に生まれた男が、お家のために死のうとするのがなぜ悪いのでしょう。あなたのお話をお伺いしていると、まるで数馬たちがなにか悪いことでもたくらんでいるように聞こえますけれど」

久枝ががまんしかねるというように青い顔をあげた。

「正直にいえば、今日薩長を敵として戦うことは、けっして主家のためにはならないのです。ただに徳川家のためにばかりでなく、日本はいまうちわげんかをしていられないときになっている」

「では、なぜ官軍は江戸を焼こうとしたのです。戦争は薩長のほうから仕掛けてきたのではありませんか」

「それは、江戸を焼かなければ、つまり徳川家をほろぼしてしまわなければ、国が一つにならないと見た。いいかえれば、徳川幕府の力ではもう新しい日本はやっていけない。世界の日本になるには、在来の古い政治のやり方ではまにあわない。これを新しくし、日本のほんとうの力を伸ばすためには、将軍家という古い勢力がじゃまになる。だから、少し無理といわれ、無情と恨まれても、この際は思いきって徳川家をつぶしてしまう、それが廟堂の腹だった」

「倹吉さんは、そんなにまで、そんなにまで薩長にかってにされて少しもくやしいとはお思いにならないんですか。あんまりだと思います」

久枝は急にうつむいて、両手で顔をおおったと見る間に、その白い指の間からわくように涙が流れ出てきた。旗本の家に生まれた娘として無理はないと思う。

「帰ってくれ、倹吉さん。わしはこれ以上、門出のじゃまはされたくないんだ」

姉の涙に誘われたように、数馬が悲痛な顔をして叫んだ。

「そうか。帰れといえば帰る。だが、数馬さん、これだけは耳に留めておいてくれ。幕臣として薩長の苛酷なやり方を憎む、それはわしだって同じことだ。わしばかりじゃない、上さまにしろ、勝安房にしろ、憤慨したい気持ちは皆同じだろう。まして、上さまは累代尊皇の家がらとして知られた水戸家から出て、尊皇の志厚ければこそ去年大政奉還の御英断にも出られた。その上さまを、それ違勅の、それ不臣のと寄ってたかって頭を押さえ、すねをけらんばかりにことごとにいじめ抜いて、そのあげくが朝敵にまでされたのだ、さぞ御無念であらせられたろう。これがわれわれ同様の軽い御身分なら、なにをかってなことをぬかしやがると、とっくに堪忍袋の緒を切っている。それが上さまにはできない」

話しながら倹吉は、けさ目のあたりに見たしょうぜんたる前将軍退去の姿を思いうかべ、我にもなくぐっと胸へこみあげてくるのを感じた。

「それができないのは、相手がこっちの堪忍袋の緒を切るときを待っているとちゃんと読めているからだ。武力できたらあくまで朝敵にしてやろう、たとえ勝っても北条足利の汚名はまぬがれまい。それをねらっている相手だ。万一そんなことになったら、十五代つづいた徳川家の名誉はどうなる。それが一つ。もう一つは、幕府は二回の長州征伐で苦い経験をなめさせられた。武威すでに落ち、人心また徳川を離れてい

る。だれの罪でもない、こりゃ時勢だ。徳川が天下に覇をとなえていられる時代は去ったのだ。現に、鳥羽伏見では、たった三千足らずの薩兵に、その十倍もある幕軍が勝てなかった。あえてわしは負けたとはいわぬ。しかし、勝てなかったのは事実だ。そして、あのときの諸藩の向背を見たまえ。明らかに天下二分の形勢が見えている。これがいざ関ガ原ともなれば、まだどのくらい裏切りが出るかわかったものじゃない。それをむりに押して、箱根を境に東と西に対立するとなれば、いきおい外国の勢力を借りなければならない。漁夫の利を占めるのはだれだ。しょせんは日本あっての薩長であり、徳川じゃないか。早い話が、日本危うしとなれば、日本人には薩長も徳川もあったもんじゃなくなる。だからこそ、上さまはじっと忍びがたきを忍びなされたのだ。徳川家の家名だけをという最後の一点を残して、すべてを、御自身の命まで投げ出されたのだ。ここをよく考えてもらいたいんだ。なぜそうしなければならなかったか、その御苦衷をわれわれはよく考えなけりゃならないのだ。万一ここで、だれにもせよ戦争を好むものがあるとすれば、それはせっかく達識の人々の努力によって一度救われた江戸を焼き、百万の市民を泣かせたうえ、主家にまで累が及ぶ。命を投げ出して三百年恩顧のために戦う義は一つ、その一つの義のために主家が迷惑し、罪なき国民を戦火に苦しめ、しかも遺族まで今後五年十年と世間から恨まれなければならないとしたら、その義はあまりにも小さな意地ということになりはしないか。それも数馬さんのように純情一徹から出る意地ならまだいい。しかし、彰義隊のうちには、それを利用し、食い物にしておのれの立場をよくしようとか、この機会にひともうけしてやろうとか、そういう不純分子が相当多いとみなければならぬ。したがって、一歩誤れば義のための軍用金狩りがおのれの遊蕩私欲のための強盗に堕するおそれさえけ

っしてなしとしないのだ」

　倹吉はわざと大崎の顔を見た。が、つごうの悪いときは馬耳東風、平気でよそが向いていられるずぶとい男なのである。

　しかし、けっきょく倹吉の忠告は、岡部家の家族にとって、せっかくの門出にけちをつける、それ以上にはうけとれないようだ。数馬は帰れといわぬばかりににらみつけているし、夫人はじっと伏し目になったまま顔をあげようとしない。このうえことばをつくしたところで、それはいたずらに憎悪をあおることになるばかりだろう。この辺が切り上げどきかも知れぬと考えたので、倹吉は床の間の位牌のほうへそこから合掌をすませて、

「伯母さま、とんだおじゃまをしました」

　一礼して静かに立ち上がった。

　それでも久枝が黙って玄関まで送り出してきたのは、従来の交誼に対してせめて最後の礼儀をつくす意味だったにちがいない。

「久枝さん」

　式台に降り立った倹吉は、おそらくこれがことも当分の別れになるだろうと思ったので、なにげなさそうに振り返った。

「よけいなおせっかいかもしれぬが、大崎はけっしてためになる人物とは思えない。あまり家庭のことに深入りさせないほうがいいよ」

　そこへ三つ指をついていた青い顔が無言でうなずいた。

「幕臣はこれからしばらくの間、だれもかれも苦労しなければならないんだ」

「倹吉さんのほうはどうなりますの」

「いずれ近いうちに官軍のほうへ引き渡すことになるだろう。われわれはむろん脱走はできない。もし死に場所があるとすれば、江戸市民の治安維持のためのみにあるので、それを乱そうとするものがあれば幕臣でも許せない。その節は断然戦います」

「倹吉さんのおっしゃることはよくわかるよう

な気がするのですけど、納得はできません。久枝はどうしてもくやしゅうございます」

「そこをがまんするのさ。おそらく、いちばんくやしいのは上さまであらせられたでしょう。きょうの明けがた、寂しく江戸の地を去って、水戸へ向かわれました。途中お見送りした者は皆泣いた。しかし、泣いて上さまをお見送りした者の数は、いったい幕臣中の何割にあたるだろう。むろん、一割にもあたるまい。久枝さん、むごいことをいうようだが、あとの九割何分かの幕臣は、だれのためにくやしがり、だれのために泣いているんだろうね。みんな自分のためにじゃないだろうか。皮肉でいうんじゃないよ。それが世相なんだ。その私憤を去ってみなければ、ほんとうのことはわからない」

それは残酷なむちであったにちがいない。久枝ははっとして、あきらかに困惑の目を伏せた。

「理想をいえば、これからわれわれはお互いに私憤や私欲を捨てて、冷静に助けあっていかなくては、この大きな変動はとても乗り切れないんだが、人間はせっぱ詰まらないと、なかなか自分の足もとのことには気がつかないんでね」

そして、倹吉はぼうぜんとしている久枝に別れを告げて、岡部家を辞した。

10

官軍は江戸城を接収したあとも、市民の取り締まりはそのまま勝安房に委託し、田安家がその責任を持って、実際の巡邏警衛は彰義隊がこれにあたっていた。彰義隊は朝廷に対しては恭順であるが、薩長の勢力に対しては絶対にあいいれぬ反感を持っている。

一方、官軍のほうでも、兵を江戸へ進めた以上、その勢力範囲の地域は自分の手で巡邏警戒の必要がある。自然、江戸は上野を中心として筋違橋以北は彰義隊、江戸城付近から品川へかけては官軍というように、きわめて寄り合い所帯で治安を保つ形になった。

当時の彰義隊は、頭取渋沢成一郎が天野八郎と意見を異にして脱隊し、本多邦之輔が頭取になったが、これがうまく納まらず、まもなく小田井蔵太と池田大隅守がこれに代わった。そして、実際の勢力は依然副頭取の天野八郎が握っていたのである。

元来、彰義隊は江戸の旗本が江戸のために立ったという形にもなるので、江戸市民には非常に人気があった。ことに、城明け渡し後は、悲憤の脱走組がぞくぞくと加盟してくる。そこで、隊ではこれらの部署を分け、一組みを二十五人として、組ごとに組頭、副長、伍長をおき、二組みを一隊として隊長ひとりをおいた。それが一番隊から十八番隊まであってこれが本隊となり、別に遊撃隊とか歩兵隊とか隊号を持ったものが十数隊できて、総数二千あるいは三千とも号した。これら多くの士が毎日隊伍を組んで、堂々と市中を押しまわす。それでなくてさえ官軍には反感を持っている連中だから、いきおい各所で衝突が起こり殺傷事件が頻発するのは当然のことであった。

官軍からいわせれば、この彰義隊のふるまいは目にあまる暴状である。しかし、西郷隆盛はしばらく静観していた。せっかく無事に江戸開城のことがすんだ直後、ふたたび府内で戦争をやるのは好ましくない。同時に、官軍の士気も開城を一段落として多少ゆるんできている。地の利に明るいうえに、市民を味方としている彰義隊を討伐するには、とうてい現在の兵力では足りないと見ていたからであった。

もう一つは、新政府の徳川家に対する処分問題がまだ決定していなかった。だいたいは禄石百万石、地所は駿河国一円に江戸城を含む武蔵、相続人は田安亀之助（家達）ときまってはいたが、この発表を先にするか、彰義隊討伐を先にするかは、また大いに議論のあるところであった。

当時南北両奉行所のほうはどうであったかと

いうに、このほうは開城直後まだ先鋒隊本営が品川の東海寺にあったとき、与力のうちからおもだった者三、四名、至急本営へ出向くようにという命令がきた。

南からは筆頭佐久間弥太郎、吉岡駒次郎、北からは秋山久蔵が出頭すると、官軍のほうでは参謀海江田武次、木梨精一郎のふたりが出て応接し、あらためて町方の取り締まりを委任されたうえ、本営への出入手札、官軍の肩章錦布などをわたされた。実は、江戸の市民と直接深い関係のある与力同心に、彰義隊などのお先棒をかつがれてはこまる、そういう腹が官軍のほうにあったからである。

この年は閏四月があって、四月が二つ重なる。春そうそうから天候不順で雨が多く、閏四月にはいるとまるで梅雨のように毎日びしょびしょとよく降りつづいた。江戸の市中はいたるところどぶが開き、特に下谷から根岸、上野かいわいの低地は水がついて、脛を没するというありさまである。

軍用金狩りや強盗辻切りはあいかわらず多かった。そのうちでも甲州屋へ押し入った四人組は、このひと月の間に三回ほど町家を荒らし、例のピストル強盗は六回出没している。どっちもさいわいその後は殺人はなく、四人組のほうはだいたい川筋に近い町を荒らして、その夜は必ずどこかの船が見えなくなり、翌朝きまって今戸河岸あたりに捨てられている。そこへ目をつけた小定は、躍起になって川筋一帯に網を張り、昼夜となく岡っ引きを激励しているようだが、いまだにこれと思う獲物はひっかからないという。そこへいくとピストル強盗のほうは荒らす範囲が広く、本郷、下谷、浅草、神田、日本橋と各方面にわたって、殺人こそないが六回のうち四回まで女に手を出している。ねらう家も小金持ちといわれる比較的小人数の家ときめているようで、今のところだいたい五日おきぐらいの見当であらわれ、雨の夜にかぎっていた。

横山町の常次郎は、あれ以来根気よく立花屋を張り込んでいるが、過去六回ともピストル強盗のあった夜は、主人浪右衛門は家にいたようだという。たしかにいたと断言しきれないのは、踏み込んでいって自分の目でそこにいるのを突きとめるわけにはいかない仕事なのだ。裏表に張り込んでいて浪右衛門が出かけるのを見かけなかったから在宅と見るほかはないというまでのことで、その張り込みそのものからして絶対に完全であったとはいいきれないものがあるという。

現に、第一回のときは、四ツ（十時）ごろ店のくぐりから客がひとりはいった。まもなく帰っていったが、これははじめから客と見ていたから、べつに跡はつけなかった。その晩ピストル強盗は本郷のそば屋へ押し込んでいる。これは完全な見張りだったとはいいきれない。一度はやはり四ツ前後に表から浪右衛門らしいやつが出てきた。あとを下っ引きに任せて、常次郎がつけると、明神下の妾宅へはいり、半刻（一時間）ばかりして店へ帰った。妾宅を出るときめかけが門口まで見送って出て、だんなによろしくといったので、はじめて浪右衛門でないことがわかったが、この間じゅう店のほうの張り込みは多少気がゆるんでいたのは当然で、六回が六回ともよく調べてみるとなにか事件があって、そこに手落ちらしいものが感じられる。

「それにね、だんな、あの野郎は魔物みたいなやつで、真っ昼間あとをつけていくうちに、ひょいと姿をくらましちまうことがあるんです。どうもこっちの張り込みを感づいているんですね。そうかと思うと、こっちの気のつかないうちに、いつの間にか家を抜け出していて、そとからふらりと帰ってきやがる。とにかく、一筋なわでいくしろものじゃないようでござんす。しかし、あっしもその後はいろいろくふうしてやっていますんで、なあに、こんどこそきっと、しっぽをつかまえてやらずにはおきません」

常次郎はそんなふうに意気ごんでいた。
どうやら、敵のほうが一枚うわてのように思われるが、せっかく意気ごんでいるのだからなんとか常次郎にてがらをたてさせてやりたい。
その日はまえにピストル強盗が下谷へあらわれてから五日めにあたり、朝からの雨は夕がた近くになっても上がりそうなけはいさえなかった。倹吉は両国まで出向いたついでに、この十日ばかり佐原屋がかぜで寝こんでいると聞いたので、それを見舞ってから宵過ぎごろ常次郎の手配りを一度見ておいてやる気になり、久しぶりで柳橋の船宿むさし屋ののれんをくぐった。いつもならまだ日のある夕方だが、店の中はことにどんよりと薄暗い。
「おや、いらっしゃいまし」
お柳が迎える声に、向かい合って話し込んでいた座敷帰りらしい妓がふと振り返った。夕やみに艶冶なお蘭の顔である。
「毎日よく降るな」
倹吉は勝平が差し出す手ぬぐいで足をふいて、お柳が気軽に自分の座ぶとんを裏がえしてくれた炉の前へすわった。お蘭と差し向かいになる。もう炉ばたという時候ではないが、釜の湯を冷やさぬほどの炭火がなんとなく恋しい薄冷えのする夕暮れだった。
「お柳、三吉はいるか」
「ちょっと永代まで出ていますが、もうすぐ帰る時分です」
「そうか。帰ったら東橋まで支度をさせてくれ。――迷惑なら二階へ行くぜ」
八丁堀が店先にとぐろを巻いていては、ほかの客がけむたがる。その辺のことはよく心得ている倹吉であった。
「だんな、お逃げなさらなくたってようござんしょう」
差し向かいになったときからまともにじっと顔をみつめていたお蘭が、急に意地の悪い目をした。その目のあたりからほおへかけてほんのり酒気を漂わし、水ぎわたった座敷着姿ながら、どこかからだのしまりがゆるんだ姿態である。

「いいきげんだな、お蘭」
倹吉はわらいながらお蘭を見かえした。
「ええ、すいませんが少し酔ってます。でも、酔ってるから申し上げるんじゃありません。はばかりさま、お蘭はそんなお酒の力をかりるなんて、そんないくじのない女とは違うんです」
「で、おれに何がいいてんだ、おとらさん」
「こんな大とらですいませんけど、ぜひだんなの奥さんにしてくださいまし。こちらのおかみさんから、ちゃんとうかがいました。みえで芸者なんかしているより、早くおれの女房になったほうがいい、そう御親切におっしゃってくださいましたそうで、ほんとにありがたくて涙がこぼれます」
「あらあら、とんだ生き証人にされるんですね」
お柳は茶をくんで倹吉にすすめながら、ちょっと困ったようにわらった。事実は、お柳がこのあいだ行きがかりの意地ずくから、奥さんにもらってやってくれと押しつけたので、お蘭にもそう話しておいた。酔っているからお蘭は、そのとき話に出たみえで芸者ということばを根に持っていて、わざと妙にからんで出たのだろう。相手が八丁堀の変わり種だけに、もしおとなげなくも開き直られると、気まずいことになる。
「お気をつけなさいまし、だんな、お蘭さんは今、彰義隊さんにくどかれたとかで、少し気がたっているんですから」
お柳は抜けめなく逃げ道を作っておく。
「けっこうだな。当節彰義隊さんは金回りがよくて、人気があって、粋人が多いって話じゃねえか」
「またお逃げなさる。どんな金回りがよくても、顔にあんなこわい傷のある人、いくらあたしが売れ残りだって――」
お蘭はつんとして横を向く。はてなと思った

ので、

「ふうん。じゃ、切られ与三(よさ)みたいな男か」

倹吉はからかうようにかまをかけてみた。

「それがとんだ与三郎で、松田松五郎さんとかいう鬼みたいな豪傑さんなんです。――ねえ、お蘭さん」

はたして、お柳の口から傷松の名が出た。お蘭は酔っているからくどい。

「ですから、だんな、かわいそうだと思ったら、だんなの奥さんにしてやるとおっしゃってくださいまし」

挑戦(ちょうせん)するように見すえて、肩も腰もなよなよと、ひざさえくずれがちになる酔態である。

「お蘭、金次の四十九日はすんだかねえ」

「すみました、おととい」

「もうそうなるかな。あれはたしか官軍が品川へはいるまえの晩だった」

それから高輪の談判となり、江戸城明け渡しとなり、前将軍の過去と歴史は大きく転換している。

「ほんとに、早いもんですね」

お柳のは通りいっぺんのあいさつだろう。

「三月十二日の夜、忘れません。きょうでちょうど五十一日めです。にいさんがあんなむごたらしい死に方をしてから」

「それだのに、まだ下手人があがらねえ。何をまごまごしているんだ。そんな寝ぼけた八丁堀なんかの女房になれるもんか。くやしかったら下手人をつれてきてみろ。――ほんとうは、お蘭、そうおれにいいたかったんだろう」

倹吉には逆手をとりにくる魂胆と、はじめから読めていた。ずぼしだったらしく、お蘭はまじまじとみつめて、ちょっとことばが出ない。

「無理のない話だが、まあ、もう少しがまんしろ。曽我(そが)兄弟は十八年、忠臣蔵だって一年九カ月から苦労しているんだ」

「待てとおっしゃれば待ちます、十年だって二十年だって。あたしは下手人がわかって、それだけのおしおきさえしていただけばがまんもしますが、そのために身代をつぶされてしまった甲州屋さんはどうなるんでしょう」

これも意地っ張り女だ、負けたくないから甲州屋をかつぎ出してきた。

「あははは、まるでおれが甲州屋をつぶしたようにいうぜ」

「いいえ、そりゃだんなのせいじゃないでしょうけれど、あんまりかわいそうじゃありませんか。――ねえ、おかみさん」

「そういえばねえ」

お柳はどっちともつかぬ返事である。

「あたしは知らないもんですから、甲州屋さんにははじめ少し腹をたててました。――よしましょう、この話。お金のことになって、なんだかいやらしい」

「まあ話してみろ。十八年先で、ことによったら亭主(ていしゅ)になるかもしれねえ男だ」

「十八年たつと、あたしは三十九になるのかしら」

「順に年をとればそうなるだろうな。おれは四十九か」

「ずいぶんおじいさんおばあさん。だんな、それまで待っていてくださる実意があるかしら」

「縁談は吉日にゆずって、金談のほうからかたづけようじゃねえか」

「そうそう、甲州屋さんの話でしたね」

「なんで腹をたてたんだ」

「実はね、だんな、にいさんのお葬式のとき、甲州屋さんから香典が十両とどきました。お金で人の心をどうかというんじゃありませんが、あのときあたしの知らないお年寄りで、佐原屋源兵衛さんという人は、にいさんに世話になったことがあるとかで、自分でわざわざ十両持って通夜にきてくれたんです。にいさんはいわば甲州屋さんのためにあんな死に方をしたのに、甲州屋さんのほうはしかも大番頭の忠造さんが代理なんです。正直にいって、あたしは腹がた

ちました」
　その佐原屋の十両は、倹吉が縁あって検視をしたきのどくな仏への寸志とは知らないお蘭である。
「米二の頭も、なあに、お蘭、あとできっとあらためて家のほうへなんとかあいさつがあるだろうからといってくれましたが、あたしのはお金じゃありません。そりゃ、あとで若い幸助さんという番頭さんが家へきて、――お店は身代限りをした、ほんとうならだんなが顔を出さなくては申しわけないのだが、手もとに詰まって香典さえ思うに任せない、どの顔さげてお宅へうかがえた義理ではないと申しますので、てまえが代わりにおわびにまいりましたと、また十両持ってきてのあいさつはありました。あたしはよっぽどこの金はいただきませんて突っかえしてやりたかったんですけど、聞いてみるとその若い幸助さんてのがなかなか感心なんです。これからかつぎ呉服をやって、きっともう一度甲州屋ののれんをおこす、その節はあらためてまたあいさつに出るからというんです。せっかく御主人のために一旗あげようと意気ごんでいる若い人を、ここで恥をかかせるようなまねをしてはいけない。あたしはそう考えなおして、なにもいわずにお金はあずかっておきました。そんなわけで、甲州屋さんにはあんまりいい気持ちは持てません。香典が少ないから恥ずかしくて顔が出せないなんて、そんなこと金持ち根性です。こっちは人ひとり死んでるんじゃありませんか――けど、考えてみれば、それもこれもみんなあの強盗のせいなんです。それが十八年もつかまらないなんて、それじゃ甲州屋さんも浮かぶ瀬がないじゃありませんか。だいいち、十八年もたってつかまったんでは、取られたお金はかえってきっこないにきまってます。そうでしょう、だんな」
　こんどこそ降参したらといいたげなお蘭の顔である。

「しかし、お蘭、物は考えようだぜ」
　その後、幸助は多田薬師裏の大亀のあとへ移って、決心どおり甲州屋親子を引き取り、かつぎ呉服を始めているはずである。大亀の女房子は佐原屋が引きうけてめんどうを見ていた。
「どう考えるんです、だんな」
「甲州屋は身代限りをしたかわりに、幸助といういい番頭を見つけ出した。とられた金はかえってこないかもしれねえが、十八年たつうちには幸助がもとの甲州屋ののれんを起こしているかもわからない」
「じゃ、だんな、あたしのにいさんはどうしてくれるんです」
「心配するな。そのころまでには、りっぱな亭主に生きかえってきてくれるだろう」
「かなわない、だんなのお口じょうずには」
　お蘭はおおげさに身をもんでみせた。

11

「だんな、三吉が帰ってきまして、よろしければすぐお供いたしますそうです」
　あかりを取りに立ったお柳が、あんどんをさげてきて告げた。色街はこれから夜が明けるのである。
「そうか、出かけよう。――お蘭、いっしょに行かぬか。おれはこれから佐原屋へちょっと見舞いに行くんだ」
「あら、だんなは佐原屋さんを御存じなんですか」
「うむ、知っている。仏に奇特をつくしてくれたおやじだ、かぜで寝込んでいるっていうから、心があったら一度見舞ってやれ」
「でも、あたし、こんなかっこうで、まだ酔っているようだし」
　急にしおらしいことをいいだす。
「いいさ、べつに改まった屋敷へ出かけるわけ

じゃない。それとも、船の中でおれにくどかれるのがこわいか」
「そんなら行きいます。みごとくどいてごらんなさいまし」
そう突っかかってくるだろうと思ったとおり、お蘭はいきなり立ち上がって、あやうくよろめきかけたが、さすがに意地でしゃんと立ち直ってみせた。
「だいじょうぶなの、お蘭さん」
「だいじょうぶ。――すみませんが、おかみさん、お冷やを一杯くださいまし」
外はもうすっかり暮れて、暗い雨があいかわらずびしょびしょと川面をたたいていた。船はおかみに送り出されて柳橋の下を抜け、まもなく神田川から大川へすべり出した。右手に両国橋の夜景をながめながら、やがて艪音静かに舳が川上へかわる。いま出てきた柳橋河岸の二階三階には明るく灯がはいって、例年だとこのあたり浅酌低唱の小船が広い川幅を埋めつくす季節にはいっているのだが、天候の不順と、世の中の物騒と、ことに今夜は雨のせいもあって、そういういき筋の船は数えるほどしか見当たらない。それでも河岸の料亭は一時より景気が出ているらしく、そこここからにぎやかな弦歌の声がわきたつように、ほかげが明るい水面のさざなみにさんざめいている。聞きようによっては、それもまた滅びゆく江戸のはかない挽歌であるのかもしれぬ。
お蘭は船へ移ってからすっかり沈みこんで、ふなばたへひじをかけ、右手で額のあたりを軽くささえながら、じっと暗い雨の音を聞いているようであった。
「お蘭、その傷の彰義隊ってのは、このごろの客か」
倹吉は雨がかかるほうの障子をしめながら、なにげなさそうに切り出した。実は、それを聞いておくのが目的の一つで、お蘭を船へ誘い出したのだ。――傷の松田松五郎が歩兵から彰義

隊になり、がらにもなく柳橋あたりで遊んでいるとすれば、当然その金の出どころが疑問になってくる。
「ひと月ばかりまえからなんです」
お蘭はうかない顔をあげた。
「いつもひとりか？」
「はじめてのときは三、四人連れでした。このごろはずっとひとりです」
「連れがあっちゃくどけねえからな」
「そうかもしれません。ほんとうにもしませんけれど、きょうなんか妙なことをいうんです」
「金に不自由はさせねえ。きまり文句だろう」
「それもあります。けれど、あたし、きょうはあんまりくどいもんですから、訳を話して、にいさんのかたきを討つまではだれのものにもならないって、きっぱりいってやりました。すると、――いいかしら、こんなことだんなのお耳に入れてしまって」
気がついたように、思わずあたりを見まわしている。
「どうした、ここは船の中だ。ほかにだれもいやしねえ」
その船は明るい柳橋河岸をこぎすぎて、いつか蔵前の水門外へかかっていた。
「人に話すと、命がなくなるかもしれないぜって、おどかされたんです。――かまいません、あんな目じりのさがった悪党、なにがこわいもんですか」
「そんなこわい話なのか」
「にいさんを切った男、今は訳があって話せないが、たしかに知っているっていうんです。夫婦にさえなれば、いつでもかたきを討たせてやるって、――でたらめにきまっているんです」
「なるほど、うっかり乗れない話だな」
しかし、倹吉にはぴんとくるものがあった。甲州屋のにせ軍用金狩りの一味のうちに、傷松はたしかにいたのだ。だから、翌日わざわざ群衆にまじって甲州屋の様子を見ていた。そうい

う男を平気で部下にしている大崎にも、場合によってはいつでも悪党になれる素質はじゅうぶんあるのである。とにかく、傷松をあげれば、四人組の強盗のほうはどうやら目鼻がつきそうだ。

「いやな世の中――」

　お蘭はだんだん酔いがさめてくるらしく、あじけなさそうにぽつんとつぶやいた。それが最近たったひとりの肉親を失って、たよりになるものを持たぬこの女の本音だろう。勝ち気で、うぬぼれが強くて、男のあさましい面ばかり見たり聞いたりしているから、一生をかけるような恋もできない。うわきはなおばからしい。そうかといって、ほんとうの世の中の真実にふれて、そこに生きがいを見つけるには少し小利口すぎてわがままでもある。しかも、自分では人一倍苦労した人間だと思いこんでいるのだ。

「そんなに苦労が多いかねえ」

「だんなとは違いますもの」

「しかし、おまえの世の中も、おれの世の中も、生きている世の中は同じじゃないか」

「じゃ、だんなは世の中がおもしろいんですか」

「いや、おれの世の中はいそがしい。いやだの、おもしろいのとぜいたくはいっている暇がない」

「どうせだんなはあたしが道楽で芸者なんかしているんだと思っていなさるんですから」

　お蘭はうらめしそうである。

「まさか、そうも思わないが、女にしろ男にしろ、生きがいは自分で見つけるものだ。世の中がいやだの、つまらないのというのは、人間のわがままだろうね」

「生きがいって、たとえばどんなもんです、だんな」

　半分はいつもの意地だろうが、半分はきまじめに目を輝かしてみつめてくる。

「そうだなあ、女の生きがいは、まあ、いい亭主を持って、りっぱな家庭をつくるのが一番だ。

といったら、お蘭のことだから、あいにく亭主にするような男がありませんとくるだろう。別なことでいえば、甲州屋の番頭幸助が主人のために一旗あげようといっしょうけんめいになっているのは幸助の生きがい。おれが今こうしておまえに説教しようとしているのも、おれの生きがいのうちの一つといえるだろう。生きがいとは、まず自分の欲を抑えて人のため世間のために尽くすに始まり、それが国を益し子孫を幸福にするところまで行けば上乗ということになる。――その後、幸助はおまえの家へ出入りしているのか」

「いいえ、どうしてです?」

「さっきお蘭は、若いのに感心な男だといっていたな。感心のしっぱなしは感心しないね。どうせ買うなら小切れの一つも幸助から買ってやって、感心な男の志を助けてやる、それが生きがいの一つになるんだ」

「いいことを教えていただきました。だんなもこれからせいぜいお蘭をお座敷へ呼んで、生きがいの元手をかせがせてやってくださいまし」

「あはは、つまらねえところで打っちゃりをくわせられたぜ」

　とんと船が軽く岸へあたったようである。

「だんな、着きました」

　外から三吉の告げる声がする。

「御苦労だった。――勝んべ、ふいに行って騒がしても悪かろう。ひと足先へ行って、いま珍客が見舞いにくるからと、佐原屋の耳へ入れておいてくれ。ただし、無理をして起きることはねえとな」

　雨がっぱの勝平が差し出すちょうちんの光をたよりに、お蘭と相合いがさで桟橋から岸へあがった倹吉は、若党にこういいつけた。

「ちょうちんを置いてまいりましょうか」

　暗いから足もとがあぶない、勝平はそう思ったのだろう。

「やぼをいうな。ちょうちんをぶらさげて道行

きでもあるめえ」

実は派手すぎる相合いがさ、さすがに倹吉もいささか人目をてれるのだ。

「そうでございましたね」

勝平はお蘭の顔を見ないように、くすりとわらいながら駆けだした。前は多田薬師の森、右手に三沢という医者があって、その黒板塀と森との間の小路をはいったところ、佐原屋はちょうど三沢の裏手になっている。夜は物騒な河岸通りだから、このあたりはもうまったく人足は絶えて、暗い雨が傘に鳴っていた。

「お蘭、遠慮なく寄れ、ぬれるぞ」

「すみません、とんだ道行きで」

二足三足道へ出たとき、小路へ駆け込もうとした勝平が急に立ち止まった。雨をついてだれか両国のほうからいっさんに走ってくるものものしい足音を聞きつけたのだろう。

思わず倹吉も足を止めて凝視するやみの中から、抜刀をさげた若い武士の姿が一瞬、勝平の突きつけたちょうちんの黄ばんだにぶい光の輪の中へ浮かびあがった。と見る間に、さっと一閃そのちょうちんへ走り抜けながら横なぐりの一刀、

「あっ」

勝平が驚いて飛びのいたとたんにちょうちんが消え、武士は振り向きもせず走って、急に薬師の森へ駆け込んでいった。そのほんの瞬間の印象ながら、雨にそぼぬれた乱髪、歯をくいしばった必死の形相、倹吉の目に残ったのはたしかに岡部数馬の顔である。しかも、あとから追ってくる足音がもう間近に迫っていた。これも抜刀をさげたふたりだ。官軍らしいとわかったときには、向こうもはっと気がついたらしくこっちをよけたが、ひとりはわずかによけきれず、お蘭の肩へ突き当たるようにして、

「あれっ」

お蘭があやうく倹吉の腕へすがりつく間に、風のごとくすり抜けて駆け去ろうとする。

「待て、――狼藉者、待て」

倹吉はお蘭をささえながら、わざと叱咤するように呼び止めた。逃げる数馬をできるだけ安全に逃がしてやりたい、とっさにそう考えたからである。

「なにっ」

官軍は四、五間先へ行って踏み止まり、くるりとこっちを向いた。

「なんだ、野村。どうした」

前を走っていたのが、これも急に立ち止まる。

「かまわん。貴公はあいつを追ってくれ。その森の中だ」

「だいじょうぶか」

「だいじょうぶだ。おれより今のやつを逃がすな」

「よしっ」

連れが森の中へ駆け込むのを見てから、野村という官兵はつかつかと倹吉の前へもどってきた。やみの底にもどこか薄あかりが漂って、顔こそはっきり見わけがたいが、がっしりとした大柄な男である。お蘭はかたずをのむように身を堅くして、ぴたりと倹吉の肩のあたりへ寄り添ってくる。

「おれに何か用か」

相手は六尺ほど離れて、野太い声を出す。

「人に突き当たっておいて、黙って行くという法はあるまい。なんとかあいさつのしようがあるだろう」

「あいさつ――?」

男はこっちの相合いがさを見すえて、ふんと鼻の先で冷笑したようである。

「だいいち、天下の往来を抜刀のまま走る、危険千万だ。刀を収めてはどうか」

「いったい、きさまは何者だ」

「徳川家の家来、――姓名は控える。そっちの名も聞くまい。往来ですれ違った人間と人間、ひとこと人がましいあいさつを聞けばそれですむことだ」

「いやだといったらどうする」
　相手は頭から人をこばかにした言いぐさだ。
「田舎っぺの物知らずとわらってやるまでのことよ」
　倹吉もすかさずやりかえす。
「いったな、こやつ。よし、それなら田舎っぺのあいさつをしてやる。相手になるか」
「横車だな。官軍さんは上は大参謀から下は兵隊まで、よっぽど横車がお好きとみえる。そっちにそう出られちゃ、いまさら大だんなのまねをして恭順も気がきかねえ」
「やるか、おもしろい。――女、どけ」
　官兵は腕に自信があるらしく、右手の抜刀を二、三度ひゅっと振ってみせた。
「お蘭、ひと足先へ行っていろ」
「いいえ、いけません、だんな」
　さすがにすがりつこうとする手を軽く押さえて、
「なんだ、江戸っ子のくせに。官軍さんにわらわれるぜ」
　倹吉は傘をわたし、高下駄を捨て、羽織をぬいだ。
「だんな――」
　路地のほうから勝平が飛び出してくる。
「ちょうどいいや。勝んべ、これを持ってお蘭とひと足先へ行っていてくれ」
　羽織をあずけ、高々とすそをはしょって、手早く下緒をたすきにした。
「いいのかしら、勝平さん」
　お蘭はひとりで気をもんでいるようだが、勝平は返事をしなかった。
「どうした、野村」
　向こうの連れも走りだしてきた。やっぱり気になって、数馬のほうは深追いせず、すぐ引き返してきたのだろう。
「太田、助太刀は絶対に断るぞ。田舎っぺと江戸っ子と意地の一騎討ちだ。まあ、見物していてくれ」

「そうか。じゃ、しっかりやれ」
　こっちの支度のできたのを見て、太田と呼ばれる連れはあっさり道ばたへさがった。勝平もお蘭を押しやるようにして路地のほうへさがる。
　東橋のほうを背にして官兵野村某、両国のほうを背にして倹吉、
「来い」
「行くぞ」
　さっと刀を合わせた。川風に吹きつけられて、暗い雨が横なぐりにたたきつけてくる。
　こいつは強い。倹吉はすぐ相手の力量を見てとった。実戦の経験があるのだろう、構えた体のこなしがのびのびとやわらかい。こっちは数馬さえ逃がせば目的は達したので、はじめから相手を切る気はなく、強いようなら途中から逃げてしまえばいいのだし、――道場剣術ながら練兵館の免許でそのくらいの駆け引きは自由にきくだけの修業はしているつもりだった。が、そうはいかぬかもしれぬ。相手は一刀で勝負を決する実用流らしく、表面は軽い構えながら、一瞬のゆるみにも仮借なき一撃をいれようと、火のような闘志に燃えてぐんぐん迫ってくる。逃げるどころか、絶対にすきは見せられない。たいへんなやつだと、倹吉はからだじゅうが熱くなってきた。けっきょく、今となっては気力の尽きるまで死生を度外視して戦うよりほか、逃げる道はないということになった。
　ざあーと薬師の森が風雨に鳴っているのが、相手の剣先に全神経をかけて緊張しきっている倹吉の耳へ、夢のように聞こえていた。軽く浮動している田舎っぺのきっさきが、ぴたりと静止する。来るなと反射的に踏み込む体勢をとると、がっきり闘志と闘志がからみあって、一瞬、猛烈な殺気が灼熱する。ついに必勝の一撃をつかみえず、どっちからともなくふたたび守勢にかわる。顔にあたる雨が、たちまち湯気となってたちのぼるかと思うばかりの息苦しさだ。そ

んな気力と気力の激闘が幾度かくりかえされて、――人間の体力には限度がある。

「くそっ」

敵がわずかにうめいて歯ぎしりをした。

田舎っぺめ、捨て身になりやがったと直感したとき、剣先が静止して、ぐいぐいと間合いを詰めてきた。夜目にもまなじりを裂いた鬼のような形相である。一歩でも退けば、そのくずれへ必殺の一撃がくるのだ。と見る間に、敵はさっと太刀をふりかぶって、

「おうっ」

岩をも砕けよと打ちこんでくる一瞬、その振りかぶった太刀のもと、あいた内ふところへ絶体絶命の突き、

「おうっ」

倹吉はからだごとまっしぐらに飛び込んでいったから、敵はまずかわさざるをえず、わずかに左へ体を開いて空を突かせ、自分も空を切り下して激しく飛びちがった。自然、敵の位置へ出ることになった倹吉が、はっと立ち直って一転、青眼に直した目に、なににつまずいたか敵のずうたいが大きく地へのめっていくのが映った。

今だ、切るのも、逃げるのも。むろん、倹吉は後者をとった。ぱっと足もとから鳥が立つように、いっさんに薬師の森へ駆け込む。

「待て、――こらっ」

見物していた連れがわめいて、あわてて追おうとするのを、

「太田、太田、よせ。こっちの負けだ、やめろ」

野村があえぎながら大声に呼び止めていた。

そんなら気違い馬のように駆けるにも及ぶまいと、倹吉は足をゆるめながら、――やれ、助かったぞという感が深い。はっはっと息が肩で波うっている。

「倹吉さん――」

ふっと後ろから呼ぶ者があった。数馬の声である。これもなにか不審なけはいに引き返してきて、今のあぶない勝負をそっと忍んで見ていたのだろう。

「数馬さんだな。こっちへ来い」

倹吉は振り返って、そこにしょうぜんと立っている数馬の手をとるなり、有無をいわせず境内深く連れこんだ。

12

翌朝、倹吉は十時近くに、ぐったりと疲れきって八丁堀の屋敷へ帰ってきた。あれから一晩じゅう寝ずの活躍をやったのである。

数馬をつれて境内をひとまわりして、もういい時分だと思ったから、ひとりでもとの河岸通りへ出て見ると、まだそこに勝平とお蘭がぼんやり雨にぬれて立っていた。その勝平を呼んで耳打ちをして、数馬はだれにも知られず八丁堀へつれて帰らせ、倹吉はお蘭といっしょに佐原屋をたずねた。

「いいぜ、そばへ寄ると着物がぬれる」

差しかけてくれる傘を遠慮しようとすると、わざと肩へすり寄ってくる意地の強いお蘭である。

「どうしなすった、そのかっこうは」

佐原屋はけさから起き出してみたところだとかで、倹吉のしりっぱしょりたすきがけ、頭からずぶぬれになって、下駄をぶらさげたかっこうを見ると、目を丸くしていた。

「なあに、そこでちょいと定九郎をやってみせたのさ、この妓があんまりおだてるもんだから」

お蘭はちらっとあきれたような顔をしたが、佐原屋のおやじはちゃんと心得ていて、物をくどくはけっして聞きたがらない。その話はふたりとも忘れたように二度とは口にしなかった。しかし、ぬれたままでもいられない。

倹吉はまだあとに一仕事あるので、大亀の後家お島にたのんで、亀吉のはんてん腹掛けもも引きを借りうけた。

とにかく、佐原屋としては珍客ふたりのわざわざの見舞いである。大よろこびで、さっそく

一本つけてくれた。さかなはするめをあぶって、あり合わせの煮豆腐と香の物、倹吉は好物のするめをかじり、おやじは煮豆腐をつつきながら、よく話がはずんで、いつの間にかちょうしの数が三、四本になった。その間じゅうお蘭は口数少なに酌をしながら、自分は酔いざめがきたのだろう、しきりに番茶をくんでいる。そこは台所と中廊下一つ隔てた木賃宿佐原屋の帳場兼茶の間で、くすぶった六畳の一方に帳場格子があり、古びた小さな茶だんすが一つ、やかんのかかった土の火ばち、そのほかに道具らしいものは何一つない殺風景な部屋だったが、団欒の空気は例によってすこぶるあたたかい。

「お島がきてくれたんで、おやじも大助かりさ。なんのことはない、急に娘と孫ができたようなもんだからね」

　話は自然死んだ大亀の生前のことから、せがれ芳太郎のむじゃきな毎日に移り、近所へ越してきている番頭幸助の日常に及んできた。甲州屋の主人重兵衛は、こっちへ移って以来、急に気が落ちたものか、床につきがちだという。困りものは娘のお糸で、いまだに飯ひとつたけず、せんたく物さえしようとしない。みんな幸助が朝早くやっておいて、それからかせぎに出るのだという。

「まあ、そのうちにはだんだん直るだろうが、お島にもよくいうのさ、下のものまで亭主に洗わせるような女にしてしまっては、娘のためにはならない。娘がかわいそうだと思ったら、なるべくてつだいに行くなってね。ところが、お島にすれば幸助がきのどくで見ていられないんだろう、困ったものさ」

「しかし、幸助が好きで洗ってやっているんなら、それもいいやね。あの男はしっかり者だから、いまにいいおかみさんに仕立て上げらあね」

「さあ、どうだかねえ。おやじの見た目では、なかなかほねがおれそうだ。好きならその苦労もしかたあるまいが」

「ときに、おやじさん、お蘭ねえさんがこれから幸助をごひいきにしてくださるそうだ。あすからでも商いに行くように、そういっておいてもらいたいね」

「そりゃありがたい。どうかひとつ、ねえさん、よろしくたのみます」

　正直なおやじが親身の頭を下げた。

「いいえ、あたしなんかどうせたいした役にもたちませんけど」

　お蘭も珍しく神妙だ。世辞や飾りけはどこにもないが、そのかわり、ここでは真実しか通用しない。そういう空気がお蘭にもすわりごこちがよかったのだろう。しまいにはお島にてつだって、自分から何度も台所へ立っていったりしていた。

　そのお蘭を駕籠に乗せて、職人姿のままの倹吉が足袋はだしであとから走り、柳橋の家まで送りこんだのはやがて夜も四ツ（十時）過ぎだったろうか。ぜひ上がってお出花だけでもというのを、それはあすあずけた衣装をとりにきたときにしようと断り、玄関先から倹吉は取ってかえして両国広小路へ出た。行く先は鍋町の立花屋である。人通りはまったく絶えて、暗い町筋をひとしきり雨がざあっと音をたてていた。馬喰町通りへ飛びこんで人家の軒下づたいに雨をよけながら三丁目のかどへ出ようとすると、つい鼻っ先のそのかどを馬場のほうから横山町通りのほうへすっと道を横切って走ったやつがある。

　自分と同じように傘は持たず、顔を黒っぽいもので包んで、しりっぱしょり足袋はだし、中肉中背の敏捷そうな男だ。こいつ怪しいと見たとたんに、ピストル強盗を思い合わせた。だいいち、朝からの雨に傘を持たないのが不審である。倹吉はすぐに跡をつけた。怪しい男は、これもなるべく軒下づたいに横山町通りのほうへ抜けていく。するするっ、するするっと、まるでさるが木の枝を伝わっていくようにすばしこ

い。横山町通りを縁橋のほうへ出て、ひょいと右へ曲がった。急に足が早くなって、はてな気がついたかなと思う間もなく、汐見橋のたもとを右へ切れる。そこは馬喰町一丁目で、まっすぐ行けばもとの三丁目のかどへ出るのだ。いよいよ怪しい、と見ているうちに二丁目までくて、そいつが左の路地へふっと消えた。距離にして七、八間もおくれていたろうか。倹吉はいっさんに追ってその路地へ飛びこんだ。狭い三尺路地でまっすぐ抜けると材木店へ出るのだが、途中に二つ三つ同じような横路地がある。路地はどこまで行ってもまっくらだ。中ほどまで夢中できて、しまったと思った。立ち止まって耳を澄ましたが、むろん足音など聞かせるようなくせ者ではない。こんなところへはいられては、もういくら追ってもむだだ。敵はどこへでももぐりこめるし、どっちへでも抜けて逃げられる。

「有無をいわせず取り押さえるんだった」

うつけのあと思案とわれながら苦笑させられて、あっさりと思いあきらめ、そこから岩井町へ抜けた。もし、あれがピストル強盗だったとすると、そしてピストル強盗が見込みどおり立花屋だとすれば、張り込みの常次郎も途中でまかれているはずだ。それがはっきりわかれば、立花屋を取りまいていさえすればいいので、今夜こそ帰ってくるところを取り押さえることができる。そう気がついて、倹吉はとにかく鍋町へいそいだ。

立花屋は鍋町の裏通りにある。そのもう一つ奥の裏通り一帯は多町の青物市場で、鍋町通りからはいるには北横町と西横町の二つの道がある。倹吉は鍛冶町へ出て西横町へはいり、すぐ右へ折れて立花屋のある裏通りへ出た。注意深く反対側の軒下をつたわっていくと、その裏通りの中ほど、ちょうど立花屋の前にあたる米屋の天水おけのかげにだれかひとり立っている。

「常次郎――」

そっと声をかけて寄っていくと、うさんくさそうに顔をのぞきこむようにしたが、

「あ、だんなで、――御苦労さまです」

常次郎はいそいでほおかぶりを取ろうとした。

「いや、そのままでいろ。お役中だ」

「じゃ、ごめんなすって」

「手配りはどことどこにしてあるんだ」

「あの三尺路地の中にひとり、鍋町通りからその路地へはいるところにひとり、もうひとりはそこの裏木戸のところにかくれています」

立花屋の右隣は魚八というさかな屋で、そのさかな屋との間に三尺路地が表の鍋町通りへ抜けている。質屋だから店の入り口は三尺路地と裏通りのかどについていて、どっちからでもはいれるようになっている。その三尺路地の奥に台所口があり、裏通りに面して左手尾張屋というそば屋に近いほうに裏木戸がついていた。そのあたり忍び返しのついた高い黒い板塀越しに松の枝などが雨にうたれてのぞいている。つまり、三つの出入り口を四人で張り込んでいるわけだ。そのほかには他人の家でも抜けなければ絶対に出られる口もなければ、道もないというのである。

「で、今夜はどんなぐあいだ、化け物は家にいるのか」

常次郎がここにこうしている以上、そう考えるほかはない。

「へえ、野郎はきょう昼間からひと足も外へ出ません」

「たしかに家にいるのは突き止めてあるんだろうな」

「それは確かでござんす。昼ごろぶらりと多町をひとまわりして、その表口からはいったのをちゃんと見ているんですから」

「昼間はどんな手配りにしているんだ」

「鍋町通りのほうの路地口はいろいろ場所をかえてそのままつづけられますが、路地の中のは

そうもいきませんので、この米屋の二階を借りています。そこからだと、店の出入り口から路地一帯がひと目に見えますんで」
「裏木戸は――？」
「そっちは北横町のかどあたりまでさがらせてますから、まあ目につくようなことはないでしょう」
　そのうえ、手がわりの人数はさかな屋にもそば屋にも米屋にもそれぞれ奉公人に化けさせて詰めきらしてあるという。まず完全といわなければならない。――とすると、馬喰町で取り逃がしたくせ者は、どうやら浪右衛門ではないということになる。が、倹吉にはなぜかさっきのやつがピストル強盗で、それが浪右衛門のような気がしてならない。
「今夜いちばんあとに店のくぐりを出たやつはどんな男だ」
「四ツ（十時）を聞いてまもなく、使いやっこのような男が、くぐりをたたいて店を起こしました。ここは四ツまではくぐりの出入りは自由で、奉公人の夜遊びを許しておくようで、四ツすぎるとかぎをおろします。使いやっこは両国の同朋町からまいりましたといって、かぎをあけてもらって中へはいりました」
「同朋町にゃ松乃屋とかいう出会い茶屋をやっているめかけがあったな」
「そのお松からの使いやっこでござんした。まもなく出てきたんで、あっしがあとをつけ、鍛冶町で呼び止めて聞いてみると、お松にたのまれて小さなふろしき包みをだんなに届けたっていうんです。だんなに会ったのかときくと、いいえ、番頭さんがたしかに受け取りましたっていうから、そのまま渡して帰ってきたっていうんです」
「使いやっこの名は聞いておいたろうな」
「へえ、近所の仕出し屋で花屋という家の出前持ち竹蔵といっていました」
　それだけのことなら、ここにもべつにあやはなさそうだ。とにかく、倹吉は一晩常次郎といっしょに張り込みをやってみることにした。
　明けがたまでのほんの二刻（四時間）あまり、自分でやってみると、それは容易なしんぼうではない。雨は朝までこやみもなく降りとおして、やがて夜明けまえごろになると、そろそろ近在から青物市場へ詰めかける野菜車が北横町と西横町の両方へはいり、それがしだいに数を増して、昼ごろまでは雑踏をきわめる多町だった。
　近所ではさかな屋がいちばん早く起き出して魚河岸へ買い出しに出かける。まもなく夜が白白と明けかけて、米屋が米をつきだした。それといっしょに、張り込みはそろそろ米屋の二階へ移るのだ。そして、ほどなく立花屋のくぐりがあいて、当の浪右衛門がぶらりと丹前姿のまま手ぬぐいをさげてあらわれた。毎朝きまって起き抜けに朝ぶろへ行くのだという。
　真正面から見た浪右衛門の顔は、色が浅黒いあばたのうえに、ひどいおでこで、わに口で、鼻が平べったい。なるほど、女に好かれるというつらではないが、人が化け物というほど醜悪な悪相とも思えない。細い目の目じりが少しさがっているあたり、むしろあいきょうのあるほうだ。が、いかにも金持ちの主人らしくゆったり構えていく中肉中背の後ろ姿を見て、倹吉はふと気がついた。肩の張りぐあいが、なんとなくゆうべのくせ者にそっくりだ。たくましいという感じの骨格に、異常な精力的なものがあふれ、たとえば不意に突き当たりでもしたら、ひらりと横っ飛びにかわしそうで、武芸者のほうでいえばすきのない身構えというやつが自然に備わっている。なんとしてもこれはたしかにくせ者だ。
「常次郎、立花屋といっしょにふろへはいったことがあるか」
「へえ、入れ墨もなんにもない白いからだでござんした」
　常次郎はそう取ったらしい。

「思ったよりいい骨組みをしていなかったか」
「だんな、おっしゃるとおりです。がっしりと肩幅があって、小力はありそうだし、腰っ骨なんかもどうして、ただのだんな育ちにゃ見えない。三人もめかけを置くわけでさ」
「ただのねずみじゃないな」
「あっしもそう思いますんで」
「しかし、こりゃ毎晩たいへんな話だ。もうしばらくしんぼうしてみてくれ。おれに少し考えもあるから」
「承知しやした。なあに、あっしらは慣れていますから」
　倹吉は帰りに念のために奉行所へ寄ってみたが、べつにピストル強盗の訴えはないようだった。とすると、馬喰町での怪しいやつは全然人が違うのだろうか、いずれにせよ、このうえの手段は立花屋へなんとかして隠密を入れてみるほかはないようである。
　そんなことを考えながら、倹吉は八丁堀の屋敷へ帰ったのだ。

13

　倹吉は着替えをして、おそい朝飯をとってから数馬を呼んだ。勝平の話では、昨夜は帰るとすぐ飯はいらぬといって、すぐ床についてたそうである。
「数馬さん、彰義隊のほうはどうなったんだね」
　わざと昨夜の話は避けて、茶をすすめながら倹吉はそんなふうに口を切った。珍しく雨があがって、雲の切れめに青空がのぞく明るい朝であった。向かい合ってみると、数馬にはあの門出のときの軒昂たる意気はなく、どこか沈みこんで紅顔に憔悴の色が濃い。なにか煩悶があるらしい。もっとも、あのときの意気ごみがそのままあるとすれば、口論別れになっている倹吉の組屋敷へなど、誘われても泊まりはしなかったろう。
「倹吉さん、わしは迷っているんだ」

「聞こうじゃないか、一門だと思うから、ときには思いきった苦言も呈するんだ。そのかわり、どんなことでも遠慮することはないさ」
「そういわれると恥ずかしいんだが、実は困ったことがあるんです」
　数馬の目がちらっとおくびょうそうに動いて、じっとうなだれてしまった。
「軍用金狩りじゃないか、数馬さん」
　軽く誘うように突っ込んでいくと、数馬はうなずいて、やがて何もかも話してしまわなければ苦しくていられないというように語りだした。
　要するに、数馬は大崎たちに巻きこまれてしまったのだ。世間知らずだから、むろんほんとうに隊の軍資金になるものと信じて、二回ほど表で見張り役をつとめたという。まもなく、その金は大崎たちがかってに遊興につかってしまうことがわかってきた。
「大崎、貴公のやっていることはにせ軍用金狩り、すなわち強盗と同じ行為になる。わしは賛成できない。今後も同じことを繰りかえすようなら、断然絶交するからそう思ってくれ」
　一本気の数馬は、ふたりかぎりの酒席を作って、強硬に難詰したという。しかし、そんなことでかぶとを脱ぐほど簡単な大崎ではなかった。
「そりゃ数馬さん、誤解だ。われわれははじめから軍用金に手をつけるために、あの軍用金狩りをやったわけじゃない。運悪くこの二回ほどは失敗だった。思ったほどの金額が集まらぬ。だから、ついかれらをあやつっていく費用として、酒色に消費するようになってしまったので、——こういうことはあまり潔癖に考えすぎると、兵隊が働かなくなるおそれがあるんだ。多少のことは大目に見てやらなくちゃね」
「わしはいやだ。そういう誤られやすい道は、武士として絶対にとりたくない。おのれに恥じることだ」

「しかし、数馬さん、誤られやすいといえば、彰義隊そのものが一朝誤れば朝敵乱賊にされてしまう性質のものじゃないのかね。勝てば官軍、負ければ賊軍というからね」

「それはやむをえない。敗れて朝敵にされるのは天地に恥じぬが、盗賊の汚名だけは絶対にいやだ」

「わしにいわせれば五十歩百歩だといいたいところだが、まあいい、ここで議論をしたってしようがないからね。ただ、数馬さん、これだけはいっておくよ。松田以下は無学の徒だ。あまり潔癖に出て反感を買うと、逆に抱きこまれるおそれがある。とにかく、一回でも二回でも行動を共にしているんだからね。おれは知らなかったでは世間はすまない。まあ、当たらずさわらずにしておくほうがいいと思うな」

痛いくぎであると同時に、それはまた次の要求を出す大きなわなでもあったのだ。

「話は違うが、――数馬さん、姉上をわしのお嫁さんにくれないかねえ。直接わしから母上にお話ししてもいいんだが、それよりきみの口から、ぜひそうしてほしいと希望を申し入れてもらったほうが早い。そうなれば、松田以下は共同の敵ということになるんだから、きっとわしが引き受けてきみは心配させないがなあ」

つら憎いほどけろりとした大崎の態度だったという。

意外なわなにおちた数馬は、その場で断然大崎の強迫がましい縁談を拒絶するだけの強い態度はとりきれなかった。以来、数馬はなるべく大崎を避けているという。大崎もまたその後は今のところべつに縁談のことは口にしないそうである。

「正直にいうと、それだけにわしはよけい気味が悪いんです。きゃつはどんなことをやるかわからない男だ。わしは母や姉を不幸にしたくない。いっそ大崎を切って、自分も腹を切ろうかと、何度も考えました。いや、けっきょくそう

しなければならないときが、きっとくるんじゃないかと思うんです」

「数馬さん、きみはゆうべどうして官軍に追われていたんだね」

追われるとは、逆にいえば逃げたことである。いちおうたしかめておく必要があるのだ。

「きのうは井浦という男といっしょでした。こっちもふたり、向こうもふたり、井浦がやろうというから、わしもやりました。一度真剣勝負をしておいたほうが度胸がつくと思ったんです。井浦はゆうべ倹吉さんがやった野村とかいう男のほうへ、芋といいながら自分からぶつかっていきました。あれじゃとても歯がたちはしない。わしはもうひとりのほうとやっていたが、井浦がやられるのを見て、ふたりになってはとてもだめだと思った。それに、言いわけのようになるけれど、大崎をかたづけてしまわないうちは、わしは死にたくない。ひきょう者といわれたってしかたありませんよ」

さすがにしょうぜんたる数馬である。

「そうか。じゃ、大崎さえかたづければ、いつでもきみは死ねるんだね」

「金打(きんちょう)します」

数馬はいきなり刀を取りに立ち上がろうとした。

「いや、そのひとことだけでけっこうだ。まあ、すわりたまえ」

倹吉は押し止めて、

「大崎のほうはわしがきっと引き受けよう。そのかわり、きみの命はきょうかぎりわしがあずかるよ。いいだろうね」

「あずけます」

「ところでと、大崎の一味は、松田と、あとのふたりはだれだね」

「本郷辰吉(たつきち)と小川勘助、みんな歩兵あがりです」

「船をきまって今戸河岸あたりへ着けるのは、どういうわけだろう」

「どうして、そんなことがわかってるんです」

数馬ははっと目をみはった。
「そりゃ数馬さん、われわれはそれが役目だもの。四人組が荒らすのはいつも川筋に近い町だ。きっと船が今戸河岸あたりへ捨ててある。そのくらいのことはすぐ調べ上げるさ」
「わしは二回しか同行しなかったし、大崎のほかの三人はわしを仲間へ入れるのは反対のようだったんで、くわしいことは知らないけれど、目的の家はあらかじめ松田がめぼしをつけるようです。そして、その辺の様子を念入りに調べておいて、その夜は深川あたりへ別々に行って勢ぞろいをする。時間を計って船で目的地へ向かい、仕事がすむとまたその船で今戸河岸へあがるんです。それから吉原へ行って翌朝まで遊ぶという順でした」
「吉原へねえ、そうか。――しかし、数馬さんは早くそこへ気がついていいことをした」
　事実、もう少しうっかりしているか、ひょっとして、そんなことに興味を持って深入りしていれば、おそかれ早かれ小定の網にひっかかるところだったのだ。
　その夜、数馬には勝平をつけ、ひとまず勝平の在所である藤沢在へ落とすことにした。おそらく、大崎もせっかく手に入れた傀儡を失っては、その生死がはっきりするまで岡部家へはどう手の出しようもあるまいし、数馬は友人を見捨てて逃げた昨夜の不面目があって、ふたたび彰義隊へは帰れない。それやこれやを考えての計らいであった。したがって、数馬のことは当分岡部家へも漏らすわけにいかない。未亡人も久枝もずいぶん心配するだろうが、そのしんけんな心配が大崎の目を惑わす結果になるのだ。
　ということはまた、当分の間、倹吉の手では大崎一味をあげかねるということにもなるのだ。数馬の名を出さないためには、大崎だけはけっきょく切るほかに道はないだろう。それに、現行犯でない彰義隊の隊士を強盗の罪であげてはこういう時勢だけに軍用金狩りだと横車に出

られ、悪くすると彰義隊を暴発させるおそれもじゅうぶんある。
(しかし、切るにしても切る理由がなければ切れないからな)
　倹吉はいささか当惑してしまった。
　その夜は曇り空ながら雨は降らず、翌日は朝のうち久しぶりに太陽の光さえ見ることができた。雨が降らなかったから、おそらくピストル強盗は出なかったろうと思ったが、はたしてそんな届け出はなく、大崎一味もなぜかここしばらくは鳴りを静めた形である。
　倹吉は午後からお蘭をたずねるつもりで、わざとこのあいだのはんてん着姿で両国へ出た。あれっきりお蘭の家へ衣装をあずけっぱなしでいる。それに、長いお座敷をつとめさせながら、まだ祝儀一つやっていない。面と向かってそれをいったら、あの女のことだからまた啖呵をきりかねないが、倹吉としてはなにかそれだけのことをしてやらなくては、ただ遊んだようで気がすまないのである。
　吉川町のかどを柳橋のほうへはいろうとして、倹吉はおやっと目をみはった。すぐ前をゆったりと歩いていくだんなふうの男の後ろ姿、まさしく立花屋浪右衛門だ。同朋町のめかけ松乃屋へでも行くところだろう。とすれば、だれかひもがついているはずだ。ほおかぶりをしているのをさいわい、それとなく振り返ってみると、五、六間うしろを常次郎がうつむきながら歩いていた。きょうはどこかの手代という物堅い身なりだ。
(よし、一芝居打ってやろう)
　ちょうどこっちもはんてん着なので、倹吉はふっと、とてつもないことを思いついた。いそいで柳橋をわたり、むさし屋の裏手の路地へはいって五軒めがお蘭の住まいである。
「お蘭ねえさん、おうちかね」
　倹吉は格子をあけるなり、わざととぼけた声を出した。どなたと答えて、茶の間から立って

きて障子をあけたのは、今ふろから帰ったばかりというような生地そのままのお蘭である。
「あら、どうしましょう、あたしこんなかっこうで」
ゆかた一枚だけを重ねた素あわせに、ふだん帯もしどけなくふくよかな肌の白さを思わせて、湯ほてりのさわやかな香をふりまきながら、つぶし島田の鬢を高々とかき上げた奔放ともいいたい姿のお蘭は、一瞬そこへはっと立ちすくんでしまった。
「はてね、ゆすりとでもまちがえられたかな」
「いいえ、もうしようがありません、こんな楽屋を見られちまったんですから。さあ、どうぞお上がりくださいまし」
「そうか、そいつは大やぼですまなかったな。しかし、楽屋のお蘭もなかなかいい女ぶりだ」
「たんとおなぶりなさいまし。さあ、お二階へどうぞ。今すぐ着がえますから。――ばあや、ばあや」
そわそわしてかん高く呼びたてるのを、
「いや、茶の間でけっこう。実は、大至急でたのみたいことがあるんだ」
倹吉はかまわず女くさい茶の間へはいって、長火ばちの前の赤いふとんの上へすわってしまった。
「おっと、この座ぶとんへおれがすわって、あとでだれかにおこられやしねえか」
「あいにく、そんなおこってくれるような生きがいの人、まだ見つからないんです」
このあいだの船の中の話をちゃんとおぼえている。少しおちつきを取りもどすと、もうそんな応酬ができる稼業がらのお蘭であった。
「だんな、あの節はいろいろと、ほんとうにありがとうございました。わざわざ送ってまでいただいたりして」
「いや、こっちこそきのどくなことをした。まさか、あんな余興がはいるとは、おれも思いもかけなかったんでな」

「震えてしまいました、あたし。いま思い出しても胸がどきどきするんです」
差し向かいにすわったお蘭は、おおげさに胸を押さえてみせる。ばあやが台所から茶をいれてきてあいさつをして、ちょっとお蘭の顔をうかがった。
「だんな、きょうはゆっくりしてくだすってもいいんでしょう。このあいだのお約束ですから」
「いや、急ぐんだ。ぜひ、お蘭ねえさんに一役買ってもらいたいんだがね、しばらくからだを貸してくれぬか」
「でも、一本ぐらい」
「せっかくだが、大急ぎなんだ。すぐ支度にかかってもらいたいな」
「そうですか。どこへ行くんでしょう」
「場所はすぐ近所だ。支度は、そうだな、ちょいと町へ買い物に出かけたというかっこうがいい。連れはこの姿のおれなんだから、あんまりぜいたくになるとつり合いがとれない。筋は道道話すことにしよう」
「なんだかむずかしそうなんですね。じゃ、とにかく失礼して、支度します」
お蘭はばあやに着物のさしずをして、自分はすぐ窓の下の鏡台の前にすわり、いさましくもろはだぬぎになった。うっかりながめていた目に、白羽二重のような女盛りの胸、肩、腕がいきいきとみなぎり輝いたので、さすがに行儀よく育てられた倹吉はびっくりして、どぎまぎと目を逃げた。
「こわいもんですね、だんな、真剣勝負って。ぎゅっと胸がしめつけられるようで、あたし歯の根が合わないんです。そのくせ、目はだんなの刀に吸いつけられてしまって、自分のからだがまるで宙にういているよう」
お蘭は平気で話しかけながら、顔から胸、首筋、肩のあたりまで、ぱたぱたとおしろいを両手でたたいているような音がする。
「お蘭、内密だ、その話は。忘れちまってくれ」

「あ、そうでござんしたね。どうしよう、あたし、ついうっかりしちまって」
急に泣きだしそうな声をあげたので、思わず振り向くと、お蘭は両手で乳ぶさをかくしながら、哀願するような目をからだごとこっちへねじ向けている。
「それもついでに忘れちまうさ」
あっさりいって、やっぱり女の肌はずぶとくながめてはいられない倹吉だった。

14

「お蘭、同朋町に松乃屋という出会い茶屋があるそうだな。知ってるか」
芸者の巣というような路地を連れだって出ながら、倹吉は小声できいた。渋い好みのお納戸小紋に博多の帯、ちょいとよそ行きという女の髪にさんごの五分玉がほおずきのように色っぽい。その連れがあまりこざっぱりとはいかないほおかぶりのはんてん着だ。お蘭にあいさつをしていくほどの者が、それとなくふたりを見比べて通りすぎた。定まらぬ空はまた曇り始めて、薄日がさっと町を刷いてはぬぐうように消えていく。
「名まえだけは聞いてます。おもにお店者なんかがいいひとを連れこむ家ですって」
「そこへおれを連れこんでくれ」
「あら――!」
お蘭はびっくりしたような声をもらした。
「安心しろ、まさか、そんなところでくどきゃしねえ。そこがお目当ての舞台なんだ」
「どうすればいいんです、あたしが」
「おまえがおれといういい人をそこへ連れこむ。おれは表向き建具屋の職人で、裏へまわるときんちゃく切りのまねもする。名まえは宇田吉とでもしよう。ほどよくあいびきという舞台を一幕見せて、それからおれが怪しい品物を松乃屋へ売り込みにかかる。たいせつなのは、怪しい品だということを、おまえがうっかりしたようにして、じゅうぶん相手にのみこませることだ。さて、その品を買うか買わないか、そこがこの芝居のやまなんだが、ひとつしっかり頼むぜ」

「できるかしら、あたしに」
おもしろがって二つ返事と思ったお蘭が、意外にも当惑したような顔をする。
「なあに、そうむずかしく考えることはない。失敗したからってべつに笑う見物がいるわけじゃなし、気を楽に持ってやってもらえばいいんだ。あんまり気がすすまねえか」
「そんなことありません。恥ずかしいんです」
男の前で平気でもろはだぬぎになれる女が、と、これもちょっと意外だった。しかし、まさか、がらにもないとひやかすわけにもいかない。
「そいつは困ったな」
「いいえ、やってみます、あたし。そのかわり、だんな、あとでわらっちゃいやですよ」
「そのだんなはいけねえ、お蘭。すぐお里が知れてしまう」
「わかってます」
栗橋をわたってすぐ右の横町が同朋町だ。その通りを半分ほど行った右の路地をはいって五軒めが松乃屋である。路地の入り口に常次郎とかわった下っ引きらしいのがしゃがみこんでいるところを見ると、まだ浪右衛門はたしかにめかけの家にいる。
あまり口数をきかなくなったお蘭が、真剣な顔をして、いきな格子をあけた。出てきた中年のやぼったい女中に、どこかあいていると、耳打ちするようにいうと、女中は心得て、二階の奥の六畳へ案内してくれた。おもに中番頭以下が客種の場所がらだから、調度もそれ相応のこしらえだが、床に文晁と署名のあるおしどりの軸物もそうへたではなく、花かごに切りたてのしゃくやくが投げ込んであるあたり、ちょっとこぎれいなおちついた部屋だった。
お蘭は如才なくすぐ女中に祝儀を握らせたよ

うである。まもなく、三さらほどつまみ物をそろえた膳(ぜん)とちょうしが出て、別にあつらえた水菓子の器を運んでしまうと、
「御用がございましたら、お手を鳴らしてくださいまし」
女中はそういって出ていってしまった。酌(しゃく)一つしなければ、冗談口一つきかない。なるほど、ここは出会い茶屋なんだからそのはずで、あとはふたりで好きにすればいいわけだ。が、見物がいないとなると倹吉はいささか手持ちぶさただ。お蘭もてれるのか、わざと差し向かいは避けて、横へすわってちょうしを取り上げる。
「いやに静かなところだね」
杯をほして女にやり、酌をしながら倹吉はあたりを見まわした。この辺一帯そういう出会い茶屋が軒をならべているが、弦歌の音一つしない。
「お料理屋さんじゃないんですもの」
「そりゃそうだろうが、これじゃ芝居のしようがない」
お蘭はくすりとわらっただけだ。
「まあ飲め。そのうちになんとかなるだろう」
「あたしがまたこのあいだみたいに、おとらさんになるかもしれない」
「そういえば、幸助はきたか、その後」
「あの翌日きました。いっしょうけんめいで、ほんとに感心な人ですね。ほうぼうへ口をきいてやりましたわ」
「そいつは喜んだろう。あいつはきっと出世するやつだ」
「そういう男に、下のものまでせんたくさせちゃかわいそうですね。どういう気持ちなんでしょう、お糸さんは」
話がほぐれるとつい杯が重なって、お蘭もぽっと顔へ出てきたが、およそあいびきの空気とはまだほど遠い。
「それもいいさ。ほれた女のものを洗ってやる、男の生きがいのうちだ。他人の口を出すところ

じゃない」
「そういえばそうかもしれませんけれど」
ちょうしがあいたので、お蘭は軽く手をたたいた。さっきのむっつり女中が顔を出して、ちょうしをといいつけるとすぐ運んできた。障子を半分あけてからだを廊下におき、けっして座敷へははいろうとしない。
「ここへ置いてまいります」
「御苦労さま」
お蘭がなにげなく立ち上がって取りに行くと、
「ねえさん。あの、おしたくはお次に取ってございますから」
はっきりと告げて、障子をしめて去った。
「とてもだめです、だんな」
席へかえって、お蘭がうらめしそうな顔をした。
「なぜだ」
「あたしたちがまだいい仲になっていないってこと、あのひとたちにはひと目でちゃんとわかるんです」
「そういうもんかな」
じっとひざのあたりへ目を落としていた女が、
「恨みます、あたし。こんなところへ来たこと、あすになればきっと柳橋じゅうの評判になってしまう」
つぶやくようにため息をついた。
倹吉はどきりとした。それを承知でからだを張ってきている女の気持ちが、はじめてのみこめたからだ。お蘭にとっては、はじめから、あれは芝居だったではすまない相談だったのである。ここまで来てはもう乗りかかった船で、どうにもしようがない。
「お蘭、それじゃほんとうにくどいてもいいか」
倹吉はすわり直さざるをえなかった。
「でも、迷惑なんでしょう?」
半分疑うように、お蘭が燃えるような顔をあ

げる。
「おまえがいやなら、このまま負けてここを引き揚げるまでだが」
「知らない」
　お蘭はいきなり身を投げ出すように、男のひざへ顔を伏せてしまった。
　けっきょく、芝居のつもりがほんものになってしまったのだ。倹吉は多少くすぐったい気持ちだが、べつに後悔は感じなかった。望みが高すぎて今まで無妻でいたというわけではない。仲人口だけで気心の知らない娘と結婚するのはわずらわしかったし、そうかといって好きでたまらないという女にもぶつからなかった。つまり、正直にいえば、女に縁がなかったのだ。それがこうしてほれられて、自分もまんざらきらいではない女とこんなことになったのだから、あとは自然の成り行きで妻にするまでのことだ。教養がないのと、平気で男の前でもろはだぬぎになれる神経は少し困るが、それも教えればおいおい直るだろうし、与力などという格式はあすにも消滅する運命にある御時勢だ、けっこうこういう世話女房のほうが身につりあっているのかもしれない。
「おい、そろそろ仕事のほうへかかるぜ」
　あらためて座にかえった倹吉は、澄ましこんでちょうしへ手をのばす女の顔をながめながら切り出した。
「そのお杯をいただいてからだっていいでしょう」
「杯――? ああ、そうか」
　倹吉はぐいと干して差しながら、
「この祝言、三々九度のほうがあとになりやがった」
「まじめに聞いてもらいたいことがあるの」
「なんだ、改まって」
「あたし、おめかけでもいいから、別れるのだけはいやですよ」
　おおまじめな顔をしているのである。

「めかけにはしません。ちゃんと奥さんにする。そのかわり――」
「そのかわり――?」
「以来、むやみに男の前でもろはだぬぎになると灸をすえるぜ」
「いつ、あたしがそんな――。ああ、お化粧のときのことね」
「お化粧のときだろうとなんだろうと、女は亭主以外の男に肌を見せるもんじゃない」
「そうね。ほんとうにそうだったわ。これから気をつけます」
「しかし、恐ろしいもんだな。もうどこから見ても他人でないってことが、おれにもわかる」
「そうかしら」
「まるで顔に書いてあるようなもんだ」
「いやな人――」
　そのにらんだ目もとばかりでなく、事実すわったひざが少しくずれて、からだ全体がゆるみながら任せきっているというふうに見える。役者ならしらず、なるほど素人の芝居ではとうていここまでの実感は出せまいと、倹吉はいまさらのように感心させられてしまった。
「呼びましょうか、女中を」
「うむ、呼んで見せつけてやれ」
「知らない、そんな」
　お蘭はわらいながら手をたたいた。例によって女中は障子を半分しかあけない。
「お呼びでございますか」
「ああ、ねえさん、すまねえが、ちょっとこっちへはいってくれ。相談があるんだ」
「なんでございましょう」
「おかみさんはいるだろうね」
「はい」
「実は、おかみさんに見せて、よかったら買ってもらいたい品があるんだが」
　倹吉は腹掛けのどんぶりから、ぜいたくなたばこ入れと、さんごの五分玉のついた銀かんざしを出してみせた。

「あら、それ――」
　お蘭がびっくりしていいかけるのを、おっかぶせるように倹吉が押さえた。
「変な声を出すねえ、ねえさんが妙に思うじゃねえか。――こりゃべつに怪しい品じゃねえんだ。ばくち場で抵当にとってきたんだが、おれはここんとこ五十両ばかりぜひほしいんでね。もし、おかみさんの世話でだれか買ってくれる人があったら金にしたい。すまねえが、ひとつきいてみてくれねえか」
「さあ、おかみさんがなんていいますか、おききだけはしてみます。この二つで五十両でございますね」
　女中は顔色ひとつかえず、品物を持って出ていった。
「ひどいわ。まるで本職みたい。いつの間に、抜いたんでしょう」
　お蘭はもう一度髪をさわってみて、うらめしそうな顔をした。
「かんざしなんかなんでえ、魂まで抜かれてるくせに」
「そりゃそうだけど。だめね、女って一度ほれちまうと」
「しかし、今のびっくりのしようは、ほんとうらしくきいたぜ」
「なんとでもおなぶりなさいな」
　さすがに惜しそうな愚痴一つ口にしないのは感心だと思った。それにしても、ひょっとこれで浪右衛門がつり出せるかなと考えていたのは、少し甘かったようである。
「お待たせしました」
　ことばのとおりしばらく待たせてから、女中が品物を持ってあがってきた。
「おかみさんにうかがいましたところ、こういう物の値ぶみはわたしにはわからないけれど、せっかくですから三十両ぐらいなら御相談にのってもいいと申しています」
「ありがとうよ。二十両から違っちゃ、ちょっ

とどうもねえ」
　実は、たばこ入れ一つだけでも捨て値にして五十両の価値はあるのだ、むろん、蔵品と見たから三十両につけてきた。また、蔵品の弱みがあれば、それで手を打つだろう。女にはその駆け引きはつかない。かげに浪右衛門がいてさしずしたのだ。これで浪右衛門は蔵品を平気で買うくらいの悪党だということだけははっきりしたわけだ。
　その日の松乃屋の一幕は、とんだ景品こそついたが、けっして無意味ではなかった。そう倹吉は自己弁護をしておいたのである。

15

　翌日は昼からまた雨になって、風さえ加わってきた。藤沢へ数馬を送っていった勝平はまだ帰らない。
　条件からいうと、今夜あたりはどうもピストル強盗の出そうな日だ。じゅうぶん気をつけるようにと倹吉は常次郎に使いをやっておいて、自分ももう一晩張り込みをやってみることにした。
　さて、とにかくお蘭というものができてみると、老婢(ろうひ)ばかりの屋敷へ帰って、もそもそとひとりで晩飯は食いたくなくなるから正直だ。倹吉の足は、自然柳橋へ向いていた。まだたそがれには少し早い夕方で、はんてん着のかっこうならともかく、八丁堀ふうで明るいうちから芸者の巣の中にある女の家へのこのこはいりこむのは、いささか気がひける。客になって料亭から座敷をかけてやろう、そう思って、鶯亭(うぐいすてい)という家の玄関へ立った。
「おや、お珍しい」
　ちょうどそこにいた顔見知りの女中がいそいで出迎えるのへ傘(かさ)をわたしながら、なにげなくそばを見ると、ふと長ぐつが目についた。陸軍のしゃれ者はよく長ぐつをはいているから、それが料理屋の玄関にあったところで不思議はな

いが、その長ぐつと一組みになっている下足は三足、計お四人さんということになる。

　ちょうど時分どきだから、客はこの降りにもかかわらず相当たてこんでいるらしく、弦歌の声もうきうきと家じゅうなんとなく活気だっていた。

「あいかわらず繁盛のようで、けっこうだな」

「おかげさまで。——さあ、どうぞ」

　女中は先に立って廊下をいくつか曲がりながら、奥まった茶室ふうの四畳半へ案内した。

「お狭くてすみませんけれど、あいにく、いいお部屋がみんなふさがっているもんですから」

「なあに、ここでけっこうだ。べつに座敷を食いにきたわけじゃなし、——しかし、ここは人目につかなくて、あいびきにちょっといい部屋だな」

「裏の離れになっているんです。よろしかったら、だんな、いつでもお使いなさいまし、特に見て見ないふりをしておきますから」

「ときに、つかぬことをきくが、四人連れの彰義隊さんがあがっているね。ひとりは陸軍服で」

「ええ、松田さんというかたのお連れです」

　相手が八丁堀だけに、女中は急に真顔になった。

「松田さんはお顔に傷があるだろう」

「ございます」

「その座敷へはお蘭がよく出るね。きょうはどうだ」

「もう来ているかもしれません。さっきもらいをかけていましたから。お蘭さんもおつな人に見込まれちまって、ありがたいような、ありがたくないような」

「お蘭に少しきいてみたいことがある。もし来ていたら、傷松にはないしょでそっとあいびきさせるわけにいかねえか。もっとも、もらえるんならこっちへ直してもらってもいいぜ」

　役目がらにかくれて口実を作ると、倹吉は内心くすぐったい。

「かしこまりました。そう申してみましょう」

　女中は心得顔をして出ていった。

　外に荒れる風雨の音と、家にわきあがる弦歌の声と、ここからはまるでよその世界のことのように遠い薄暗い小部屋で、女を待つ気持ちとはこんなものかと、倹吉はやっぱり甘くたのしかった。が、因果なことには、そのあとからたちまち役目がらが追いかけてくるのだ。

　大崎一味の四人組が集まっている。むろん、この風雨をねらって何かたくらんでいるのだ。とすれば、荒仕事をして例によって今戸河岸へあがるのは真夜中すぎ、切るにはちょうどいい機会だし、万一小定が網を張っているとすれば、大崎の口だけはどうしてもふさいでしまわなければならない。立花屋のほうより、このほうが先だと、倹吉は予定を変更する気になった。

「ごめんくださいまし」

　ふと、廊下を小走りに踏んできた女が、障子の外へひざをついて、だれかしらというように細目に戸をあけた。あら、とよそ行きの顔をびっくりさせながら、すそさばきもあざやかにするりと中へすべりこみ、後ろの戸をしめきってしまえばもうふたりの世界だというように、

「だれかと思うじゃありませんか、どうなすったの」

　お蘭はひざを突きあわさんばかりに男の顔を見あげた。

「傷松の座敷だそうだな」

「そうなんですって。あたしほかへ出ていて、たった今ここへはいったばかりなんです。そしたら、このお座敷に用のある人が待っているからって、お梅さんがそっと知らせてくれたんです」

「じゃ、まだあっちへは顔を出さないのか」

「ええ」

「おれはまたお蘭ねえさんが売れっこだってのをついうっかりしちまって、少しからだがあいたもんだから、いっしょに飯でも食おうと思ってきたんだ」

「なら、どうしてうちへ来てくれなかったんです。迎えをよこしてくだされば、すぐ帰るのに」

「まさか、このかっこうで明るいうちから巣へもはいりこめまい。だいいち、うわさにたつと稼業がしにくいだろう」

「いいんです、もう稼業なんか。おかげで、近いうちにひかしてくれるいい人ができたんですから」

「ほう、どこの馬の骨だ、そんな二本棒は」

とたんに、いやというほどひざをつねられて、倹吉はあっと顔をしかめた。けっきょく、こうして会ってしまっては、離れたくもないし、放したくもないふたりである。さいわい傷松のほうへはまだ顔を出していないのだし、あたしがなんとかしてもらってくると、お蘭が自分で掛け合いに行って、うまく女中を説き伏せてきたらしい。そのかわり、二、三人芸達者なのを一座させて、むろんお蘭は他人のような顔をしながら、女中まで引き入れ、どんどん好みの料理を取ってやって、調子よくおんなたちを遊ばせるのである。だんなはそれを見て、酒をのみながら、にこにこと二本棒にされていればいい。つまり、きょうの一幕はお蘭が立て役者なので、そのほうがまた無芸でやぼな倹吉にはかえって気楽で、おもしろくもあった。

さて、そのままますめばこの一幕、至極めでたしめでたしだったのだが、残念ながら幕開きにちょっと無理があった。倹吉は傷松の呼んだお蘭を横取りした形になっているのである。宴たけなわというころ、

「いけません、だんな、――いけませんたら」

急に廊下で女中たちの金切り声がして、どたどたと足音の乱れるのが聞こえた。

「ええ、じゃまするな。かまわねえ、与力がなんだ。のけ」

野太い声がわめいている。

「やぼですよ、だんな。いけませんたら。お蘭さんに御用なら、あたしが呼びますから」

「きさまではらちがあかねえ。うそばっかりぬかしやがる。おれはちゃんと見たんだ。彰義隊をなんだと思ってやがる」

「いくら御覧になったって、人さまのお座敷へ、困りますってば。――あれ、だんな、だんな」

ついに止めきれなかったらしく、どかどか、がらりと手荒く障子があいて、ぬっとそこへ仁王立ちになったのは傷松だった。衣紋もはかまもだらしなく酔いくずしているが、赤鬼のようなつら構えで、はだけたえりに胸毛が黒い。こうなると、ほおの傷がいっそうすごみに見えた。止めきれなかった女中たちも、座敷のおんなたちも、一瞬はっと息をのんで青くなる。

が、倹吉の顔を見た傷松は、さすがにぎょっとしたらしかった。黙って相手の出ようを待っていると、そこは相当人を食った悪党だ、にらみつけていた顔へ、なんと思ったかふっと不敵なうすら笑いをうかべて、

「なんだ、あんたか、あんたじゃしようがねえな」

ぱたりと障子をしめて、ゆうゆうと引き揚げていった。大風一過というやつである。

あとからすぐ女中やおかみまであやまりにきたが、いってみればこっちにも無理を通した弱みがあることで、倹吉は内心はいささか恥ずかしかった。それに、一度しらけた興味は容易に取りもどせるものではなし、また大崎から妙な招待でもうけるようになると、いよいよ事めんどうになる。こういうときは切り上げが肝心だと早くも腹をきめて、

「きょうはおもしろかった。いずれまた近いうちにこのつづきをやるから、そのときはまた今夜の一座で顔を合わせてくれ」

倹吉はあっさりと座を立ってしまった。

「うちへ行っていてくださいよ、すぐ帰りますから」

用ありげにかげへ呼んで、お蘭は念を押すことを忘れない。うむとうなずいてみせて、おれ

もいいかげん二本棒になったぜと苦笑しながら、鶯亭を出た倹吉はふと気がついた。

「あの連中もすぐ引き揚げるだろうな。おれの目についたとなると、しりがこそばゆくて長居はできまい」

　しかし、あとでわかったことだが、実はこの考えも大甘ものだったのである。恋をして、その恋が珍しいうちは、どんなに用心していてもどこか仕事に穴があくものとみえる。その夜の倹吉がそれだった。真夜中から夜明けへかけてたいせつな仕事があるのだから、宵のうちにじゅうぶん睡眠を取っておくべきであった。それもあとになって気のついたことである。

16

　その夜、倹吉がお蘭の甘いうつり香をのせて花川戸まで駕籠を走らせたのは、やがて九ツ過ぎであった。そこから目ざす今戸までは、もうひとまたぎである。

　暗い町を雨はまだ横なぐりにいつやむとも知れず、どうせぬれるのは覚悟の頭を黒頭巾でつつみ、肩へ油紙をかぶっただけのしりっぱしょり足袋はだし、倹吉はまもなく今戸橋へ出た。ここは山谷堀が隅田川へそそぐ入り口、大崎一味が荒仕事をすませて船で今戸河岸へあがり、吉原へ行くとすれば、必ず通らなければならないところだ。倹吉は橋をわたって左手、堀にそった慶養寺の築地の下に雨をよけて、ここでかれらを張り込むことにした。

　堀を隔てて人家の屋根のすぐ向こうに、待乳山の森がまゆにせまらんばかり黒々と風雨に鳴っている。ここからは左手にあたる隅田川は、山谷堀がそそぐあたりからやみに塗りこめられ、ただ鼻をうってくる強い水の香にその洋々たる川幅が感ぜられるだけだ。夜明けまでにはまだ二刻の余もある。さて、待つとなると相当以上に根気のいる仕事だが、今夜の倹吉には必ずかれらは来るという自信があった。

「どうだ、傷松たちもあれからすぐ引き揚げやしなかったか」

　あとから帰ってきたお蘭にきいてみると、

「そうなの。だから、あの人たちが帰るんなら、なにもあたしたちあわてることはなかったって、みんなくやしがっていました」

　それは倹吉が想像したとおりで、その想像をもう一歩進めると、かれらは今夜仕事をしようという腹があるから与力の目がこそばゆい。それさえなければ、あのずぶとい奸智の大崎のことだから、きっとその場ですぐ何か仕返しの手をうってくるはずだと考えられたのだ。

「お蘭、ことによると、今夜、おれはおまえの兄貴のかたきをとってやるようになるかもしれないぜ」

　倹吉は調子にのって、思わずそんなことばが口から出た。

「今夜——？　じゃ、帰る気なんですか、この降るのに」

　お蘭にはそのほうが先にぴんときたらしい。女というものはてまえがってなものだと、倹吉はいささかあきれさせられた。

「のんきなことをいうぜ。帰るったって、家へ寝に帰るわけじゃない。八丁堀のだんなが御出役に、雨風をいとっていられるか」

「あら、お役目なの。それじゃしかたありませんけど、どこへ行くんです」

「だから、金次のかたき討ちに行くんだ」

「わかったんですか、にいさんのかたきが」

「まだはっきりそうだとはいえないが、たいてい見当がついた。十年待たずにこんな変なことになってみると、おれにも責任があるからな」

「じゃあたしもいっしょに行きます。連れてってください」

　急にするりと床を抜け出して、髪を直しはじめるのだ。つまらぬことを口にするのではなかったと、倹吉は後悔してしまった。

「ばか、女をつれて御出役ができるか」

「遠くに離れていればいいでしょう」
「まあいいから、おまえは家で寝ていろ。いざとなれば歯の根があわなくなるくせに、物好きな女だ」
しかりつけるようにして、それだけは相手にもしないでいると、いつの間にこしらえておいたか、出がけに、じゃこれをふところへ入れていってくれと、奉書でくるんでていねいに紅白の水引きまでかけたものを渡した。なんだときくと、なんでもいいから持っていってくれと、しんけんな顔つきである。こういう社会の女は、いろいろな縁起をかつぐ。何かそんな意味の魔よけかおまじないのつもりだろうと思ったから、しいては拒まず、少しかさばるがふところへ入れてきた。
「あの無知だけは、当分直るまいな」
今も思い出して、倹吉は苦笑が出るのである。御出役のたびに縁起をかつがれて、変な魔よけを持たされてはたまらない。そのくせ、燃えるような長じゅばん一つの上へ羽織をひっかけただけのふしだらなかっこうで、かいがいしく着替えの世話をやいたり、熱い茶を入れてくれたり、さては出がけに切り火までかけてくれた無知でなければできない女の放縦な親切を、なんとなく憎みきれない倹吉である。おれも元来は案外孔孟の教えとは縁の遠い男にできているのかもしれぬ。そう反省して、ふっと気恥ずかしくなってみたり、所在なさについ、いま別れてきた女のうつり香に心をひかれていた倹吉は、突然はっと聞き耳を立てた。
「その辺でよかろう」
暗い風雨の底に、そういう声が水にこもってひびいたのをたしかに聞いた。と見る間に、橋上は雨にけむって人っ子ひとり通らぬ今戸橋の下から、すうっと船のへさきが目の前へあらわれ、ごつんと橋のたもとの桟橋へ当たった。
倹吉はとっさに築地の根方へぴったりと地に腹ばう。まっさきに桟橋へひらりと飛んだやつ

が、すばやくあたりを見まわしてから、
「みんな、忘れ物のないように気をつけろ」
船のほうへ声をかけて注意した。黒い頭巾で顔をつつみ、羽織はかまのまま頭から雨にぬれているという異様さである。どうやら、そのかっこうは傷松のようだ。つづいてふたり、同じような黒頭巾で、いちばんあとから軍装の大崎が、これも覆面ながら例の長ぐつをはいて上がってきた。あとは予定の行動らしく、四人一団となって無言のまま足早に、今戸通りを八幡社のほうへ歩きだす。
思ったよりかれらの出現が早すぎたので、倹吉はちょっと機先を制された形になった。船から上がったところを、御用っと飛んでいって、有無をいわせず大崎を切る、あとの三人はおどろいて逃げるだろう、行く先は吉原だろうから、それは翌朝大門口でつかまえればいい、そういう腹だったが、お蘭のうつり香に甘く酔っていたのが不覚で、つい一瞬の気魄にかけ、今となってはやむなく尾行しなければならぬ立場になった。
なに、機会はいつでもつかめる。そう思ったのと、吉原とは方向が違う。しかも、四人とも覆面姿だ。時刻からいっても、あるいは仕事をすませてきたのではなく、これから仕事にかかるのではないか、この辺には金持ちの寮が多い、ふっとそんな気もしてきた。よし、どこへはいるか、どんなふうにやるか、ひとつ手ぎわを見とどけてやろう。倹吉はその気になって、さいわい向かい風のうえに雨が強い、尾行には好都合だ。そのうえ、かれらはまさかつけられているとは気がつかぬらしく、ひたすら先を急いでいる。
まもなく、左にうっそうたる八幡社の森が見えてきた。その前を通りすぎて、八幡社とは筋向かいになる門構えの前へ、かれらはふっと吸いよせられるように寄っていった。たいして手間もかからずくぐりがあいたようで、そこから

ひとりずつ中へ消えてすっとくぐりがしまった。

走り寄って、中のけはいに耳をすましてから、倹吉はそっと桟に手をかけた。すばやく中へはいってしばらく立っていたが、べつに人声一つ起こらぬ。目の前五、六歩のところに、中は格子造りらしいしゃれた玄関があり、雨戸が堅くしまっていた。その玄関の右手に庭へ出られるらしい切り戸があって、ばたんばたんと風にあおられている。むろん、かれらはそこから庭へまわって、いつもの手口どおり、外から雨戸を押し倒したにちがいない。それにしても、叫び声一つ、物音一つしないのは少し変だ。倹吉は静かに切り戸から家の横手をまわって庭へ出ながら、

「あき家らしい、ここは。一杯くわされたかな」

ぎくりとして、その夜目にも荒れ果てている広い庭を見わたした。一面に草がのびて庭石をうずめつくし、枝をひろげほうだいの樹木が風雨に黒々と波だっている。幅よりも奥行きのほうが深いらしく、ここも堅く雨戸のしまった軒下づたいに進み、回り縁になっているらしい母屋のかどにそって左に折れると、正面の木の間がくれにぼうっとほかげが漏れているように見える。

「そうか、やつらはあき家をさいわい、ここを隠れ家にしているのだ」

用心深く母屋のはずれまで進むと、母屋とはかぎの手に土蔵が建っていて、ぽかりとあいた入り口からなんとなく黄ばんだ明るみがただよってくるのだ。倹吉はじりじりと蔵の戸前へ進み、中をのぞいてみると、ほかげは二階へのぼる階段口から明るく落ちている。かれらは二階にいるのだ。

「よし、踏み込んでいって、こんどこそたたっ切ってやる」

倹吉は一つ深い呼吸をして、階段に足をかけた。じっと心気を押し静めながら、獲物をねらう猟人のごとく、段一段と忍び上がる。上からはひっそりとして話し声一つしない。外からの風雨の音に消されているのだろうか。さすがにからだじゅうじっとりと汗ばんできた。ちょうど階段の半ば、もう二、三段のぼれば上がのぞけるところまできたとき、突然がらがらという音が足もとから起こって、はっと立ちすくむ間に、今はいってきたばかりの蔵の格子戸が締まった。がちゃりと錠のおりる音と同時に、表の重い開扉が生き物のように両方からぱたんと締まる。外の風雨の音が急に遠くなった。

何のことか一瞬ふにおちぬながらも、倹吉は重大危機が身に迫ったのを直感して、一足飛びに二階へ駆け上がった。が、そこには一寸ばかりの裸ろうそくが上端近くの床に立ててあるばかりで、人けはなく、がらんとしたあき蔵いっぱいに湿気が重くよどんでいる。

「しまった」

さすがに倹吉の背筋をぞっと悪寒が走った。あかりを消さないようにろうそくを取りあげ、階段をおりて戸口を調べてみたが、がんじょうな格子戸はむろん外から錠がおり、しかもその向こうに重い土の表とびらが堅く閉ざされている。倹吉はすぐ二階へ取ってかえし、窓を見てまわったが、二つある窓の格子戸にはいずれも内から錠がおりていて、その向こうに鉄格子がはまり、外からはやはり土の表とびらがぴたりと締めきってあった。つまり、倹吉は完全にあき蔵の中へ閉じこめられてしまったわけである。

「おちつくんだ、いまさらあわてたってしようがない」

そう自分にいい聞かせる声が、ぶきみに四方の壁に反響して自分の耳にかえってくる。それは大声を出して外へ救いを求めたところでとうていむだだということを裏書きされたようなものだ。階段をおりる足もとがふるえて、じっとりと額にあぶら汗を感じた。

助かる道は一つしかない。だれかが偶然に外からとびらをあけるときを待つばかりだ。腕力でとびらなり壁なりを破ろうとすれば、おそらく破りうるまえに体力のほうが参ってしまうだろう。それはいたずらに自分から死期を早める結果になる。入り口の格子戸のところへ帰って、床にろうそくを立てたときには、もうそれは五分ほどしか残っていなかった。倹吉はその前にあぐらを組んで、背を格子戸によりかけた。あたりは森閑としてしめっぽく、外界の風雨の音は水を隔てて聞くように遠い。

「なぜ、こんなわなにおちたろう」

じっとあかりをみつめながら腕を組んだ。やつらは船から上がったとき、もう自分のいるのに気がついていたのだろうか。いや、そのとき気がついてこういう段どりにするには、あまりに手が巧妙すぎる。だいいち、あそこからここまでにそんな相談ができる暇はなかった。これはもっとまえからの計画だ。今夜、鶯亭で傷松と顔を合わせている。

「そうか」

急にいなずまのごとく頭にひらめくものがあった。――数馬があれっきり彰義隊へ帰らない。大崎は早くもそれを自分と結びつけて考えた。とすると、数馬の口から一味の犯行、その手口などが漏れているかもしれない不安を感じだした。そのやさき、今夜、鶯亭での傷松との一幕である。大崎は傷松の報告を聞いて、おそらくひもがついたと感じたのだろう。そこで、その逆手を取る。倹吉が自分たちの手口を知っていれば、今夜は必ず今戸橋へ張り込むだろう。むろん、数馬のことがあるからひとりで来る。かれらはこのあき蔵のあることはかねて知っていたので、ここへ閉じこめてしまえば、手を労せずして敵を葬ることができると考えたのだ。

「待てよ」

かっとこみあげてくる憤怒を抑えて、倹吉は前のあかりをにらんだ。おれをここで餓死させ

るのが目的なら、そのまえにかれらは一度きっと様子を見にくるだろう。二、三日たって、こっちがすでに戦う気力を失ったころ、様子を見ながら侮辱にくる。そのくらいのことはしそうな大崎だ。なんとかそのときまで体力を保っていられるくふうはないものか。

が、いくら考えても、水も食べ物もないこのあき蔵の中で、そんなくふうのつくはずはなかった。

「女なんかにうつつを抜かしていた天罰さ」

自嘲せざるをえない。家を出るまで痴情に酔いしれて、しかもその女から妙な魔よけまでわたされて、いい気になってでれりとふところへ入れてきた二本棒なのだ。――しかし、お蘭のやつ、気違いのようになるだろうな、おれがここでもし死んだら。それでもまだそんな夢を追いながら、ふところから魔よけのごていねいな紙包みを取り出して、いったい何がはいっているんだろうと、ごそごそ紙をほぐしてみた。出てきたのは、するめを一枚一枚こんぶで巻きつけたものである。

「はてな――」

これがなんのおまじないになるんだろうとながめているうちに、残りのろうそくが尽きて、はたはたとまばたきながらふっと消えた。そのやみの中で、よろこぶに当たりめ、金次のかたき討ちということばが出たので、おそらくその縁起をかついでのお蘭らしい思いつきと読めたのは、考えが単純すぎるだけに少し手間がとれた。が、場合が場合だったので、この二品は大いにありがたかった。たいせつに食っていけば、これで三日四日は気力が保てると思ったからである。

「無知また愛すべしか」

一寸のがれながら、さし迫った不安がいくぶん軽くなると急に疲れが出て、倹吉はやみの底へごろりと横になった。まだからだのどこかに酒気が残っていて、横になると骨の節々が溶け

ていくような気持ちである。
のんき千万にも、どのくらい眠りこけていたのだろう、なんとなくはだ寒さにふと目がさめると、とびらのほんのわずかなすきまからにぶい光が漏れていたので、夜が明けたことがわかった。とたんに、昨夜からのできごとがまざまざと脳裏へよみがえってくる。
「そうだ、おれはいま死の断崖に立っているのだ」
倹吉はむくりと起き上がった。熟睡をして明晰になった頭は、たちまち容易ならざる事態をはっきりと痛感したのだ。二、三日たてば大崎一味が様子を見にくるだろうなどと安易にきめていたのはまちがいだ。なるほど、あるいは来るかもしれない。しかし、それを二、三日ときめてかかるのがいけないのである。気力がつきて来られたのではどうにもしようがないのだ。とすれば、ここはあき屋敷のことで外からの救いはまったく絶望なのだから、どうしても自分の力で血路を開かなければならない。
では、どこに血路を求めるか。この入り口では、太い格子戸の錠のかかっている部分を切り取っても、外のとびらに表から二重の錠がかかっているだろう。内からそれを押し破るのは不可能だ。破るとすれば、二階の窓よりほかにない。その窓なら、格子戸の錠を切りさえすれば、外とびらは中からあけられるようになっているはずである。難物は格子戸と外とびらの中間にはまっている鉄格子であって、これはその鉄棒を植えつけてあるわく木をえぐり押しはずすよりしようがあるまい。うまく中二本さえ押し抜ければ、からだが出る。あとは帯をなわばしごに使えばいいのだ。
「まず縁起ものの朝食を食ってからだ」
倹吉はたいせつに内ふところへしまっておいた食糧のうち、するめを出して頭のほうから三分の一ほど裂き取り、ゆっくりかみしめかみしめ食った。お蘭をはじめて佐原屋へつれていった晩、これをさかなに酒を飲んだ。大好物だといったのを覚えていたらしく、どこからか本場物を買ってきておいて、きのうもおいしいでしょうと自慢していた。そのうちの一枚だということを、倹吉はいま思い出した。

「無知また愛すべしか」
ちょっとほのかな気持ちになったが、食い終わってもあまり腹の足しにはならぬ。しかし、食糧はなるべく食いのばさなくてはならないのだ。
倹吉は元気よく二階へあがっていった。ここにもすきま漏るわずかな光があって、窓の錠の位置はすぐ知れた。これはつるのところを刀で打ち切る計画である。すえ物切りの呼吸で、まず一太刀えいと力いっぱい振りおろしてみた。がっと火花が散ったが断ち切れぬ。えい、えいと、三太刀四太刀。だめだ。練兵館の免許も、鉄に出会っては歯がたたぬらしい。あの気合い、この呼吸と、くふうをしては二十回、三十回、自慢の刀の刃がぼろぼろになってしまった。それでも、これを切って落とさないことには血路は開けぬ。死にもの狂いで、やっと五十何回めかに、切り落としたのではなく、たたき落としえた。
「しめた」
ほっとして格子戸を引き、鉄格子の間から手をさし入れ、ぐいと外とびらを押してみると、案の定、これは苦もなく外へあいて、ぱっと明るい光線が新鮮な空気といっしょに流れ込んできた。その一瞬の歓喜、もうこっちのものだと、倹吉はおどり上がった。しかし、その窓の向こうは三尺ほど隔てて同じような蔵の窓に向かいあっている。視界がきかないうえに、きょうもあいかわらずの雨で、わずかに見上げられる空はどんよりと低くたれさがっていた。耳を澄ましても、町の物音は何一つつたわってこない。これでは、いくら大声を出してみたところで、ちょっと救いの手は得られなさそうである。

歓喜は実につかのまだった。しかも、鉄棒を植えたわくは五寸角の樫で、刀のきっさきぐらいではそう容易にえぐれそうにもみえない。といって、ここで勇気がくじけては餓死するほかはないので、倹吉はするめの足をかじりかじり、根かぎり樫の台木をえぐりつづけた。何度も絶望感がきた。鉄棒は相当深く植え込んであるうえに、疲労と飢えがしだいに加わるばかりで、仕事は遅々として進まぬ。まだ一本の半分も掘り進まぬうちに、雨の日はとっぷりと暮れてしまった。暗くなっては仕事にならない。棒のようになった腕をさすりながら、根気もすっかり尽き果て、倹吉は世にもみじめな気持ちで下へ降りてきた。万一の機会をのがさぬためには、夜は戸前口に寝る必要がある。そして、とても空腹に耐えきれないので、残りのするめを全部かんでしまった。

　あすはたった一枚のこんぶしか残っていない。それがある間に、はたしてあのがんじょうな樫の台木を征服しえられるだろうか。重苦しい死の恐怖が、突然やみに翼をひろげたように思えた。ここで死んではならぬと、何度か奮起し、しかし、とうてい手段のないことを思って絶望のどん底へけ落とされたり、倹吉は肉体的にも精神的にも、くたくたに疲れきっていた。うとうととなりかけては、何かしらぞっとして目がさめる。悪寒がからだじゅうを走って、額へ手をやってみるとまるで火のようだった。

「かぜまでひきこみやがった。いよいよおしまいかな」

　またうとうととなりかける。やたらに水がほしい。これで眠ったらそれこそおしまいだという気がして、不安でたまらない。じっとやみをにらみながら、しかし、いつの間にかからだが宙に浮く感じで、もうろうとなってしまう。そんなことを繰りかえし、精も根も尽き果てて、どのくらい夜がふけたころだったろうか。

　ことり――!

　ふとそんな金属性の音を聞いたような気がして、はっと我にかえった。思わず耳をすましていると、まもなくぎいっとちょうつがいの鳴る音がして、蔵の外のとびらが静かにあいたのである。

　瞬間、夢を見ているのかなと思った。が、夢ではない。外気がぞくりとほおにふれ、外のほのあかるみを背負って格子戸の前へぼうっと人の立ったのがわかった。

「来た。――大崎だ」

　倹吉はどこにまだそんな力が残っていたか、自分でも不思議だった。すばやく刀をつかんで立ち、戸口の壁へぴたりと身を寄せる。格子戸の錠をはずす音がして、がらがらと戸が半分ほどあいた。そこからすっと中へひと足はいって立ったのは、どうも大崎らしくない。黒い布で顔をつつみ、中肉中背、しりっぱしょりのがっしりした男である。――はてな、馬喰町で取り逃がしたくせ者、なんとなくそんな気がしたとき、その男は慣れたすり足でするすると蔵の奥のやみへ姿を消した。思いもかけないことだっただけに、なんともぶきみである。

　いま脱け出してはあぶないというような気もしたし、この奇怪千万な男はなにをする気だろう、そういう疑問もあって、倹吉はじっと息を殺していた。

　男はやみの中へまるで土ぐものごとくうずくまって何か手さぐりしているようなけはいだった。まもなくぱたんと音がしたのは、床板の一部をはずしたらしい。――そうか、地下室があるなと全身を耳にしているうちに、床下からかちっかちっと火打ち石を鳴らすのが聞こえてきた。

　その秘密をのぞいてやろうという好奇心より、一昼夜のあいだ死の恐怖にさいなまれつづけていた心は、一刻も早くこの生き地獄からのがれたいと思う気持ちのほうが先だった。今だと思って、倹吉はするりと蔵の戸口から脱け出

す。半分夢中で荒れた庭を抜け、例のくぐりから表へ出て、——おれは助かったと思うと、ただわくわくと胸がおどる。何刻ごろか知らぬが、今夜も雨で町は暗くひっそりと寝しずまっていた。どこかでしきりに犬の遠ぼえが聞こえる。

　さて、これでもうだいじょうぶだとなると、急に理性がよみがえってきた。現在この目でくせ者を見てきている。このまま手をつかねて見のがすわけにはいかないのだ。倹吉は閉ざされた門のとびらにぴたりと身を寄せて、くせ者の出てくるのを待った。しきりに悪寒がして、腹にも足にも妙に力がないようだが、闘志だけはもうすっかり取りかえしていた。しかし、あとで反省してみると、相当長い間そうして待たされていながら、そのときはただくせ者をつかまえてやろうとねらっていただけで、ほかにはなんの思慮も働かせていなかった。それだけやはり精神力も体力も衰えていたのである。

　ふいにくせ者が出てきた。それはまったく足音をたてない幽霊のごとく、すうっとくぐりから出て、後ろざまにとびらをしめ、もう往来へ踏み出しているというすばやさである。いささか虚を突かれた倹吉は、はっとして、

「御用っ」

　背後からおどりかかるなり、腰の十手を抜いてくせ者の右肩へしたたか一撃をくれた。ひるむところを同時にはがい締めに組みつくのが定法で、倹吉はそのとおりの行動に出たのだが、くせ者はとっさに身を沈めるようにして、するりとこっちの組み手に行く下をくぐり抜けていた。つまり、最初の一撃で少しもひるんではいなかったのである。そして、すり抜けるやいなや、まったく脱兎のような敏捷さでぱっと今戸橋のほうへ逃げ出したのだ。

「待てっ」

　すかさず倹吉はあとを追った。が、こうなると一昼夜絶食同様の体力がすべてにひびいてくる。息ばかりはずんで、足が少しも前へ出ない

感じだ。今戸橋をわたったときには、くせ者はもうどこへ逃げこんだか、完全に姿を消していた。

　だらしがねえなと思ったが、どうにもしょうがない。しかし、巣はちゃんとわかっているのだ。あせるにも及ぶまいと、みずから慰めた。極度に疲労を感じ、まるで力の抜けてしまったからだをふらふらと花川戸まで出てくると、おりよく吉原帰りらしいもどり駕籠にぶつかった。

「駕籠屋、八丁堀の者だ。駄賃ははずむから、柳橋までいそいでくれ」

　手にしていた十手を見せると、こういうときはにらみがきく、一も二もなく駕籠をおろして、

「へえ、どうぞお乗んなすって」

「何刻だろうな、今は」

「まもなく八ツでございましょうよ、だんな」

　金竜山で打ちだすその深夜の鐘を倹吉は並木町あたりで耳にしながら、またしても襲ってくる激しい悪寒に、じっと歯をくいしばっていた。

17

　官軍と彰義隊との衝突は、日ごとに激しくなってきた。こういう不自然な状態は、いつまでつづくはずがない。

　朝廷では四月二十七日、長州の大村益次郎を新たに軍防事務局判事に任じ、江戸へ下してこの解決にあたらせることにした。むろん、解決の手段としては、とうてい討伐以外にないのである。

　そこで、大村が出府すると、大総督府がこれまでとっていた黙認主義は、がぜん一変して武断的威圧政策となった。まず五月一日、田安家に委託してあった江戸市中取り締まりの任務を解き、巡邏警衛の権を官軍の手に収めたので、彰義隊の仕事はこれでなくなったことになる。

　仕事がなくなった以上、彰義隊は当然解隊していいのだが、事実は逆に官軍に対して憤激の

態度に出るだろうことは、大総督府もじゅうぶん承知のうえであった。

その彰義隊の背後には寛永寺がついていて、執当覚王院義観が輪王寺宮を擁し、大いにこれをあおっていたのだ。田安中納言、勝安房、大久保一翁らは、そういう彰義隊の行動がけっきょく徳川家のために不利を招くことを憂い、山岡鉄太郎を使者として東叡山へやり、覚王院に面会して彰義隊解隊のことを説諭させた。しかし、義観は、

「今日のこと、名は朝廷といえども実は薩長の所為である。貴殿が参謀に応接するも、また薩州に誑惑せられたのであって、朝廷にはあらず。貴殿は世々徳川家の恩沢に沐浴して、一朝これを忘却するか。徳川家祖先もあらかじめ後世にこのことあるを知り、この山を経営し、皇族をもってこれに主たらしめたのである。かつ、一幅の錦旗を日光山におさめたるは、もし朝廷残暴にして禍乱をなすの変あるときは、当宮をもってこれにかえ、万民を安んずるの意なり。貴殿のごとき軟弱にして恩を知らざるものは、徳川の賊臣にして、これを蜂腰士といわずや」

こう罵倒して、解兵斡旋を拒絶した。

大総督府としても、輪王寺宮をそのままにして上野攻撃はできない。そこで、五月四日、参謀西田辻公業と寺島秀之助を東叡山へつかわし、宮をさとして京都へ還御のことを取り計らわせた。が、宮は面謁を拒絶され、覚王院も病と称して出てこなかった。

この彰義隊討伐については、大総督府参謀たちの間にも二つの議論が対立した。それについて、長州出身の参謀寺島秀之助は、のちにこう語っている。

「先生（大村）が江戸へきたのは四月ごろであった。その時分有栖川宮についていた参謀は西郷吉之助が名頭で、林玖十郎とかわたしどもだ。それから木梨精一郎、海江田、安場というような先鋒参謀で橋本についてきた人々が、とうとう江戸にはいった時分は先鋒も何もいっしょになったのだが、こんど西丸へはいるまえは実に乱脈でしかたがなかったものだ。――それで、宮さまを西丸へ入れ申したなりで、兵はごろごろたくさんいるけれども、しようがないのだ。そういうありさまであるから、わたしどもは帰ろうというようなことをいうたことがある。そこへ大村先生がやってきた。

それで、彰義隊追討ということはどうしても仰せ出されなければならぬことになった。というのは錦の布をつけている者がぞくぞく暗殺されるというようなことで、夜歩けば殺されるというふうになった。

いよいよ上野追討の御軍議ということになって、今日ではりっぱな人であるが、その時分勝などとしじゅう往復しておった人で、その人と大村が非常なけんかをやったのだ。その反対者のいうには、かくのごときわずかな官軍をもって江戸で兵をあげるということは、実に無謀な話である。すでにこの床の下まで火がまわっているようなものであるから、もしも殿下のお身の上に一朝なにごとか危害のことが迫ったなれば、再度京都へお帰りができぬようになるというておどす。

そうすると、大村先生がいうには、いや、けっしてそのような御心配はない。これでじゅうぶんいくさのできぬことはない。益次郎お請け合い申しますというものだから、さあ、その先生おこりだして、いくさを知らぬなどとはなにごと、益次郎言語道断なやつじゃというようなことで、橋を落として見附を締めて戦うくらいのことは知っている。けれども、実際兵が足らぬというのだ。そうすると、先生は、それは足らぬことはない。これでじゅうぶんである。見附見附へ配って、その間に準備兵を配っておけば、急なことがあればどっちへでも行けるから、この兵でたくさんだ、というようなことでけんかが始まった。

ほかの参謀たちは何もいわず、その席には正親町、西田辻、それから三条さんなどおられたが、わたしどもは平伏ですみのほうにおった。そのとき三条さんが、次の間へわたしをひっぱっていって、きさまはどう思うか、あのようにけんかを始めては困るが、という話で、わたしは大村の門人でございますから、なにとぞ大村のいうことを御採用くださいというておいた。それから軍議もいよいよ追討ということにきまって、その反対した人は、駿府の警衛かなにかですぐに駿府へやられてしまった」

この軍議のあったのは五月八日のころで、いよいよ討伐ときまってからの大村の準備は、実に周到であった。

「当時上野にたてこもっていた不平党彰義隊を討たねばなるまいということになり、その計画を論議されたのであるが、そのとき伯（土方久元）が最も感心されたのは、かの大村益次郎である。かれは西郷や寺島などとともに参謀をしておったが、当時まず第一に諸見附の固めをすっかり正義の藩にやらせようということで、鍛冶橋、呉服橋のような外郭の門を正義の藩々にいいつけて警固せしむることになり、それから上野を討つ儀につき、とかく事の有無にかかわらず、諸藩の隊長を毎日西丸に集むることになったが、これは、にわかに諸藩の隊長を召集すれば、かれらから直ちに悟らるるおそれがあるからであった。

それから、いよいよきたる五月十五日には上野を征伐するということになったが、そのとき大村が策を建じていうには、十三日に上野山近辺の町役人を呼んで、十五日に上野を征伐するから、老人や子どもなどはけがのないように立ちのきするように達したらよかろう、というのである。すると、ほかの者が、それはすこぶる拙策である。ちょうど鎮西八郎が御所を夜討ちにしようというのをはばめられたため、かえって逆襲されたようなもので、敵にじゅうぶんの

準備を与え、逆襲を受けるかもしれぬから、それはすこぶる迂策である、と反駁した。ところが、大村のいうには、三百や四百の兵を動かすのであるならばいざしらず、大兵を動かすにはそうはたやすくできるものではない。かえって敵は十五日という声言であるから、必ず十四日にはくるであろうと思って、夜も眠らず大騒ぎをやるであろう。その間に味方はじゅうぶん休養し、夜も寝て鋭気を養うがよいと主張してまげない。さすがに、大村は軍事にかけては手配が巧手である。しかし、一同はなお不安であったが、かれの言に従い、十三日に上野近辺の町役人を集めて、きたる五月十五日上野を征伐するから、老幼婦女子を立ちのかせると達したということである」

以上は土方伯の談話であって、五月十四日一般市民に対して、大総督府から次のような布告が出た。

「過日以来脱走のやから上野山内その他所々屯集、しばしば官軍を暗殺し、あるいは官軍と偽り民財を略奪し、ますます凶暴をたくましくするの条、実に国家の乱賊たり。以来右様の者は見つけしだいすみやかに討ち取るべく、もし万一ひそかに扶助いたし、あるいは隠し置き候者これあるにおいては賊徒同断たるべきこと」

倹吉はあの夜柳橋で駕籠をおり、路地づたいにやっとお蘭の家の戸をたたいたまでは記憶していたが、はっきりと正気にかえったのは翌日の昼すぎであった。非常に熱が高く、しかもげっそりと憔悴していて、お蘭のことばを借りていえば、まるで幽霊のようだったという。

「おや、気がついたようね。熱、いくらかさがったかしら。気分はどうなんです」

お蘭はすぐ額へ手をやりながら額をのぞきこんだ。

「うむ」

倹吉は長い悪夢からさめたような気持ちで、黙って寝不足らしい女の額を見上げた。正直に

いうと、こんなふうに看病されてみたくてその夜は半分夢中で女の家へころがり込んだのだが、実際問題としてはちょっと困ったことになったと気がついた。役目がら、芸者の家などの二階へ寝込んでいるのはあまりふしだらのようで、近所へも同僚へも、いや、勝平にさえ知らせたくない。といって、そのまま黙ってかくれているわけにはいかないからだであった。

「よかったわ、ほんとに。いくらかでも熱のさがったのはやっぱりこいの血がきいたんですよ」

「なんだ、こいの血って」

「あら、けさこいの生き血を飲んだの、おぼえてないんですか」

「知らないね」

「じゃ、やっぱりうわごとだったのね」

「何かいったか」

「いろんなことといいました。おまえはおまじない博士だの、無知愛すべしだのと」

　これはいささかてれくさい。あるいは、もっと甘いことばが出ているかもしれないのだ。

「そのこいの生き血ってのもおまじないか」

「いいえ、熱がさめるんですって。ゆうべ、医者を呼んじゃいけない、大きな声を出すな、おれがここにいることは近所へ知らすなって、あなたはおこってばかりいるんです」

「おぼえがない。――しかし、近所へはなるべく知れないほうがいいんだ」

「だから困っちまったんです。熱が高いし、うわごとはいうし。そしたら、ばあやが、みみずをせんじて飲ませるか、こいの生き血を飲ませれば熱がさがるっていうんです」

「そうか。こいの生き血ぐらいはいいが、みみずや馬の小便だけはたのむからかんべんしてくれ」

　この無知愛すべしは、いざとなると何を飲ませるかわからない貞女なのだ。倹吉は内心恐れをなして苦笑した。

「いくらなんだって馬の小便なんか飲ませやしませんけど、一つ心配なことがあるんです」

「なんだ」

「久枝さんて、どなたのこと?」

　それとなくお蘭の目が光る。案外やきもちやきらしい。

「親戚の娘だ。それがどうした」

「うわごとにいうくらいだから、奥さんになるかたなんでしょう」

「女房ならここにひとりいる。ふたりはいらねえ」

「うまいことばっかし」

　疑わしそうな目はしたが、答弁の要領がよかったのか、それともまた熱がのぼっては困るとでも思ったのか、それ以上固執しなかった。

「もう一つあるんです」

「いってみろ」

「おれは命をねらわれている。だから、ここにいることはだれにも内密にしておけっていいました。ほんとうなの」

「ほんとうだ」

　これも口にした記憶はないが、そんなふうに考えてはいたので、無意識に口に出たのだろう。しかし、それはべつに大崎を恐れる意味ではなく、かれらに自分は死んだと思いこませておく、そのほうがかれらを始末するうえにおいて上策だと考えたからで、一つにはそれがあるから、女の二階を隠れ家に選んだのであった。

「だれなの、そんな憎らしいやつ」

「おまえの兄貴を殺したやつだ。つまり、おれはおととい、あぶなく返り討ちにあうところだったんだ。これ以上は今のところ話せねえが、亭主の命がたいせつだと思ったら、おれがすっかり治るまで、絶対にここに寝ているということは近所へも知らせるな。いいか」

「そりゃわかってますけど――」

　しかし、両隣とは壁一重だし、前も後ろも同じような家がつづくごみごみした女の巣なの

だ。そういう女たちの目を忍ぶとなると、お蘭の苦労はひととおりではなかったろう。さいわい雨の日が多い季節だったから、なんとかあまり人のうわさにもならず、半信半疑のまま過ぎてしまったが、そのためにお蘭は事実倹吉が起きられるようになる半月ほどの間に、めっきり面やつれが目だったくらいだった。
　倹吉としては、当分起きられないとわかると、その間じゅう雲がくれをしているというわけにはいかない。やむなく、その夜、若党勝平をひそかに迎えにやった。
「どうなすったんです、だんな」
　ゆうべおそく藤沢から帰ったという勝平は、なにより大病人らしく憔悴している主人の顔に、まずどぎもを抜かれたらしい。
「数馬は無事についたんだろうな」
「はい、お送り申し上げました」
「おまえ、きょうは常次郎に会わなかったか」
「常次郎にも大原さまにもお目にかかりました。湯島へもまいりました」
　むろん、一昨日の朝出たままだという倹吉をさがしまわったのにちがいない。
「そりゃ好都合だ。知っていることをみんな話してみてくれ」
「はい。ピストル強盗が昨夜浅草田原町の米屋茨城屋広吉方へ押し入り、現金八百両ばかりを強奪して若い後妻を手ごめにしたことが、けさになってわかりました」
「ふうむ」
　倹吉は昨夜あき蔵へ忍びこんできた怪しい男を思いうかべた。
「時刻は――？」
「九ッ（十二時）から九ッ半（一時）ぐらいまでの間だそうです」
　倹吉が今戸でくせ者をつかまえそこなったのは八ッ（二時）まえだから、時刻もぴったり符合する。
「そのほかにけが人はなかったか」

「けが人はありませんが、その後妻が申しわけないといって、けさがた米倉の中で縊死しました」
「手にかけたも同然だな」
「はい。常次郎にきいてみますと、ゆうべは立花屋はどこへも出なかった、この二晩ほどはこっちもじゅうぶん気をつけていたからまちがいない、なんだかこのごろは見込み違いじゃないかというような気がしてきたと、当惑顔をしていました」
「やっぱり、立花屋は朝湯へ行ったようか」
「そこまでは聞きませんでした」
「じゃ、今夜帰りがけにまわって、聞いておいてくれ。ついでに、あすの朝、立花屋が朝湯へ行ったら、いっしょにはいって右の肩先を見ろ。後ろから棒でなぐられたような跡があるかないかを調べるんだと伝えておけ」
「はい」
「それからもう一つ、これはおまえでもいい。今戸八幡前に門構えのあき屋敷がある。庭に土蔵のある家だ。持ち主はだれで、いつごろからあいているのか調べてみてくれ」
「かしこまりました」
「湯島じゃべつに変わったことはないか」
「奥さまも久枝さまもおかわりないそうですが、数馬さまがちっともみえないといって、いくらか御心配なすっているようです」
「あれ以来、大崎はたずねていった様子はないか」
「一度行ったそうですが、あべこべに奥さまから数馬さまのことをきかれて、そうそうに帰っていったようです」
「探りを入れに行ったんだな。――おれがここにいるってことは、当分だれにも知らせるな。役目向きへは病気で保養中だといっておけばいい。それから、この近所へもおれのいることは内密にしてあるんだから、報告はなるべく夜持ってこい。どうしても昼間急用があるようなら、

商人にでも化けてきてくれ」

倹吉は、今戸で不覚をとった事件については、勝平にも話さなかった。あの蔵の中には何か秘密がある。それは自分が起きられるようになってからのことで、うっかり人に手を入れさせては、肝心のくせ者を逃がしてしまうおそれがあるのだ。もう一つ、なんで自分がこんな女の家の二階へ寝ているかもべつに説明はしなかったが、これはどんなに取りつくろっていても自然に出る女の態度でわかってしまったらしい。勝平が帰ったあとで、お蘭が自分の甘いのをたなにあげていっていた。

「いい若党さんね。なにか御不自由なものがございましたら運んでまいりますからって。それから、主人は少し変人ですからお世話がやけましょうっていっていましたよ。いくら隠そうったって、そうはいかないもんなんですね」

次の夜、勝平は常次郎の報告を持ってきた。それによると、浪右衛門はきのうもきょうも朝湯を休んだというのである。こいつはたしかに臭い。もっと意外だったのは、今戸のあき屋敷は立花屋の所有で、三年ばかりまえ貸し金の抵当流れになったものだということがわかった。めかけにさえ商いをさせておくような利にさとい浪右衛門が、あのくらいの家をいつまでもあき屋敷にしておくのは、しておくだけの理由があってのことだ。いよいよあの蔵が怪しくなってくる。

ただ、どうにも説明のつかないことは、ピストル強盗の出た晩は必ず浪右衛門が家にいる事実だ。逆にいえば、ときどきは妾宅に泊まる男が、その妾宅に泊まったときにはまだ一度もピストル強盗は出ていない。そして、かれの出るときはきまって雨の夜にかぎる。

「とにかく、常次郎にもうしばらくしんぼうしてみろといえ。だれか奉公人をひとりうまくつかまえて、様子を聞き出すのも手だ。金を使ってみろ。おれの見込みじゃ、どこかに抜け穴が

あるんだ。それから、朝湯のほうと、これだけはぜひ調べておくようにことづけてくれ」

長くも四、五日たてば起きられると思っていたのが、またしても発熱したりして、とうとう半月ほどになってしまった。はじめから医薬にたよらなかったのがこじらした原因である。その間に時勢はますます逼迫してくるし、しまいには我ながら癇が高まってきて、お蘭にまで当たり散らした。勝ち気で根が単純な女だから、そのたびにむきになって食ってかかりそうになりながら、それでもはっと気がつくらしく、お蘭はよく涙をためてしんぼうしていた。ただ一度だけ、

「どうせおまえは腐った女なんだ」

男としていってはならぬ女の急所をうっかり突いて、いきなり肩先へ血のにじむほどかみつかれたことがある。そんなことをいってあたしを捨てる気になったんだろうから、あんたを殺してあたしも死ぬとくやしがるのだ。

これだけはかわいそうな失言だったと、あとまで気になったので、十三日の夜、勝平をまじえてのささやかな床上げの席で、

「勝んべ、与力がお廃止になったら、おれはここへころがりこんで芸者屋の亭主になるつもりだから、その気でいてくれ」

冗談に託して、きっと夫婦になるということだけは誓言してみせた。

「けっこうです。こんどはほんとうにお蘭さまにも苦労をおかけしたんですから」

勝平はどこまでもまじめだった。

「じゃ、勝平さんはどうなるんです、こんな狭い家で」

お蘭は急に顔を輝かしながら、そこまで真にうけてしまうのだから、どこまでも無知愛すべき女に出来上がっている。その夜、久しぶりで八丁堀の屋敷へ帰った翌日が五月十四日であった。

18

その日も朝から雨であった。いよいよあすは上野攻撃ときまったので、倹吉は市中の状況をひとわたり見まわりに出た。日本橋、神田、本郷、下谷、浅草とまわってみたが、ほんの上野近辺を除くほかの町々は、平常と少しも変わったところはない。

　もっとも、別の布告に、——賊徒はやむをえず誅伐するが、市民はみだりに離散等のことはなく安堵してしかるべし、という意味のものをふれていた。が、そんなものを信頼しておちついているのではなく、多くの江戸市民は、むしろ、戦争や政変は侍だけのものとして、無関心に構えこんでいるのだろう。むろん、戦禍がどんなに悲惨なものかということには、全然経験のない市民たちなのである。

　それにつけても、討伐があす一日、日のあるうちにかたづかぬと、府内に散在している不平の旗本が無秩序に蜂起して官軍の背後を襲うおそれがあり、勝敗は別として、戦禍はついに全市に及ぶであろう。何の用意もない市民たちは、それだけ多くの犠牲者を出さなければならないのだ。そして、彰義隊としては有為の子弟を多数乱賊の名のもとに殺す、——無用の意地だ。倹吉はどう考えてもその小さな意地には賛成できなかった。

　倹吉は本郷を通ったついでに、湯島の岡部家を玄関にたずねてみた。けんか別れのようになった日以来の訪問である。

「倹吉さん、数馬がちっとも顔を見せないのですけれど、どうしたのでしょう」

　走り出てきた久枝が、顔を見るなり不安そうに訴えた。あす決戦という大事が迫っているのだ。未亡人は二、三日まえからかぜで床についているそうで、かぜよりむしろ数馬の消息が知れないのを気に病んでいるのだろう。今こそ、この母親はむごい現実に直面しているのだ。正

直にいって、この狼狽ぶりは、あの門出のときの三百年恩顧の夢を、今なお毅然と持ちつづけているという姿ではない。

「あの、おさしつかえなければ、ちょっとお上がりくださるとよろしいのですけれど」

「いや、そうもしていられないんだ。じゃ、久枝さん、大崎もこのごろ姿を見せないのかね」

　大崎一味はその後自重しているとみえて、一度も軍用金狩りには出ていない。ことによると、あき蔵を調べに行って、自分が脱出しているのを知ったのではあるまいか。

「いいえ、二度ほどおみえになりました。そのたびに、なんですか、数馬が家へ来ていはしないかというふうにおっしゃるんです。数馬はどうかしたのではないでしょうか」

「すると、上野にもいないというのかね」

「はっきりそうは申しませんけれど、この四、五日会わないとか、きょうはたしかに家へ帰ったはずだとか、——なにか隠しておいでになるようにしかわたしには思えません」

「じゃ、とにかくこれから上野へちょっと寄ってみてあげよう。数馬さんとしては、門出のときすでに生死は覚悟して出たんだから、いまさら別れにくるでもあるまい。そんな気持ちでいるかもしれない。今夜来られたらもう一度様子を知らせにくるから。たとえ大崎から何をいってきても、あまりほんとうにしないほうがいいね。正直にいうと、大崎はこの家になにか野心があるらしいから」

「だいじょうぶですわ、わたしは」

　ふっと顔を赤らめたところを見ると、多少久枝は気がついているのだろう。こんな心配をさせておくのも、そんなに長いことではあるまい、そう思って倹吉は岡部家を辞した。

　上野から雷門へ出て、並木町通りを蔵前へかかったころ、雨の日はいつか夕暮れかけていた。ピストル強盗もその後はぱったり鳴りをしずめている。そして、浪右衛門はあれ以来ずっと朝

湯はやめているというし、倹吉は今戸のくせ者を思い合わせて、肩の痛みの回復を待っているのではないかと想像するのである。とすると、今夜あたりはもうそろそろ活動できる日になっている。

ピストル強盗は、ただ金がほしいばかりでなく、盗むということに興味を持っている一種の変質者だ。しかも、必ず女に手を出している。そういう変質者が、一度おぼえた冒険の味を容易に中絶できるものではない。

「だんな――」

ふっと供の勝平が後ろから呼んだ。ちょうど第六天社あたりへ来たところで、呼ばれるまでもなく、もうたそがれかけて、ほとんど人足の絶えがちな表通りを、町駕籠が一丁掛け声勇ましく追い抜いていくと見るうちに、第六天社のかどへとんとおりた。駕籠屋が桐油をはねる。中から義経ばかまわらじがけという足のほうから先へ、つづいてぬっと顔を出した男、たしかに傷松と見てとったから、倹吉はいそいで笠でこっちの顔をかくした。

「あとをつけろ、勝んべ」

振り返って、とっさにいいつける。

「はい」

「上野へ帰ればそれまでだが、おれはむさし屋で待っている」

勝平は心得て、まんじゅう笠を前かがみに駆けだした。

第六天社のかどにはもう傷松の姿はなく、駕籠屋がから駕籠をかついで汗をふきながら引き返してくるところだ。上野三枚橋内の「橋富」の若い者である。つかまえてきくまでもなく、傷松は上野から飛ばしてきたにちがいない。決戦をあすに控え、あるいは今夜にも夜襲があるかもしれないとうわさのある宵の一刻、すきを盗んでほれた女に別れを惜しみにくる、そんな風流げのある傷松とは思えない。

「脱走、――その行きがけの駄賃に、なにかやる腹だろう」

ここで駕籠を降りる以上、その第一にねらわれたのはお蘭だと直感すると、倹吉はあまりいい気持ちはしなかった。おそらく、鶯亭あたりからでも座敷をかけてくる気か。倹吉は少しあともどりをして茅町の自身番に寄り、土地の岡っ引き福井町の伝次にすぐむさし屋まで出向くようにと使いを走らせた。傷松が鶯亭へあがっている間に、尾行をなれた伝次とかわらせる腹だ。

「このぶんだと、大崎もあぶないな」

雨の中をふたたび浅草橋ぎわまで引き返しながら、倹吉はそう思った。むろん、大崎もまじめに戦う覚悟があって彰義隊へはいったやつではない。ひょっとすると、今夜は久しぶりに四人組となって、最後の軍用金をたくらんでいるのではないか。そうだとすれば、今夜こそのがせない。

神田川の河岸っぷちへ出て、むさし屋の前までくると、三吉がいま表戸をしめにかかっているところだった。

「三吉、今夜は休業か」

「おや、おいでなさいまし。だんな、いよいよ戦争だって話じゃありませんか」

「うむ、おかみもどこかへ逃げ出したのか」

「それなんですがね。どうしたもんだろうって、さっきから立ったりすわったり、大騒ぎなんで」

そういえば、この色街一帯弦歌の声もなく、今夜は火が消えたようである。

倹吉はふと気がついて、三吉をお蘭の家へ走らせることにした。まさか傷松の座敷へなど出はすまいが、そばへ呼んでおいたほうが安心だし、ことによるとここを今夜の本陣にしなければならないのである。

くぐりから土間へはいると、お柳が店でぽつねんと屈託顔で、きせるをおもちゃにしていた。

「お柳、いま三吉をちょっと借りたよ」

「おや、どなたか聞いたお声のようだと思って

ましたら、――お珍しいじゃありませんか」
そういえば、酔っ払いのお蘭を船で誘い出した夜以来の対面だった。
「今夜は早じまいだそうだな」
「ええ、あす上野のお山は戦争だっていうもんですから。だいじょうぶでしょうかねえ、だんな、この辺は」
「だいじょうぶだろう。この辺までとばっちりが来るようじゃ、江戸じゅうの大騒動になる。――ときに、せっかく骨休みのところを迷惑だろうが、しばらく店先を借りてもいいか」
「どうぞお上がんなすってくださいまし。だんなにいていただけば心じょうぶです。なんでしたら、お二階へ支度をしましょうか」
まんざら世辞ばかりでもなさそうな顔である。
「いや、ここでけっこうなんだ」
おかみはさっそく茶を入れながら、
「お蘭さん、呼んでやりましょうか、だんな」
隠したって知ってますよというような目でにらんでわらう。
「なあに、――いま来るだろう、三吉を迎えにやったから」
「あらあら。――じゃ、ほんとうなんですか、だんな」
「なにが」
「お蘭さんがこのあいだ、いきな職人をつれて松乃屋へはいったっていうんです。いくらなんでも職人は少しおかしいって評判だったんですが、あとでそれが、どうもだんなのお顔に似ていたっていう妓があるんですけれどねえ」
うわさがまだそのくらいの程度なら、案外きのうまでの潜伏はうまくいっているのだ。
「そんないろ男に見えるかねえ」
どうせいつかは知れることだから、倹吉はどっちつかずに笑っていた。女は敏感である。それでなにもかも一度に通じてしまったらしい。
「あらまあ、お蘭さんもすみにおけないんです

ねえ。それじゃ、このあいだの鶯亭のとき、みんなを呼んだのは、見せつけるつもりだったんですね。どうもただじゃないって、陰でうわさしてましたけど、そうと聞いたらきっとくやしがりますよ、みんな」
「なんの話だ、おれにゃちっともわからねえな」
「そうでしょうとも。いまにお蘭さんが来ればおわかりになるでしょうよ」
くぐりがあいて、だんな行ってまいりましたと三吉がはいってくるあとから、ふだん着のままのお蘭が澄ました顔を出した。
「こんばんは、おかみさん。おじゃまします」
「さあ、どうぞ――」
これも澄まして迎えるので、お蘭はしらじらしく、
「だんな、いらっしゃいまし」
なんともつかずていねいに両手をついた。わざと顔を見ないようにしている。
「あら、やせたねえ、おまえさん。どうしたの?」
「そうかしら、あたし」
事実、少しやせて、一段といろっぽくなったお蘭は、さりげなく顔へ手をやった。
「いい人ができるとなんとなくやせて女っぷりが上がるもんだっていうけれども、争えないもんだね」
「え――?」
「そらっとぼけないで、遠慮なくそばへお寄りなさいよ」
ぴしりと一本やられて、ちらっと男の顔をうかがいながら、
「あら、あたし、ひどいわ、おかみさん」
お蘭はがらにもなくまっかになってしまった。と見ると、そこは色街育ち、
「お祝いに一本つけてあげるから、どうぞごゆっくりなさいまし」
おかみは如才なくわらいながら、つと台所へ立っていった。
「話したんですか」

「話しゃしねえ。もっぱらそんなうわさだそうだ」
「なら、もうしようがないんですね。おお、恥ずかしかった」
お蘭はまだほおをほてらしながら、急に大胆な目を見上げてくる。
「ときに、鶯亭あたりからお座敷はこなかったか」
「いいえ。どうして？――ああ、傷松のこと？」
「うむ」
「それなら、いましがた玄関まできました。あたし、どきっとしてしまって、お客さまを芸者屋へお上げするのは御法度だからって、お茶もやりませんでした」
「なにしに行ったんだ」
「今夜こそにいさんのかたき討ちをさせてやるから、支度をして待っていろ、きっと九ツ（十二時）過ぎに迎えにくるっていってました。あたし、なんだか気味が悪い」

すると、今夜はたしかに四人組がどこかで落ち合うはずになっているのだ。金次を切ったのは、切り口から見て大崎である。まさか、傷松が、仲間の大崎を裏切るとは思えないから、かたき討ちを口実にお蘭を誘拐する腹でもあるのか。
「こんばんは――」
ぬれた傘の先からくぐりをはいって福井町の伝次が顔を出した。下っ引きがひとりついている。
「だんな、御用だそうでして――」
「降るのに御苦労だったな。まあ、こっちへあがってくれ」
手違いになって当座の用にはまにあわなかったが、今夜は待機させておいてもむだにはなるまい。
「お蘭、おかみにそういって、みんなに一本つけてやってくれ」
倹吉はあらためていいつけた。

19

事件はたして急転直下した。
宵過ぎごろ、勝平が深川からよこした番太郎の知らせで、傷松は八幡裏の料亭富田屋へはいったことがわかった。待機していた伝次が下っ引きをつれてすぐに駆けだす。
第二報は四ツ半（十一時）ごろ、勝平が自分で駆けつけてきた。
「今、大崎、傷松の四人組が船で神田川へはいって。ついそこをこぎのぼっていくところです」
船は永代から出たという。筋違橋あたりへつけて上野へ帰るところだとすればべつに問題はないが、どうもそうは思われない。船には船頭はつかず、自分たちでこいでいるというのだ。
「勝んべ、船をどこへつけるか、もう一度見届けて知らしてくれ。ただし、やつらが上野へ帰るようだったら、武士の情けだ、黒門口まで見送って今夜だけは見のがしてやろう」
あすは決戦である。男らしく戦って討ち死にでもしてくれれば、かれらにとってはいちばんいい罪のつぐないになるのだ。
が、まもなく勝平が第三報を持ってきた。一行は船を柳原稲荷の森の下へつなぎ、お籾倉の間の道を抜けていったという。上野とは正反対の方角だ。
「よし、すぐ行こう」
倹吉は勢いこんで立ち上がった。もう許せない。柳原堤なら場所もいいし、荒仕事をすませて船へもどるところを、大崎だけ切ってほかは召し取る、そう覚悟した。
「きのう治ったばかりだのに、雨にぬれてだいじょうぶかしら」
背後から雨がっぱを着せかけながら、お蘭はもう人前もなにもなかった。
「なあに、またこいの血っていうおまじないがあらあね」
「今夜は家へきてくださいね、気味が悪いから」

くぐりの外まで送って出て、傘をわたしながら、そっと念を押していた。うなずいてみせて、
「勝んべ、急ごう」
倹吉はざあっと降りしきる雨の中へ急いだ。和泉橋のたもとまでくると、ふいに物かげから伝次についていた下っ引きが飛び出してきた。
「だんな、御苦労さまで」
妙に殺気だっている。
「どうした、伝次は？」
「へえ。うまくいきました。かれらは鍋町の質屋立花屋浪右衛門をねらいやがったんで」
「なに、立花屋」
さすがに意外だった。と同時に、そうだ、今夜こそ立花屋の家へはいって根こそぎ調べてやろうと考えた。
「で、やつらは――？」
「裏口から、といっても、あそこの家は通りのほうに裏口がありますんで、――ひとりが肩車の上へのって塀を越してはいり、中から木戸をあけました。こっちは親分とふたりきりなんで、困ったなと思っていると、運よく横山町の常次郎親分が五、六人子分をつれて来合わせてくれました」
来合わせたのではない。常次郎は例によって今夜も張り込みをやっているのだ。その二組みが一手になって裏口へ集まる間に、突然立花屋の奥からピストルが二、三発轟然と聞こえ、四人組は今はいったばかりの木戸口からどかどかと飛び出してきたというのである。
「あっしは親分のいいつけで、すぐに自身番へ手配をいいつけに駆けだし、それからこっちへ張り込みにまわったんで、あとのくわしいことはわかりませんが、四人のうちふたりはつかまって、ひとりは逃げた。ひとりはまだ立花屋の中にかくれているって話です」
逃げたひとりというのはだれか、――とにかく柳原稲荷の前へ出てみると、そこにもう下っ引きが二、三人張りこんでいた。おそらく、長い間じみな張り込みばかりでくさっていた常次郎のことだから、今夜こそ勇みたって腕をふるっているだろうと、人ごとながらほほえましい。
ふいに、どこかあまり遠くないところで、呼び子の笛が鳴った。土手にそって長い籾倉の裏側、九軒町あたりらしい。が、それっきりではたとやんだのは、見誤りだったのか、案外観念して逃げたやつがすなおになわについたのか、――倹吉は土手を左へ切れて、籾倉と籾倉との間の道、四人組がたどったという暗いかどを曲がった。
ざあっとまたひとしきり重い雨だ。
「あっ――！」
出会いがしらに、走ってきたらしい黒い人影がぱっと飛びさがった。荒い息をはずませながら、いきなり柄に手をかけて、次の瞬間には有無をいわせず切って出ようとするすさまじい気組みに見えた。雲のどこかに十四日の月があるので、暗いとはいえおぼろに相手が見える。士官服の男だ。
「大崎、――彦之進だな」
倹吉は左手に傘をかざしたままの姿で、相手を見すえながら低く声をかけた。
「なにっ」
「宇田川倹吉だ。船にも手がまわっているぞ」
「宇田川――？」
がくぜんとしたらしい。みるみる闘志を失って棒立ちになってしまった。してみると、倹吉はまだあの蔵の中でおそらくは餓死したものと思いこんでいたのか。その残忍な行為は憎いが、闘志のない相手は切りにくい。どうせ死なせるならと、倹吉は気がかわった。
「勝んべ、おまえのかっぱを脱いでやれ」
すでに向こうのかどへ御用ぢょうちんが一つあらわれて、いっさんにこっちへ走ってくるのだ。

「大崎、下にいろ」
さしずされて、彦之進はぼうぜんと倹吉の背後へさがってうずくまった。手早く勝平がかっぱを着せかけ、笠を頭へのせてやる。
「だれだ、そこにいるのは――あっ、だんなで」
飛んできたのは下っ引きにちょうちんを持たせた伝次だった。
「御苦労だった。ふたりつかまえたそうだな」
「へえ、ひとりは立花屋の廊下で死んでいたそうです、ピストルにうたれて」
「すると、ピストルは立花屋が撃ったのか」
「そうらしゅうござんす」
そのピストルの弾がまえのものと符合すれば、もう一も二もないことになる。
「ひとり逃げたと聞いたが――？」
「陸軍服のやつです。なあに、もう袋のねずみでさあ。わなになっているとは知らずに、例の船へ逃げこむのが落ちですからね」
「立花屋には常次郎が詰めているんだな」
「へえ」
「御苦労だった。もう一息がんばってくれ」
伝次はおじぎをして、柳原稲荷のほうへ駆け去った。
それを見送ってから、倹吉は黙って筋違橋のほうへ歩きだす。あとからまんじゅう笠、雨がっぱの大崎が魂の抜けた人間のようにつづき、それを警戒するように勝平がひと足さがってつづいた。だれも口はきかない。
倹吉は筋違橋から警戒網を抜けて御成街道へ出た。ここまでくれば、もう彰義隊の勢力範囲である。
「大崎、これをまっすぐ突き当たれば、おれがいうまでもなく上野のお山だ。男は死に場所がたいせつだぜ」
そのひとことでたくさんだったろう。さすがに深くうなだれて返すことばもない大崎を残して、倹吉はさっさとくびすをかえした。
「勝んべ、今夜は一度にかたがつきそうだな」

須田町から鍋町通りのほうへ出ながら、倹吉の声は明るかった。
「だんな、湯島のお屋敷のほうは心配ないでしょうかねえ」
勝平は用心深い。まだ大崎を疑っているようだ。
「その心配はあるまい。大崎だって武士の端くれだ。どっちみち生きられないからだだからな」
「だから、なおさらのこと、湯島は通り道からそう離れてはいません。破れかぶれ、そんな気を起こされるのが心配です」
「そうか、それもあるな。じゃ、おまえ御苦労だが、ひとっ走り岡部へ行ってみてやれ。ついでに、もうだいじょうぶだろうから、数馬のことを耳に入れておいてやるほうがいい。ふたりともやせるほど心配しているんだ」
「では、てまえはそうしておあげします。お迎えには柳橋のほうへまわりますから」
ちゃんと主人の心を見抜いている勝平だった。
しかし、勝平に別れて立花屋へまわってみると、そんなどころでない意外な事件が持ち上がっていた。立花屋の近所は、前の米屋、両隣のさかな屋とそば屋からあかりがもれ、その軒下に雨をよけながら黒い人影がひとかたまりずつ何かひそひそとうわさをし合っている。深夜だけに、ほかには野次馬もなく、かえってそれがものものしいぶきみさを思わせた。
「だんな、お待ちしていました」
裏木戸から狭いながらよく手入れの行きとどいた庭へはいっていくと、その庭に面した雨戸を二、三枚だけあけて縁側に腕組みをしていた常次郎が、待ちかねていたように立ち上がった。雨戸から流れるほかげが、そこだけ重い雨あしをうつし出して、座敷も店もいやにしいんとしている。下っ引きのひとりが飛んできて、倹吉の手から傘を受けとってさしかけた。
「ひとり撃たれたってのはだれだ、常」

「傷松なんで、――まだそこにそのままにしてございます」
　なるほど、座敷のほうを頭にしてぶっ倒れている死骸がむしろをかぶり、そのむしろの端からわらじがけの足だけがにょきりと庭のほうへはみ出している。
「主人浪右衛門は――？」
　問題の化け物である。もう調べ上げているものと思ったから、倹吉はわざとことば短にきいた。
「それが、だんな、今夜は留守だったんだそうで」
「留守――？　では、ピストルを撃ったのはだれだ」
　倹吉はあぜんとして常次郎の顔を見まもった。
「おかしな話なんですが、そのピストルを撃ったのは、どうやら例のピストル強盗らしいです」
「というと、ピストル強盗と四人組が同時に立花屋をねらって、衝突したということになるのか」
「そのとおりなんで。――まあ、聞いてください」
　常次郎はむろん今夜もずっと例のとおり立花屋を張り込んでいた。朝湯をやめて以来、浪右衛門は二度ほど同朋町のめかけの家へ出かけたが、それも夜は四ツ（十時）までに必ず帰ってきて、泊まったことはない。それ以外は少しも外出せず、このごろは一日じゅう顔を見ない日さえあった。
　今夜は、あす上野に戦争があるというので、宵のうちはなんとなく人の出入りが多かったが、それも四ツごろまでにぴたりと収まって、いつものように戸締まりをした。そして、例の四人組の押し込みとなったのである。
　ピストルの音が三発ひびいて、最初に裏木戸から飛び出してきたふたりは、待ち構えていた伝次と下っ引きとで難なく組み伏せた。そこへもうひとり出てきたやつは、物音で外に捕手がいると気がついたらしく、木戸を出るなり刀をふりまわして、猛烈な勢いで鍋町通りのほうへ逃げだした。
「あっしはそんなものにかまっちゃいられません。長い間苦労してねらっていた獲物なんですからね」
　常次郎はすぐ裏口から庭へ飛び込んでいったという。雨戸が、二枚は中へ、一枚は庭へ押し倒されていて、家の中はまっくらだ。廊下にひとり倒れていて、ぷんと血のにおいがする。
「だれかいねえか、おい。あかりをつけろ、御用の者だ」
　常次郎がどなると、それまで二階に小さくなっていたらしい奉公人が二、三人一度にどかどかと店へ降りてきて、火打ち石を打ち始める。あわてているのかちょっと手間どって、やっとあかりがついたのと、下っ引きがちょうちんを持って飛び込んできたのといっしょだったという。
　座敷はきれいにかたづいていて、主人の姿は見えない。
「主人はどうした」
「さあ、夜食のときまではおりましたが、それからお出かけになったのかもしれません。おさきどんが知っていましょう」
　おさきどんとは飯たき女のことで、立花屋にはこれひとりしか女けはない。奉公人たちはみんな二階に寝るので、下にはこの座敷に主人、台所わきの四畳半におさき、いつもそれだけしかいないのだという。しかも、この騒ぎに、そのおさきがいっこう姿をみせないのだ。
　おかしいと気がついて、台所わきの四畳半へ行ってみると、おさきは自分の帯で手足をがんじがらめにされ、手ぬぐいでさるぐつわまでされて、頭からふとんをかぶせられていた。
「どうしたんだってききますとね、台所で何か物音がするんで目をさました、だんなさんです

かとびっくりして出ていくと、いきなりだれかが飛びかかってきてのどを絞め、騒ぐと絞め殺すといいながら部屋へひきずりこんで縛ったというんです。まっくらでどんな男だかわからないが、着物がびっしょりぬれていた。それからピストルの音を聞いたが、あとはなんにもわからない、こういうんですがね」
「浪右衛門が外出してたことは承知していたんだな」
「へえ。夜食がすんでしばらくたってから、ちょっと行ってくる、店の者にはいうな、おそくも九ッまでには帰ってくるからって、台所口から出ていったそうです。あいにく、その時分はさっきもお話ししたとおり、店からも台所口からも人が出たりはいったりしました。張り込みの野郎が見のがしっこないというんですが、これははっきりした口はきけないと思います。正直に申しますと、ここんとこあんまり長かったんで、みんなも少し疲れていますんでね」
常次郎はいささか申しわけなさそうだ。
「無理はないな。で、それがピストル強盗だと見当をつけたのは？」
「これが台所のかまどの前に落ちていましたんで――」
常次郎は手ぬぐいにくるんでそばに置いてあったものを取り上げ、くるくると手ぬぐいを解くと、六連発の当時としたら新しいピストルが出てきた。調べてみると、たしかに三発撃ってある。弾の大きさから見て、どうやら問題のピストルであることだけはたしかだ。
「話をそのとおりに聞くと、ピストル強盗は台所からはいって、台所から逃げた。逃げるとき、このピストルを落としていったとなるが、そのとき張り込みはどうしていたんだ」
「それが、その、四人組がここへはいるとすぐ、張り込みは一度みんな裏木戸へ集めました。ですから、出ていったのはその間のことかもしれませんが、はいったのはそのまえということになりますんで、たしかに見ていなけりゃならねえんですが――」
「だれも見かけちゃいないというんだな」
「へえ」
「飯たきはどこにいるんだ」
「気分が悪いってもんですから、見張りをひとりつけて部屋に寝かしてあります」
「めかけの家へはだれかやってあるだろうな」
「へえ、ここの小僧に下っ引きをつけて、三軒へ走らせてあります」
「とにかく、台所へ案内してくれ」
ピストル強盗がほかにあるとすると、倹吉の見込みはまったくだいなしになる。それでなくてさえ、このごろ、ぼんくら与力という声がちらほら耳にはいっているのだ。お蘭との関係もまもなく知れわたることだろうし、そうれ見よと後ろ指をさされることにでもなると、なんとも世間に顔出しができなくなる。さすがに、真剣にならざるをえなかった。
座敷から裏廊下へ出て、その廊下は次の間から店の裏を抜け、左に蔵の戸前口を見てまっすぐ広い台所へ通じていた。奉公人はみんな店の間へひとかたまりになっているようである。台所は北側に大店らしいりっぱなかまどがすえてあり、飯たき女の部屋はそれと向かい合わせに障子を見せていた。出入り口は土間が広くとってあって、左手に内井戸がある。
板の間は下っ引きたちが土足で出たりはいったりしたとみえて、相当に踏み荒らされ、これでは犯人の足跡を見分けるのにほねがおれそうだ。倹吉がその辺をひととおり見てまわって、半分あけ放しの飯たき女の部屋の前に立つと、
「おい、だんなのお調べだ、ちょっとおさきを起こしてくれ」
常次郎はそこに立っていた下っ引きにいいつけた。
寝巻きのまま床の上へ起き直ったおさきは、四十前後でもあろうか、髪をむぞうさにたばね、

いまだに江戸じみたところはみじんもない田舎女で、がんじょうそうなからだは俵のように堅く太って、あいきょうのないおかめといった感じの醜女ながら、案外肌は白そうである。

「年はいくつだ」

「三十九です」

むっつりと答えながら、すねたように顔をあげようとしない。下っ引きにはそれがひどくしぶとく見えたのだろう。

「面をあげて御返事申し上げろ」

思わず横からどなりつけた。女はびっくりしたように愚鈍そうな顔をあげたが、いつの間にかすぐまたおどおどとうつむいてしまう。

「いつごろからここへ奉公しているんだ」

「三十二のときからです」

「そのまえは何をしていたんだ」

「奉公です」

「故郷はどこだ」

「八王子です」

「ここへは桂庵からきたのか、それともだれかの世話ではいったのか」

「桂庵からです」

「親兄弟はどうした」

「ありません」

「浪右衛門が夜おそくめかけの家から帰るときは、いつもおまえが戸をあけてやるようだね」

おさきはうなずいた。

「浪右衛門は今夜もめかけの家へ行くといって出かけたのか」

それには答えない。倹吉はかまわず、

「主人はこのごろでもよくおまえのところへ忍んでくるようだな」

至極あっさり持ちかけた。おさきはいそいで頭をふる。

「隠さなくともいい。主人と夫婦約束ができたのは何年まえだ」

こんどもはっきり頭をふったが、うつむいているほおから耳のあたりまで血のけがさしてい

る。

「もういい。気分が悪ければやすめ」

倹吉はそれで尋問を打ち切った。目的は達したのである。ピストル強盗は変質者だ。変質者は案外こういう女をも溺愛するかもしれない。愚鈍で醜い女の身にとって、その主人の溺愛は大きな喜びであったにちがいなく、そのためには命まで投げ出す気になるのは当然だ。痴情は善悪をさえなんの苦もなく乗り越えさせる。いや、悪いと良心にはとがめても、男の愛情にはかえがたかったにちがいない。ここにおさきという忠実な協力者があったとわかれば、あとはもう簡単だ。

倹吉はいささかあっけにとられている常次郎を目で呼んで、かまどの前へ立った。かまどにはたぶんあすの米が仕掛けてあるだろうと思われるよくみがきあげた大釜がかかっていた。

「常、その上へ乗ってみろ」

「へえ」

「少し届かないようだな。待て待て」

あたりを見まわして、膳だなの片すみにある五寸高さほどのかつお節箱を取り、それを釜のふたの上へかさねた。

「こんどは届くだろう」

かまどの真上に引き窓がある。常次郎が手をのばすと、ちょうど、その引き窓のなわ通しの桟がつかめるようになった。

「その桟は鉄棒のようだな。ぶらさがってみてくれ」

男ひとりがぶらさがって、からだを振ってみてもみしりという音ひとつたてない。特にじょうぶに造ってあるようだ。

「やっとわかりやした、だんな」

窓からおりてきた常次郎が、顔を輝かせながらいった。

「ちくしょう、屋根づたいにこんな抜け穴があるとは気がつかなかった」

「雨が降る日はだれも空を向きたがらない。も

う一つ、雨はすぐ屋根の土足の跡をおとしてくれるからな」
「今夜もここからでしょうね、だんな」
「そうだ。四人組が押し込んだのを知って、てめえのほうが本職だから、こしゃくなまねをしやがるぐらいのことは思ったろう。座敷へもいれないうちにピストルでひとり撃ち殺した。殺してからはっと気がついたんだ。このまま家にいるとピストルが問題になる。大いそぎで寝ていたふとんを押入へほうりこんで、そっとおさきの部屋へ忍びこむ。常次郎が座敷で、あかり、あかりとどなっていたときは、まだおさきの部屋にいたにちがいない。ゆうゆうといつもの身支度になり、女にはあとのことをいいふくめて縛りあげた。さて、ここから抜け出す段になって、今夜はあと始末をする女が縛ってある。かつお節箱はつかえない。そこで、桟(さん)に飛びついたとたんにピストルを落とした。もう拾っているまがないんで、そのまま逃げ出したか、あるいはピストル強盗の仕事と見せかけるためにわざとピストルだけ残していったか、その点は当人にきかないとわからないが、――これがほんとうにほかにピストル強盗がいてはいったのだとすると、そいつがピストルを落としていくのは少しおかしい。落としてもきっと拾っていくはずだ」
「なるほど、そうですね」
　常次郎は感心してみせたが、そんな説明はどっちでもいいらしく、
「で、だんな、野郎は三軒のめかけのうち、どっちへ行ったでしょうね」
「めかけの家じゃあるまい。支度が違う。浪右衛門は奉公人はむろんのこと、めかけにも裏のことは知らせてない。知っているのはおさきだけだ。だから、仕事をするときはきっと家から出て、家へ帰っていたんだ」
「あっ、いけねえ、親分。のどを、おさきがのどを――」

　突然、見張りの下っ引きがわめきたてる声に、常次郎はぱっとおさきの部屋へ飛び込んでいったが、倹吉はべつにまゆ一つ動かさなかった。実は、そうなるだろうと思ったから、わざとこんなところで聞こえよがしに話し込んでいたので、――無知愛すべし、ここにもいたそういう女のいちずな痴情を、ふっとお蘭の心根に思いくらべてみて、妙にあわれまずにはいられなかったのである。
　浪右衛門があの今戸のあき蔵でつかまって、地下室から五千両余りの小判が発見されたのは、官軍がいっせいに彰義隊討伐の行動を起こした七ツ（午前四時）ごろのことで、五月十五日の江戸はあいかわらずうっとうしい雨に夜が明けたのである。

●江戸おもしろ事典

もののけ

もののけとは何か

もののけ——といえば、いかにも日本的な、さらに古代的なひびきをもつ言葉である。

古代の、冠・束帯に威儀を正した貴公子や、十二単にかざりたてた貴妃たちのはなやかな宮廷文化のかげ、燈のとどかないくらがりに、人のすきをうかがってひっそりとひそんでいる怪しのもの、といった感じがする。

試みに広辞苑をひいてみると、

「死霊、生霊などの祟ること。またその死霊、生霊、邪気、霊気」

また、東京堂の風俗辞典によれば、化物の項に、

「物の化けたものを物怪、人間の死霊を幽霊といい、伝説的怪物（河童・天狗・龍蛇・猿神・鬼・天邪鬼・小豆洗・人魚の類）を妖怪という……」

とある。

池田弥三郎氏は、その著『日本の幽霊』において、もののけとは、

「怨霊によって生ずる病気。もともと『け』とは病気のこと。人間の肉体的な病を、生霊・死霊のたたりとみて、霊魂という意味の『もの』に病気の『け』をつけて、もののけとしたもの。源氏物語などに出てくる『邪気』は、ざけと読ませるが、日本訳はもののけである」

という。右は筆者の要約である。

もののけとはたしかに物が化けたものにちがいないが、精霊あるいは邪気の「もののけ」と、物の化けた「物怪」とを分けて考えたい。

たとえば、お化け屋敷などで、人を「キャーッ！」といわせるようなものは物怪であり、もっと深い、心の底から人をふるえあがらせるもの、つまり霊魂にふれたり邪気にあたって病気になり、やがて死に至らせるもの、これが「もののけ」とみるのである。

そして、もののけは、平安時代のころがもっとも盛んに跳梁した時代であり、室町ごろには物怪の全盛時代となり、江戸時代になると幽霊が主流となる。それは、人間の世界において、神代から古代天皇の時代、藤原を中心とする貴族の時代、鎌倉・室町の武家時代、さらに江戸時代と歴史が発展するように、幽界もいろんな交替があったわけだ。

幽界の幽体種の分類は

幽界の生存者（あるいは生存体）の分類のしかたは、いろいろある。

一、現世界の生物体の変化したもの。
一、現世界の非生物体の変化物。

にわけるもの。あるいは、出現する場所による分類法、すなわち、

一、山中・行路の怪。
一、家屋の怪。
一、海・湖川の怪。

である。また、その性格による分類——お化けと幽霊を分けるのもその一例で、性格分類のうちにはいるが、身分差による分類もある。

それらは、人類といっても、黄色人種、白人、黒人とわけたり、アジア人、ヨーロッパ人、アフリカ人とわけたりするがごとくである。

妖怪の分類整理は、民俗学の大家柳田国男氏によって先鞭をつけられたが、上田都史氏の分類も面白い。同氏の著『妖怪の話』によると、

「幽霊は、脊椎動物、妖怪目のユウレイ科に属する」

と、いうことで、ヒトダマ科、オバケ科、オニ科、テング科などがあるそうだ。

＜生物体の変化＞

「一」 ひと。人間が死ぬと、生前の思いこみようによって、化けて出る。

イ、幽霊になるもの。

ロ、人魂になるもの。

ハ、姿をみせず、怪異を起こすもの。つまり、そのような能力をもつものに変化するもの。

人魂には、死霊と生霊がある。死霊は死んだ人から魂がぬけだすものだが、生霊は生きている人からぬけだす。眠っているときとか、驚きすぎたときとか、珍しい例ではくしゃみしたときとびだした魂もある。

「二」 動物。鳥獣魚介が劫を経ると、化けることができるようになる。

イ、人間に化けるもの。

ロ、奇怪なものに化けるもの。

日本でよく化けるものは、狐であろう。次に狸、蛇。猫も化けるというが、前の三者には劣るようだ。

「三」 植物。これも古くなると、精が本体から自由にぬけでて浮遊するようになる。古木などにしめなわをまわしてあるのをよくみかける。これは、精がぬけて怪異を現さないためのまじないである。植物そのものではないが、他の妖怪を宿らせる植物もある。

＜非生物体の変化＞

「一」 想像上の変化。天狗、河童の類である。龍、鬼も、この中にはいる。

「二」 物の精。雪の精の雪女。水の精の海坊主。

「三」 物そのもの。幽霊船。

「四」 自立現象。音、不知火、ブロッケン現象。

大体、以上に分類できよう。

ここで、はっきりいっておかねばならないことは、幽霊と妖怪とはちがうということである。幽霊は死者の魂の発動であり、何らかの関係のあった者のところに、ほとんど生前の姿のまま

出現する。ついつい、化けて出るといってしまうが、幽霊は妖怪のような化け方をするのではない。

幽霊は、その生前の感情を、特定の人に訴えようとするため出現するのだから、訴える相手に、自分の生前の姿をみせねばならない。殺された者が、殺した者の前に出るには、殺した者も知っている姿で出てきて「恨めしや」といわなければ、なんにもならない。

妖怪は、なんに化けてもいいのだ。ただ、わるさをすればいいからである。

幽霊と妖怪は、いつ、どこに出るのか

幽霊は、前項でもいったように、生前の思いがこりかたまって、化けて出る。よって、思いをはらす人の前、場所に出て、感情を表明する。

番町皿屋敷のお菊さんは、一枚の皿をわったため、井戸に投げ込まれて殺されたので、井戸から、ヒュルヒュルと化けて出てきて、

「一枚……、二枚……、三枚……」

と数えるのだ。旗本青山主膳にとっては、皿を数える声をきいただけで、だれが、どんな気持ちで出てきたか、すぐさまわかる。

幽霊の出る時刻は、よくいわれるのが、草木も眠る丑三ツ刻である。午前二時、三時であるが、このころは、軒下も三寸さがるといわれる。

幽霊は、特定の人の前に出ることから、戸をたたいたり、胸にのしかかったりして、その人をおこせばいいのだから、深夜に出てもいい。

これが妖怪になると、とくに人を選ぶわけではなく、大勢にみられなければ商売にならないので、日中でも化けて出る。しかし、だいたいにおいて光をきらうので、日中に出るには、あたりをうすぐらくできるほどの力量がなければ出られない。それで、大体、宵の口だとか、まだ人がいくらか通るころの時間帯に多い。そして、夜明けとともに退散する。

妖怪は、幽霊よりも、時をえらばないようだ。人と出会ったとき、いつでも出るといえそうである。

さらに、妖怪は出る場所が、たいていきまっている。だから、出る場所にいかなければ、出会わないですむ。江戸の人に、おいていけ、おいてけ……と声かけるお化け「おいてけ」は、おいてけ堀を通らなければ声かけられないですむのである。

幽霊になると、思いいれた人の行くさきざきに出るので、避けることができない。

もちろん、例外もある。一定の場所にしか出ない幽霊もあれば、唐、天竺・日本と三国の、当時の日本人では全世界であった天下をかけめぐった、狐の化けもの玉藻前のような怪物もいる。例外のない規則はないという人間界の法則は、幽界にも通用する。

池田氏の『日本の幽霊』のはじめに、気の弱い幽霊の話をのせている。

姐さん芸者にいじめぬかれて死んだ芸者が、生前親切にしてくれた近所のおばあさんのところへ出てきて、おばあさんに幽霊のルール違反をしかられている。そのとき幽霊は、

「わたし、こわくて、姐さんのところには出られないんです」

といったという。そこでおばあさんは、

「ばかばかしいったらありゃしない。うっかり人に親切もできない」

と、大いに憤慨したものだそうだ。

人もさまざまなら、幽霊もさまざまだ。

どんなもののけがいたか

もののけには、古代的なにおいがする。

源氏物語の「葵」の、葵夫人が、産気づくとともに、六条の御息所の生霊（いきすだま）になやまされる話がある。

「大殿（葵夫人）には、御物の怪めきて、いたう、わづらい給へば……」

とあるが、このもののけが、藤原文化のかげに跳梁した怨霊である。

葵の上は二十六歳、光源氏の嫡妻で、源氏の子を産もうとしている。

六条の御息所は二十九歳、源氏の忍び妻で、五年ほどまえ、源氏が十七歳のときから関係していた女性。しかも、葵の上と本妻の地位を争ってやぶれた女。

御息所は、自分の恋する男が、葵の上の産屋で一喜一憂するさまを思いえがいて、嫉妬に狂った。狂った生霊が、御息所からぬけでて、葵の上にのりうつり、葵の上を苦しめている。

叡山延暦寺の座主、高僧たちの修法によって御息所の生霊は退散し、葵の上はようやく男子を出生した。が、葵の上はまもなく死んでしまった。

葵の上に死なれた源氏は、御息所をあとがまにむかえず、紫の上という女性を迎えいれた。それやこれやで御息所は死んでしまうのだが、

それから二十五年ほどすぎたころ、源氏は御息所のことを、しつっこい女であった、と悪口をいった。

人のことをいえば影がさすというが、御息所のことが源氏の口にのぼったことから、御息所の死霊は動きはじめ、紫の上にとりつき、これを殺したのである。

もののけ、怨霊が、化けものより恐ろしいのはここのところだ。御息所は、恨めしければ、張本人である源氏につけばいいのである。幽霊なら、源氏の前に出る。が、怨霊はまわりにつくのだから、恐ろしい。

この紫の上が亡くなったときだが、御息所の怨霊は小童にとりついていて、源氏に、

「ほんとうは、姿をみせたくなかったが、あなたが、あんまりお悲しみになるので、ついに姿をあらわしてしまった……」

というのだが、それでわかるように、本来姿をみせず、何者とも知らせず人にとりつくもの

で、それが人々をおそれさせた。
くらがりの光のとどかない闇の中に、何ものともしれぬものがひそんでいて、とりついてくる……目にはみえないが、闇の中に、恐ろしい何かがうごめいている気配がする。その気配が、もののけである。ただ、おどかすだけの一つ目小僧など、そうしたもののけにくらべたら、まだまだ愛嬌がある。

鬼ももののけか

今昔物語にある話。
ある夜、三人の娘が、武徳殿の松原を歩いていた。すると、松の木の下に一人の男が出てきて、三人の中の一人を呼んで、その木のかげで話をしていた。あとの二人は待ちくたびれて、女を呼びにいったところ、男も女もいない。どこへ行ったのかと、あたりをさがしてみると、女の手と足だけが、ばらばらになって落ちていた、という。
編者は、この話に教訓をつけている。人離れた所では、よくよく注意せよ、と。いまでも通用する教訓だが、現在のように、ひとりあるきはやめましょう、痴漢が出ますではなく、この当時はもののけがひそんでいたのだ。
ある男が、思いをかけた女を盗みだして、逃げだした。もちろん、夜中である。その途中、雨がふりだしたので、近くにあった古屋敷にはいり、雨をさけ、夜明けをまつことにした。だれも住んでいない屋敷である。男は、女を倉の中にいれ、自分は戸口にたって、追っ手が来るのを見張っていた。ようやく夜があけたので、女を呼びにはいったところ、女は首と着物をのこして食われていた。
古い屋敷には、もののけが住んでいるのだ。人を食ったのは、鬼だといわれている。
鬼は、人の肉を好むようだ。
だいたい、鬼は化けたりしない。化けないでも、大変に恐ろしい様子をしている。閻魔大王

のひきいる獄卒どもの姿が、われわれがすぐ思いうかべる鬼だ。
そのような鬼の形をしていながら、化けて出て（美しい男や女、かわいい子供に）、人肉を食ったり、人に仇なすものが、怨霊とは系統を異にする、もう一つのもののけである。

物怪にはどんなものがいるか

もののけを、物の化けたもの、物怪とするなら、ごまんといる。
中でも恐ろしいのは、のっぺらぼうであろう。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の一連の怪談もので、有名になったお化けである。
江戸の赤坂の紀ノ国坂。片方は深い江戸城のお濠、片側は紀伊家のお屋敷の塀、夜になると人通りのたえる寂いところであった。
ある夜、夜もふけてから、この寂しい道をある男が通りかかった。急いで通りぬけようとすると、濠端に女がしゃがんで泣いている。男は身投げかもしれないと思い、いろいろと問いかけた。女は顔を覆って泣くばかり。男はなおも親切に、
「さあ、泣かないで、事情をおはなしください。さあ、こちらをむいて」
と、いった。女もようやくうなずいて、顔から手をはなした。
男は、肝をつぶした。目も鼻も口もない、のっぺらぼうであった。男は無我夢中で逃げだした。遠くに提燈の灯がみえる。
屋台のそば屋だ。男は、地獄に仏とばかり、そば屋へ駆けつけた。
男はそば屋に、抱きつかんばかりにしていった。
「で、でた、でたでた……」
「なにが出たんだね、追いはぎじゃない」
「追いはぎかえ？」
「じゃ、なんだね」
「そ、それは……」

「こんなのかえ?」
と、そば屋は自分の顔をつるりとなでた。そのとたん、そば屋の顔ものっぺらぼうになった。
そして、そば屋も灯もふっと消えた。
狐が化けたので有名なのは、玉藻前であろう。
この狐は、金毛九尾白面の古狐である。
化けたのがすごい。古代中国の紂王の寵妃妲己に化けた。紂王は、ローマのネロにも匹敵する暴君である。紂王が火中に滅んだとき、妲己も捕らえられて死刑の宣告をうけたが、死刑執行人は、妲己の妖しい微笑に、首を斬ることができなかったという。
それから七百年ほどすぎて、この狐はインドに現れ、耶渇国の王子の夫人に化けたが、耆婆に見破られて北方へ逃げ、ふたたび中国で周の幽王の寵妃褒似となる。それから千年たって、遣唐使の帰国船にのって日本へ渡ってきて、美女玉藻前となって時の天皇に寵愛される。寵愛が深まるにつれ、天皇は病に悩まされ、ついに玉藻前は妖獣とみやぶられ、下野国那須で退治された。しかし、その悪念は石と化し、邪気を発して、近くを通る者を殺したので、人々は殺生石とおそれた。
おっそろしくスケールの大きい話である。
その他、ロクロ首、海坊主、山姥といろいろいるが、お化けにしろ妖怪にしろ、幽霊もまた絶滅に瀕している。
日本列島改造論などでて、土地開発がすすみ、また丑三ツ刻であろうとなんであろうと、よっぴいて人が働き、深夜トラックなど、びゅんびゅん走りまわっている時代だ。動物も、植物さえも滅びようとしている。もののけも、棲むところがなくなって、ちかいうち絶滅するだろう。環境がかわると、どんな種族も滅びるものだ。
それら妖怪にかわって、人間が怖ろしい化物になってきた。

(松永義弘)

山手樹一郎長編時代小説全集17
ぼんくら天狗 他一編
発行――一九七八年六月二五日初版第一刷
――一九八〇年三月二五日初版第二刷
著者――山手樹一郎©
装画――国貞(静嘉堂文庫提供)
装丁――玉井ヒロテル
発行者――和田欣之介
発行所――株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三―四―一六
〒一〇三 ☎東京二七一―〇〇五一 振替東京〇―一六一―七
印刷製本――城北印刷製本センター
◆――定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします